

令和元年度(2019 年度)
神戸グローバルチャレンジプログラム
自己点検・評価報告書

国立大学法人神戸大学 大学教育推進機構
神戸グローバルチャレンジプログラム委員会
令和2年7月

目 次

1. 神戸グローバルチャレンジプログラムの概要	3
1-1. 神戸大学の教育改革と神戸グローバルチャレンジプログラム	4
1-1-1. クォーター制の導入	4
1-1-2. 神戸スタンダードと教養教育改革	5
1-2. 事業の目標と取組計画	6
1-2-1. 事業概要と成果指標	6
1-2-2. 事業年度（5年）を通じた取組計画概要	7
（1）プログラム内容の開発及び実施	7
（2）学修の実施と成果の把握・指標	7
（3）学生等への周知や広報、FD・SD の実施、他大学への情報提供	8
（4）プログラムの活動資金の確保	8
（5）学生の主体的な活動企画	8
1-3. 事業の実施体制	9
1-3-1. 学内の実施体制	9
（1）神戸グローバルチャレンジプログラム委員会	9
（2）神戸グローバルチャレンジプログラムコーディネーターの配置	9
（3）大学教育研究推進室の役割	9
（4）大学教育推進委員会による適切性の担保	10
（5）全学評価・FD委員会等における学内点検	10
（6）適切な事業実施のための事務体制	10
（7）学内各センターとの連携	10
（8）同窓会及び海外同窓会ネットワークとの連携	10
（9）グローバル企業や国際機関との連携	10
（10）アドバイザリーボードの活用	10
1-3-2. 評価体制とPDCAサイクル	11
2. 令和元年度の取組	12
2-1. プログラムの実施と自己評価	13
2-1-1. プログラム実施計画	13
2-1-2. プログラムの取組実績・具体的成果	14
2-2. 各コースの実施と自己評価	22
（1）グローバル都市ニューヨークのコミュニティと文化を学ぶ（ニューヨークコース）	22
（2）カナダ・トロントの多文化社会研究（トロント大学コース）	25
（3）モスクワ大学・ロシア社会文化研修（モスクワコース）	27
（4）アジア・フィールドワークコース（スラウェシコース）	29
（5）アジア・フィールドワークコース（上海コース）	31
（6）理学グローバルチャレンジプログラム SIIT コース（理学 SIIT コース）	32
（7）理学グローバルチャレンジプログラム UPLB コース（理学 UPLB コース）	34

(8) ギャップターム海外協定校派遣コース (工学部 GCP)	36
(9) UPLB 農学英語コース (UPLB コース)	38
(10) EU フィールドワークコース (KUPES コース)	40
(11) グローバルチャレンジコース (学生企画型) A (グローバルチャレンジコース A)	43
(12) グローバルチャレンジコース (学生企画型) B (グローバルチャレンジコース B)	50
(13) フィールドワークチャレンジコース (フィールドワークコース)	55
(14) インターンシップチャレンジコース (インターンシップコース)	60
(15) サマースクールチャレンジコース (サマースクールコース)	63
(16) ボランティアチャレンジコース (ボランティアコース)	66
(17) 理学グローバルチャレンジプログラム Nanyang/Sci コース (理学 Nanyang コース)	68
 3. プログラム全体の自己評価 —成果と課題—	69
3-1. プログラム目標能力に関する自己評価	70
3-1-1. ルーブリック指標に基づく自己評価 (令和元年度参加学生)	71
3-1-2. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化 (平成 30 年度参加学生)	103
3-1-3. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化 (平成 29 年度参加学生)	119
3-1-4. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化 (平成 28 年度参加学生)	132
3-2. プログラム参加後のアンケート結果	144
3-3. 大学教育再生加速プログラム (AP) 令和元年度フォローアップ報告書	159
3-4. プログラム全体の自己評価総括	161
(1) 自己評価総括	161
(2) 課題への対応状況	161

1. 神戸グローバルチャレンジプログラムの概要

1-1. 神戸大学の教育改革と神戸グローバルチャレンジプログラム

神戸大学はこれまで、人文社会科学系学部を中心とする「経済社会を牽引するグローバル人材育成支援」プログラムを始め、各学部でグローバル人材育成のために留学を組み込んだ様々な取組を行ってきた。これらの取組を促進するとともに、対象を全学生へと拡大するため、本学では、学士課程の学生を「自ら地球的課題を発見しその解決にリーダーシップを発揮できる人材」（「課題発見・解決型グローバル人材」）に育成することを目標に、平成 28 年 4 月から、以下のとおり教育改革を実施している。神戸グローバルチャレンジプログラム（以下「神戸 GCP」という。）は本学の教育改革を活用し、その効果を大きく高めるプログラムである。



1-1-1. クォーター制の導入

前期・後期の授業期間をそれぞれ分割し、各 8 週で授業を行うクォーター制を導入した。これにより、週 1 回または週 2 回 8 週の授業による集中的な学修を可能とするとともに、特定のクォーターをギャップタームとして利用することが可能となった。また、学生はギャップタームを活用することにより、海外短期留学、海外のサマースクール、海外インターンシップ、ボランティア等の様々な学外学修において多様な経験をし、4 年間で卒業することが可能となった。

神戸 GCP においては、このクォーター制により生じるギャップタームを利用し、学生が 1・2 年生に国際的なフィールドで行うインターンシップなどの学外学修を促進する。



1-1-2. 神戸スタンダードと教養教育改革

神戸大学では、神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき以下の能力を新たに「神戸スタンダード」として定め、神戸スタンダードの修得を教養教育の学修目標とした。

- 複眼的に思考する能力：専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通して複眼的なものの見方を身につける
- 多様性と地球的課題を理解する能力：多様な文化、思想、価値観を受容するとともに、地球的課題を理解する能力を身につける
- 協働して実践する能力：専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力と、困難を乗り越え目標を追求し続ける力を身につける

また、「神戸スタンダード」を全学部生が身につけるよう、主として1・2年生が学修していた教養科目を見直し、平成28年4月から「基礎教養科目」及び「総合教養科目」に再編した。さらに、平成29年度より、高学年の学部生を対象とする新たな科目として、「高度教養科目」を設け、4年間を通じて学ぶ教養教育のカリキュラムを提供している。「神戸スタンダード」の各能力と各教養科目は、以下のように対応している。

- ・「複眼的に思考する能力」
⇒⇒⇒「基礎教養科目」において身につける目標
- ・「多様性と地球的課題を理解する能力」
⇒⇒⇒「総合教養科目」において身につける目標
- ・「協働して実践する能力」
⇒⇒⇒「高度教養科目」において身につける目標



神戸GCPでは、学生の学外活動による学修に事前学修・事後学修を組み合わせることで学修成果を高め、「総合教養科目」の「グローバルチャレンジ実習」として単位授与を行う。このことにより、神戸GCPは体系的な教養教育のカリキュラム内に位置づけられるとともに、全学部生の受講が可能となっている。

1-2. 事業の目標と取組計画

1-2-1. 事業概要と成果指標

神戸GCPは、学部1・2年生の1つのクォーターをギャップタームとして設定し、国際的なフィールドで学生が行う自主的な活動を、「グローバルチャレンジ実習」として単位授与するプログラムである。その目的は、参加学生が低年次において自らの体験に基づき「神戸スタンダード」の必要性を体感し、「学びとは何か」を主体的に考え、「学びの動機づけ」を得ることである。学生は国際的なフィールドでの活動や異文化環境下での体験に基づき、外国語でのコミュニケーション能力を高めるとともに、「課題発見・解決能力」の必要性を体感することができる。このことにより、課題解決に向けた意欲を高め、学生自らが学修目標・計画を立てて活動に取り組み、主体的な学修姿勢を大学入学後の早い時期から身につけることが期待される。また、学生は本プログラムに参加し、主体的に活動することを通じて、本学が独自に設定した「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」を身につけることができる。

【独自指標】

I) プログラムに参加した学生がプログラム終了後に身に付けた能力

「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」（ループリックによる測定）

令和元年度	目標	実績
水準2に達した学生：	75%、	84.4%
水準3に達した学生：	30%、	44.1%

II) プログラムに参加後、在学中に留学を含む海外での学修活動に参加した学生の割合

令和元年度	目標	50.0%、	実績	52.1% (163/313)
-------	----	--------	----	-----------------

【必須指標】

i) 長期学外学修プログラムに参加する学生の割合 [% (参加学生数/全学生数)]

令和元年度	目標	2.53%、	実績	1.19% (138/11,577)
-------	----	--------	----	--------------------

長期学外学修プログラムに参加する学生の割合 [% (参加学生数/1・2年生の学生数)]

令和元年度	目標	5.67%、	実績	2.63% (138/5,255)
-------	----	--------	----	-------------------

ii) 上記プログラムを経た学生の成績評価[プログラムに参加した学生と不参加学生のGPAの平均の差]

令和元年度	目標	0.41、	実績	0.25
-------	----	-------	----	------

iii) 退学率 [% (退学者 (除籍者を含む) / 在籍者数)]

令和元年度	目標	0.98%、	実績	0.95% (110/11,577)
-------	----	--------	----	--------------------

iv) 学生の授業外学修時間 [時間数 (1週間当たりの時間を、教務情報システムで半期毎に全学部生にアンケートを行って把握)]

令和元年度	目標	実績
全学生	：	6.5時間、9.7時間
プログラム参加学生：	12時間、	12.8時間

v) 進路決定の割合 [% ((就職決定者数+進学者数) / 卒業者数)]

令和元年度	目標	94.09%、	実績	94.36% (2,526/2,677)
-------	----	---------	----	----------------------

vi) 学生が企画する活動数 (活動数) (大学関与分のみ)

令和元年度	目標	150件、	実績	152件
-------	----	-------	----	------

1-2-2. 事業年度（5年）を通じた取組計画概要

神戸 GCP の実施に当たっての取組計画は、以下のとおりである。

（１）プログラム内容の開発及び実施

神戸 GCP として実施する取組は、各担当教員が現地視察及び受入先との協議等により開発を進め、同プログラム委員会（以下、「委員会」という。）において認定する。認定基準は、本プログラムで身に付けることが期待される 3 つの能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」に基づくものとする。

1・2 年生に同プログラムに参加することで学修への動機づけを行い、上位学年において、海外留学等の国際的なフィールドでの更なる活動にチャレンジする力を学生が修得することをねらいとする。

神戸 GCP では、開講コースを「フィールドワーク型」「サマースクール型」「学生企画型」「インターンシップ型」「ボランティア型」の 5 つのタイプ（型）に分類して実施している。プログラムに参加する全ての学生には、学修目標を定めたチャレンジシートを作成することを求める。学生は、神戸グローバルチャレンジプログラムコーディネーター（以下、コーディネーター）またはアドバイザー教員の指導の下、事前・渡航中・事後の学修を行い、学修成果をまとめる。学生がまとめた学修成果は、コーディネーターまたはアドバイザー教員が評価し、委員会に報告し、「総合教養科目」の中に位置付けられる「グローバルチャレンジ実習」として単位授与（1～2 単位）を行う。

（２）学修の実施と成果の把握・指標

・事前学修・事後学修

学外活動学修の前後に、事前・事後学修を実施する。学生は事前学修時に学修目標を定めたチャレンジシートを作成するほか、海外等学外へ出る際の危機管理学修の受講を義務化し、心構え、安全管理について学修する。海外学修に参加する学生には、海外旅行保険への加入を義務付けるとともに、「留学生危機管理システム」の登録を義務付ける。また、事後学修時に、事前に立てた目標の達成度を振り返るリフレクションシートを提出する。学外学修で得た経験を基にグローバル人材に必要な能力や自らの能力・可能性に対する「気づき」を有し、今後の学修へのモチベーションを高める動機づけにつなげる。

全コースとも、主体的な学修を身に付けさせるため、アクティブ・ラーニングを取り入れた学修を行っている。

・全体報告会

プログラム参加者主催による全体報告会を開催する。学生同士がネットワークを構築し、互いに活動の成果を振り返り刺激し合うことでモチベーションの維持を図り、上位学年において、海外留学等の国際的なフィールドでの更なる活動にチャレンジする力を付けさせる。

・学修ポートフォリオの利用

神戸大学学修支援システム BEEF を本プログラムの学修ポートフォリオとして活用する。チャレンジシートの提出・保存、事前学修として安全管理マニュアル等の配付、SNS 機能による海外等滞在中の指導、事後学修時のリフレクションシートの提出に BEEF を活用し、参加学生の学修状況・学修時間・学修成果の把握と保管を行う。

また、参加後の経年変化については、平成 30 年度から、従来の BEEF Venture に代えて、神戸大学教務情報システム「うりぼーネット」を活用して、参加翌年度から卒業年度までのループリック及び海外学修関連活動状況について、調査することとする。

・英語外部試験の活用

全学部生が入学直後に英語外部試験を受験し、その結果を本プログラム対象者の選抜に利用する。

・学修成果の評価指標

学生の質的な成長について、「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」の3つの力を神戸 GCP 独自の指標とし、参加学生がループリックで自己測定する。事前学修・学外活動・事後学修などの実績（学修ポートフォリオ）と報告会（プレゼンテーションと質疑応答）を基に、多面的な評価を行う。

（３）学生等への周知や広報、FD・SD の実施、他大学への情報提供

本プログラムのウェブサイトを作成し、学生への周知や広報を行う。また、プログラムの成果を可視化してウェブサイト等で公表する。

また、派遣先での安全管理や異文化理解等、国際的なフィールドでの活動に関する知識や方法について十分な知識が必要となるため、教職員に対して海外研修や計画的な FD・SD を実施し、学生の国際的なフィールドでの学外学修を的確にサポートできる人材養成を行う。

大学教育再生加速プログラム (AP) 採択校をはじめ、他大学等への情報提供を行って取組の波及を図り、報告書を作成して公表する。

（４）プログラムの活動資金の確保

プログラムの活動において、渡航費等は学生が自ら負担することが原則であるが、より多くの学生が参加できるよう、以下のとおり資金を確保する。

- ・神戸大学基金
- ・全学及び各学部後援会・同窓会からの援助
- ・日本学生支援機構等の各種奨学金

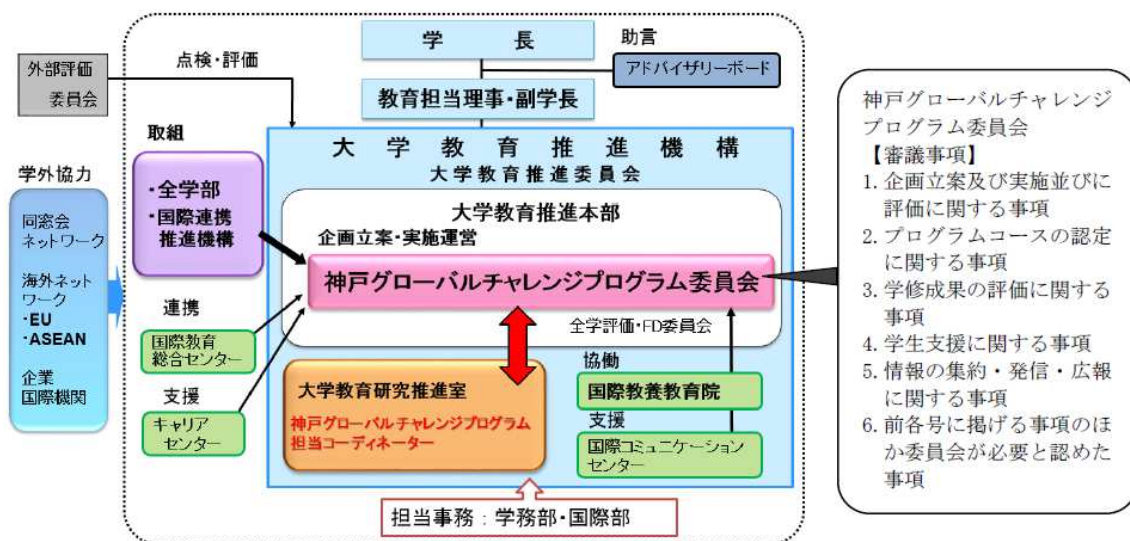
（５）学生の主体的な活動企画

本プログラムに参加した学生は、海外等のフィールドで活動を行った経験に基づき、主体的な活動に取組み、課題解決に向けた意欲を高めることが期待できる。また、全体報告会等における学修成果の報告、アクティブ・ラーニングの拡大及びラーニングコモンズの活用により、プログラム不参加学生への波及効果が期待される。これらの取組により、学修意欲の高い参加学生による自主ゼミやセミナー、海外フィールドワーク等の多様な主体的活動の増加が期待される。

1-3. 事業の実施体制

1-3-1. 学内の実施体制

神戸グローバルチャレンジプログラム実施体制図



（1）神戸グローバルチャレンジプログラム委員会

本学の教学マネジメントを行う大学教育推進機構の下に、「神戸グローバルチャレンジプログラム委員会（以下、「神戸 GCP 委員会」という。）」を設置している。神戸 GCP 委員会は、大学教育推進本部副本部長、国際教養教育院長、国際コミュニケーションセンター長、神戸グローバルチャレンジプログラムを実施する部局から選出された教員各 1 人、キャリアセンター長、国際連携推進機構国際教育総合センター長、大学教育研究推進室長、神戸グローバルチャレンジプログラム担当コーディネーター、国際部長、学務部長により構成し、本プログラムの実施責任者である大学教育推進本部副本部長（学長補佐（グローバル教育担当））を委員長としている。

神戸 GCP 委員会は、大学教育研究推進室及び国際教養教育院と協働し、本事業の企画・立案、運営及び実施について全学的な意思決定を行う。具体的には、各コースの審査・認定・予算配分及びプログラムの運営についての意思決定を行うとともに、自己点検・評価を行っている。

（2）神戸グローバルチャレンジプログラムコーディネーターの配置

神戸グローバルチャレンジプログラム担当コーディネーター（以下、「コーディネーター」という。）を「大学教育研究推進室」に配置し、全学を対象としたコースの企画・立案や受入先との交渉、調整等を行い、令和元年度は、24 の国・地域で学外学修を展開した。また、海外での学外学修活動に必要な危機管理学修をプログラム全体で実施しているほか、各種 FD・講演会等の企画・実施、本プログラムに関する説明会、参加学生による全体報告会・パネル展示、ホームページやパンフレットによる広報・情報発信等、コーディネーターが本プログラムの中心となり様々な取組を推進している。

（3）大学教育研究推進室の役割

本学の教育全体を推進する「大学教育研究推進室」は、ルーブリック指標や学修ポートフォリオの作成・活用により、本事業における学修成果の明確化及び向上に努めている。また室に配置されるコーディネーターを中心に、教育的効果の高いプログラムの企画・立案を行っている。

（４）大学教育推進委員会による適切性の担保

神戸 GCP 委員会において決定した本事業の人材配置については、本学の全部局教育担当責任者により構成され、全学における教育のマネジメントを行う「大学教育推進委員会」において審議・承認し、また神戸 GCP 委員会での決定事項を「大学教育推進委員会」にて報告・点検することで、その適切性を全学的に担保している。

（５）全学評価・FD 委員会等における学内点検

本事業は、神戸 GCP 委員会のほか、全学の教育を担う「大学教育推進委員会」が事業の全体管理を、また、全学の教育評価・FD を担当する「全学評価・FD 委員会」が本事業の点検・評価・改善についての助言を行い、学内の PDCA サイクルを確立している。

（６）適切な事業実施のための事務体制

本事業の業務は、全学の教育事務を統括する学務部、国際交流を担当する国際部及び各コースを実施する各部局が担当している。また、本事業に関わる予算については、学務部会計担当部署による組織的な管理と適切な執行を行っている。

（７）学内各センターとの連携

学生のキャリア支援を行っている「キャリアセンター」は、企業との繋がりや、インターンシップ及びボランティアの実施、運営における豊富な経験を活かし、本事業の企画・実施部局への助言役や仲介役としてコースの円滑な実施を支援している。また、全学の外国語教育を担当する「国際コミュニケーションセンター」は、本事業の柱の一つである外国語能力の向上・強化に関わる教育プログラムを推進している。

（８）同窓会及び海外同窓会ネットワークとの連携

一部の学外学修は、国籍や専門を超えた本学の「海外同窓会ネットワーク（13 拠点：東アジア・東南、中央アジア・欧州）」等を活用してプログラムの更なる展開を行っている。特に、海外同窓会ネットワークを統括している国際教育総合センターと密接な連携の下、これら海外同窓会ネットワークを活用して、派遣国を開拓し、プログラムの更なる拡充を目指している。

（９）グローバル企業や国際機関との連携

国際機関やグローバルに事業を展開する企業と本学とのネットワークを最大限に活用し、連携して多様なコースを開発・実施しており、令和元年度は6部局でフィールドワークやインターンシップなどの16コースを実施した。

（10）アドバイザーボードの活用

社会の意見を本学の教育研究に反映させるため、平成 27 年度 4 月に学長の下に設置した「アドバイザーボード」を活用し、産業界・学界・官界・政界等の幅広い視点から本事業全体についての助言を受け、事業全体に反映させ、プログラムの質向上を図ることとしている。

1－3－2．評価体制と PDCA サイクル

本プログラムの効果的な展開のため、「神戸グローバルチャレンジプログラム委員会」において、各実施コース及びプログラム全体に関する自己点検・評価を行っている。また、全学の教育評価・FDを担当する「全学評価・FD 委員会」が本事業を点検して評価・改善に関する助言を行うとともに、全学の教育を担う「大学教育推進委員会」が、事業の全体を管理し、学内の PDCA サイクルを確立している。

さらに、学外の有識者による本プログラムの点検・評価を行うために、国際的な活動実績のある社会人や国際交流の専門家、教育関係者等で構成される「外部評価委員会」を設置している。

2. 令和元年度の取組

2-1. プログラムの実施と自己評価

令和元年度において、本プログラムでは以下のとおり取組を行った。

なお、2-1-2 の自己評価においては、取組計画に対し5段階（「5：計画を大幅に超えて実施できた」「4：計画を十分実施できた」「3：計画どおり実施できた」「2：計画どおり十分に実施できなかった」「1：実施できなかった」）で評価を行った。

2-1-1. プログラム実施計画

令和元年度は補助金調書において次のとおりプログラムの実施を計画した。

・令和元年度実施計画

（総論）

- 1) 平成 27～30 年度に構築した本プログラムの各コースを実施する。事業の改善や本プログラムの各コースの更なる充実を図るとともに、広報を拡充することにより参加学生の増加を図る。
- 2) 事業の継続について協議を行い、コース継続・発展に向けて、現状の課題を整理し、実施体制等を整備する。
- 3) 令和 2 年度に受審予定の本補助事業の事後評価に備え、事業最終年度にこれまでの本プログラムの集大成として「事業実施報告書」を作成して本事業の実施体制や実施状況・成果について自己点検・評価を行い、また、報告書を関係機関に送付し、本学における教育改革の取組・成果を社会に発信する。

（具体的な事業内容）

- ①教育改革の一環として高度教養科目を開講する。
- ②全学部 1 年生を対象に英語外部試験を実施する。
- ③プログラム担当のコーディネーター等教職員を雇用する。
- ④プログラムに係るウェブサイトを保守・更新する。
- ⑤神戸グローバルチャレンジプログラム委員会を開催する。
- ⑥プログラムの各コースを実施する。
- ⑦プログラム実施に係る TA や SA、学生補佐員を雇用する。
- ⑧学生受入先の調査を行う。
- ⑨事業終了後の継続について、関係部局から意見聴取を行う。
- ⑩次年度以降の事業の在り方について検討を行い、実施体制等を整備する。
- ⑪プログラム参加学生による全体報告会を実施する。
- ⑫外国人講師を雇用し、学生向けの英語力向上セミナーを実施する。
- ⑬教職員への FD・SD を実施する。
- ⑭次年度に実施するコースをグローバルチャレンジプログラム委員会で認定する。
- ⑮ループリックを活用して、プログラム参加学生の評価を行う。また、評価結果の経年変化を分析する。
- ⑯次年度の実施コースについて、学内外への広報を行う。
- ⑰総合科目Ⅰ「アジアへの誘い」を開講する。
- ⑱これまでの本プログラム参加学生との意見交換会を実施する。
- ⑲「事業実施報告書」を作成し、事後評価の準備を行う。
- ⑳事業の自己点検・評価を神戸グローバルチャレンジプログラム委員会、全学評価・FD 委員会及び大学教育推進委員会において行う準備をする。

2-1-2. プログラムの実績・具体的成果

(総論)

【自己評価】4：計画を十分実施できた

取組実績

- 1) 平成30年度の神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において認定された17コース(大学教育推進機構、国際人間科学部、理学部、工学部、農学部、国際教育総合センターにて企画)で参加学生を募集し、うち16コースを実施した。結果、計138名の学生が本プログラムに参加し、海外で学外学修活動を行い、前年度よりも参加学生が2割増加した。
- 2) 令和2年度に実施するプログラムのコースについて全学部で検討を行い、コース実施に向けて受入先との協議や実地調査を進めた結果、9月に開催した神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において計18コースを認定した。
- 3) 神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において、事業全体及び各取組部局の実施状況について自己点検・評価を依頼し、その結果を確認するために、とりまとめて集計した。

具体的な成果

- 1) コース参加後のアンケートでは、参加コースについて高い満足度(「満足」80.2%、「概ね満足」18.9%)を得るとともに、本プログラムへの参加を契機としたさらなる留学や関心を持ったテーマについて、「より長期的な留学等に挑戦したい」は8割を、「より深く学修したい」については9割を超える回答を得ており、長期留学等の国際的な活動への更なるチャレンジやより専門的なテーマへの学修意欲の向上等、本プログラムが全体を通じて設定している「学びの動機づけ」という目標に対して順調に成果が現れていることが確認できた。
- 2) 各部局が学生の活動先と協定等を交わして企画したコースを、教育効果の観点を踏まえて委員会で審査し、本プログラムにおけるコースとして認定することで、各コースの教育の質を保証することができた。また、令和2年度の一部のコースにおいて、参加対象学年を1～4年生に拡大し、今後のプログラム参加者数の増加に向けた支援体制を強化することができた。
- 3) プログラム全体の運営体制、令和元年度に実施した各コースの取組状況、ループリックに基づく参加学生の自己評価及びプログラム参加後のアンケート結果により本プログラムの実施状況を点検した結果、多くの学生は本プログラムへの参加を通じて「課題発見・解決能力」の必要性に気づき、「学びの動機づけ」を得て「主体的な学修姿勢」を身につけており、本プログラムの目標達成に向けた活動は計画どおり進行していることが確認できた。

(具体的な事業内容)

- ①教育改革の一環として高度教養科目を開講する。

取組実績

平成30年度から本格開講した高年次対象の高度教養科目を本年度も引き続き開講した。

具体的な成果

専門科目を学修した様々な学部の高年次生が、共通の課題について、協働して解決方法を探ることにより、「分野融合」「文理融合」の意義、協働の大切さを学ぶ機会を提供した。

②全学部1年生を対象に英語外部試験を実施する。

取組実績

全学部の新入生を対象に、4月に英語外部試験（TOEIC または TOEFL）を実施し、1年生 2,621 名中 2,550 名が受験した。

具体的な成果

英語外部試験を受験させたことで、学生に自己の英語能力を認識させ、自主的な英語学修を促進することができた。また、英語外部試験の結果をプログラム参加学生の選考と事前学修に活用することができた。

③プログラム担当のコーディネーター等教職員を雇用する。

取組実績

本プログラム担当のコーディネーターを大学教育研究推進室に引き続き配置し、また、事業実施を補佐する職員を雇用した。

具体的な成果

本事業の中心的な役割を担うプログラム担当のコーディネーターを雇用することで、コースの企画・立案・実施や受入先との交渉、調整を行うことが可能となり、学生の学外学修を順調に実施することができた。また、事務作業を補助するために非常勤職員を雇用したことで、円滑に本事業を実施することができた。

④プログラムに係るウェブサイトを保守・更新する。

取組実績

各コースの募集案内や参加した学生の体験談、各種セミナーや研修の案内・実施報告など、本プログラムの取組に関する最新の情報を本プログラムのウェブサイトや Facebook に掲載し、学内外に広く情報発信した。

具体的な成果

従来のホームページに加え、平成 30 年度に立ち上げた本プログラムの Facebook により、若い世代の学生たちに身近な SNS による発信も行うことで、本プログラムの詳細な内容を広く学内外に情報発信することができ、学内における本プログラムの認知度を高めることで参加学生を増加させることができた。セミナーの案内やコースの紹介・募集、学生の体験談や自己評価・外部評価の報告書を掲載するなど、従来のウェブサイトも適宜更新し、充実を図っている。

⑤神戸グローバルチャレンジプログラム委員会を開催する。

取組実績

神戸グローバルチャレンジプログラム委員会を 7 回開催した。委員会では、令和 2 年度実施コースの審査・認定、予算執行、参加学生の単位授与、奨学金制度の見直し、関連する制度の整備、危機管理体制、学生及び学内外への本プログラムの周知方法の検討及びその他本プログラムの運営についての意思決定を行った。

【令和元年度神戸 GCP 委員会 審議事項】

第1回委員会（平成31年4月12日（金）開催）

1. 平成30年度春実施コースの学生の成績評価報告について
2. 平成30年度AP補助金の執行状況及び残額の調整について
3. 2019年度AP補助金の予算配分について
4. 2019年度神戸GCPコース内容の変更について
5. 「神戸GCP海外派遣学生への助成金支給について」の改定
6. 神戸グローバルチャレンジプログラムの継続等に係る各学部との意見交換の実施について（依頼）

第2回委員会（令和元年6月14日（金）開催）

1. 平成30年度自己点検・評価報告書について
2. 令和元（2019）年度神戸GCPコース内容の変更について
3. 神戸GCP緊急時対応シミュレーション訓練について
4. 令和元（2019）年度神戸GCP秋フェアの実施について

第3回委員会（令和元年8月9日（金）開催）

1. 今後の神戸グローバルチャレンジプログラムについて

第4回委員会（令和元年9月13日（金）開催）

1. 令和2年度実施コースの申請及び認定について
2. 令和2年度JASSO奨学金の申請について
3. 令和元（2019）年度神戸GCP参加学生との懇談会の実施について

第5回委員会（令和元年12月13日（金）開催）

1. 令和元（2019）年度夏実施コース学生の成績評価について
2. 令和元（2019）年度神戸GCPコース内容の変更について
3. 令和元（2019）年度神戸GCP自己点検・評価の実施について
4. 令和2年度神戸GCPコースの変更について

第6回委員会（令和2年1月10日（金）開催）

1. 神戸グローバルチャレンジプログラム実施要綱の改定について
2. 神戸GCPにおける単位授与に関する内規及び神戸GCPのコース実施に関する申合せの改定について
3. 神戸GCPループリックの改訂について
4. 令和2年度神戸GCPコースの追加・変更について
5. 令和2年度神戸GCP春フェアの実施について

臨時委員会（令和2年2月20日（木）～令和2年2月28日（金）持ち回り審議開催）

1. 令和2年度神戸グローバルチャレンジプログラムコースの変更について

第7回委員会（令和2年3月13日（金）開催）

1. 令和元（2019）年度大学改革推進等補助金（AP補助金）実績報告書について

具体的な成果

令和2年度実施コースの審査・認定、予算執行、参加学生の単位授与、奨学金制度の見直し、関連する制度の整備、学外学修時の危機管理体制、学生及び学内外への本プログラムの周知方法の検討及びその他本プログラムの運営について委員会が中心となり意思決定を行うことで、本事業を円滑に実施することができた。

⑥プログラムの各コースを実施する。

取組実績

平成30年度の神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において認定された17コース（大学教育推進機構、国際人間科学部、理学部、工学部、農学部、国際教育総合センターにて企画）で参加学生を募集し、うち16コースを実施した。計138名の学生が本プログラムに参加し、海外で学外学修活動を行った。

具体的な成果

参加後のアンケートでは、参加コースについて高い満足度を得るとともに、本プログラムへの参加を契機としたさらなる留学や関心を持ったテーマについて、「より長期的な留学等に挑戦したい」、「より深く学修したい」について、ともに8割を超える回答を得ており、長期留学等の国際的な活動への更なるチャレンジやより専門的なテーマへの学修意欲の向上等、本プログラムが全体を通じて設定している「学びの動機づけ」という目標に対して順調に成果が現れていることが確認できた。

⑦プログラム実施に係る TA や SA、学生補佐員を雇用する。

取組実績

学外学修で渡航する前に行われる事前学修や帰国後の事後学修、全体説明会で行われる活動成果の報告発表及びパネル展示資料作成の指導補助にあたる SA を雇用した。また、大学全体の催事等でのイベント運営補助業務を行う学生補佐員を雇用した。

具体的な成果

学外学修活動参加経験のある SA が事前学修で指導補助をすることで、本プログラム参加学生の学修国の社会事情や学外学修の活動内容、現地での生活事情等への理解が早まり、また、事後学修の指導補助にあたることで、本プログラム参加学生の報告資料作成をスムーズに進めることができた。さらに、参加学生を学生補佐員として雇用し、学修成果の展示報告やホームカミングデイでの活動成果報告を行うことで、自己の能力を更に高めるよう意識づけられるとともに、他の学生にも刺激を与え、学修を牽引していく効果が得られた。

⑧学生受入先の調査を行う。

取組実績

プログラムのコースの拡充のため、コーディネーター及びコース責任者等が、国内外の本学現地同窓会や協定校、大学関係者のネットワークを活用しつつ、学生の受入機関の調査・開拓を行った。

具体的な成果

国内外の本学現地同窓会や協定校を中心に、大学関係者ネットワークの支援を受けつつ、現地の情報収集や現地調査を行い、受入先との協議を行うことで、学生の安全確保を踏まえた実施環境を整備することができた。また、海外の企業、国際機関、協定校等と受け入れについて協議を行うことで、学生の学外学修活動先の更なる拡充を図ることができた。

⑨事業終了後の継続について、関係部局から意見聴取を行う。

取組実績

神戸グローバルチャレンジプログラムの継続等に係る意見交換を全学部の学部長及び国際担当教職員と行い、事業終了後の本プログラムの継続の在り方等について意見聴取を行った。

具体的な成果

各学部に意見聴取を行うことで、本プログラムの具体的な手続や仕組・体制等における課題を見つけることができた。これらの課題を改善することで、プログラムの更なる拡大・発展を図ることがで

きる。

- ⑩次年度以降の事業の在り方について検討を行い、実施体制等を整備する。

取組実績

本プログラム開始後4年目を迎え、神戸グローバルチャレンジプログラムの継続等に係る各学部との意見交換での意見や関係教職員からの意見を踏まえ、神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において検討を行い、本プログラムに関する手続・様式等を見直した。また、令和2年度の一部のコースにおいて、参加対象学年を1～4年生に拡大した。

具体的な成果

プログラムの実際の実施状況に合わせて、様々な運用を見直すことで、プログラムの更なる充実と発展、また参加者の増加が期待できる。今後も、本事業補助期間終了後の事業の継続実施を見据え、システムの導入等を含め、より効率化を図った運営体制を引き続き検討していく。

- ⑪プログラム参加学生による全体報告会を実施する。

取組実績

全学部1・2年生を対象に、4月に4回、10月に4回、全体報告会を実施し、延べ704名が参加した。また、全体報告会参加者には、参加者アンケートも行った。

具体的な成果

全体報告会を開催することで、学生同士がネットワークを構築し、刺激し合ってモチベーションの維持を図り、更なる活動にチャレンジする力を付けさせるとともに、学修内容を振り返ることで学修効果を定着させることができた。特に4月の報告会は、主として新入生を対象として開催した説明会の中に、参加学生による報告会を組み込んだことで、本プログラムの成果を広く学内にアピールし、より多くの学生にプログラムの周知を図ることができ、海外での学外学修活動への更なる参加を促すことができた。参加者アンケートでは、本プログラムへの興味・参加意欲が高まったという回答が多く得られた。

- ⑫外国人講師を雇用し、学生向けの英語力向上セミナーを実施する。

取組実績

外国人講師を雇用し、本プログラム対象者である1・2年生を主に対象としたスピーキング力の向上に重点をおいた英語力向上セミナーを実施し、27名の参加があった。

具体的な成果

英語力向上セミナーを実施し、学生が事前学修期間中に外国人講師によるネイティブの英語に触れることで、語学面において、国際的なフィールドでの学外学修活動に取り組みやすくなった。また、正規の授業以外の場で実践的なスピーキング力を向上させる良い機会となった。

- ⑬教職員へのFD・SDを実施する。

取組実績

4年間にわたる神戸グローバルチャレンジプログラムの成果を振り返り、今後の課題について意見交換を行うことを目的として、プログラムに関わる本学の教職員を主な対象としたFDセミナーを実施することとし、その準備を行った。

具体的な成果

4年間にわたる神戸グローバルチャレンジプログラムの成果を振り返り、今後の課題について意見交換を行うために、AP事業テーマⅣの幹事校でもある新潟大学の事業担当者を講師に招聘し、プログラムに関わる本学の教職員を主な対象として、令和2年3月にFDセミナーを予定していた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、FDセミナーの実施を中止した。

⑭次年度に実施するコースをグローバルチャレンジプログラム委員会で認定する。

取組実績

令和2年度に実施するプログラムのコースについて検討を行い、9月に開催した神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において、実施コースを認定した。その後、令和2年度から開始する各コースの準備及び学生募集を開始した。

具体的な成果

各部局が学生の活動先と協定等を交わして企画したコースを、教育効果の観点を踏まえて委員会で審査し、本プログラムにおけるコースとして認定することで、各コースの教育の質を保証することができた。また、令和2年度は、6部局等（大学教育推進機構、国際人間科学部、理学部、工学部、農学部、国際教育総合センター）で18コースを実施することとし、本事業の継続・発展を図ることが可能となった。

⑮ループブリックを活用して、プログラム参加学生の評価を行う。また、評価結果の経年変化を分析する。

取組実績

本プログラム参加学生が伸ばすことが期待される3つの力、「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」について、平成29年度に改訂したループブリック指標により、事前学修時及び事後学修時に参加学生が自己評価を行った。また、経年変化の分析のために、前年度までの参加学生に対して、本学の教務システムを用いて同じループブリック指標による自己評価を行った。

具体的な成果

ループブリックを用いて評価を行うことで、本プログラムで身につけることが期待される3つの能力を統一的に測定することができ、コース参加学生に対して統一的な評価を行うとともに、本プログラムの教育効果を把握することができた（ループブリック教育効果については、「3-1. プログラム目標能力に関する自己評価」を参照）。

⑯次年度の実施コースについて、学内外への広報を行う。

取組実績

本プログラムを広報するために、プログラムに関するパンフレットを6,000部作成した。次年度の1～4年生に配布するとともに、全国主要都市で開催した入学説明会にて全国のSGH指定校や近畿圏の主要高等学校、学外学修の新規受入先や受験生に対しても配付する。また、一般の方にも分かり易い広報チラシをオープンキャンパスや入試説明会にて高校生を含め、保護者等へも配付することとし

た。

具体的な成果

パンフレットを用いて、本事業の具体的な取組や手続、募集についての情報を本学の学生に周知することができ、コースの内容や実績を記載することで、学外学修先の新規開拓を行うとともに、本学を志望する受験生にもアピールすることができた。また、広報チラシを配付することで、高校生や学外の一般の方にも、本プログラムの取組をより分かり易くアピールすることが期待できる。

⑰総合科目Ⅰ「アジアへの誘い」を開講する。

取組実績

全学部学生を対象とする教養教育において、本プログラムで企画した総合科目「アジアへの誘い」を開講し、学生にアジアの国々の現状や課題について学修させ、18名の学生が履修した。

具体的な成果

学外学修を多数開催しているアジアの国・地域に焦点を当てた講義を本学の全学共通授業科目として開講することで、年次の早い段階で海外への関心や意識を高め、海外での学外学修への学生の参加促進を図ることができた。

⑱これまでの本プログラム参加学生との意見交換会を実施する。

取組実績

これまでに実施したコースの参加学生と教職員との学修成果等の情報共有を行うプログラム意見交換会（参加学生11名、教職員18名）を12月に実施した。

具体的な成果

これまでに参加した学生とのプログラム意見交換会を実施したことにより、参加学生は学修内容を振り返ることで学修効果を定着させるとともに、学生同士がネットワークを構築し、刺激し合ってモチベーションを維持・向上させることができた。お互いのキャリアについての議論等を行ったことで、将来に向けて更なる活動にチャレンジする意欲が見られた。併せて、参加学生からの要望を聞き、改善点についての有効な意見を得たことで、今後の本事業の運営に取り込んでいく。

⑲「事業実施報告書」を作成し、事後評価の準備を行う。

取組実績

神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において、事業全体及び各取組部局の実施状況について自己点検・評価を依頼し、その結果を確認するために、とりまとめて集計した。

具体的な成果

プログラム全体の運営体制、令和元年度に実施した各コースの取組状況、ループリックに基づく参加学生の自己評価及びプログラム参加後のアンケート結果により本プログラムの実施状況を点検した結果、多くの学生は本プログラムへの参加を通じて「課題発見・解決能力」の必要性に気づき、「学びの動機づけ」を得て「主体的な学修姿勢」を身につけており、本プログラムの目標達成に向けた活

動は計画どおり進行していることが確認できた。

⑳事業の自己点検・評価を神戸グローバルチャレンジプログラム委員会、全学評価・FD 委員会及び大学教育推進委員会において行う準備をする。

取組実績

全学評価・FD 委員、大学教育推進委員会において、自己評価・外部評価の結果を報告・点検する準備をした。

具体的な成果

本事業の実施体制や実施状況・成果について自己点検・評価を行うことで、次年度の事業実施のために改善を図るなど PDCA サイクルを適切に実施することができ、プログラムの更なる発展と向上を図ることができる。

2-2. 各コースの実施と自己評価

神戸 GCP における学外学修コースについては、神戸グローバルチャレンジプログラム委員会の実施について認定を行うこととしており、令和元年度に学外学修を行うコースとして 17 コースが認定され、令和元年 6 月～9 月、及び令和 2 年 2 月～3 月に海外で学外活動学修が行われた。

なお、自己評価においては、取組計画に対し 5 段階（「5：計画を大幅に超えて実施できた」「4：計画を十分実施できた」「3：計画どおり実施できた」「2：計画どおり十分に実施できなかった」「1：実施できなかった」）で評価を行った。

（1）グローバル都市ニューヨークのコミュニティと文化を学ぶ（ニューヨークコース）

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：22 名
- ・学外活動学修時期：令和元年 9 月 4 日～9 月 23 日
- ・学外活動学修先：アメリカ合衆国・ニューヨーク市

《学修目標・期待される効果》

ニューヨーク市内のフィールドワークに向けた事前のプランづくり、現地での実際のフィールドワーク調査、帰国後の成果報告に向けた取りまとめを通じて、参加学生たちは集団での討論能力、企画立案能力、交渉能力、実践的な英語の運用能力、危機管理能力、異文化に対する想像力を総合的に涵養することが期待される。また、このニューヨーク市のフィールドワーク調査によって、グローバルな都市の多様なコミュニティとその文化の動態を学ぶことが、本コースの目標である。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

ニューヨーク市立大学クイーンズ校に附属する語学学校（ELI）に昨年度に引き続いて受け入れをお願いだけでなく、クイーンズ校の the Division of Arts and Humanities の教員である Mari Fujimoto 氏との協議の下で、クイーンズ校の学生有志の会である日本文化クラブ（JCC）との交流の機会を昨年度に引き続いて開拓した。

・事前学修

各学生は、担当教員と他の参加学生の前で順番に、現地でフィールドワークをしたいことについてプレゼンテーションを行い、その内容について討論や追加学習を行った。各種の危機管理学修にも参加し、渡米中の安全管理について学んだ。

・学外学修

語学学校の先生方のサポートを得つつ、複数の site visits を実施した。具体的な実施先としては、ルイ・アームストロングミュージアム（クイーンズ区）、テネメントミュージアム（マンハッタン）、自由の女神及びエリス島移民博物館（マンハッタン）である。また、参加学生は各自、個人でフィールドワークを行い、その状況を学外学修日誌に記録した。

・事後学修

事後学修では、学生企画活動である、クイーンズ校で知り合った日本文化クラブの学生の中で本人が移民の一世ないしは二世の学生に対して、自分たちで考えた質問を基にインタビューを行い、それを動画に撮影したものの発表を行った。その発表を踏まえ、アメリカという国やそこに住む人びとについて参加学生全体で討論をした。

・学生が企画した活動

事後学修後、参加学生の有志が自主的にコースの参加を振り返る反省会を企画し、7名の学生が参加した。(1件)

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

今年度は昨年度の20名から更に2名増え、GCPとして22名の参加学生を得ただけでなく、神戸大学のすべての学部から参加学生を得ることができ、GCPの全学的な波及に、ニューヨークコースとしてこれまでも増して貢献をすることができたと言える。

・ルーブリック評価

事前学修と事後学修時のルーブリック評価を比較すると、行動の見直しや苦手克服という点でスコアの上昇が観察された。

・具体的な成果

自己評価でも触れたように、今年度は神戸大学のすべての学部の学生の参加を得ることができ、GCPの全学的な波及に貢献することができた。また、このコースに参加した文学部の2年生が、英国バーミンガム大学の交換留学の内定を得た。なお、昨年度の参加学生のうち、国際人間科学部の現3年生の1名が、バルセロナ自治大学の交換留学の内定を得ており、このコースへの参加をきっかけとして長期留学に踏み出す学生を継続的に生み出している。

・今後の課題・改善点

今年度はとくにホームステイをめぐるトラブルが複数生じた。トラブルの未然の防止、あるいはトラブルの解決のためには、ホームステイ業者との意思疎通をしっかりと取っていく必要がある。また、それらトラブルに付随して、参加学生のご父兄とも連絡を取り合う機会をもった。父兄の目から見れば、大学が企画している海外研修は大学の責任において実施しているものである。

《その他》

・派遣先の拡充(R2)

ニューヨーク市立大学クイーンズ校附属語学学校(ELI)の責任者であるダナ・スミス先生とコース実施後に今年度の課題を検討し合い、来年度実施する際には語学学校に通っている他の留学生と交流する機会を設けることを検討していただけることになった。

・非常勤職員の雇用

昨年度に引き続き、学生補佐員を雇用した。この学生補佐員は、ニューヨーク市立大学クイーンズ校に留学をした経験のある大学院生である。この補佐員は昨年度の補佐員と同様に、現地で生活しなければわからない危険情報や生活上の有益な情報を参加学生に伝達してくれたばかりか、現地での学外学修中には参加学生のよき相談相手として、ロールモデルの役割を果たしてくれた。長期留学経験のある学生補佐員の雇用は、極めて教育効果が高いと今年度も感じた。

（２）カナダ・トロントの多文化社会研究（トロント大学コース）

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：7名
- ・学外活動学修時期：令和元年9月3日～9月27日
- ・学外活動学修先：カナダ・トロント市

《学修目標・期待される効果》

「言語情報コミュニケーションの動態を深く理解し、現代のグローバル社会の諸課題に取り組むことができる」能力の醸成（国際文化学研究科 DP）や、「多様な境界線を越えて人々と自在にコミュニケーションを取り、課題の共有と解決に向けてリーダーシップを発揮できる」というようなコミュニケーション能力の獲得や自分と異なる文化背景をもつ人々の視点を取ることができることを目指す。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

平成 30 年 9 月にトロント大学を訪問し、令和元年度実施のコースの内容についての調査及び打ち合わせを行った。

・事前学修

5月30日、6月21日、7月4日、7月18日、8月23日に事前学修を実施した。トロント大学研修でのフィールドワークを成功させるために、（１）参加する学生自身が問題設定をし、（２）その問題に回答するために研修先で具体的に何を行うのかを予め考えておけるよう指導した。また、BEEF にカナダ事情に関する現地の新聞記事やフィールドワークについてのパワーポイント資料をアップして自習するよう指示し、事前学習でも取り扱った。

・学外学修

- トロント大学 School of Continuing Studies に依頼して企画したカナダの多文化主義に関わる 3 回の特別講演を受講した。
- トロントの多様性についての、学生独自のテーマに基づくフィールドワークを実施した。
- ボランティアプログラムに参加し、トロント市民との交流を通じてトロントの多様性に触れた。

・事後学修

10月3日、10月10日、10月17日に事後学修を実施した。各自が振り返りをするとともに、全員で研修報告のためのポスターを作成した。

・学生が企画した活動

上記の学外学修の項で挙げたフィールドワークの具体的な内容は全て学生企画のため、活動の内容は参加者数の7通りある。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

1-1, 1-2, 2-1 の評価については、評価平均値で見ると事前よりも事後の評価が上がっていた（それぞれ 1.57→2.57, 1.29→2.00, 1.71→2.71）。しかし、2-2, 2-3 については、評価平均値で見ると事前よりも事後の評価が下がっていた（それぞれ 2.14→1.57, 1.86→1.43）。2-2 は「得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する」、2-3 は「課題を見つけ、解決をはかる」である。事前評価よりも事後評価が下がった理由としては、実際に英語を使ってコミュニケーションし、問題解決をはかることが思っていたよりも困難であったことから、当初の高めの自己評価が是正されたと考えられる。

・具体的な成果

全体的には、英語学習への意欲が高まったようだ。また、本プログラム参加後に 1 名の学生が交換留学試験に応募し、イタリアへの交換留学試験に合格した。

・今後の課題・改善点

今年度遭遇した問題点は以下の 2 点である。参加した学生の多くが自宅生であるためか、問題解決のために自ら行動した経験が日本語でも乏しかったようだ。また、想定していた英語能力レベル以下の学生が少なからず参加していたのだが、本年度の英語カリキュラムは昨年度よりも難易度が高いものであった。これらの問題が複合し、プログラム実施中に英語を使って積極的にコミュニケーションをとることが難しい学生が現れた。プログラム末期には授業での協調的学習（プレゼンテーション）から逃れようと授業を欠席する学生も出た。

良かった点としては、上記のような問題が起きた際に、3 名の大学院生の参加者（GCP の外数で、うち 1 名は STA）が学部生の助けとなって問題解決を手助けしてくれた。今後も STA の起用や上回生のプログラム参加を推進したい。

令和 2 年度の課題であるが、参加に必要な英語能力を満たさない学生には、希望をしても参加をさせない決断も必要だと考える。また、本プログラムはホームステイを組み入れているが、現地での家賃や地価の上昇から、良い条件のホームステイ先を見つけるのが年々困難になっている。いかに良いホームステイ先を見つけるかが、プログラム成功の重要な鍵の一つである。

《その他》

・派遣先の拡充(R2)

令和 2 年度より募集開始であった BGA-Start プログラムが実施中止となったため、その代替プログラムとして Berkeley Global Access を採用することにした。プログラムの詳細や参加の要件について調査するために、令和 2 年 2 月上旬に UC Berkeley を訪問した。

・非常勤職員の雇用

学生（大学院生）補佐員を 1 名引率補助者として雇用した。引率教員が独自に参加者にアンケートを行ったところ、教員が帰国後に引率補助者がいたことが参加学生にとって非常に役立ったことがわかった。

・広報関係

神戸大学が運営する国際交流関係のポータルである GEMs にこの研修に関する情報をアップし、逐次アップデートを行った。

(3) モスクワ大学・ロシア社会文化研修（モスクワコース）

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：7名
- ・学外活動学修時期：令和元年8月6日～8月19日
- ・学外活動学修先：ロシア・モスクワ市、トゥーラ州

《学修目標・期待される効果》

第二外国語（ロシア語）のスキルを向上させ、ロシア社会文化に関する新たな知識を身につけて異文化への理解を深め、関心のある学習テーマについてリサーチ・フィールドワークを行い、国際的視野を涵養する。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

ロシアで最古・最強の大学であるモスクワ国立大学のロシア語文化学院と事前に協議し、一緒に学習プログラムを企画・実施した。

・事前学修

学生は、アドバイザー教員の指導のもと、各自の学修テーマを決め、詳細な計画及び研究手法を設定した。また、派遣先の諸事情、安全管理について学んだ。

・学外学修

派遣先にて、学生ごとに各々の学習テーマに関するリサーチ・フィールドワークを行った。派遣期間中の平日は、ロシア語授業を受講し、受入機関の教員及び本学の担当教員とともにあらゆる施設を訪問し、ロシア及び旧ソ連地域に関する歴史や社会文化について学修した。土日は、教室外活動に積極的に取り組み、各自の学習テーマについて調査を推進した。また、随時、指導を受ける体制を構築し、派遣先での研修終了後にリサーチペーパーを提出することを目指した。

・事後学修

派遣先での学修について振り返りを行い、各自の学習テーマに関するリサーチ・フィールドワーク成果を報告し、リサーチペーパーを提出させた。

・学生が企画した活動

各参加者が、リサーチテーマのために必要な調査を各自で企画し、実施した。（合計8件：NHKモスクワ支局関係者とのインタビュー、ロシアアヴエンギャールド関係スポットの調査・見学、美術館見学、ロシア人に対するアンケート調査、図書館での調査・インタビュー、スーパーやデパートでの調査（3件）

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

事前学修と事後学修時の評価を比較すると、多くの参加者は2週間の海外滞在・短期研修を通じて、

自分の弱点に気づき、次第に自信を持って、課題・リサーチに取り組むことができたといえる。

・具体的な成果

各参加者のロシア語レベルが向上した。また、全員が積極的にリサーチに取り組み、プログラムのスケジュールに加えて、各自が教室外の活動を企画・実施するなど学修に対する高い意欲を見せた。提出されたリサーチペーパーや最終報告も内容豊かなものが多かった。

・今後の課題・改善点

- ・アシスタント（学生）制度は、参加者や担当教員にとって大変役に立つものであり、今後も継続する必要がある。
- ・ビザ申請に伴い、コース担当者に様々な負担が生じたが、事務からのサポートは得られなかったため、今後は、ビザ申請の手続きにつき、サポート体制（書類記入案内、一時預けなど）を構築する必要がある。
- ・OSSMA からのロシア案内に関する情報は極めて古く、実態が把握されていないため、大幅に修正する必要がある。
- ・予算が不足し、個人研究費を使用せざるを得なくなったが、今後は十分な予算を確保する必要がある。
- ・神戸 GCP と GSP の運営を統一化する必要がある（提出された報告書等の情報共有など）。事務的な手続き（BEEF リフレクションシート、ループリック入力など）については、事務が学生へ通知し、窓口となる必要がある（アンケート入力などに関する問い合わせが複数あり、学生→教員→事務→教員→学生という連絡ルートが不合理だった）。
- ・成績入力を合理化する必要がある（コース担当者によるエクセル入力を廃止し、他の科目と同じ様に「うりぼーネット」で入力を可能にする）。

《その他》

・非常勤職員の雇用

アシスタント（学生補佐員）として派遣された学生は、先輩として、参加者にとってとても役に立つ存在であったため、この制度は今後も継続されることが望ましいと思われる。

(4) アジア・フィールドワークコース（スラウェシコース）

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：9名
- ・学外活動学修時期：令和元年9月15日～9月25日
- ・学外活動学修先：インドネシア・南スラウェシ州

《学修目標・期待される効果》

本コースでは、異なる学部学生同士がインドネシアの大学生たちとともに、フィールドワークを通して、地域が直面する環境問題・社会問題を深く理解することを目指す。前半では、インドネシアの漁村において、ホームステイをしながら、漁撈活動や真珠養殖などの体験型プログラムや現地の学校訪問を行う。後半では、これらの活動を通して、学生自らが立案したフィールドワークを遂行しながら、地域の魅力や地域課題を見つける。そして、住民や現地の大学生とともに、地域おこしプロジェクトを企画し、実践することで課題解決型アプローチを学ぶ。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

インドネシア・南スラウェシ州におけるプログラムは、平成28年に引き続き、3度目であったため事前調査は実施せず。カウンターパート機関のハサヌディン大学と密に連絡を取り、プログラムを組んだ。

・事前学修

事前学修としては、①安全対策・病気予防②宗教、文化及びマナーを座学講義によって学ぶ。

さらに、学生が現地フィールドにおいて、自ら課題を設定し、それをどのように学んでいくかを計画・立案ができるようにフィールド調査の基礎を実習形式で学ぶ。

・学外学修

異なる学部学生同士が、インドネシアの大学生たちとともに、自らが立案したフィールドワークを通して、地域が直面する環境問題・社会問題をより深く理解することを目指す。インドネシアの漁村において、ホームステイをしながら、村落調査や植林活動などの体験型プログラムを行う。後半では、これらの活動を通して学生自らが立案したフィールドワークを遂行しながら地域の魅力や地域課題を見つける。そして、住民や現地の大学生とともに地域おこしプロジェクトを企画し、実践することで課題解決型アプローチを学ぶ。

・事後学修

現地で発表した内容を報告書にまとめ、グローバルチャレンジ合同報告会に向けたプレゼンテーションの準備を行う。さらに、これらの報告書や報告会の内容はインドネシアの参加学生とも共有し、次年度のプログラム計画に向けて学生側からの意見やアドバイスをまとめてもらう。

・ 学生が企画した活動

令和2年1月14日から1月26日まで、カウンターパート機関のハサヌディン大学の学生（本GCPプログラムにも参加してくれた7名の学生）が神戸大学に来校し、日本文化を学ぶプログラムが実施された。その際、本プログラムに参加した神戸大学の学生が主体的にプログラム内容やセミナーを企画し、遂行まで行った。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】5：計画を大幅に超えて実施できた

・ ルーブリック評価

「学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う」、「メンバーと協力し、チームの目標を達成する」、及び「自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる」の3課題に対する自己評価は、水準1・水準2を選択した学生が多い。

引率者の視点から評価すると、異文化や異なる環境下で、ホームステイをしながら、フィールドワークを実施し、彼らなりに上記の課題に対して向き合えていたと思う。これらの課題に対して、自信を持って行動に出せた・具体化できたと自己評価できるようになるまでには、もっと経験や時間が必要であるのではないだろうか。留学などの次の機会には、さらなる成長が期待できると感じた。

・ 具体的な成果

事後学修の一環で、現在、フィールドワークの結果を報告書にまとめ、1月19日にハサヌディン大学と合同で成果発表セミナーを行った。また、ハサヌディン大学の学生と協働で報告書を作成中である。さらに、学生がハサヌディン大学の学生にサポートしてもらいながら、春休みを利用してプログラム中にお世話になったホームステイ先を再訪問する計画を立てている。このように本プログラムの経験を通して、学生自身が主体的に人脈ネットワークや活動範囲を広げているといえる。

・ 今後の課題・改善点

学外学修の10日間の間に、多くの課題やイベントを盛り込みすぎたため、学生自身が、現場でゆっくりと振り返る機会が無かったように思う。学生が自ら考え、行動に移せるようにするためにも、もう少しゆとりあるプログラムを組む必要がある。

《その他》

・ 広報関係

実施後の報告書の作成

(5) アジア・フィールドワークコース（上海コース）

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：4名
- ・学外活動学修時期：令和元年8月28日～9月8日
- ・学外活動学修先：中国・上海市、無錫市

《学修目標・期待される効果》

本コースでは、異なる学部学生同士が中国の学生たちとともに、フィールドワークを通して、地域が直面する環境問題・社会問題を深く理解することを目指す。前半では、上海近郊の太湖を訪れ、湖沼における自然環境問題に関するフィールドワークを行う。後半では、上海近郊および都市域における社会環境・生活環境にかかるフィールドワークを行う。これらの活動を通して地域の魅力や地域課題を発掘する。

《実施内容》

・事前学修

中国における環境問題に関する事前学修を実施した。

・学外学修

太湖における自然環境問題、上海における生活環境問題、社会環境問題について訪問先の上海交通大学で講義を受けるとともに、現地を視察して実地体験した。期間中に、上海交通大学で英語による中間発表を行った。

・事後学修

帰国後、中国で学んだ問題について、プレゼンテーション資料を作成し、公開セミナー形式で発表を行った。

・学生が企画した活動

帰国後に現地市民と連絡を取ってアンケート調査を行った。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・具体的な成果

各自が中国語の難しさを肌で体感するとともに、いっそう語学への学習意欲が増したと回答した学生が多くいた。国が変わると考え方も変わるということを理解できたとの意見もあった。参加学生の1人は現地市民へのアンケートを実施し、政治的に敏感な話題であるにも関わらず複数の回答を得ることができた。これによって、中国における政治と市民の関係をよりよく理解することができた。

《その他》

・派遣先の拡充(R2)

令和2年度に浙江省の温州大学への派遣に向け、交渉を行い、合意した。

(6) 理学グローバルチャレンジプログラム SIIT コース (理学 SIIT コース)

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数 : 4名
- ・学外活動学修時期 : 令和元年8月12日～8月30日
- ・学外活動学修先 : タイ・ランシット

《学修目標・期待される効果》

Chemical Engineering (応用化学) と Chemistry (化学) をプラットフォームとして「英語で学ぶ」ことを目標とする海外学修プログラムである。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

担当教員が2016年12月・2018年9月・2019年3月に先方を訪問して受入体制を調査した。さらに、2018年1月・2019年7月にさくらサイエンスプログラムのもとで、先方学生を招聘して交流を深め、派遣受入を円滑に進める準備を進めた。

・事前学修

ジョージア工科大学と共同で実施した英語力向上セミナー・さくらサイエンスプログラムで招聘したSIIT学生との交流・海外渡航時の安全に関する講義を受講させた。

・学外学修

タンマサート大学シリントン国際工学部 (SIIT) は、学部から大学院まですべての授業を英語で実施する高等教育機関である。先方の応用化学科2年生向け専門科目を中心として、語学から自然科学と工学まで8科目程度を選択して「英語で学ぶ」ことを実践した。

・事後学修

参加学生が個々に学修内容を口頭報告する報告会を実施した。さらに、現1年生に体験を披露して、次年度の参加を呼びかける広報活動に参加させて、自らの体験を反芻する機会とした。

・学生が企画した活動

該当なし

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4 : 計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

自己と他者の相似点と相違点を認識し、相違点を尊重しつつ、彼我それぞれが活動することの重要さと難しさについての認識が深まったと総括できる。

・具体的な成果

派遣学生自身の興味に応じて選択した科目を履修することで、「英語で学ぶ」ことを達成できた。現地学生（アジア・欧州諸国からの留学生含む）と教室・学生食堂・週末の課外活動（観光）において日常的に交流することで、「日本とタイ」「神戸大学とタンマサート大学」の相似点と相違点を意識させ、国際的な感覚を養うことができた。

・今後の課題・改善点

派遣先が発行する学生 ID を参加学生に付与しなかったために、派遣先で履修する科目の選択などが想定に比べて不自由であった。

《その他》

・派遣先の拡充(R2)

令和元年 12 月に派遣先の受入担当職員 1 名を本学へ招聘して、令和 2 年度の派遣では派遣者数を 8 名に増やすこと、及び派遣学生に先方の学生 ID を付与し、履修科目選択の自由度を広げることで合意した。

・英語力向上セミナー

ジョージア工科大学から学生と教員を招聘して、参加学生を含む本学学生と共同して SDGs に関連した調査研究を行う授業科目を設定した。これを履修させることで参加学生の英語能力が向上した。

(7) 理学グローバルチャレンジプログラム UPLB コース (理学 UPLB コース)

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：2名
- ・学外活動学修時期：令和元年9月9日～9月27日
- ・学外活動学修先：フィリピン・ロスバニョス

《学修目標・期待される効果》

基本となるサイエンスを学ぶだけでなく、異文化に身を置くことにより、自らが身を置く専門分野以外のサイエンスも含めて、より総合的に学ぶことで、サイエンスの理解をさらに深化させる。ある一定期間の異文化での生活や学修体験を通じ、自分自身への理解を深め、新たな興味を持つ事柄や、より追求したい学修テーマを自主的に発見する機会とする。理学 UPLB コースは、特に理学全般での英語会話能力・発表能力の向上に重点を置いたプログラムである。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

受け入れ側との事前の打ち合わせが十分なされている。

・事前学修

1) 海外での安全について 2) 海外での健康管理について 3) フィリピンの生活と文化 4) タガログ語講座 5) コースの内容と注意事項

・学外学修

フィリピン大学ロスバニョス校文理学部において、3週間の英語語学研修 (LITE) プログラム (UPLB 農学英語コースとの共催) を受ける。原則、午前2時間、午後2時間程度。平日は英語レッスン終了後 (16:00～18:00) に、UPLB 所属の進行補助学生 (ファシリテーター) と様々な交流活動を行う。この活動により、状況に応じた活きた英語を学ぶ。また、派遣期間中、数度のキャンパス内外での集団活動を行い、植物園、国際稲研究所、化学研究所等を訪問・見学する。派遣先にて、学生ごとに前もって作成した自らの学修計画に基づき、学修プログラムを実践する。派遣期間中、学生は BEEF を利用して自己の活動内容や学修したことを学修日誌として作成し、事後学修のための資料とする。

・事後学修

派遣先での学修について、振り返りを行い、リフレクションシートを作成・提出する。全学で実施される神戸 GCP フェアの全体報告会に向け、プレゼンテーションの準備を行う。

・学生が企画した活動

該当なし

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

全体的に各項目で水準の向上が見られたが、特に、「学内外の活動に参加し、自分の役割を担う」、「メンバーと協力し、チームの目標を達成する」、「課題を見つけ、解決をはかる」では、全員、水準が向上している。

・具体的な成果

- ・理学全般での英語会話能力・発表能力の向上を図ることができた。
- ・異文化に身を置き、進行補助学生（ファシリテーター）とのコミュニケーションを通して、英語を使っの意思疎通の方法を身につけ、その重要性を理解することができた。
- ・全体報告会での報告を実施することにより、プレゼンテーション能力を向上させることができた。

・今後の課題・改善点

特になし

《その他》

・派遣先の拡充(R2)

令和元年 12 月に令和 2 年度の説明会を実施し、1 年生（令和 2 年度に 2 年生）が早期に参加を検討できるようにした。

・英語力向上セミナー

英語力向上セミナーは特に実施しなかった。ただし、令和元年 11 月にフィリピン大学ロスバニョス校の研究者 3 名が来日した際は、昼食時に神戸 GCP 参加学生（2 名のうち 1 名参加）とミーティングを持ち、英語力の向上を行った。

(8) ギャップターム海外協定校派遣コース（工学部 GCP）

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：12名
- ・学外活動学修時期：令和元年9月11日～9月18日
- ・学外活動学修先：オーストラリア・メルボルン（ロイヤルメルボルン工科大学、モナシュ大学）、
国内グローバル企業

《学修目標・期待される効果》

- ・英語コミュニケーション力の向上及び英語による工学知識を習得可能とする能力の向上。
- ・国内外でのインターンシップ等や協定校での体験を通して日本、ひいては各自の進むべき方向性を見出し、広い視野を獲得すること。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

海外研修については、前年度中に関係教員が派遣先を訪問し、具体的なプログラムについての打ち合わせを行った。

国内グローバル企業については、各学科担当教員から企業訪問の受入について打診を行い、訪問の調整を行った。

・事前学修

本学部教員による修学指導の下、海外研修先及び実習予定のグローバル企業の事前調査と研修先での課題と到達目標を設定し、チャレンジシートの作成を行った。

また、コーディネーターによる危機管理についての授業を受講し、海外渡航時の安全危機管理、緊急時行動フローチャート等について学んだ。

さらに、マイナビによる企業訪問に関する事前研修を受講した。

加えて、今年度からは事前学習の一環として、ジョージア工科大学との連携授業を受講し、Kobe University Engineering Summer School 2019 へも参加することで語学力の向上を図った。

・学外学修

第2クォーターと夏休み（ギャップターム）に、国内グローバル企業研修と海外協定校において1週間の海外研修を実施した。国内グローバル企業では、関西圏の企業6社から各学生の専攻に関連の深い企業を選択し、合計5日間以上の企業訪問に参加した。訪問先では、企業の事業内容や海外における事業展開、海外赴任時のエピソードなどについて聞き、実際にグローバルに働くことがどのようなことであるのかについて学んだ。

派遣先の海外協定校では、工学関係の研究施設や企業の見学、英語による現地授業への参加、現地学生との交流を行った。

・事後学修

海外協定校及び国内グローバル企業での学修内容について振り返りを行い、リフレクションシートを作成・提出した。各自の体験をプレゼンテーションとしてまとめ、報告会での報告を行った。

・学生が企画した活動

本コース内のプログラムとしては特にないが、ジョージア工科大学からの留学生やサマースクールへ参加した留学生と積極的に交流しており、サマースクールの学生対象には関西を案内する冊子を作成した。

また、休日などは進んで近隣地域を案内する学生もみられた。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】3：計画通り実施できた

・ルーブリック評価

どの項目においても、事前学修では水準1が多くみられたが、研修後では水準3または2の回答が多くみられる。この実習を通じて、自分の問題点を自己分析し、改善するための方策を得ていると判断する。

・具体的な成果

参加した学生からは、企業研修や海外研修を通して、将来、海外で学ことや働くことを意識するようになったとの意見が多くみられた。

また、海外研修後、長期の交換留学に参加したいという学生もあり、連携授業を受講したジョージア工科大学やメルボルンにあるモナシュ大学への交換留学を目指す学生がみられる。

・今後の課題・改善点

予算削減に伴い、今後、本事業が継続できるかどうかが課題となる。また、本プログラム参加学生が神戸 GCP の経験を今後どのように学業や生活に生かしていくかの追跡調査も課題となる。

《その他》

・派遣先の拡充(R2)

R2 年度の派遣予定先は既にスウェーデン・リンショピン大学と確定しているため、拡充は行っていないが、本コースに選抜されている学生がリンショピン大学からの交換留学生のチューターを務めたり、選抜学生に対し、リンショピン大学からの留学生に自身の大学についてプレゼンテーションを行ってもらったりするなど、派遣前からの交流を深めている。

・非常勤職員の雇用

工学英語入門にて非常勤講師を雇用。

・英語力向上セミナー

本プログラムに選抜された学生には平成 30 年度後期に外国人非常勤講師による工学英語入門の受講を義務づけ、準備学修を行った。

・広報関係

プログラムに係るパンフレットの作成や4月初旬の説明会の開催。

(9) UPLB 農学英語コース (UPLB コース)

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数 : 18 名
- ・学外活動学修時期 : 令和元年 9 月 9 日～9 月 27 日
- ・学外活動学修先 : フィリピン・ラグナ

《学修目標・期待される効果》

躊躇することなく英語で積極的に外国人に話しかけ、会話を楽しむことができるようになること。
異文化を体験し、世界にはさまざまな考え方があることを知ること。また、それを通して日本と日本文化を客観的に見つめなおすことができるようになること。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

受け入れ先は、フィリピン大学ロスバニョス校である。特にさらなる開拓・調査は行っていない。

・事前学修

フィリピンの気候・風土・習慣、渡航に当たっての心構え、健康を維持し学習効果を上げるために留意すること等について事前学修を行った。

・学外学修

フィリピン大学ロスバニョス校に 3 週間滞在し、英語の集中レッスンを受けるとともに、自然史博物館、有機農場等を訪問し、実戦的英語力を鍛えた。

・事後学修

3 週間を振り返って、さまざまな自己点検を行うとともに、その内容を英文・和文に纏めた。

・学生が企画した活動

UPLB では、毎日夕方 2 時間、Guided Interaction の時間が設けられていた。これは、少人数グループで、UPLB の学生と交流するものであった。また、夕食後は、Night session の時間が設けられていた。これらの内容は、基本的にすべて学生が自主的に企画した。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4 : 計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

プログラム経験による「成長」をストレートに評価する学生（参加後に高い水準を選択）がいる一方、参加後に、今後達成したい具体的な課題を見つけたことで、現時点で達していない自分に対して低い水準を選択した学生もいる。いずれのタイプも参加後に繋がる手ごたえを得られたことが、全参加者に提出を課した「報告書」内容からも読み取ることができる。

- ・ 具体的な成果

学生達は、異文化を背景に持つ世界の人々とコミュニケーションをとることの楽しさを知り、そのための英語の重要性を認識することができた。さらに、各種機関を訪問するなかで、将来の目標を見つけたという声もあった。

- ・ 今後の課題・改善点

特になし

《その他》

- ・ 非常勤職員の雇用現地 UPLB

現地で、student guardian として2名の UPLB 学生を雇用した。

- ・ 広報関係

令和元年度の演習の概要と参加者の感想を、農学部ホームページに公開した。

(<http://www.ans.kobe-u.ac.jp/zaigakusei/uplb2019.pdf>)

(10) EU フィールドワークコース (KUPES コース)

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：6名
- ・学外活動学修時期：令和2年2月25日～3月6日
- ・学外活動学修先：フランス・パリ、ベルギー・ブリュッセル及びルーヴェン、英国・ロンドン、ドイツ・フライブルク、オランダ・ライデン及びルクセンブルク

《学修目標・期待される効果》

「日欧比較」をテーマに、学生自らが企画し、計画・実施することにより、日欧が抱える共通課題を深く知ること、及び現地に赴くことで、その解決に向けた方策を思考する能力を学生に身に付けさせることを学修目標とする。また、フィールドでの実践活動が3年生後期からの交換留学につながり、成長と飛躍が期待できる。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

日欧のフィールドワーク先を開拓すべく、複数回、東京に出張し、在京の国際機関（OECD 東京センター、ILO 駐日事務所、国連大学ライブラリー）、イタリア文化会館、外務省、三井物産戦略研究所、三菱総合研究所を訪問し、日欧におけるフィールドワークへの協力を依頼した。今回の学外学修にて、三井物産戦略研究所を通じて、ブリュッセルの欧州政策研究所（CEPS）への訪問が実現する等の成果があった。

・事前学修

まず、各自の関心を踏まえて、フィールドワークでの研究テーマと問いを設定し、フィールドワーク計画書とチャレンジシートの作成や訪問先へのアポイントメールの送付など、協力して準備を進めた。「日欧比較セミナーⅡ」の授業の1コマを使い、フィールドワークの中間報告会を行ない、他のKUPES 生及び欧州からの交換留学生よりフィードバックを受け、計画を進めた。さらに、渡欧前に春季アカデミック英語集中コースなどを通じて英語力を強化し、現地での活動に役立つコミュニケーションスキルを磨くとともに、危機管理セミナーを受講して渡航中の安全管理も学んだ。

・学外学修

主な活動として、フランス（パリ）、ベルギー（ブリュッセル・ルーヴェン）、英国（ロンドン）などにおいて、EU における移民問題、都市計画と環境政策、AI と経済、司法制度の考察などを研究テーマとして、各自及びグループの活動計画に基づきフィールドワークを行った。パリでは、フランス国立図書館を訪問し、近代建築（フランソワ・ミッテラン館）と歴史的建造物（リシュリユ館）を見学し、フランスの文化的基盤や文化政策などに関する知見を深めた。ベルギーでは、EU 主要機関が本部を置くブリュッセルにおいて、欧州委員会ベルレモン本部ビルを往訪、EU が受賞したノーベル賞の展示や歴代委員長の肖像写真が並ぶフロアなどを見学した後、案内を依頼した若手事務官と懇談を行った。また、欧州議会を視察し、広報担当官から説明を受けた後、本会議場を見学した。さらに、欧州対外行動庁の文民支援部長（元駐日 EU 代表部次席公使）を往訪し、EU の共通安全保障・外交政策に向けた機構改革とコソボの司法改革支援など文民支援の実際について説明を受けた。同国のルーヴェンにおいては、本学協定校のルーヴェン大学で交換留学生として学ぶ KUPES 生の案内で歴史的な

大学街を視察した後、同地での学生生活について聴取し、欧州への交換留学について大いに動機づけられた。また、同大学において本学の関根教授（法学研究科）による日本の社会保障制度に関する集中講義（英語）をベルギー人学生とともに受講し、グループ・ディスカッションなどを通して日欧の違いなどについて見識を広げた。ロンドンでは、欧州復興開発銀行（EBRD）の若手日本人職員らとスカイプ面談を行い（先方より、新型コロナウイルス感染防止のため、当初、予定されていた同行への往訪が中止となった）、日本人として国際機関で働くために準備すべきことや専門性を高めるための大学院進学などについて説明を受けた。また、同地において新型コロナウイルス感染に対する不安が広がる中、本学ロンドン同窓会との懇親会が予定どおり実施され、現地の日系企業等に勤務する本学同窓生から英国勤務やブレクジットの現状および欧州の将来などについて話を伺い、フィールドワークについても助言を得た。

・事後学修

学外学修を振り返り、リフレクションシートを作成して成果をまとめた。また、5月に開催が検討されている神戸 GCP 報告会において、プレゼンテーション又はパネル展示により、活動成果を発表する予定である。

・学生が企画した活動

該当なし

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

事前評価と事後評価を比較して顕著な伸びが見られる。「学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う」について、水準3が0%から16%、「メンバーと協力し、チームの目標を達成する」について、水準3が0%から33%へと着実に変化している。また、「自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる」について、水準3が13%から67%へと大きな変化が見られる。「得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する」については、水準3が0%から50%へと大幅に伸びている。「課題を見つけ、解決をはかる」についても同様に、水準3が0%から50%へと大きく伸長している。

・具体的な成果

上述した大きな変化に見られるように、事前学修そして学外活動を通して「チームワーク力」を高めた。また、多様な人々と交流して多くの気づきや刺激を受ける中で「自己修正力」を身に付けており、自分の関心と得意分野及びキャリアの方向性を考える好機につなげた。さらに、今年秋からの交換留学に向けて準備を進める強い動機づけがなされ、「課題挑戦力」も向上した。

・今後の課題・改善点

英語力、コミュニケーション力、知識量の差から意見交換が難しい面が散見され、訪問先における意見聴取においても、英語による聞き取りや質疑応答に苦勞する面があった。引き続き来年度も英語による議論や質疑応答などのポイントを想定した指導に努め、訪問先についても事前調査を十分に行い、活発な意見交換ができるよう事前学修を充実させたい。

《その他》

・派遣先の拡充(R2)

訪問先の本学協定校や欧州議会などの EU 主要機関に、来年度も訪問の受入れを依頼し、了承を得た。

・英語力向上セミナー

上述した春季アカデミック英語集中コースを2月12日から18日まで実施した。英語ネイティブの外部講師により、学生の英語力に応じて3つのレベルに分け、英語4技能の向上と EU に関する基礎知識を図った。

・広報関係

KUPES のパンフレットやウェブサイトに掲載し、KUPES 生が登録するフェイスブックの非公開グループに活動内容を掲示した。来年度の履修対象者となる KUPES 7 期生（現1年生）に対しても、KUPES の説明会や合宿などにおいて本コースを紹介し、履修を促した。

(11) グローバルチャレンジコース（学生企画型）A（グローバルチャレンジコースA）

<前期>

- ①グローバルチャレンジコースA（ベトナム・ホーチミン）
- ②グローバルチャレンジコースA（ウガンダ）
- ③グローバルチャレンジコースA（韓国）
- ④グローバルチャレンジコースA（エストニア）

<後期>

- ⑤グローバルチャレンジコースA（ニュージーランド）
- ⑥グローバルチャレンジコースA（ケニア、ウガンダ）

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：①1名、②1名、③1名、④1名、⑤1名、⑥2名
- ・学外活動学修時期：①令和元年6月11日～7月7日、②令和元年8月20日～9月29日、
③令和元年8月26日～9月25日、④令和元年8月27日～9月25日、
⑤令和2年2月6日～2月25日、⑥令和2年2月6日～3月7日
- ・学外活動学修先：①ベトナム・ホーチミン、②ウガンダ・ムコノ、③韓国・ソウル、
④エストニア・ヒーウマー島、タリン、
⑤ニュージーランド・オークランド、ロトルア、
⑥ケニア・ナイロビ、ニャフルル、ウガンダ・ムコノ近郊

《学修目標・期待される効果》（全コース共通で記載）

【学修目標】

渡航国の社会が抱える課題に関して取り組む組織での活動を通じ、現地社会事情、専門的な知識を深めるとともに、現場の運営ノウハウや現場が抱える問題等について知見を深める。そして、それを基に上位学年での各自の専門分野の研究や活動に繋げる。また、単身渡航に加え、ある一定期間、現地コミュニティの中で生活することを通じ、自己を見つめ直し、新たな自分を知る機会となり、現地での活動や生活で直面するであろう様々な壁を一つひとつ乗り越えていく方策を思考する能力を伸ばすと同時に、海外で生活する自信をつける。

【期待される効果】

学外学修活動を学生自ら企画立案、受入機関との連絡や交渉を自分たちで行うことで、社会人として、広くはボーダレスに活躍できる人材としての対応、行動の起こし方などを学ぶことができる。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

- ・学外学修活動で取り組むことができる活動プログラムとして学生に提案ができそうな海外プログラムを持つ教育関連団体と随時打合せを行う。
- ・学生団体 AIESEC との連携

・事前学修（全コース共通で記載）

- ・渡航国概論や渡航先で取り組む活動テーマに沿った渡航国の現状と課題についての講義と発表
- ・現地活動の準備（活動で使用するような専門用語に関する英語学修等）、チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・危機管理学修
- ・渡航に際してのガイダンス

・学外学修（小分類されたコース別で記載）

- ①ベトナム：チャイルドケアボランティアとして寺院が運営する障がい者施設に派遣され、こどもたちの世話（一緒に遊ぶ、食事をはじめとする日常生活の介助や施設の掃除等）をするボランティア活動に従事した。施設には、ベトナム戦争の枯葉剤の影響を受けた両親の遺伝により、精神的、肉体的疾患を持った子どもも多い。ベトナム人にとって後世にわたり負担を生んでいるこの戦争を学ぶために、戦争博物館や戦争関連の負の遺産を訪れた。これらの訪問は、ベトナム戦争についての理解を深め、民間人が多く犠牲となる戦争の悲惨さをあらためて認識し、今日のベトナム社会の目覚ましい発展と負の遺産を背負った影の部分の二面性を理解する機会となった。そのほか、空いた時間を使って、ホーチミン市内にある他の障がい者施設や障がい者向け職業訓練施設を訪問し、入所者と交流を図るとともに、各施設の障がい者への指導取組や運営状況について知見を深めた。
- ②ウガンダ：現地 NGO “Slow Food Uganda” にて、主として生活向上支援の活動にかかわった。具体的には、様々な農家で聞き取りを行い、彼らの抱える課題を調査した。その結果、土壌の質改良の必要性、灌漑設備の不足、児童労働などいくつかの課題が把握できたが、なかでも特に多かったものはお金に関することであったため、各家庭の毎月の所得と支出を確認したところ、ほとんどの農家がこれを把握していないことが判明した。そのため、各家庭が月々の収入収支を把握する必要性を感じ、家計簿のワークショップを提案し実施した。ワークショップは1, 2回行っても浸透しないため、その後、現地スタッフが引き継ぎ、続けていくこととなった。そのほか、同団体が支援する学校やスラムを訪問し、現地の教育現場や貧困家庭の生活実態を知った。
- ③韓国：現地のイベント運営会社で企業インターンシップに取り組んだ。ルーティンのデスクワークのほか、イベントで着用する衣装をデータとして整理したり、韓流スターのファンクラブを調査してその結果を取りまとめたりする作業などに従事した。また、インターンシップの合間を縫って、専門である法学の勉強のために裁判所へ通い、裁判を傍聴した。そのほか、勤務前や勤務後は習い事でバレエやヨガに通い、週末は日韓交流会話カフェに参加し、積極的に現地の韓国人とかかわる機会を作った。
- ④エストニア：バルト海に浮かぶ島にある家族経営の小さな農場で、農業ボランティアに取り組んだ。主な仕事として、ヤギの搾乳、チーズ作り、野菜の収穫と仕分け、出荷作業を行った。滞在は、農場の家族とメキシコからのボランティアとの共同生活スタイルであったため、家事を分担しながら日常生活を送ることはそれぞれの文化への理解の場となった。週末は、島内や首都タリンを観光し、IT化が進む現地社会、日本では知る機会が少ない同国の歴史を学ぶ機会となった。
- ⑤ニュージーランド：環境保護とフードバンクでのボランティア活動に取り組んだ。環境保護活動では、オークランド郊外の Selwyn Bush エリアと Silverdale 地区の雑木林や川沿いで、在来種を守るための外来植物の除去を行った。また、フードバンクでは、寄付された食料の仕分けや在庫管理、配給作業を行った。これらとは別に、単発のボランティア活動として、“Feed the Street” という路上・車中生活者、精神病を患う人や麻薬中毒者へ食事を提供する活動や、“Book Sales”

という古本市を開催してその収益をロータリークラブに寄付する活動にも取り組んだ。前者では、食材集めから会場準備、料理や片付けまで、後者では、古本の回収から仕分け・整頓、販売や会場撤収まで一通りの仕事を遂行した。そのほか、観光として、オークランド市内だけでなくウェリントン、ロトルアにも赴いた。特にロトルアでは、大地熱地帯独特の自然やマオリ文化に親しんだ。

⑥ケニア、ウガンダ：両国では、主にスポーツを通じた現地貢献を行った。まず、ナイロビでは野球のナショナルチームと野球指導や試合を行ったほか、キックベースボールを教えた。また、アフリカ最大のスラムであるキベラスラムを訪れ、スラムの子どもたちと縄跳びやサッカーでの交流、ゴミ山視察を通じてスラムの人々の厳しい生活現状を知った。そのほか、地方都市ニャフルルへ日本から持参したサッカーボールを運び、ケニア4部チームに寄付をし、同チームの練習でも指導を行った。これらの活動の合間を縫って、サファリツアーに参加したり、大地溝帯地域やマサイ族の村を訪問したりし、アフリカの自然や少数民族文化に触れた後、ウガンダへ移動した。首都カンパラでは、日本のサッカースクール“Solitilo”がCSR活動として行うウガンダのサッカークラブで、現地の子どもたちへサッカー指導や試合を行い、交流を図った。その後、ムコノの現地NGO“Slow Food Uganda”より紹介されたムコノ近郊の農家に滞在しながら、現地で生態系の多様性を保つために様々な取り組みを行う農家数軒を訪れ、各農家の取り組みを一つずつ視察しながらウガンダの農業事情を学んだ。また、滞在先の農村地域の小学校でスポーツ関係の活動を行い、サッカー指導やミニ運動会を実施した。

・事後学修（全コース共通で記載）

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会での活動成果報告ポスターの作成、又は全体説明会での活動成果報告発表準備と投影資料作成

・学生が企画した活動

当該コース6件の学外学修活動はいずれも学生自身が企画し、取り組んだ活動

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

※ルーブリック評価を行った学生数7名

＜チームワーク力＞

- ・1-1：渡航前の評価では、水準0（1名）、水準1（4名）水準2（2名）であった。渡航後の評価では、渡航前に水準0とした学生が水準2と評価を上げ、水準1とした4名のうち1名が水準2に、残り3名が水準3と評価を上げた。また、水準2とした2名については、1名が水準3と評価を上げたが、もう1名は水準2のまま評価に変化がなかった。（水準0→水準2 1名、水準1→水準2 1名、水準1→水準3 3名、水準2→水準3 1名、水準2→水準2 1名）

- ・1-2：渡航前の評価では、水準1（4名）、水準2（3名）であった。渡航後の評価では、渡航前に水準1とした4名のうち3名が水準3に、1名が水準2に評価を上げた。また、水準2とした3名も全員が水準3に評価を上げた。（水準1→水準2 1名、水準1→水準3 3名、水準2→水準3 3名）

<自己修正力>

- ・2-1：渡航前の評価では、水準0（1名）、水準1（2名）、水準2（4名）であった。渡航後、渡航前に水準0とした1名及び水準1とした2名、水準2とした4名のうち2名が水準3に評価を上げる一方、残る2名は水準2のまま評価に変化はなかった。（水準0→水準3 1名、水準1→水準3 2名、水準2→水準3 2名、水準2→水準2 2名）
- ・2-2：渡航前の評価では、水準0（1名）、水準1（2名）、水準2（4名）であった。渡航後、渡航前に水準0とした1名は水準3に大幅に評価を上げた。また、渡航前に水準1とした2名は水準2に、水準2とした4名は水準3へと評価を上げている。（水準0→水準3 1名、水準1→水準2 2名、水準2→水準3 4名）

<課題挑戦力>

- ・渡航前の評価では、水準0（1名）、水準2（4名）、水準3（2名）であった。渡航後、渡航前に水準0とした1名は水準2に評価を上げた。また、水準2とした4名のうち3名が水準3に評価を上げたが、残る1名は評価に変化はなかった。そして、渡航前に水準3とした2名のうち1名は評価に変化はなかったが、もう1名は水準2に評価を下げた。（水準0→水準2 1名、水準2→水準3 3名、水準2→水準2 1名、水準3→水準2 1名、水準3→水準3 1名）

・具体的な成果（小分類されたコース別で記載）

①ベトナム

- ・ベトナムの障がい者施設の現状と課題を知ると同時に、施設は海外からの支援で運営されているため、海外からのボランティアや視察者が多く、国際協力支援の在り方を考えるきっかけとなった。
- ・ベトナム戦争関連の施設を訪問し、今日のベトナム社会の目覚ましい経済発展と負の遺産を背負った影の部分の二面性を理解する機会となった。
- ・様々な国籍のボランティアと活動や生活を共にし、英語コミュニケーション能力が伸びた。

②ウガンダ

- ・発展途上国についての知見が深められた。また、途上国に対するイメージが変わり、国際協力という分野への向き合い方、考え方、かかわり方を考えるきっかけとなった。今後、本気で取り組みたい分野として、学修を深めていきたいと考えるようになった。
- ・現地での活動や滞在を通じ、ウガンダのみならず日本国内の人のネットワークが広がった。

③韓国

- ・在日韓国人として韓国のことにはかなり精通しているつもりだったが、インターン先の職場や習い事、普段の生活を通じて、自分の知らない韓国を数多く発見し、韓国や韓国人の新たな面を目の当たりにすることで、自分のルーツのある国についてより理解を深める機会となった。そして、自分の中にある日本と韓国の二重性を今後、強みにしていきたいと思うようになった。
- ・今まで弁護士を目指すか決めかねていたが、現地で外国人に関わる裁判を傍聴したことで、国際弁護士を目指すのもよいのではないかと考えるようになり、進路を決めていく中で一つの助けになったように感じた。

④エストニア

- ・農家での作業は、機械化されておらず手作業で行うものばかりだったので、それぞれの作業における農家の工夫を知り、また、小規模な農場経営について知見を深めることができた。
- ・農場の家族や他国からのボランティアとの共同生活で、社会性や協調性、英語コミュニケーション能力を伸ばすことができた。

⑤ニュージーランド

- ・どの活動も主体的に動くことで、チームと協力してより有意義な活動が行えた。また、困難なことがあってもメンバーと協力することで、目標を達成できるということを知った。
- ・現地社会の異なる民族の価値観を尊重し、様々な国籍の人を温かく受け入れる国民性に触れ、積極的にコミュニケーションを取ることで、他者の考えをより理解することができるようになり、それが互いの信頼関係の形成につながることを感じた。
- ・日常生活やボランティア活動で課題ができたとき、その課題解決のために努力しようとする向上心を養うことができた。
- ・活動を通じ多様な背景を持つ人たちと出会ったことで、様々な価値観や生き方を知り、将来の選択肢を増やすことができた。
- ・英語は学問ではなく、コミュニケーションツールだということを認識することができ、今後の英語学修の手がかりになった。

⑥ケニア、ウガンダ

- ・発展途上国の開発支援を専門とすることを考えるなか、スポーツが開発に与える影響やその重要性について、現地の人々とのかかわりを通して理解を深めることができた。
- ・アフリカの農業の現在について僅かだが知見を深めることができた。
- ・スポーツや運動指導を行うことで、多くの人をまとめる力、現地の人と協力する力、自分で何をすべきか考えプランを立てていく力や予想外の出来事が起きても迅速な判断でフォローしていく力を伸ばすことができた。

・今後の課題・改善点

1ヶ月以上の学外学修に取り組む学生を増やしていくこと。

《その他》

・非常勤職員の雇用

○学生補佐員の雇用：延べ26名

- ・春と夏に実施する神戸GCPフェアでの活動報告発表及びパネル展示運営（4、10月）
- ・第14回ホームカミングデイ記念式典にて神戸GCP参加学生による活動報告発表（10月）
- ・50年目の卒業式にて神戸GCP参加学生による活動報告発表（10月）

○SAの雇用：延べ6名

- ・事前学修における学修支援（7月）[フィールドワークチャレンジコース（マレーシア）、フィールドワークチャレンジコース（アルメニア）サマースクールチャレンジコース（ベトナム）]
- ・学外学修における活動サポート（9月）[フィールドワークチャレンジコース（アルメニア）]
- ・AP事業テーマIV「長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」合同総括シンポジウム・分科会にて神戸GCP参加学生による学修成果報告（11月）
- ・宇部工業高等専門学校 AP事業テーマIV宇部工業高等専門学校 大学教育再生加速プログラム(AP)シンポジウム「真のグローバル人材育成へ舵を切る高等教育」シンポジウム・パネルディスカッション

ションに神戸 GCP 参加学生がパネリストとして登壇（12 月）

○ゲストスピーカー：延べ 3 名

- ・英語力向上セミナー指導（6～7 月、全 5 回）
- ・総合科目 I 「アジアへの誘い」講義担当（12 月、第 1・第 3 回目）

○フィールドワークチャレンジコース（マレーシア）の事前学修にて、一昨年度同コースに参加し、その後、マレーシアの大学へ長期留学していた学生が、マレーシア概論について説明したり、フィールドリサーチのリサーチテーマ選びをファシリテートしたり、事前に自主学修しておくべき点、現地滞在中の治安面・健康面で気をつけるべきこと等のブリーフィングを行ったりした。

○フィールドワークチャレンジコース（アルメニア）の事前学修にて、一昨年度、モンゴルの日本語教育補助インターンシップを経験し、9 月にアルメニアの日本語学校で再び日本語教育補助インターンシップに取り組む予定の学生が、当コース参加学生の日本文化紹介発表のファシリテートを行った。また、学外学修期間中、インターンシップ業務の合間を縫って、当コース参加学生の滞在サポートや機関訪問時に同行し、低年次学生が学外学修を円滑に進めるようアシストした。

○サマースクールチャレンジコースでは、昨年度国際サマープログラムに参加した学生が、事前学修にて、同プログラムの各活動概要や事前に自主学修しておくべき点、現地事情、滞在中の治安面・健康面で気をつけるべきこと等、ブリーフィングを行った。

・FD・SD の実施

3 月 13 日、「大学教育加速プログラム (AP) 事業テーマⅣ（長期学外学修プログラム（ギャップイヤー））を振り返る」と題し、テーマⅣ幹事校である新潟大学で本事業に関わってこられた木村裕斗氏をお招きし、同大学の AP 事業実施事例を共有し、本学の神戸グローバルチャレンジプログラムを振り返る FD を開催予定であった。しかし、2 月末、新型コロナウイルス感染症が国内で拡大している状況を鑑みて実施中止とした。

・英語力向上セミナー

英語ネイティブ講師指導の英語のスピーキングに重点を置いたセミナーを 6 月中旬から 7 月中旬にかけ実施した。週 1 日 1 コマ（90 分）計 5 回開講し、27 名が受講した。

・広報関係

＜プログラムパンフレット及び専用 HP＞

- ・昨年度 12 月より今年度パンフレットを作成し、2 月末に完成したものを 3 月下旬より学内配布開始。
- ・神戸 GCP 関連イベントの告知等を専用 HP に掲載。また、前期、後期、各時期に実施されるコースの募集案内や、各時期の学外学修コース参加学生による体験談も専用 HP で発信した。さらに、SNS で学生生活に役立つ情報を収集する学生の主流に合わせ、本プログラムの Facebook ページに、HP の掲載内容をフォローする形で本プログラムの情報発信を行い、学生が本プログラムのお知らせ等に日常的に目に触れるようにした。

＜学内外の掲載印刷物＞

- ・大学案内 2019-2020, p. 21.
- ・学生生活案内 平成 31 年度版, p. 73.
- ・「兵庫の大学へ行こう 2020」、『神戸新聞』、2019 年 6 月 6 日, p. 18.
- ・大学通信「卓越する大学 2020」, p. 140～p. 141

- ・「長期学外学修のデザインと実践－学生をアクティブにする－」 p. 98
- ・令和元年度 AP 事業テーマⅣ長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）合同総括シンポジウム
報告書, p. 49

＜学内外参加イベント＞

- ・本学主催第 14 回ホームカミングデイ記念式典内及び 50 年目の卒業式での神戸 GCP 参加学生による活動成果発表（10 月）
- ・新潟大学主催 AP 事業テーマⅣ「長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」合同総括シンポジウム・分科会「社会のニーズと学生の成長をつなぐ」にて本プログラム成果報告（11 月）
- ・宇部工業高等専門学校主催 AP 事業テーマⅣシンポジウム「真のグローバル人材育成へ舵を切る高等教育」シンポジウムにてポスターセッション出展及びパネルディスカッション（(1)現代社会における企業の求める人材像／学生の描く未来像とのマッチング(2)留学生活用と地方都市の国際化／日本人学生として何ができるか）に本プログラム参加学生がパネリストとして登壇（12 月）

(12) グローバルチャレンジコース（学生企画型）B（グローバルチャレンジコースB）

<前期>

- ①グローバルチャレンジコースB（ベトナム・ホイアン）
- ②グローバルチャレンジコースB（フィリピン）
- ③グローバルチャレンジコースB（アメリカ合衆国）
- ④グローバルチャレンジコースB（ドイツ）
- ⑤グローバルチャレンジコースB（インドネシア）
- ⑥グローバルチャレンジコースB（ベトナム・ホイアン）
- ⑦グローバルチャレンジコースB（カンボジア）

<後期>

- ⑧グローバルチャレンジコースB（ベトナム）[新型コロナウイルス感染症拡大の影響により不催行]

《令和元年度コース実績》

・参加学生数：①1名、②1名、③1名、④1名、⑤2名、⑥1名、⑦1名、⑧0名

※⑧について1名の参加予定者があったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により不催行とした。

- ・学外活動学修時期：①令和元年8月8日～8月23日、②令和元年8月19日～9月29日、
③令和元年8月22日～8月31日、④令和元年8月31日～9月15日、
⑤令和元年9月1日～9月11日、⑥令和元年9月13日～9月26日、
⑦令和元年9月13日～9月28日
⑧令和2年3月中旬～3月下旬 [不催行]

- ・学外活動学修先：①ベトナム・ホイアン、ダナン、フエ、
②フィリピン・ケソン州、ピナツボ火山周辺地域、マニラ、
③アメリカ合衆国・スポケーン、④ドイツ・グロースローラ、
⑤インドネシア・南スラウェシ州、南東スラウェシ州、⑥ベトナム・ホイアン、
⑦カンボジア・カンボンスプー州、プノンペン
⑧ベトナム・バクカン省 [不催行]

《学修目標・期待される効果》（全コース共通で記載）

【学修目標】

渡航国の社会が抱える課題に関して、取り組む組織での活動を通じて現地社会事情、専門的な知識を深めるとともに、現場の運営ノウハウや現場が抱える問題等について知見を深める。そして、それをもとに上位学年での各自の専門分野の研究や活動に繋げる。また、単身渡航に加え、ある一定期間、現地コミュニティの中で生活することを通じ、自己を見つめ直し、新たな自分を知る機会となり、現地での活動や生活で直面するであろう様々な壁を一つひとつ乗り越えていく方策を思考する能力を伸ばすと同時に、海外で活動に取り組むことへ自信をつける。

【期待される効果】

学外学修活動を学生自らが企画立案し、受入機関との連絡や交渉を自分たちで行うことで、社会人として、広くはボーダレスに活躍できる人材としての対応、行動の起こし方等を学ぶことができる。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

これまで活用してこなかった、海外でフィールドワークプログラムを展開している団体のプログラムについても、現地活動実施体制や活動内容を調査、検討したうえで、本コースでの参加として認めた。

・事前学修（全コース共通で記載）

- ・渡航国概論や渡航先で取り組む活動テーマに沿った渡航国の現状と課題についての講義と発表
- ・現地活動の準備（活動で使用するような専門用語に関する英語学修、現地での発表資料の作成等活動内容に応じて対応）、チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・危機管理学修
- ・渡航に際してのガイダンス

・学外学修（小分類されたコース別で記載）

- ①ベトナム：現地英語学校の経営戦略を2週間以内に導き出すPBL型のビジネス課題に4人1チームで取り組んだ。経営戦略を練るうえで現地のニーズを知るため、ベトナム人へのアンケートやヒヤリングを行い、そこで得た回答をメンバーと分析しながら具体的な提案内容を討論し、最終発表に向けて資料を作成した。同じ課題に取り組んだ複数チームの中から最も見込みのある企画案が採用される最終発表では、参加学生所属のチームの企画案が採用された。この活動終了後、ダナンやフエへ行き、ベトナム近代史を辿りながら建築を中心に見学した。
- ②フィリピン：フィールドスタディとして、日本のNGO団体が支援活動を行う地域を視察した。まず、ピナツボ火山で被災した地域を訪問し、1991年に起きたピナツボ火山噴火被害からの復興状況について説明を聞き、村の小学校やゴミ分別処理場を訪問し被害の実態について学んだ。その後、ペレーズの漁村を訪問し、漁師家族の生活実情について話を聞いたり、村のヘルスケアセンターを視察したり、町中で物価を調査したり、家計簿ワークショップに取り組んだ。マニラではスモークーマウンテンやスラムを訪れ、スモークーマウンテンではごみ処理場に潜む危険などについて説明を受け、また、スラムでは住人女性から生活現状や生い立ち、家庭環境などについて話を聞いた。そのほか、第二次世界大戦時のフィリピンでの日本軍の歴史を学ぶため、サンチャゴ要塞や慰安婦博物館を視察した。元慰安婦から話を聞き、一緒に行ったメンバーと「日本は被害者か加害者か」というテーマでディスカッションを行った。
- ③アメリカ合衆国：スポケーン市にあるNorth Central高校にて、ボランティアとして新学期開始前の授業準備を行い、新学期開始後、日本語クラスでは日本文化や日本語の歴史などを紹介し、世界史の授業では日本の歴史について説明を行った。そのほか、空いた時間を利用し、フードバンクで寄付された食料の仕分け、パッキングのボランティアや夏期休業中のスキー場の山道の整備や除草、下枝を選定する環境整備のボランティア活動にも取り組んだ。
- ④ドイツ：グロースローラにある中世の古城ローラキャッスルにて2つのボランティア活動に取り組んだ。一つは城の保全として清掃や廃材処分、もう一つは城周辺の自然保護地区で、森林保全として間伐作業、除草、山道整備を行った。当該活動には、メキシコ、ロシア、ジョージアなどの様々な国から参加者が集まっており、活動期間中は寝食を共にすることで伝統文化紹介や料理を通じて交流を行い、それぞれの文化や歴史に理解を深めた。

- ⑤インドネシア：スラウェシ島地方南部の各地で、海にかかわる産業を中心とした視察や体験活動を行った。まず、南東スラウェシ州のブトン島にあるユニダヤン大学で現地の文化や民族に関する講義を受けた後、市内の歴史博物館を見学した。その後、パラブサ村でホームステイをしながら真珠養殖や真珠加工を視察した。そして、参加メンバーと村人でこの地域で取れる半円真珠の加工やプロデュース方法について議論した。その後、海上生活を送る民族の集落を訪れてホームステイしながら、学校訪問や漁労体験をした。学校では多民族国家における民族強制の課題やへき地の学校教育問題について考えた。そしてブラワン島へ移動し、離島における水利用に関してのフィールドワークを行った。
- ⑥ベトナム：活動大枠は前記①と同じであるが、取り組んだ課題は、ホイアンにあるサンドイッチ屋で外国人旅行者向けの新商品を考案するものだった。外国人観光客へのヒヤリングを行い、新メニューであるココナッツコーヒーを考案・試作し、原価計算をして価格を設定し、再び、外国人観光客からフィードバックをもらいながら商品の改良を重ねた結果、ココナッツコーヒーの材料を使ったパフェを売り出すことにした。新商品の宣伝も工夫し、最後のコンペティションでは参加学生のチームの企画が採用されることとなった。
- ⑦カンボジア：コンポンスプー州の村の小学校で、午前中は村の小学校校舎の塗装修繕、午後は小学校に自主的に集まった5～13歳の子どもを対象に英語の特別授業を行った。英語の授業では、現地語が分からないなか、現地スタッフの力を借りて、年齢や性別、英語力、理解力、集中力が全く異なる子供たちに対し、ゲームを交えるなど工夫を凝らしながら授業を行った。ボランティア活動のほか、首都プノンペンでカンボジア内戦とポルポト派による虐殺を学ぶため、トゥールスレーン虐殺博物館及びキリングフィールドを訪問した。また、富裕層が住むエリアやモール、ダウンタウン各所を訪問し、海外からの投資先として注目を浴びる国の首都を様々な観点から視察した。
- ⑧ベトナム [不催行]：バクカン省パクゴイ村の小学校にてスポーツ大会の実施や音楽の授業として作詞作曲の指導をしたり、また並行してこの地域の少数民族の家にホームステイしながら伝統文化、山間部の生活様式や農業について学んだりする予定であったが、新型コロナウイルスの感染症拡大の影響により不催行とした。

・事後学修（全コース共通で記載）

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会での活動成果報告ポスターの作成

・学生が企画した活動

当該コース7件（実施件数）の学外学修活動はいずれも学生自身が企画し、取り組んだ活動

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

※ルーブリック評価を行った学生数6名

<チームワーク力>

- ・1-1：渡航前の評価では、それぞれ水準2（5名）、水準3（1名）であった。渡航後の評価では、渡航前に水準2とした5名のうち水準3と評価を上げた学生が3名、水準2のまま評価に変化がなかった学生が2名であった。また、渡航前に水準3と評価した1名は渡航後も評価に変化はなかった。（水準2→水準3 3名、水準2→水準2 2名、水準3→水準3 1名）
- ・1-2：渡航前の評価では、水準1（2名）、水準2（3名）、水準3（1名）であった。渡航後、渡航前に水準1とした2名のうち1名が水準2に、もう1名が水準3に評価を上げた。また、水準2とした3名のうち2名は水準3としたが、1名は水準0に評価を下げた。渡航前に水準3と評価した1名は渡航後も評価に変化はなかった。（水準1→水準2 1名、水準1→水準3 1名、水準2→水準3 2名、水準2→水準0 1名、水準3→水準3 1名）

<自己修正力>

- ・2-1：渡航前の評価は、水準2（5名）、水準3（1名）であった。渡航後、渡航前に水準2とした5名のうち3名が水準3に評価を上げ、残る2名は評価に変化はなかった。また、渡航前に水準3とした学生は渡航後の評価に変化はなかった。（水準2→水準3 3名、水準2→水準2 2名、水準3→水準3 1名）
- ・2-2：渡航前の評価は、水準2（2名）、水準1（3名）、水準0（1名）であった。渡航後、渡航前に水準2とした1名と水準1とした3名が水準3に評価を上げた。また、水準0とした1名も水準2に評価を上げた。なお、渡航前に水準2としたもう1名は、渡航後も評価に変化はなかった。（水準2→水準3 1名、水準1→水準3 3名、水準0→水準2 1名、水準2→水準2 1名）

<課題挑戦力>

- ・渡航前の評価は、水準2（5名）、水準3（1名）であった。渡航後、渡航前に水準2とした5名のうち4名は評価に変化がなく、また1名は水準1に下げた。渡航前に水準3とした1名は渡航後も評価に変化はなかった。（水準2→水準2 4名、水準2→水準1 1名、水準3→水準3 1名）

・具体的な成果（小分類されたコース別で記載）

①ベトナム

- ・将来は教員志望だが、今回取り組んだ課題解決のために正解のない道を自分たちで開拓していく経験は、教員になった際に授業に取り入れたいと思った。また、授業にどのように取り入れるかのヒントになった。
- ・企画を練るうえで、現地のニーズを知るために何度もベトナム人へのアンケートやヒヤリングを行い、事実を推測しどの意見が現状で必要とされているのかを見分ける力を育んだ。また、具体的な提案を検討するに、チームメンバーと徹底的に討論することでコミュニケーション能力を高めることができた。

②フィリピン

- ・様々な現場視察を通じてこれまで知らなかった実情を知り、それを知った以上、自分に何ができるか考える責任があると感じた。
- ・フィリピン以外の国に行き、それぞれの国の知見を広めたいと思うと同時に、日本国内の問題にも目を向け学ぶ必要があると感じた。
- ・日本の学校授業では教えられない、第二次大戦中の加害者としての日本について学ぶ機会を得て、スペイン・アメリカ・日本に支配されて苦しんだフィリピンの人々を実際に現場で見なが

ら考える重要性や、次の世代に自分たちの見たものや聞いたものを伝えていく責任があることを認識した。

③アメリカ合衆国

- ・いずれのボランティア活動もスタッフから指示されることは必要最低限であり、どのような作業をどの程度の質で行うかは各自の判断に任せられ、自主性が求められた。そのため、状況を判断し、自分は何をどのようにすべきかを考えて作業をする力がついたと思う。また、現地の人が楽しみながら、ライフワークとしてボランティア活動に参加する姿を間近で接し、ボランティア活動の意義を考えるきっかけになった。

④ドイツ

- ・現地活動や様々な国籍の人と共に過ごす体験を通じ、何事も自ら積極的に行動することの重要性と自分の意見をしっかり主張することがグループに置いて不可欠であることに気付いた。それまで待っていれば役割を振ってくれると思っていたことから、自ら進んで何かに取り組もうとしたことがほぼなかった。しかし、現地活動はリーダーに指示された作業だけではなく、自分ができる作業を背景的に見つけて行動し、言われなくても他の人の作業を手伝うのが当然とされる環境での活動であった。当初は戸惑いが多く、自ら行動することにためらいがあったが、徐々に進んで作業ができるようになった。また、積極性はグループでの作業や活動だけでなく、人と人との交流の上でも大切だと気づいた。

⑤インドネシア

- ・学生自らが立案したフィールドワークを推敲しながら地域の魅力や地域課題を見つけ、住民や現地の大学生と共に地域おこしプロジェクトを企画し実施することで、課題解決型アプローチを学んだ。

⑥ベトナム

- ・実際に活動を起こしながらビジネス課題に取り組むことで、大学の経営学の授業より実践的に学べた。活動は4人一組のチームで行ったが、チームビルディングで個人間の能力に差があり、仲間の足を引っ張ってしまうことやもめることもあったが、ファシリテーターの仲介もあり、チームに対する不満を吐き出しながらチームをうまく機能させるよう努力できた。また、新商品考案からメニューとして店頭で提供するまで様々な活動に取り組む中、自分ができないこと、今まで気づけずにいたことなどに気付き、自分自身を見直す良い機会になった。

⑦カンボジア

- ・現地に行くことで、これまで知らなかったことを肌で感じることの重要性を感じることができた。海外で活動するにあたり、今後自分が磨かなくてはならない要素（コミュニケーション能力、積極性、チャレンジ精神など）に気づけた。

・今後の課題・改善点

- ・1ヶ月以上の学外学修に取り組む学生を増やしていくこと。
- ・旅程の変更に伴うキャンセル料などの費用負担については、参加要項や誓約書に記載があるが、旅費の補償に大学としては対応できないため、コース担当教員が学生へ渡航の変更や中止について、危機管理マニュアルで謳われている対応基準より早い段階で指示することが難しいこと。

《その他》

- ・非常勤職員の雇用、FD・SDの実施、英語力向上セミナー、広報関係

「(11) グローバルチャレンジコース（学生企画型）A」の同項目を参照。

(13) フィールドワークチャレンジコース（フィールドワークコース）

<前期>

- ① フィールドワークチャレンジコース（マレーシア）
- ② フィールドワークチャレンジコース（アルメニア）

<後期>

- ③ フィールドワークチャレンジコース（タイ）
- ④ フィールドワークチャレンジコース（ミャンマー・ヤンゴン）[不催行]
- ⑤ フィールドワークチャレンジコース（ミャンマー・マンダレー）[不催行]

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：①7名、②6名、③5名、④0名、⑤0名
- ・学外活動学修時期：①令和元年9月2日～9月25日、②令和元年9月12日～9月24日、
③令和2年2月19日～3月3日、④不催行、⑤不催行
- ・学外活動学修先：①マレーシア・クアラルンプール及びスバンジャヤ、セレンバン、マラッカ、
シンガポール、
②アルメニア・エレバン及びアララト、コタイク、ゲラルクニク地方、
ジョージア・トビリシ
③タイ・バンコク、アユタヤ、④ミャンマー・ヤンゴン [不催行]、
⑤ミャンマー・マンダレー [不催行]

《学修目標・期待される効果》（全コース共通で記載）

- 【学修目標】日本政府機関/企業訪問、フィールドリサーチ活動や現地の人との交流や意見交換を通じて得た様々な気づきから、自身のキャリア形成を考える機会とする。
- 【期待される効果】マスメディアによる報道やインターネットから得る情報ではなく、新興工業経済地域や世界の注目を集める地域の現在を自分の眼、自分の肌で感じ、知見を深め、様々なキャリアやバックグラウンドを持つ人々と交流することで、自分の中の既存の視思考に刺激を受け、新たな発想や視点を見出し、それを学修や学内外の活動に繋げる。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査（コース別で記載）
 - ①マレーシア：訪問先日系企業を新規に増やした。
 - ②アルメニア：視察見学先を新規に増やした。
 - ③タイ：企業や学校機関への訪問先の一部は、現地の本学同窓会ネットワークより紹介を受けた。
- ・事前学修（全コース共通で記載）
 - ・渡航国の社会、歴史、宗教、政治、産業、文化に関する分野から1つの分野を取り上げて調べた結果を発表
 - ・渡航国の概論や前年度の活動内容を紹介
 - ・訪問先での本学及び日本文化の紹介活動の準備（アルメニア・タイ）又はフィールドリサーチの準備（マレーシア）

- ・チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・危機管理学修
- ・渡航に際してのガイダンス

・学外学修（コース別で記載）

①マレーシア：大きく3つの活動（英語学修、機関・企業訪問、フィールドリサーチ）に取り組んだ。渡航期間の前半は、2週間、クアラルンプールにてオーストラリア系の英語学校（ELC）で英語の授業を受講した。その後、スバンジャヤへ移動し、フィールドワーク活動に入り、さくらコンサルタントにて、マレーシアの現況や海外でキャリアを積むということについて講義を受ける傍ら、JETRO マレーシア事務所及びヤクルト・マレーシア工場を訪問し、ASEAN におけるマレーシアの位置、日系企業の進出状況や海外からの投資状況、日系食品会社がイスラム社会で事業を展開する際の商品開発や広報面での課題とクリアするための工夫などについて学び、訪問後はフィードバックのレポートを作成した。これと並行し、2～3名のグループに分かれ、グループ毎にリサーチテーマを設定し、それに基づき街頭インタビューやテーマと関係する団体担当者への聞き取り調査を行い、調査内容を分析し、現地コーディネーター指導のもと、その結果を英語資料にまとめ、発表を行うことでマレーシア社会の事象について理解を深めた。また、これらの活動の合間を縫って、学生企画の活動として、シンガポールでの2泊3日の視察、マレーシア国民大学への訪問を行い、現地学生と交流した。そのほか、マレーシア駐在の本学 OBOG との交流も図った。

②アルメニア：大きく3つの活動（機関・企業訪問、現地学生との交流と日本文化交流の架け橋としての活動、世界最古の文化を持つ同国の歴史についての学修）に取り組んだ。機関・企業訪問では、在アルメニア日本大使館、JICA アルメニアリエゾンオフィスを訪問し、アルメニアの現況や日本との関係について学んだ。また、TUMO を訪問し、IT 先進国と言われる同国の IT 教育現場を視察した。現地学生との交流に当たっては、日本文化交流の架け橋として、書道や囲碁、カルタなど日本文化の特色あるトピックをいくつか紹介し、実際に、書道、囲碁、百人一首を実演して一緒にやってみるという体験型プログラムを盛り込んだ交流内容を予め企画し、3つの学校機関（ロシアアルメニア大学、イロハセンター、ヒカリセンター）で行った。また、交流の最後には、おにぎりを準備し、歓談しながら親交を深めた。これらの活動と並行して、ユーラシア大陸の東西を結ぶ要衝に位置していることから、小国ながら様々な局面を持つ同国の文化や歴史を学ぶため、エレバン市内及び周辺地方の古代遺跡、教会、修道院、博物館、古文書館を訪問したり、学外でも現地学生と交流を続けたりした。その後、学生企画で行ったジョージア・トビリシでも博物館や教会、遺跡を訪問し、コーカサス地方の歴史、文化、民族性について理解を深めた。

③タイ：大きく3つの活動（機関・企業訪問、現地学生との交流、日本では見る・知る機会の少ない同国のローカル文化や歴史及び仏教についての学修）に取り組んだ。機関・企業訪問では、日系企業であるタイ・トヨタ工場、現地企業でタイのセブンイレブンを運営する CP ALL を訪問し、それぞれの事業現場で事業展開や戦略などを学んだ。その後、JETRO バンコク事務所を訪問し、タイの日系企業の事業状況や世界規模で感染が広がる新型コロナウイルスによる企業活動への影響等についてレクチャーを受けた。これらと並行して、国際交流基金バンコク日本文化センターを訪問し、国際交流基金の果たす役割やタイにおける日本文化の啓蒙活動や日本語教育とその支援状況についてブリーフィングを受けた。また、消費経済で華やかなバンコクの光の部分だけでなく、陰の部分の実情を知るため、クロントゥーイスラムを訪問し、この地域のコミュニティ支援を行うドゥアンプラティープ財団で、スラムやそこに住む家庭の実情について説明を受けた。

後、地域内を視察した。現地学生交流では、パンヤピワット経営大学(PIM)、泰日経済技術振興協会(TPA)の日本語学習者と交流を行った。PIM では、まず参加学生が本学紹介をした後、現地学生からタイの紹介やタイ語レッスンを受けた。TPA でも本学紹介をしたのち、日本文化紹介として2、3月の季節にまつわる節分とひな祭りの紹介を行い、その後、折り紙で女雛と男雛、桃の花の作成指導や歓談を行った。その他の交流としては、本学タイ同窓会のメンバーと交流を行い、それぞれのキャリアや現地生活について多岐に渡る話を聞き、現地事情や海外で働くことへのイメージを具体的に知り、キャリア形成のために参考とする機会となった。また、チュラロンコーン大学の教員から、タイの歴史、文化の説明、また、それが現代タイ社会やタイ人の気質にどのような影響をもたらしているかなどの講義を受けた。また、先生から出された5つのフィールドリサーチテーマの中から1つを選び、市中でリサーチや一般市民へのヒヤリングを行い、その結果を最後に発表し、先生からも解説や評価をいただいた。この活動を通じ、タイに来て以来、疑問に感じていた点を解消したり、タイ人やタイ社会、歴史や文化について新たな気づきや知識を得たりするなど、タイへの理解を促進させた。これらの活動の合間を縫って、バンコク市内の仏教寺院、博物館や資料館、アユタヤ遺跡、バンコク周辺の地元市場、タイ料理教室などへ行き、日本では見る・知る機会の少ない同国のローカル文化や歴史及び仏教について学修した。なお、学外学修活動は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、予定していたタイ・グリコへの訪問が見送りとなった。また、チュラロンコーン大学も学外者の入構制限により訪問ができない状況となり、当初予定していた同大学の学生との交流や意見交換会は見送りになったが、Skype のビデオ通話機能を使い、予定していた講義を受け、フィールドリサーチの発表を行なった。

・事後学修（全コース共通で記載）

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会での活動成果報告ポスターの作成または全体説明会での活動成果報告発表準備と投影資料作成

・学生が企画した活動（コース別で記載）

- ①マレーシア：マレーシア国民大学での学生交流、シンガポール視察、フィールドリサーチ（マレーシア人の語学力について、マレーシアのキリスト教について、マレーシアのスポーツに関する考察）
- ②アルメニア：日本文化紹介活動、日本では見る・知る機会の少ない同国のローカル文化や歴史、キリスト教についての学修活動、ジョージア視察
- ③タイ：日本文化紹介活動、日本では見る・知る機会の少ない同国のローカル文化や歴史、仏教についての学修活動

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】3：計画通り実施できた

・ループリック評価

※ループリック評価を行った学生数 17 名
＜チームワーク力＞

- ・1-1：渡航前の評価では、それぞれ水準1（5名）、水準2（5名）、水準3（7名）であった。
渡航後の評価では、渡航前に水準1とした5名のうち3名が水準2に、2名が水準3と評価を上げた。また、渡航前に水準2とした5名のうち水準3に評価を上げたのは1名のみで、残る4名は水準2のまま評価に変化がなかった。そして、当初水準3と評価した7名だが、うち2名が水準2に、1名が水準1に評価を下げたほか、残る4名の水準は渡航後も変化がなかった。（水準3→水準3 4名、水準3→水準2 2名、水準3→水準1 1名、水準2→水準2 4名、水準2→水準3 1名、水準1→水準2 3名、水準1→水準3 2名）
- ・1-2：渡航前の評価では、水準1（1名）、水準2（10名）、水準3（6名）であった。渡航前に水準1とした1名は、渡航後も水準1のままであった。そして、渡航前に水準2とした10名のうち3名が渡航後に水準3に評価を上げたが、残る7名は渡航後も水準の変化はなかった。また、渡航前に水準3とした6名のうち3名は水準に変化はなかったが、残る3名は水準2に評価を下げた。（水準1→水準1 1名、水準2→水準3 3名、水準2→水準2 7名、水準3→水準3 3名、水準3→水準2 3名）

<自己修正力>

- ・2-1：渡航前の評価は、水準0（1名）、水準1（3名）、水準2（11名）、水準3（2名）であった。渡航後、渡航前に水準0とした1名は水準3に、水準1とした3名は2名が水準2、残る1名は水準3に評価を上げた。また、渡航前に水準2と評価した11名だが、1名が水準1に評価を下げ、7名が水準3に水準を上げ、3名が水準2のまま評価に変化がなかった。渡航前に水準3としていた2名は、1名は水準3のまま、もう1名が水準2に評価を下げた。（水準0→水準3 1名、水準1→水準2 2名、水準1→水準3 1名、水準2→水準3 7名、水準2→水準2 3名、水準2→水準1 1名、水準3→水準3 1名、水準3→水準2 1名）
- ・2-2：渡航前の評価は、水準1（5名）、水準2（12名）であった。渡航後、渡航前に水準1とした5名は、1名が水準1のまま、1名が水準2に、3名が水準3へ評価を上げている。そして、渡航前に水準2とした12名であるが、7名が水準3に、1名が水準1に評価を変え、4名は評価に変化がなかった。（水準1→水準1 1名、水準1→水準2 1名、水準1→水準3 3名、水準2→水準3 7名、水準2→水準1 1名、水準2→水準2 4名）

<課題挑戦力>

- ・渡航前の評価は、水準1（6名）、水準2（6名）、水準3（5名）であった。渡航後、渡航前に水準1とした6名のうち5名は水準2に評価を上げ、1名が水準1のままだった。続いて、渡航前に水準2とした6名のうち、2名は水準3に評価を上げたが、残る4名は水準2とし評価に変化がなかった。最後に、渡航前に水準3とした5名であるが、4名が渡航後も評価に変化がなかったが、1名は水準2に評価を下げた。（水準1→水準2 5名、水準1→水準1 1名、水準2→水準2 4名、水準2→水準3 2名、水準3→水準3 4名、水準3→水準2 1名）

・具体的な成果（全コース共通で記載）

- ・フィールドリサーチや日本文化紹介活動を通じ、渡航国と日本の異なる点、似ている点から異文化理解を深めるとともに、日本（文化）の良さやそれらを人に伝える難しさを再認識し、日本の事柄や日本文化を自分の言葉でしっかり説明できるようにもっと学ぶ必要があると痛感する契機となった。
- ・様々な訪問先の担当者や同窓会メンバーにキャリアについて話を聞くことで、今後のライフプランを考える参考となった。

- ・日本がどのような国かを捉え直し、多様化する時代の中で文化交流を行っていくことの重要性について考える機会となった。
- ・グローバル人材としてキャリアを積む中で求められる力は語学だけではないことを認識するきっかけとなった。
- ・日本の学校では教わる機会のないマイナーな地域の歴史や文化、社会について知ることができた。

・今後の課題・改善点

今年度はミャンマー・ヤンゴン/マンダレーでの学外学修コースが不催行となったため、次年度は参加促進に努める。

《その他》

・派遣先の拡充(R2)

マレーシア：訪問先を増やす予定

アルメニア：現地 NGO を通じ、現地社会へ貢献する活動を増やす予定

ミャンマー：マンダレーの日本語学校と連携し、現地学生と共に取り組む活動を増やす予定

・非常勤職員の雇用、FD・SD の実施、英語力向上セミナー、広報関係

「(11) グローバルチャレンジコース（学生企画型）タイプ A」の同項目を参照。

(14) インターンシップチャレンジコース（インターンシップコース）

<前期>

- ①インターンシップチャレンジコース（モンゴル）
- ②インターンシップチャレンジコース（ベトナム）[不催行]

<後期>

- ③インターンシップチャレンジコース（インド）

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：①2名、②0名、③1名
- ・学外活動学修時期：①令和元年9月1日～9月27日、②不催行、
③令和2年2月18日～3月14日
- ・学外活動学修先：①モンゴル・ウランバートル、②ベトナム・ホーチミン [不催行]、
③インド・デリー

《学修目標・期待される効果》（全コース共通で記載）

- 【学修目標】海外生活は、現地の人々のサポートがなければ円滑に社会生活を営めないという実体験を通して、渡航国・地域の文化、歴史、宗教、慣習、考え方等を深く知り、現地の人々を尊重することが重要であることを再確認すること。また、日本社会を外から俯瞰することで、日本の尺度、価値観等が全てではないということを知ると同時に、グローバルパーソンになるために求められる要素を考察する。
- 【期待される効果】海外で、ある一定期間同じ場所に身を置くことで、自己を見つめ直し、新たな自分を知り、キャリアパスを考えるきっかけとする。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査
モンゴルの本学同窓会会長が交代したため、学生の現地滞在に際して、従前と変わらず滞在サポートや交流機会を持つことを依頼した。
- ・事前学修（①、③のコース共通で記載）
 - ・渡航国の社会、政治、経済、宗教、文化、歴史等に関する分野から1つのトピックを選び、調べた結果を発表
 - ・渡航国の概要に関する講義
 - ・インターンシップ先で行う日本事情紹介資料や日本文化体験活動の準備
 - ・チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
 - ・危機管理学修
 - ・渡航に際してのガイダンス
- ・学外学修（①、③のコース別で記載）
 - ①モンゴル：新モンゴル高専の1～3年生の日本語授業で、指導補助（漢字書き取り練習のチェック、ひらがな練習、会話練習、例文の読み上げ等）や教材作成を実施した。また、書道や折り紙の日本文化体験を行った。そのほか、週末を利用して、高専の先生方とゴビ砂漠や国立公園を訪問したり、博物館、チベット仏教寺院の視察、伝統芸能の鑑賞、草原マラソン大会に参加したり

とモンゴルの文化や自然に触れる体験を多々得たほか、滞在先となった寮では、現地の学生と共同生活をする中で、価値観・生活習慣の違いを理解するとともに親睦を深めた。

- ③インド：日本語学校の初級から上級の日本語授業補助（単語の説明、漢字練習、前回の授業を復習する際の説明担当）及び宿題のチェック、テストの採点を行った。そのほか、これまで使用した補助説明プリントや模擬テストの整理やその他の教員の授業見学、授業運営会議に出席した。また、週末は、滞在する南デリー地域の中流階級のインド人の日常生活を知るために、モールやスーパーマーケット、市場などを視察した。

・事後学修（①、③のコース共通で記載）

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会で行う活動成果に関する報告発表（またはパネル展示）のための発表資料（またはポスター）作成

・学生が企画した活動（①のコースについて記載）

- ①モンゴル：日本語授業で、日本文化体験として書道と折り紙の指導を行った。とりわけ、書道は担当するすべてのクラスで行い、初めて筆を持つ学生に、何をどのタイミングで指導していけばよいか、授業時間内に「とめ・はね・はらい」まで学生がしっかり理解できるよう工夫した。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

※ルーブリック評価を行った学生数3名

＜チームワーク力＞

- ・1-1：渡航前の評価では、水準1（2名）、水準2（1名）と評価しているが、渡航後、渡航前に水準2とした学生の評価に変化はなかったが、水準1とした2名共が水準2と評価を上げた。（水準2→水準2 1名、水準1→水準2 2名）
- ・1-2：渡航前の評価では、水準1（1名）、水準2（2名）であったが、渡航後、渡航前に水準1とした学生は水準2に評価を上げた。また、水準2とした2名のうち1名は水準3としたが、残る1名は水準2のままである。（水準1→水準2 1名、水準2→水準3 1名、水準2→水準2 1名）

＜自己修正力＞

- ・2-1：渡航前の評価では、3名とも水準2としている。渡航後にこの評価に変わりのない学生は1名で、2名が評価を1つ上げ水準3とした。（水準2→水準2 1名、水準2→水準3 2名）
- ・2-2：渡航前の評価では、水準0（1名）、水準1（1名）、水準2（1名）であった。渡航前、水準0、水準1とした学生は、2つ評価を上げて水準2、水準3とした。また、渡航前に水準2とした学生は渡航後の評価も変化がなかった。（水準0→水準2 1名、水準1→水準3 1名、水準2→水準2 1名）

＜課題挑戦力＞

- ・渡航前は3名とも水準2と評価していたが、渡航後の評価では、2名は評価に変化がなく、1名は

評価を1つ下げた。(水準2→水準2 2名、水準2→水準1 1名)全体を通じて、渡航前と渡航後の自己評価の変化に乏しい点もあるが、これは、前年度に本プログラム別コースに参加していた学生が1名おり、前年度からループリックを行っているため、自己評価が他の2名の学生よりも厳しくなっているのではないかと考えられる。

・ **具体的な成果** (①、③のコース共通で記載)

- ・ 教員として業務を行う中で、社会的なスキル(業務に際する態度、効率よく業務を進める工夫、積極性等)が醸成できた。
- ・ 母語を教えることで、視点の転換等を図ることができた。
- ・ 学校で様々な学生への指導や現地学生との共同生活(モンゴルの場合)や多様な国籍の人たちとの共同生活(インドの場合)を通じ、異文化理解の重要性を認識し、様々な価値観を受け入れるマインドを培った。
- ・ コミュニケーション能力が向上した。
- ・ 今後の専門分野での学修の方向性やキャリア形成を考える機会となった。

・ **今後の課題・改善点**

今年度、ベトナムでの学外学修コースが不催行となったため、次年度は参加促進に努める。

《その他》

・ **派遣先の拡充(R2)**

インドでの企業インターンシップと、タイ及びアルメニアでの日本語・日本事情指導教育補助のインターンシップの実施に向けて各企業・学校機関と協議中。

・ 非常勤職員の雇用、FD・SDの実施、**英語力向上セミナー**、広報関係

「(11) グローバルチャレンジコース(学生企画型)A」の同項目を参照。

(15) サマースクールチャレンジコース（サマースクールコース）

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：3名
- ・学外活動学修時期：令和元年8月12日～8月30日
- ・学外活動学修先：ベトナム・ハノイ（ハノイ貿易大学）

《学修目標・期待される効果》

- 【学修目標】様々な国籍の学生と共に、ベトナムに関する講義を受講したり、フィールドワークに取り組んだり、グループでの発表活動を行ったりすることで、ベトナムについて知見を深め、国際的な視野を養い、グローバルパーソンとなるための素地を養う。
- 【期待される効果】様々な国籍の学生と共に3週間活動することで、グローバルに活躍するための知見や求められるスキル、資質について気づきを得て、上位学年での長期留学などさらなる国際的な活動へのキャリアパスに繋げる。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

同大学における国際サマープログラムへの本学学生の参加枠は従前3名であったが、次年度以降の参加人数枠がなくなった。

・事前学修

- ・ベトナムの社会、経済、文化、歴史に関する分野から1つの分野を取り上げ、調べた結果を発表する。
- ・ベトナムの概要講義、参加予定の国際サマープログラムにおける過去活動の概要について、過去参加学生より活動報告を聞く。
- ・チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価、ビザ申請手続きの準備をする。
- ・危機管理学修を行う。
- ・渡航に際してのガイダンスを実施する。

・学外学修

ハノイ貿易大学が実施する国際サマープログラムに参加し、プログラム期間中は同大学の学生がバディとなり、3週間、ベトナムについて様々な角度から知見を得た。具体的には、本プログラムの中軸となるベトナムのビジネス、法、投資、経済などについて英語で講義を受けた。また、プレゼンテーションスキルを学ぶ、簡単なベトナム語を学ぶといった講義も受講した。大学でこれらを学ぶことと並行し、現地企業(BRG Hapro, Dong Hung Footwear)や日系工場(TOTO)を訪問し、ベトナムの企業（ビジネス）現場を視察するだけでなく、ベトナム人の国民性や労働者の特徴などを知る機会となった。そして、これらビジネス関連の学修の総括として、グループに分かれ、「ベトナムでの新規事業立案」をテーマに英語で発表を行った。そのほか、このビジネス関連の学修の合間を縫って、ハノイ貿易大学のクアンニンとホーチミンにあるキャンパスを訪問したり、ハノイとホーチミン市内だけでなく世界遺産のハロン湾、ニンビンや陶芸の村であるバッチャン村、メコンデルタを観光視察したり、ベトナム料理教室、民族衣装アオザイの試着、陶芸体験、水上人形劇観劇をしたりするなど、様々な

分野のベトナムを学び、体験した。

・事後学修

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会での活動成果報告発表準備と投影資料作成

・学生が企画した活動

特になし

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・ループリック評価

※ループリック評価を行った学生数3名

＜チームワーク力＞

- ・1-1：渡航前の評価では、それぞれ水準1（1名）、水準2（1名）、水準3（1名）とそれぞれ評価が分かれていた。渡航後の評価では、渡航前に水準1とした学生が水準3と評価を上げたが、水準2とした学生は評価に変化はなく、水準3と評価した学生は水準2に評価を下げた。（水準1→水準3 1名、水準2→水準2 1名、水準3→水準2 1名）
- ・1-2：渡航前の評価では、水準3が1名、水準2が2名であった。渡航後、渡航前に水準3とした1名と、水準2とした学生のうち1名には評価に変化はなかったが、水準2としていたもう1名は水準3と評価を上げた。（水準3→水準3 1名、水準2→水準2 1名、水準2→水準3 1名）

＜自己修正力＞

- ・2-1：渡航前の評価は3名とも水準2であった。渡航後、1名が水準1に段階を下げ、1名が評価に変化がなく、残る1名は水準3に評価を上げた学生となっている。（水準2→水準1 1名、水準2→水準2 1名、水準2→水準3 1名）
- ・2-2：渡航前の評価は、3名とも水準2であった。渡航後、評価に変化のない学生が2名、水準3へ評価を上げた学生が1名となっている。（水準2→水準2 2名、水準2→水準3 1名）

＜課題挑戦力＞

- ・渡航前は3名とも水準2であった。渡航後、3名のうち2名が水準3に評価を上げ、残る1名は水準2と評価に変化はなかった。（水準2→水準3 2名、水準2→水準2 1名）

・具体的な成果

- ・英語での講義や訪問先でのブリーフィング、ベトナム人バディとのコミュニケーションを通じ、英語の重要性を改めて認識した。
- ・3年生で長期留学をしたいという気持ちが強くなった。
- ・開発途上国や産業新興国への関心が高まった。

・今後の課題・改善点

特になし

《その他》

・派遣先の拡充(R2)

派遣先の拡充予定はないが、ハノイ貿易大学の国際サマープログラムへの参加人数制限がなくなったため、これまでよりも多くの学生を派遣することが可能となった。

・非常勤職員の雇用、FD・SDの実施、**英語力向上セミナー**、広報関係

「(11) グローバルチャレンジコース（学生企画型）タイプA」の同項目を参照。

(16) ボランティアチャレンジコース（ボランティアコース）

《令和元年度コース実績》

- ・参加学生数：9名
- ・学外活動学修時期：令和元年9月2日～9月14日
- ・学外活動学修先：ネパール・カトマンドゥ及びダディン郡

《学修目標・期待される効果》

【学修目標】自分たちと全く異なる環境で活動することで、困難な状況に直面した際の問題解決能力や創意工夫する力、コミュニケーション能力、チャレンジ精神を養う。

【期待される効果】自分たちと全く異なる環境で暮らす子どもたちへ指導し、現地の人と共に作業することで、現地から学ぶ重要性を認識したり、困難な状況に直面した際の解決能力や適応能力を伸ばしたりする。さらに、そこに暮らす人たちにとって効果のある活動は何か、開発協力の意義、日本人が果たせる役割を考察し、また、国際協力分野でキャリアを積むことを希望している場合、個々が今後身につけるべき知識・技術を確認する機会とする。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

ダディン郡での活動先小学校の拡大を図った。

・事前学修

- ・ネパールの社会、政治、宗教、教育、文化、歴史、外国からの開発支援に関する分野から1つの分野を取り上げ、調べた結果を発表する。
- ・ネパールの教育現状や学校現場の実情に関する講義を受ける。
- ・現地小学校での活動準備を行う。
- ・チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価を行う。
- ・危機管理学修を受ける。
- ・渡航に際してのガイダンスを聴く。

・学外学修

○カトマンドゥ

- ・日本大使館や JICA を訪問し、現地概況や教育事情、日本の政府レベルや民間レベルでの経済支援・支援分野及び重点的に支援していること、震災後のネパールの復興状況などについてレクチャーを受ける。
- ・カトマンドゥ市内の公立学校2校を訪問し、都市部の公立学校を視察、子どもたちと交流すると共に、校長からブリーフィングを受け、教育現場が抱える問題などについて理解を深める。
- ・スラム地域を訪問し、都市部の最下層の生活状況を視察する。
- ・古都パタンやバクタブルの旧王宮、パシュパティナート寺院、チベット仏教の寺院を訪問し、ネパールの歴史及びヒンドゥー教や仏教とそれが混ざり合うネパール独特の文化について学ぶ。

○ダディン郡

- ・ダディン郡農村部の小学校3校及び村の学童保育施設にて、学生が企画した青少年活動（図画、

折り紙、モザイクアート、サッカー、踊り等）を実施する。

- ・ダディン郡第7区の区役所を訪問し、区長から地域の現状や課題についてブリーフィングを受けた後、それらを解決し、よりよいコミュニティを築くための意見交換会を行う。
- ・その他、村のヘルスポストを訪問し、村の医療事情を知る。人手の足りない農家でトウモロコシの収穫作業を手伝う。村のカレッジを訪問視察する。

・事後学修

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会での活動成果報告発表準備と投影資料作成

・学生が企画した活動

- ・村の小学校や学童保育施設での青少年活動全般（参加学生9名でアイデアを出し、指導手順を考案しながら準備：折り紙工作、図画、モザイクアート指導、牛乳パックでコマや竹とんぼ作り、サッカー指導、「パプリカ」のダンス指導）
- ・村の青年たちとのサッカー交流試合
- ・参加学生9名のうち2名が、2020年2月から3月にかけて、ケニアとウガンダでのボランティア活動を企画し、渡航した。現地では、サッカーや野球指導、ナイロビにあるアフリカ最大のスラム街の視察やウガンダの農家に滞在しながら現地農業事情の知見を深めた。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】5：計画を大幅に超えて実施できた

・ルーブリック評価

※ルーブリック評価を行った学生数9名

＜チームワーク力＞

- ・1-1：渡航前の評価では、水準1（2名）、水準2（6名）、水準3（1名）となっている。渡航後、渡航前に水準1とした2名は2段階評価を上げ水準3に、水準2とした6名のうち3名は水準2のまま、2名が水準3に評価を上げ、1名が水準1に評価を下げた。また、渡航前に水準3とした1名は、渡航後の評価に変化はない。（水準1→水準3 2名、水準2→水準3 2名、水準2→水準2 3名、水準2→水準1 1名、水準3→水準3 1名）
- ・1-2：渡航前の評価では、水準2（7名）、水準3（2名）となっている。渡航後、渡航前に水準2としていた7名のうち5名が水準3と評価を上げ、残る2名は水準2のままとしている。また、渡航前に水準3としていた2名は、渡航後も水準3と評価に変化はない。（水準2→水準3 5名、水準2→水準2 2名、水準3→水準3 2名）

＜自己修正力＞

- ・2-1：渡航前の評価では、水準1（1名）、水準2（4名）、水準3（4名）となっている。渡航後、渡航前に水準1及び水準2とした6名とも、1、2段階評価を上げ水準3と評価している。また、渡航前に水準3とした2名は渡航後も水準3と評価に変化はない。（水準1→水準3 1名、水準2→水準3 4名、水準3→水準3 4名）
- ・2-2：渡航前の評価では、水準1（2名）、水準2（7名）となっている。渡航後、渡航前に水準

1 とした 2 名はいずれも水準 3 に評価を上げた。また、渡航前に水準 2 とした 7 名のうち 4 名は渡航後も水準の変化はなく、残る 3 名は水準 3 に評価を上げている。(水準 1→水準 3 2 名、水準 2→水準 2 4 名、水準 2→水準 3 3 名)

＜課題挑戦力＞

- ・渡航前の評価では、水準 1 (3 名)、水準 2 (5 名)、水準 3 (1 名) であった。渡航後、渡航前に水準 1 とした 3 名のうち 2 名は水準 3 に、1 名は水準 2 に評価を上げた。そして、水準 2 とした 5 名のうち 4 名は水準 2 のまま変化がなく、1 名が水準 3 に評価を上げている。また、水準 3 とした 1 名は渡航後も水準 3 とし評価に変化はない。(水準 1→水準 3 2 名、水準 1→水準 2 1 名、水準 2→水準 3 1 名、水準 2→水準 2 4 名、水準 3→水準 3 1 名)

・具体的な成果

- ・子どもたちへの活動を進めるなか、先進諸国の環境とは全くことなる村での生活の中で直面する問題に状況を分析し対処する力、物がなくて、創意工夫して活動する力、どのような環境でも柔軟に対応する力、積極性を伸ばした。
- ・活動全般を通じ、開発途上国の現状への理解を深化し、異文化理解を促進する機会となった。
- ・どの国でも英語力が求められることを認識した。

・今後の課題・改善点

活動先地域を広げ、より多くの子どもの学生と触れ合う機会を作る。

《その他》

・派遣先の拡充(R2)

村のカレッジを訪問し、同世代の学生との交流機会を作る。

・非常勤職員の雇用、FD・SD の実施、英語力向上セミナー、広報関係

「(11) グローバルチャレンジコース (学生企画型) タイプ A」の同項目を参照。

なお、以下の 1 コースについては、募集した結果、参加者が催行人数に達せず、令和元年度は実施しなかった。

(17) 理学グローバルチャレンジプログラム Nanyang/Sci コース (理学 Nanyang コース)

《令和元年度コース実績》

- ・学外活動学修時期：令和元年 9 月 (3 週間程度を予定)
- ・学外活動学修先：シンガポール・南洋理工大学 (理学部)

《学修目標・期待される効果》

基本となるサイエンスを学ぶだけでなく、異文化に身を置くことにより、自らが身を置く専門分野以外のサイエンスも含めて、より総合的に学ぶことで、サイエンスの理解をさらに深化させる。ある一定期間の異文化での生活や学修体験を通じ、自分自身への理解を深め、新たな興味を持つ事柄やより追求したい学修テーマを自主的に発見する機会とする。

3. プログラム全体の自己評価 ―成果と課題―

3-1. プログラム目標能力に関する自己評価

本プログラムでは、参加学生が卒業するまでに身に付ける3つのチカラ（「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」）をルーブリックにより測定することとし、神戸GCP委員会で制定したルーブリック指標（表1）をプログラム全体で統一して利用している。参加学生は事前学修時、事後学修時に加えて、参加した翌年度以降も毎年1回、卒業時までルーブリックによる自己評価を行い、プログラム参加後の経年変化を測定している。

なお、平成29年度からは改訂したルーブリック指標により自己評価を行っており、令和元年度末からは、全ての水準に対して選んだ理由を記述させることとした。

表1：ルーブリック指標（上段：平成28年度／下段：令和元年度（改訂版））

H28	水準0		水準1		水準2		水準3	
チームワーク力 他者とともに学ぶ	水準1に達しない段階	一参加者としての段階		周辺の立場から運営に関わる段階		リーダー役やマネージャー役を果たす段階		
		● 自分の意見を他者に分かるように説明することができる。 ● 他者の意見を理解するために、質問をすることができる。(＝問いかけを厭わない) ● 他者の意見、姿勢、感情に共感することができる。		● 他者の個性や特質をふまえて接することができる。 ● 困っていることがないか、声掛けなどをして他者をサポートできる。		● 質問や観察などを通して、他者の意見を引き出すことができる。 ● 他者の個性や特質をふまえて、適切な課題を提示することができる。 ● 他者を励まし、他者の意欲を高めることができる。		
		他者からの指摘に耳を傾ける段階		指摘の意味を把握し自分のものとする段階		自己の思考や学修方法を適切に修正できる段階		
自己修正力 他者から学びとる		● 他者に意見を求めることができる。 ● 他者から自分に対する反対意見や批判的意見を、感情的にならずに聞くことができる。		● 自分の考え方(思考パターン)や行動の仕方(行動パターン)を知っている。(＝自己パターンの把握) ● 他者からの指摘を、自己パターンに当てはめて解決策・修正策を考えることができる。		● 自己の解決・修正に向けた取り組むべき諸課題を知り、その優先順位を付けることができる。 ● 自分で設定した課題と、その優先順位に従い、(課題に)取り組むことができる。 ● 修正プロセスに間違いを見つけたら、そのプロセスを修正することができる。		
課題挑戦力 目標を見極める		与えられた問題の解決に必要な能力を見極める段階		挑戦する価値のある課題を設定する段階		課題を解決するための方略を策定し不断に挑戦し続ける段階		
		● 複数ある課題に優先順位をつけることができる。 ● 取り組むべき課題について理解し、課題解決に向けて必要な知識や技術を選択することができる。 ● 優先順位に沿って、必要な知識や技術を用いて、課題に取り組むことができる。		● (課題解決に向けた)選択した知識や技術を組み合わせ、課題解決策を組み立てることができる。 ● データ・事実・既知の事柄をもとにして、未知の事柄を推し量ることができる。(＝推論)また、それを言語化(文字・言葉)することができる。		● 失敗したことのある解決すべき課題に、再度(再々度、何度も)取り組むための意思を持続できる。 ● 長期間にわたって感情のコントロールができる。 ● 想定外の事態に対処できる。		

R1	3つのチカラ		【水準0】	【水準1】	【水準2】	【水準3】	回答した水準について、その理由を具体的に説明してください。
構成要素		意識していない	気づき	分析・理解	行動・成果		
1 チームワーク力	1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う	水準1に達していない。	活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。	活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。	チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。		
	1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する	水準1に達していない。	メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。	メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。	メンバーと協力し、チームの目標を達成している。		
2 自己修正力	2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる	水準1に達していない。	自分の考えや行動について認識している。	自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の見直すべきことについて理解している。	自分以外の人の考えや行動を参考にして、自分の考えや行動を見直している。		
	2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する	水準1に達していない。	自分の得意分野や苦手分野について理解している。	自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を克服する方法を模索している。	自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を克服するための実践を行っている。		
3 課題挑戦力	3-1. 課題を見つけ、解決をはかる	水準1に達していない。	解決すべき課題を見つけることができる。	見つけた課題を解決する方法を模索している。	見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。		

3-1-1. ルーブリック指標に基づく自己評価（令和元年度参加学生）

令和元年度参加学生が事前学修時（コース参加前）及び事後学修時（コース参加後）に行ったルーブリックによる自己評価結果は、表1～3のとおりである。

また、それぞれに関するコース参加前後の自己評価結果を比較した図が図1～3である。いずれの能力においても、コースへの参加によって向上したことが確認できる。

①チームワーク力

事後学修時において「水準3」と回答した学生が、1-1で20.7%、1-2では28.7%それぞれ事前学修時より増加した。水準2以上の学生は、1-1では33.2%、1-2では32.4%増加しており、全体では8割以上の学生が事後学修時に水準2以上となっている。特に事後学修時の自己評価では、「チームで活動する時、言語能力に不足のあるメンバーの意思を英語で伝え、相手との交流を促進した。また、メンバーとして自分の考えや提案などを大胆に発言し、課題の解決に助力した。」「私がしたいことや話したい場面も多くあったが自分の希望だけを考えるのではなく、その中で自分が話すべき時、するべき時を見極めることができた。」「家庭訪問の際に、行動班の全員が協力し、聞きたいことの聞き漏らしがないよう計画を立て、目標を達成することができた。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、これらのことから、コースへの参加によってチームワーク力が高まったことが窺える。

②自己修正力

事後学修時において「水準3」と回答した学生が、2-1では41.5%、2-2では31.1%それぞれ事前学修時より増加した。水準2以上の学生は、2-1では18.7%、2-2では26.8%増加しており、全体では約8割の学生が事後学修時に水準2以上となっている。特に事後学修時の自己評価では、「現地で出会った人の価値観から日本的な価値観を見つめ、自分の行動を見直した。」「自分の意見を主張することが苦手であるといった弱点を認識し、周りのメンバーのように、今の自分ができる範囲で想いを伝えようとするようになった。」「英語表現をあまり多く知らないなので、英語で日記を書き語彙力を養おうとしている。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、これらのことから、コースへの参加によって自己修正力が高まったことが窺える。

③課題挑戦力

事後学修時において「水準3」と回答した学生が、19.9%事前学修時より増加した。また水準2以上の学生が25.2%増加した。全体では約8割弱の学生が事後学修時に水準2以上となっている。特に事後学修時の自己評価では、「神戸GCP終了後、進路を真剣に考え、IFEK参加を検討し始めた。留学と早期卒業のために英語や専門の勉強に現在真面目に取り組んでいる。」「チームで活動することが少ないので、このプログラムを含むいくつかの活動に参加している。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、これらのことから、コースへの参加によって課題挑戦力が高まったことが窺える。

表 1 自己評価結果（チームワーク力）

【チームワーク力】

1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

		事前学修 回答数 (人)	事前学修	事後学修 回答数 (人)	事後学修
【水準3】	チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。	14	11.3%	40	32.0%
【水準2】	活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。	44	35.5%	60	48.0%
【水準1】	活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。	65	52.4%	25	20.0%
【水準0】	水準1に達していない。	1	0.8%	0	0.0%

1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

		事前学修 回答数 (人)	事前学修	事後学修 回答数 (人)	事後学修
【水準3】	メンバーと協力し、チームの目標を達成している。	17	13.7%	53	42.4%
【水準2】	メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。	51	41.1%	56	44.8%
【水準1】	メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。	54	43.5%	15	12.0%
【水準0】	水準1に達していない。	2	1.6%	1	0.8%

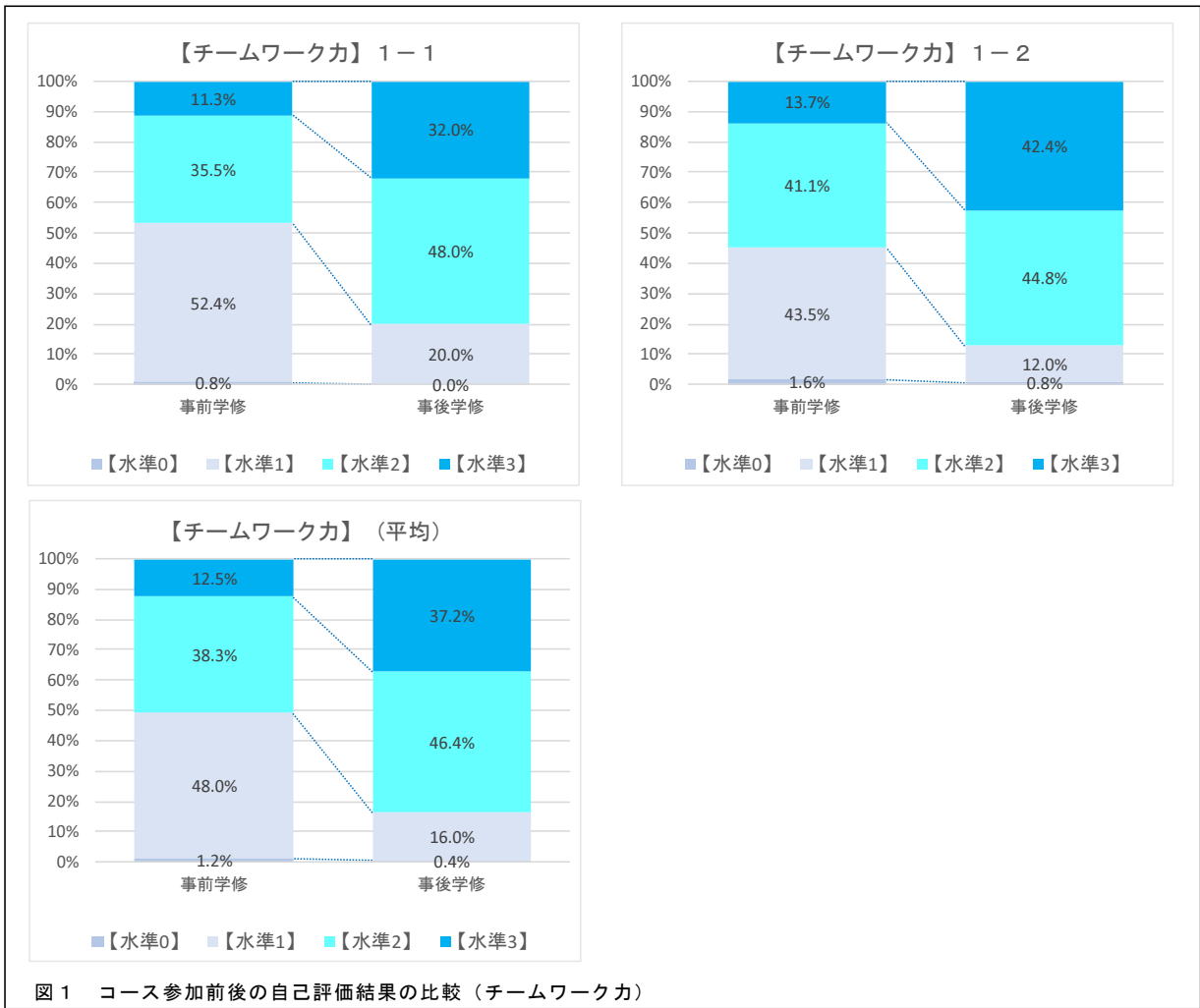


図 1 コース参加前後の自己評価結果の比較（チームワーク力）

—水準選択における具体的な説明（水準２・水準３）—

【チームワーク力】1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

●事前学修時

【水準３】

- ・アルバイト先で、経費削減で大きく変容を迫られた際、メンバーの意見を集約すると共に職員の方々と話し合いを重ね、今後の活動を立て直すのに貢献した。
- ・神戸大学公認のサッカーサークルで、副会長という役割を遂行している。
- ・クラブ活動では、１年生の時に学年のリーダーを務め、２年生の後半からは副部長を務めることになった。
- ・積極的に会話を回したり、話のきっかけを作ったりした。
- ・英語のグループワークの際、チームに足りない要素があれば、進んで提案・実践している（ムードメーカー、記録係など）。チームの雰囲気が良くなり、発表に対し高評価を得ることができた。
- ・どこの集団であれ、自分はまとめ役、前に出るタイプだと自己分析し、今までの人生ではそれが何かしらの成果に繋がってきたと思う。
- ・部活動で２年間部長をしたり、各学校行事において積極的に係に立候補したりすることができた。
- ・高校の学園祭で劇をやった際に、大道具チームのリーダーとして、メンバーそれぞれの得意分野や大道具以外の人の特性を考えて仕事を割り振り、本番までに完成度の高い大道具を作成できた。
- ・体育祭で機材班を率いた際、他のメンバーが担当の先生を嫌って交渉が進まないなか、他のメンバーを遠ざけて自らが先生と話すことで交渉を進ませた。
- ・高校２年時、修学旅行の実行委員長となり、旅程の計画立案から実行に至るまでの段階で実行委員会のメンバーをリーダーとしてまとめた。各メンバーの意見を尊重しつつ自分の意見も出し、修学旅行を成功させることができた。
- ・大学のゼミのメンバーと教授の方々についてのプレゼンの準備で、演出担当として、とある報道番組に似せた演出を考案し、結果的に８組中１位を獲得した。
- ・習っている剣道の練習において、今までは先生方の指導を受けるだけであったが、最近は自ら進んで小さい子達の指導をすることで、今まで自分か教わってきたことを次に伝えていくという役割を担うことができている。
- ・吹奏楽部で、打楽器のパートリーダーとしてメンバー全体の技術向上に努めた。
- ・高校で野球部にいた頃、自分の実力を理解したうえで、チームメイトへ意識を向け続けることで、一選手としての役割を果たし、最終的には個人としてもチームとしても成果を上げた。

【水準２】

- ・議論が詰まった時は、新しい問題提起をする努力をしている。
- ・いろんな人の意見を聞いてそれを見つけることができた。
- ・与えられた課題についてグループで調べ、それを各自協力して発表したこと。
- ・チームメンバーを見渡して仕事の割り振りができる。また、チームの意見を集めて判断を下すことができる。
- ・自分の役割を正確に遂行する。
- ・アルバイト先では自分の立場や与えられた役割を自覚して言動するように心がけ、臨機応変に行動できるように試みている。
- ・マネージャーとして必要とされている仕事や雑務は言われる前に気づくように努力しています。
- ・どのような活動であれ、自分ができることは自分から進んでやることを心がけている。
- ・クラブ活動において、広報やチームをまとめる役割として動き、発言してきた。
- ・クラブ活動において人の長所を見つけ伝えている。全体を見て行動することを心がけている。
- ・大学内の学生委員会（通称 GI）で意見交換会をしている
- ・ゼミやサークルの仕事
- ・サークル活動で新入生に上級生としての役割に基づいたアドバイスやサポートを自ら行った
- ・部活動では運営に携わる仕事(会計、部のお金の管理など)

- ・部活で全体の雰囲気を感じ取り、グループごとの橋渡しをする役割を担っている。
- ・ミーティングでは積極的に発言している。
- ・ボランティアサークルで、一回生として、間違いをおそれずにどんどん積極的に発言している。
- ・メレヘン市との直接のコンタクトを取り、一緒に訪問するメンバーと事前学修をした。
- ・クラブやアルバイトにおいて、学年や職位を意識し、能動的に全体とコミュニケーションや後輩にはフィードバックを与えるなどして、コミュニティにできる限り貢献した。
- ・割り振られた役割に対しては確実な履行を心がけている。また、取り残される人が出ないように積極的に取り込んでいる。
- ・高校の時バスケット部部長として、ムードメーカーとなり声出しをし、監査の際には中心となって日程調整などを行った。
- ・中学校の合唱コンクールで、音楽の知識を持っているのが自分だけだったので、伴奏者をしながら歌唱指導もしてクラスを最優秀賞に導いた。
- ・高校生の時、テニス部のキャプテンとして、チームの練習内容を決め、鼓舞するように努めた。
- ・高校の時、インドネシア研修で小学校を訪れた時、そこで行う活動によってそれぞれ役割分担をして、自発的に行動した。
- ・高校の部活でかたるたをしていた際、主将として他のメンバーに声をかけたり毎日部室に行って誰も 1 人にならないようにしたりしていました。
- ・キャンプのボランティアをしている中で、話し合いの場で改善点を発言している。
- ・高校の部活の時ペアとどうすれば自分たちがより上手になれるかを協議し、改善点を見つけ取り組んだ。
- ・高校生の頃は委員長や応援団を何度か務めた。
- ・高校の海外フィールドワーク研修で副団長を務め、訪れた施設や大学で簡単な挨拶・感謝の言葉・質問等を率先して行った。
- ・高校時代に所属した創作ダンス部で、副キャプテンとしての役割を果たすために、まず全体を見渡して、自分だからこそできることは何かを常に考えるよう意識した。
- ・英語のスピーチコンテストに参加、自分で原稿を作成。
- ・高校時代に部活の女子部長、全体の副部長として、メニューを考えたり、出場選手の選考などを中心になり考えたりした。
- ・チーム内での自分の役割に応じた行動をとることはできるが、役割分担を人に求めることが多く積極性に欠ける。
- ・サークル活動の幹事になった時、事前にアナウンスしたり当日まとめたりした。
- ・2018 年度、六甲祭の準備で資金集めや全体の進行調整などを行いました。
- ・過去に部活やクラブチームのキャプテンをして、その役割を担った。
- ・新歓活動の際、ある一つのイベントではリーダーを引き受けて企画や運営を率先して行い、他のイベントではメンバーとしてイベントを盛り上げたり 1 回生に積極的に話しかけたりするなど、自分の役割に応じて行動することができた。
- ・アルバイトで、リーダーとして皆をまとめました。
- ・高校 3 年時、1 年指導係に任命されたが、私は直接 1 年生と関わるというよりは事務作業等を積極的に行い他の指導係と連携していた。神戸 YMCA のユースボランティアでは中高生の活動を応援する役割を担ったため中高生向けのイベントを企画したり募集したりした。
- ・サークルでは、論理的な意見を求められ、自分の主張を示すことが多い。出展では役割を見つけ、行動する。

●事後学修時

【水準 3】

- ・チームで活動する時、言語能力に不足のあるメンバーの意思を英語で伝え、相手との交流を促進した。また、メンバーとして自分の考えや提案などを大胆に発言し、課題の解決に助力した。
- ・移民の方へのインタビューでは、撮影と編集という役割を果たせた。
- ・課題のインタビューの際、自分の適性を考えチームに貢献できた。
- ・現地での先生と積極的に話し、連絡事項をグループで伝えることで、英語力の向上を図った。

- ・グループ内で自分ができることを積極的に行った。
- ・クラブ活動で自分の仕事をこなすとともに、全体を見て動くようにしている。
- ・今回のマングローブ班のプログラムで自分が唯一の生物学科生だったこともあり、干潟の調査等の時に率先して、みんなの安全確保と種の同定を行うことができました。
- ・インカレサークルの幹部として自分の行動のサークルへの影響の大きさを理解し、サークルの運営に貢献している
- ・部活動で学祭のステージの企画の責任者を務め、無事に終了した。
- ・GCP のプレゼン発表の際、割り振られた仕事を遂行した。
- ・みんなの意見をうまくまとめて行動できるようにした。
- ・私は人よりも英語を聞くのが得意だったので、困っている人がいたら率先して助けるようにしていました。
- ・授業内課題、クロージングセレモニーでの創作劇。
- ・グループワークが多くあって、その中でよく司会役をし、意見をまとめるように動けた。
- ・意見を出すことだったり、分担作業での自分の負担を責任持って担当したりする。
- ・グループワークなどに取り組む際に、リーダーになったり積極的に発言したりした。
- ・メヘレン市とのメールのやり取りをし、2 日間のフィールドワークを作成してもらうことができ、2 名で参加できた。
- ・料理が好きだったため、プログラム中の料理のお手伝いやチーズ作りなどの台所仕事は私が行っていた。具体的な作り方や材料について質問してみるなどして、同時に話す練習もすることができた。
- ・周りの様子を観察してできそうなことを進んでやった。
- ・アフリカの活動において自分の役割を遂行し活動をやり遂げた。
- ・ボランティア活動で自分のすべきことを認識し、それを実行できた。
- ・カンボジアの小学校で英語の授業をした。主に、前に立ってメインの教師役を担当し、残りの 2 人のメンバーに、1 人ひとりの子どもの様子を見てサポートしてもらった。それぞれが役割を満たすことができたので、子ども達を授業に集中させ続けることができていたと思う。
- ・フードコートでボランティア活動をしていた時、自分の当てられていた役割(食品の袋づめや分別)を遂行して、食糧難に苦しむ人へ送るための食品を多数作り上げることができたこと。
- ・自分に与えられた役割をこなして企画が採用された。
- ・グループリーダーとして、必要な諸手続を率先して行うなどの役割を積極的に請け負った。
- ・フィールドリサーチで現地の人々にアンケートを取った際など、役割分担をはっきりしていたので準備は比較的スムーズに進行したように感じた。
- ・宗教をテーマに選んだ班で、唯一宗教色の強い家庭に育った立場から、率先して発案、活動すべきだと感じ、そのようにした。結果発表までこぎつけられた。
- ・チームの活動においては、自分が他社に役割を割り当てるということはあまりないが、過去に割り振られた役割は遂行できていると思うし、今回のフィールドリサーチでも、それは達成できたと思う。
- ・私がしたいことや話したい場面も多くあったが自分の希望だけを考えるのではなく、その中で自分が話すべき時、するべき時を見極めることができたと思う。
- ・フィールドワークのプレゼン準備に際して、役割分担とその役割を着実にこなし、ペアの人とその分担部分を組み合わせてプレゼンを完成させることができた。
- ・プレゼンの発表において自分の担当した部分を準備、練習、発表と最後までやり遂げることができた。
- ・最終日のプレゼンテーションに向けて役割分担やスケジュール調整をした。また原稿の校閲などを他のメンバーの分まで行った。
- ・プログラム最終日にグループでプレゼンがありました。そのための準備を率先してやり、他のメンバーに指示をしたことで、当日の発音が上手く行きました。
- ・ネパールの学校訪問では、自分の担当のスポーツ分野ゆそれ以外の分野についてもみんなと協力し子どもたちを楽しませることができた。
- ・小学校へ訪問した際、自分の準備してきた工作で子どもたちと交流したが、子どもたちもきちんと作り、上手に遊ぶことができていた。

- ・小学校での活動は毎回違うものを、全員で分担して行っていたが、子どもたちがたくさんいるところには進んで手伝いに行ったり、必要な助けをきちんと求めたりすることができていた。自分がすべきことが何かを常に考えながら行動ができていたと思う。

【水準2】

- ・グループの人数とそれぞれの得意なものに応じて役割分担できた。
- ・部活の大会では自分の役割を理解して試合をする。
- ・グループでインタビューをする際、質問の内容を考えた。
- ・大学の講義中に積極的に英語で発言した。
- ・他人の意見を受け入れたうえで自分なりの意見を発言する。
- ・AIESEC Project Leader チームの vision のプレゼン。
- ・スケジュールの確認不足がチームの足を引っ張った。
- ・ボランティアにおいて積極的に行動した。
- ・神戸大学のグループとして参加するアクティビティでは、全員に様子を把握し、自分の発言や行動にも気を付けていた。
- ・話し合いの時には意見をまとめたり話を前に進める。リーダーがいる場合、円滑に進むように意見する。
- ・国際人間科学部の GSP でボランティア活動に参加した際に自分の仕事をこなした。
- ・他人の意見を尊重しつつ自分の意見を述べるよう努力した。
- ・ゼミで質問を行ったり、サークルの活動で自分の仕事を行ったりしている。
- ・役割分担が明確だった。
- ・部活動で、1年生としてチームを活気づけるにはどうすれば良いか考えて動いている。
- ・部活動で自分の仕事にしっかりと取り組む。
- ・困ったことがあっても、自分なりに解決策を考えて発言するようになった。
- ・このコースでリーダーを務める中で、仕切ったり積極的に意見を聞いたりした。
- ・ディスカッションなどの際、人の意見を聞きつつ、自分の意見を言うようにしている。
- ・部活動で現役のうち最上級学年になったので後輩その自覚をもった行動や発言ができるよう気をつけている。
- ・メンバーの中では明るく、ムードメーカー的な役割を担っていました。キャラクターを受け入れてもらい、学長との懇親会に参加する学生として選んでいただけました。
- ・GCP のメンバーでプレゼンや、ポスターづくりをする際には役割を考えて、チームで協力した。
- ・サークル活動などにおいて、他人の意見などを踏まえた上で自分の意見などを発言するようにしている。
- ・In group work, I talk actively.
- ・グループディスカッションで進行役を務め、みんなの意見をまとめた。
- ・期限が迫っている活動の際には、率先して無駄話を軌道修正する方向に持っていった。
- ・グループでの話し合いの時は積極的に発言するように心がけた。
- ・フィリピンでの授業において、様々なグループ課題が与えられたとき積極的に自分の役割を発言し行動することができた。
- ・グループワークのときに自分の役割を考え行動した。
- ・自分の考えを提示しながらも、他の意見も取り入れて行動した。
- ・チームで劇をした際、自分の役割に基づいた発言や行動をした。
- ・自分の能力や経験を認識し、それに応じて役目を果たそうとするとともに、分からない部分については必ず助けを求める。
- ・GCP を通じて、グループで活動する際に自分がどのような役割を期待されているのかを意識して質問をした。課題としては、今回フランス語圏ではフランス語履修者としてある程度貢献することが求められたと想定しているが、覚えているフランス語が少なくあまり全体に貢献できなかった。
- ・フラウでインターンシップを行っていた時、しばしば表を作成したが、その表を引き継いで作業を行う社員さんが予備知識がなくても一目でわかるように工夫をした。
- ・ウガンダで、日本人だからこそ気づけるようなことを探し、帳簿の作成を提案した。
- ・自分の役割を把握し、自分のできる最大限の役割を果たしている。

- ・テニスサークルで副会長に就き、一年次に所属していたテニス部での経験を活かしながら、より楽しい活動に運営している。
- ・ディスカッションの時間は自分から発言したりメンバーの発言を促したりした。
- ・アルメニアコースでは、日本人として日本文化などを伝えにいていたので、最初はどううまくできないところもあったが、修正することができた。サークルでは、幹部の1人なので、自分の役割が持つ仕事内容などを果たすことができていると感じる。
- ・プレゼンの準備過程では、パワポのアウトライン作成、インタビュー等の自らの役割を全うした。
- ・アルメニアの学生と交流するときに、喋れていない人がいないように気を配って色んな人と話した。
- ・サークル活動において、上回生として議論を引っ張ったり、交渉を担当したりして、チームのための活動をしている。
- ・チームが仲の良い雰囲気だったので、気兼ねせず発言できた。先生や周りの人たちに頼る部分が多かったので、次回は主体的に動ける部分を増やしたい。
- ・アユタヤで遺跡を巡るときに、積極的に目的地までの行き方を事前に調べた。
- ・自分の役割は、みんなと充実した時間を過ごすために、この役割！といったものではなく、1回1回の動きを協力的に行動することだったと思います。
- ・アユタヤでの移動、訪問先での移動の際それぞれが進んで先頭に立ってみんなを案内することができた。
- ・発表資料の作成など、与えられたことに責任を持って取り組んだ。
- ・日本語話者として、正しい日本語の話し方を意識して学生と接するように心がけた。ただ、学生の日本語に対する疑問に対しうまく解消してあげることができず、力不足を感じた。
- ・GCP 活動中は高専での日本語教育補助で現地教員から求められる役割を理解することに努め、それに基づき積極的な行動をとった。
- ・授業のサポートとして何ができるか常に考え意見を言った。同時に事務作業ができない時に仕事の引き継ぎなどコミュニケーションをしっかりとるようにした。自分が分からない時は人にすぐ聞いたり調べたりした。
- ・サークルの幹部の代になったので、イベントの連絡や出欠など役割を遂行している。
- ・PPT の作成や、その後の現地でのプレゼンテーションでの発表の時に、各自の分担や原稿の確認など率先して行うことができた。
- ・青少年活動のうち自分で企画したもの（折り紙）は率先して前でリーダーシップを取り、そうではないものはあまり進んでいないところのサポートに徹した。
- ・現地では、ダンス組・工作组・スポーツ組などに分かれてそれぞれが自分の役割に基づいて行動することができました。
- ・様々なタスクがある活動の時に全体を見て自分の役割を見つけることができた。

【チームワーク力】1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

●事前学修時

【水準3】

- ・野球チームでは主将を担い当面の目標であったチームの大会優勝を達成した。
- ・まともな指導者がいなかった高校の時の部活動でバスケットボールをメンバーと協力して練習し、勝利することができた。
- ・神戸大学生協学生委員会オープンキャンパスで配布する冊子を完成させるという目標を達成した。
- ・ジョージア工科大学の人たちと一緒にいったチームワークでは、自分の意見も取り入れられたプレゼンをつくった。
- ・軽音サークルでライブをした時、初心者ながら先輩に教えてもらいつつ自分の役割を果たした。
- ・昨年、専門の講義で、防災意識に関するアンケートを行い、1000人以上の人に回答してもらい、発表も成功した。
- ・ダンス部において、メンバーと相談し話し合うことを大切にして、全国大会入選を果たすことができた。
- ・高校の文化祭で舞台監督を担い文化祭の舞台部門で優勝した。

- ・サッカーの審判活動で主審として他の副審や第4審の人と試合前にコミュニケーションを取り、約束事や試合中のあらゆる場面を想定した打ち合わせを行い、試合を成功させた。
- ・高校の課題研究でプレゼン班、スライド班など、分担して行い、内容を工夫したことで目標であった領域代表になった。
- ・高校時代に吹奏楽部に所属していました。たくさんの演奏会などをこなしていく中で、本番に向けて話し合い、準備をし、反省点を確認することで、部員皆で協力し合い、本番の成功に向けて活動することができました。
- ・サークルのチーム戦で、チーム全員で協力して優勝した。
- ・アルバイトでの学生独自のプロジェクトにて、目標数値を定めチームの皆と協力して達成することができました。
- ・高校時代の部活動で、チームメイトと協力し合い、一つになって戦うことができた。目標は達成できなかったが、良いものを創り上げることができ、想像だにしていなかったものを達成できたので、ある意味での目標達成となった。
- ・体育祭で団のみんなでダンスを完成させる。セミナーの班のメンバーで書籍を読み、パワポを作って発表する。

【水準2】

- ・みんなの意見を取り入れながらサークルの運営に携わっている。
- ・授業内のグループディスカッションで役割分担をして検索しながら正解を導き出すことができた。
- ・事前学修では、グループの方と目標を理解し、各自の担当を決めて、協働しながら目標に向けて努力をする。
- ・相手の意見を否定しないように心がけている。
- ・アルバイトで、各メンバーの忙しさを考慮しつつ協力して活動を行えた。
- ・部活において様々な仕事を行う際にメンバーとの会議を通して方針を決めている。
- ・与えられた課題を分担して調べて達成したこと。
- ・チーム全体として強くなるために改善すべき点、いい点を他人に伝えている。
- ・研究室では分け隔てなくメンバーとコミュニケーションを取り、良好な関係を築くように取り組んでいる。
- ・塾のアルバイトでは生徒の学習を助けるためのイベントをチームで考え、目標を立てることもあります。その際はお互いにアイデアを出しつつ良いところは取り入れ、足りない部分は補いあえていると思います。
- ・メンバーの意見を聞いて自分の意見と比較しチーム全体の活動に貢献しようと思っています。
- ・部活動でチームのメンバーとしっかりコミュニケーションをとれていると思う。
- ・海外派遣に際してプログラムのメンバーとして他のメンバーと意見を交わし現地での活動内容を決めた。
- ・様々な考えをもっているのもので、その考えは尊重しながらタイの大学生との交流を図ることができた。
- ・サークル活動などで、自分一人だけの力ではなくチームワークで一つの目標に向かって頑張っている。
- ・春には英語の演劇があったが、全員で協力して舞台を成功させることができた。
- ・ジョージア工科大学との連携授業で、それぞれの国の文化について班で伝えあい、それをプレゼンとして発表した。
- ・自分の意見を述べたあと、他の人の意見も聞くようにしている。
- ・異なる意見にも耳を傾け、共感できる部分などを探しながら聞いている。
- ・サークル活動などでは、友達とたくさんコミュニケーションをとれるようにする。
- ・同行するメンバーのスケジュールと学修興味分野を尊重し、共に学べるように手配した。
- ・クラブやアルバイトにおいて、常に周りの意見に耳を傾け、大会での入賞や売り上げの達成、ミッションの達成など、具体的な結果を意識して目標を掲げ、それを全体で共有しながら活動を行っている。
- ・他人の動向や自分のやるべきことがわからないときには周りを頻繁にコミュニケーションを取ることで解消している。
- ・アイスホッケー部マネージャーとして部活の目標を達成できるよう、プレーヤーがよい環境で練習できるように努めている。

- ・模擬国連で、まず、ペアと提案したい政策について意見を擦り合わせて政策をまとめた。本会議ではペアと分担して政策の方向性が同じグループを見つけ交渉と妥協を重ねながら政策をまとめ、最終投票での可決に持ち込んだ。
- ・インドネシア研修で、現地高校生とともに小学生に環境開発活動を行い、環境に関心を持ってもらえるように努めた。
- ・ボランティアサークルの活動の一環で、3人でステージ企画をした。自分の意見を押し通すのではなく、客観的に見て、議論がうまく進むように発言することを心がけた。
- ・キャンプのボランティアで話し合いをするときは他のスタッフの意見を尊重しながら進行している。
- ・サークルでの練習、イベント等の企画、運営。
- ・生協キャリアサポートのバイトで、先輩や同輩と相談しながらツイッター運営やポスター作りを進めている。
- ・小学校から高校まで女子バレー部に所属しチームプレーが主なのでおのずと“みんなの意見を聞いて全体として選ぶべき事に合わせる”ことが多かった。まとめる立場にはあまりなかったことがない。
- ・サークルの企画で、半年間議論を重ね、企画の参加人数を上回る応募をもらい、企画を成功させることができた。
- ・今回のGCPの準備段階で、シンガポール学生企画旅行の発議、およびメンバーの希望や意見を取りまとめた航空機や宿泊施設の予約などでリーダーシップを発揮。
- ・高校の学園祭の劇で、大道具リーダーをやった際に、こまめに進捗を確認し合いながら、締め切りを管理し達成することができた。
- ・集団塾でアルバイトをしていて、生徒に関して気づいたことは塾長や正社員の先生に報告をしている。
- ・柔道部で仲の良い同期がもう1人の同期を嫌うのをたしなめ、チームワークを良くしようとしている。
- ・いろいろな団体での活動を行ってきたが、すべてが成功に終わっているとは言えないので水準2とする。
- ・陸上競技は個人種目に見えますが、チーム力もまた大切になってきます。メンバーがしっかり練習している姿を見ると自分もあと少し頑張ろうという気持ちになります。確に対立するときもあるけど、それはそれぞれが陸上に対して本気で取り組んでいるからこそおこるものなのだと思います。それを乗り越えて、その先に目標が生まれ、協力し合える仲間になりました。その過程を高校中学ともに経験してきました。
- ・部活では個人ではなくチームを意識し、共に刺激し合って目標を達成しようとする。
- ・「日本史導入演習」で、論文に対する要約や考察を班でまとめてレジュメを作成する際、班員同士で様々な立場から意見交換を行い、問題への理解を深めた。
- ・自分で考えてわからないことは人に聞き、人から聞かれたことには積極的に答えるようにしている。
- ・アルバイトの時、「報連相」を意識するようにしている。
- ・2018年度六甲祭の準備で、チームと協力する際、相手の意見に耳を傾けながら自分の意見も相手に納得させる形で伝えることができた。
- ・自校の演奏会を成功させるために、それぞれの得意分野の役割を分担して、結果的に過去最高の来場者を呼び込むことができた。
- ・部活の大会などにおいて、共通の目標を仲間と持って努力した。
- ・新歓活動の際、部活の同期の諸事情（兼部している、外せない用事がある等）を考慮して役割を分担するように働きかけた。また、今後の部活の活動方針（昼休みに行っている活動の開催頻度や内容）について同期と意見を出し合い納得する結論を出すことができた。
- ・高校生のとき野球の部活で練習メニューや試合の目標などをミーティングを重ねながら話し合い、全員が納得したうえで決定していた。
- ・野球部の頃や授業の班活動で他のメンバーの意見を引き出すことが好きで、共感や反対を示すようにしている。
- ・高校の体育祭で、応援合戦のリーダーの1人として、リーダーたちと意思疎通しながら団員全員をまとめ、応援合戦部門で優勝を勝ち取った。
- ・バトントワリングでは、チーム演技では大会に向けてケンカしながらもいい成績を修められるよう練習しました。

【水準 3】

- ・グループ活動で意見を出し合っただけでなく、
- ・テネメント博物館に行った時、アメリカに初めて来た英語が喋れないイタリア人の移民という設定の体験をし、メンバーとボディランゲージでコミュニケーションをとることができた。
- ・メンバーと役割分担をし、移民の方の話を引き出した。
- ・アメリカでの課題（事後学修でのプレゼンテーション）は完成している。
- ・与えられたビデオの課題を班で協力してインタビューをした。
- ・メンバーの中で役割分担をし、協力する。
- ・研修に参加したメンバー全員がカナダでの生活を充実させ、無事に帰国できたと思う。
- ・グループのメンバー全員と積極的にコミュニケーションを図った。
- ・チームでの学修では中心として目標達成に貢献した。
- ・今回の研修で受けた授業ではグループ学修が多かったが、どれも協力してうまくできたと思う。
- ・個人のリサーチ時間とチームでの活動時間を分け、有意義な時間を過ごせた。
- ・このコースに参加した仲間とプログラムを最後まで達成した。
- ・異なる分野の学生同士で、自分の専門的知見からの説明をして、違えば、その専門の学生が説明をしてくれるという良いサイクルで相対的に全員が知識を深めることができた。
- ・学祭の企画において多くの人と関わり、仕事も協力してできた。
- ・GCP のプレゼン作成の際、自分から積極的に動き、メンバーとコミュニケーションを取るようしていた。
- ・どのような発表をするべきか、みんなで目標を立てて行動に移した。
- ・I listen to other opinions.
- ・同じ部屋の人と英語のみで会話をしていました。
- ・作業完了の目標時間を定めて、ほとんど達成できていた。
- ・授業内課題、クロージングセレモニーでの創作劇。
- ・クロージングセレモニーでの劇で、チームでうまく創作できた！
- ・協力して劇を成功させた。
- ・guided interaction では班のメンバーと協力して現地の人とコミュニケーションをとった。
- ・メヘレン市のフィールドワークにおいて、参加 2 名であるが協力し、政策の現場担当者とのミーティングで十分情報を得たうえで、ディスカッションができた。
- ・互いに苦手分野を補い、得意分野で貢献しながらメンバー全員で GCP をやり遂げるための努力をした。特に海外経験が豊富な人が多かったため、メンバー内で得意な分野ごとに役割分担がなされており自然に協力し合っていたように実感する。
- ・プログラムの最後の 5 日間はホストマザーが家を空けており、家事や料理などを 3 人で回した。役割をそれぞれ決め、お互いに助け合いながら過ごすことができた。
- ・ほかのボランティアの人たちと助け合いながら、子どもたちの生活をサポートできた。
- ・フラウで、社員さんと一緒にポスター整理を行う際に、できるだけ効率よく、また、ほかの社員さんにもわかりやすいように整理するため、どれをどのくらい補完し、どのようにカテゴライズするか、どこに置くかを話し合いながら作業を行った。
- ・一緒にプログラムに参加した人や現地の人々とともに協力して現地での活動を行うことができた。
- ・積極的に意思疎通を図り、メンバーと協力して、活動を行っている。
- ・できないことは他のメンバーと助け合いながら、2 週間の活動でしなければならない活動は終わることができた。
- ・家庭訪問の際には行動班の全員が協力して聞きたいことの聞き漏らしがないよう計画を立て、達成した。
- ・カンボジアでのボランティア活動で、現地 NP0 スタッフの突然の指示に驚いたが、子ども達に英語を楽しんでもらう、授業に継続して参加してもらうことを目的に、ゲームなどを交えて授業を行うことができた。
- ・チームのメンバーとともに活動して企画の採用という目標を達成した。
- ・それぞれの役割分担を決定し、効率よくフィールドワークを行なったため、円滑に進めることができた。
- ・予定を立てる時など、全員で話し合い、情報共有ができた。
- ・今回のフィールドリサーチも、途中欠員が出たりトラブルがあったが、何とか役割分担してプレゼン発表に持っていくことができ、目標を達成し成功できたと思う。

- ・礼状や感謝状はしっかり自分で担われた部分を書き、添削したうえで期限までに提出した。
- ・企業訪問の時や、フィールドワークの時間にはみんなで電車の駅や時間を調べて、1度も間違えることなく行くことができました。また、行けなくなった企業や無くなった活動はありましたが、みんなで臨機応変に対応し充実した時間を過ごすことができました。
- ・休日の過ごし方をみんなで話し合い、移動手段、行程など計画を立てて行動することができた。
- ・一人では難しいことでも、周りと一緒にになってお互いに助け合えば実現できると分かった。特に日本文化の紹介では、先生に通訳してもらいながら、書道の楽しさを学生に伝えることができた。
- ・サークルの合宿のチーム戦で目標を達成した。
- ・ハードなものであったが、チーム皆が納得のいくプレゼンテーションを作ることができた。
- ・プレゼンのグループ内で皆と協力することができました。自由時間にメンバーと行きたい場所を相談して行ったり食事を楽しんだりすることで絆を深めました。
- ・担当のスポーツ分野では中心となって、他の分野ではリーダーを助けながら、それぞれの活動を進めていくことができた。
- ・GCPの活動期間中に現地の人々とともに料理をする機会があったが、その際に工程を上手く分担して協力しながら現地の料理作った。
- ・ネパールでは9人のメンバー全員で協力して、集団生活はもちろん、青少年活動・ペンキ塗り・様々な視察を行うことで成長することができました。
- ・9人全員が話し合いに参加し、行動を決めることが多かった。
- ・子どもたちとのふれあいの際、活動自体をよく理解しておくことで、活動の発案者をサポートしたり、活動の発案者としてサポートしてもらったりと、協力がしやすかった。疑問はすぐに言葉にする、お互いにアドバイスし合うなども、協力の一つとして、お互いを高め合えた面だと思う。
- ・ネパールでは、ネパールファミリーの皆と協力して現地の人を多く喜ばせることも出来たし、笑顔を作ることから文化を伝えることも出来たので、目標を達成したと言って良いと思う。帰国後は水準0だ。様々な活動でメンバーのやる気を引き出すことに苦戦している。
- ・渡航前に数回しか会っていなかったのに、2週間後には家族と呼べるほど絆は深まり、ネパールでもみんなで協力してなんの活動をやるか決定したり、薬を分け合ったり、現地の視察をしたりできた。

【水準2】

- ・サークルでみんなの意見を取り入れながら新しいことにも挑戦して運営を行った
- ・お互い違う意見をまず受け入れてから、意見の協調を図る。
- ・ライングループ内で課題について話し合い、充実したインタビューを作成できた。
- ・今回初めて知り合った人も多い中道に迷ったときや、時間が空いたとき何をするのがベストか話してトラブルなくできた。
- ・AIESEC チーム内で共通認識の取れたプランを採用する。
- ・自分の意見だけでなく他人の意見を考慮して授業に取り組んだ
- ・話せていないメンバーがいれば、意見を聞く。反対意見も受け入れながら自分の意見を主張する。
- ・語学学校のファイナルプロジェクトを完成させた。
- ・ボランティアでメンバーと意思疎通をしながら役割を果たす努力をした
- ・授業で学んだ絵画作品などを実際に美術館で見つけるという現地での活動で、情報交換などを行いながら自分のもののみではなくほかのメンバーのものも探し出そうとした。
- ・ロシア研修の際、見知らぬ土地の情報をみんなで共有し、それぞれのリサーチの手助けをすることがあった。
- ・今回のチームの中には体の弱い人もいたので、そういった人も気にかけながら行動できたと思います。
- ・留学で授業をすることになったときどんな内容にするか相談した時、相手の意見の方が良かったならすぐに取り入れ、少しでもいいものにしようと協力できた。
- ・部活動において、メンバーとよく話したり、意見を交換したりしている。
- ・チーム内でもめないように気を配っている
- ・みんなでコミュニケーションをとりながら海外での生活を乗り越えられたと思う。
- ・それぞれの意見を聞いてまとめ、活動に取り組む。

- ・自分たちの抱えている問題や課題に対し意見を交換しながらより良いものへと昇華させようと活動している。
- ・この GCP は 4 人という少ない人数での行動だった上に、相手のことをあまり知らない状況での参加であったので、意見交換や自分の思っていることを伝えるなど、積極的に意思疎通ができたと思う。
- ・あるテーマについて話し合うとき、自分の意見と違っている発言に対しても理解を示しつつ、自分の意見も言うようにしている。
- ・部活動で定期的にミーティングを行い、部員の考えや意見を共有している。
- ・GCP のメンバーでプレゼンや、ポスターづくりをする際には役割を考え、プレゼンを終えることができた。
- ・サークル活動などにおいて、なるべくコミュニケーションを増やすことを意識して取り組んでいる。
- ・学校生活の中で常に冷静であり、人間関係を乱さないよう心がけている。
- ・相手がどう考えているのか聞き出すようにしている。
- ・Closing Ceremony において、メンバーや UPLB の学生と協力しながら一つの劇を短期間で完成させることができた。
- ・ガイドドインストラクションで何をするか、メンバーと話し合った。
- ・チームでメンバーが意見を言いやすい雰囲気をつくり、自分と考え方が異なっていたとしても否定はせずに意見を述べる。
- ・意思疎通を常に怠らず、周りに気配りをする。
- ・人の話をよく聞いた。
- ・チームのメンバーがやりたいことをやれて、気持ちよく活動できることを大事にしているので、2 週間に 1 回くらいは 1 対 1 で話すようにしている。
- ・塾講師の次期教室リーダーとして、教室内ミーティングで中心となりながら、ほかの講師の意見を聞き、よりよい教室になるよう改善に取り組んでいる。
- ・アルメニアコースでは、学外学修として教会の見学などを行ったが、その工程などを考えることができた。学科のグループ学修では、よく会話をしながら、時には先導したり指示を仰いだりしながら、できていると思う。
- ・アルバイトで、先輩や社員さんの立場や特徴を汲みながら、最年少として仕事を積極的に取りに行ったり、聞きづらい質問をきちんと聞いたりするようにしている。
- ・サークル活動で 3 人の班で活動していて、3 人で議論をしながらより良いものを作ろうとしている。
- ・いくつかのトラブルはあったが、その対処や、その他現地での様々な活動に対してメンバー全員が協力して取り組むことができた。
- ・アルメニアで 6 人いると行きたいところが分かれたり、活動に関する意見が割れたりすることもあったが、話し合ったり、意見をすり合わせたりして取り組んだ。
- ・フィールドワークのプレゼン準備では、森さんと意見を出し合いながら協力できたが、そのプレゼンの内容については改善の余地がまだまだあったと思う。
- ・メンバーがやる気がなかったり、議論好きで話がまとまらなかったりしても、常に努めて意見をまとめることができた。
- ・プレゼン準備では、当初想定していた発表内容と個々のリサーチ内容にずれが生まれ、やや一貫性のないものになりかけたが、互いの意思疎通をより高めることで当初の目標は達成できなかったものの、納得のいくプレゼンを作成できた。
- ・練習時間があまり取れず、タイに行ってから合わせる練習をしたがそれぞれが自信を持って発表できるまで仕上げることができた。
- ・たとえ少数意見が出たとしても、その考えをしっかりと聞いた。
- ・GCP 活動中、現地教員・日本人学生と授業の改善のために話し合いをし、お互いの意見についての理解に努めた。
- ・時間の都合上、意思疎通が十分にできない時が多かったが、直接話して自分が何をすべきか考えて行動した。
- ・各自に割り当てる前の案や調査について、それぞれの意見を取り入れながら進められた。
- ・今回は年齢の違う人が多く混ざっていたため、おのおのにふさわしい役割をチームで共有し、互いに積極的に意見を交わすことができた。

- ・ネパールの子どもたちとダンスを踊る企画で各学校の年齢や場所の広さに合わせてその都度メンバーと話し合い、最適な方法で企画を実施できるようにした。

表 2 自己評価結果（自己修正力）

【自己修正力】

2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

		事前学修 回答数 (人)	事前学修	事後学修 回答数 (人)	事後学修
【水準3】	自分以外の人の考えや行動を参考にして、 自分の考えや行動を見直している。	17	13.7%	69	55.2%
【水準2】	自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の 見直すべきことについて理解している。	64	51.6%	36	28.8%
【水準1】	自分の考えや行動について認識している。	41	33.1%	20	16.0%
【水準0】	水準1に達していない。	2	1.6%	0	0.0%

2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

		事前学修 回答数 (人)	事前学修	事後学修 回答数 (人)	事後学修
【水準3】	自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を 克服するための実践を行っている。	12	9.7%	51	40.8%
【水準2】	自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を 克服する方法を模索している。	49	39.5%	44	35.2%
【水準1】	自分の得意分野や苦手分野について理解して いる。	57	46.0%	29	23.2%
【水準0】	水準1に達していない。	6	4.8%	1	0.8%

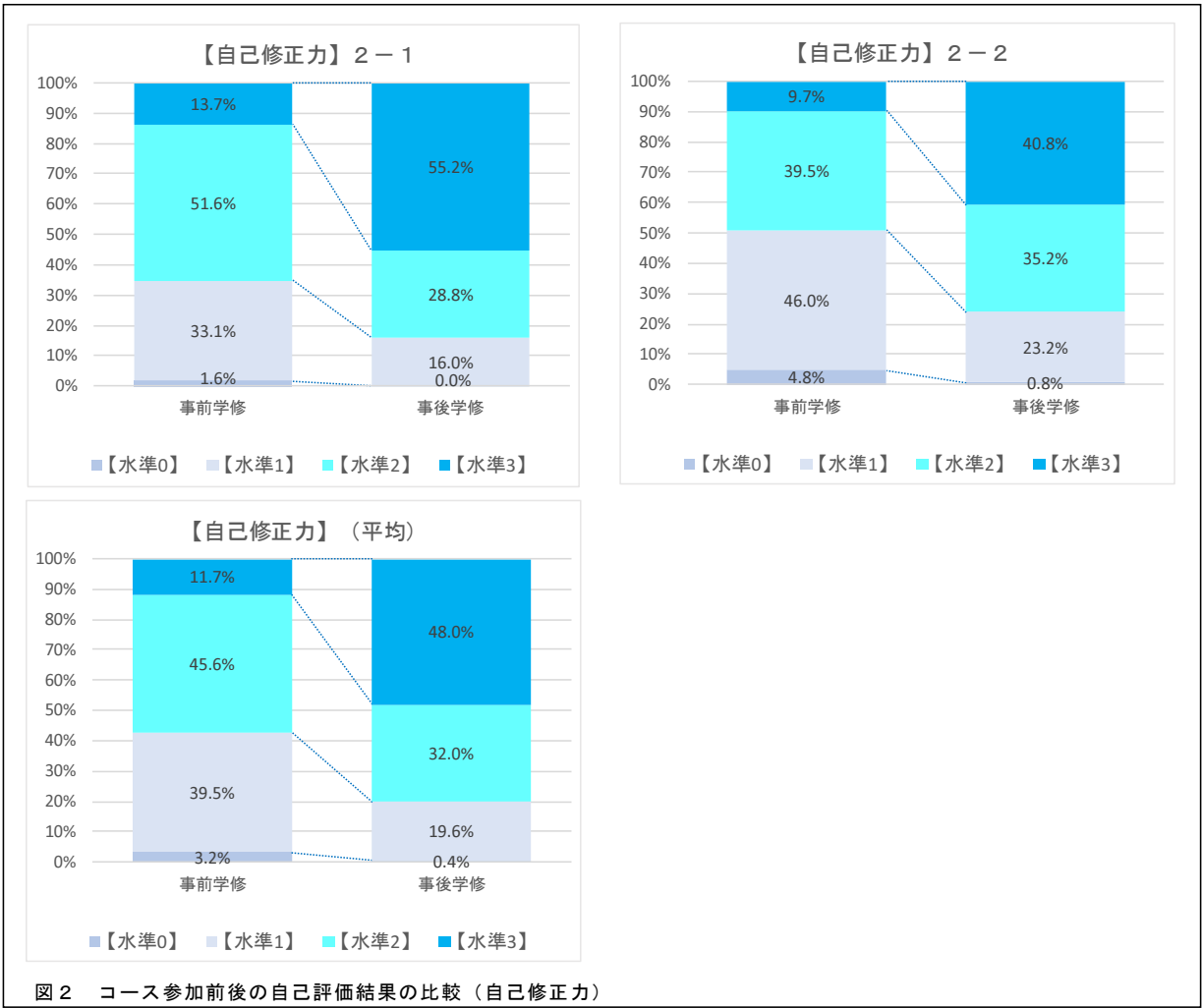


図 2 コース参加前後の自己評価結果の比較（自己修正力）

—水準選択における具体的な説明（水準２・水準３）—

【自己修正力】2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

●事前学修時

【水準３】

- ・友達や本から吸収した新しい見方を吸収するように日頃心がけている。
- ・常に周囲にいる人の言動を参考にし、自分に欠けているものを補えるように心がけている。
- ・色々な考え方の人がいることを理解している。
- ・前述の調査実習において、他メンバーの意見を参考にできず失敗したことがあった。その失敗から、他者の意見を参考にし、自分の行動を修正し責任と自信を持つようにしている。
- ・他者のリサーチ方法が良いと思った際にはそれを参考にした。
- ・他の人の筋肉トレーニングメニューを参考に、より良いものは自分のメニューに取り入れていっています。
- ・日常生活で自分とは違う他の人の考え(例えば社会問題についてなど)を聞いて、自分の考えを再構築するようにしている。
- ・自分の元の意見と違ってても人の発言で良いと思ったものを積極的に取り入れるようにしている。
- ・いつも周りにありがとうと感謝を伝えている友人を見て、まず私も感謝から始めようと思いがけている。
- ・自分以外の考えの方が冷静で客観的であるため、比較的他者の意見を尊重し、取り入れるように意識している。また、他者の観察から自分が吸収できることは全て吸収するように努めている。
- ・部活の練習で、他のメンバーの効率の良い練習方を見て、自分の練習方を見直した。
- ・塾での集団授業を行うにあたって、他の人の授業も聞いて自分自身にない部分などを見つけてフィードバックしている。
- ・大学生活を送っていて、多くの社会人の人に出会う機会が増えました。そういった人と関わる中で、自分の甘さや考えの未熟さを自覚し直すよう努力しています。
- ・尊敬できる友達から、積極性や礼儀、ものの考え方など、たくさんのことを学び、自身の行動に活かしている。また、部活内での先輩方の態度を見て、反面教師として後輩に対する態度を改めた。
- ・基本昔から人のいいなと思うところを真似して生きてきたので、自分から作り出したものは0だと思っているし、私は話し方、言葉、態度、動き、考え方、等、他人でできていると思う。
- ・あまりプライドは高い方ではないので人に反対意見などを言われても聞き入れることができる。

【水準２】

- ・授業内のグループディスカッションでその人その人の意見を尊重し合うことはできた。それを踏まえて自分の意見を変えることができた。
- ・相槌を打つ、積極的に質問するといった姿勢は自分に足りないものだと感じる。
- ・自分と他人の優先順位が異なることを自覚して、他者について不満に思うことを見直し自分の行動を変えている。
- ・アドバイスを聞いて自分の意見を考え直すことができた。
- ・主将という立場で相手の意見を取り入れ自分の意見を見つめ直すことができるようになった。
- ・自分の考えや行動に関する意見を友人から聞くことで自分を客観的に見られるようにしていること。
- ・人よりも自分の意見を主張することが多いところを見直すべきだと思っている。
- ・時間差で自己の評価ができる。行動を起こしつつ自己を客観的に観察するのはまだ不得意とする。
- ・私は少しのことですぐイラっときてキレてしまうので我慢するようにしている。
- ・他の人の考え方を聞いて、自分の中にはなかった考え方だったら、そういう風に考える人もいることを心に留めたり、その考えを取り入れたりする努力をしています。
- ・幅広い事に興味を持つ人を見て、自分も普段から様々なことにアンテナを張って生活すべきだと感じている。
- ・自分以外の人意見を聞いて自分の活動に取り入れられるものは取り入れつつ自分の行動や考えを見直していこうとしています。
- ・きちんと自分で反省するようにしている。

- ・部活のチーム内における自分の立場を理解して日々の練習時での準備やOB会の立ち回りに注意し、常に行動を省みるようにしている。
- ・部活動において、特に先輩から自分について考えることがある。
- ・自分の積極性のなさを自覚している。
- ・私はルーズなところがあり、ルームメイトは几帳面な性格であったので、うまく折り合いをつけられるよう努力した。
- ・自分の意見を主張する前に他人の意見を聞く姿勢を持つようにしている。
- ・自分の考え方に固執せず、まずは人の意見を聞こうとしている。
- ・他人からのアドバイスを素直に受け止める
- ・英語を話すのが得意な人、積極的に質問をできる人を見て、自分が成長するためには必要な部分があるのだと考えていた。
- ・他者との関わりにおいて人の良い点は参考にしようとしている。
- ・仲間ができているところを見て、自分がその部分ができていないことは理解できるが、それを改善はできなかった。
- ・人それぞれ異なる価値観を持つと認識し、それに基づいて自分の価値観をより良くしようとしている。
- ・自分は余裕がなくなると、近くにいる人に対しても余裕を持った対応をすることができなくなったり、イライラしたりしてしまいます。逆に何も抱え込まなさすぎると、それはそれで焦る気持ちも生まれてきます。
- ・自分の考え方と異なる考え方を持つ人の話をよく聞くようにしている。
- ・他人の行動を見て、いいなと思ったことは自分も真似してみる。
- ・計画能力が甘いので早めの計画を心がけた。
- ・他人から見習うべきところはしばしば実感するが、行動に移すことがあまりできずにいる。
- ・高校のダンス大会では全くダンス経験のないクラスメイト達で選曲から振り付けまで行わなければならなかった。しかし全員やる気がなく、締め切りに間に合いそうになかったので、仕方なく私個人で振り付けを持ち込んだが、やはり全員の協力で完成させたいとの意見の下、振り付けを撤回し、みんなでやることになった。
- ・4月にアイセックの新歓で多くの先輩と話して自分の未熟さを思い知り、そこからの活動で自分の「生きる意味」を見つけた。
- ・他人の良い点、悪い点を把握し、自分の行動を見直すようにしている。
- ・高校の部活のとき、個人個人で目標がばらばらで考え方も違ったので、意見を言い合ったうえ、合意形成し目標を決定した。
- ・アルバイトで、先輩がやっていることを観察して、自分の改善すべき点を理解している。
- ・周りの人と自分の自分に対する評価が合わないことが多く、もっとポジティブに考えるべきだと思っています。
- ・英語キャンプに参加した際、イギリス人が台風を経験したことがないことを知り、驚いた。自分が日本人の感覚に支配されていることに気づいたので、イギリス人に偏見で接しないよう、彼らの考えや風習について聞き、理解しようとした。
- ・高校の部活で自分の動作のロス进行をペアに指摘してもらいどう克服するかを考え実践した
- ・委員長として、文化祭や体育祭などでうまく行かない時に、周りのメンバーの意見を聞き、成功させることができた。
- ・塾講師のアルバイトで、色んな生徒の得手不得手・共感できる部分できない部分を通して、自分の考え方の癖に気づくことが多い。
- ・優柔不断な正確なのでよく他人に意見を求める。なぜそう思うのかなど親密になるほど結構聞く。ただ「そういう人もいる」という結論になる事が多く自分の行動を変えるまで至っていない自覚がある。最近では選挙に関して創価学会の知り合いに話を聞いた。
- ・サークルでの部会において、議論を重ね、より良い意見を出すことができた。
- ・アルバイトでの体験を通して、今までは消費者側の視点しか持っていなかったが、日常の色々なときにも生産者側の事情を考えられるようになった。

- ・ダンス部の経験を通して、他の人と話し合うことの重要性に気づいたので、現在所属するカヌー部においても、他の人から意見を貰うことを意識的に行なっている。
- ・模擬国連というサークルに現在入っており、相手がいる場で議論をするのだが、自分の主張を相手に伝えるのはもちろん、相手の主張も自分のそれと同じ価値のあるものとして尊重し、自分の主張だけで頭をいっぱいせず、自分のものと他者の主張を比較することで、自分の主張をよりよいものにしようとする意識はある。
- ・吹奏楽部で自分の楽器の位置を理解する。
- ・インドネシアの人々の大部分が信仰しているイスラム教の考えを知った上で、現地の学生と接することができた。
- ・体育祭のダンスリーダーの時は、バラバラだったクラスを一つにまとめて、ダンスを成功させました。その時は、自分の意見を全面的に通すのではなく、クラスの意見もしっかり取り入れて話し合うことができたと思います。
- ・高校の時、部を引っ張る立場になった時、自分がどう行動しどう伝えればみんながついてくるのかを考えて行動するようになった。
- ・大学で出会った友達の中には、自分の意見とは異なる人がたくさんいます。そういった人とのコミュニケーションの中で、自分の意見を押し付けないよう心がけています。
- ・危機管理学修において、自分の認識が甘かったことを知った。他者の視点に立って危機管理を行いたい。
- ・人の考え方に対し感情的にならず冷静に判断することを心がけている。
- ・他人の価値観や考え方を理解しようとする姿勢はあり、自分との違いや、自分の曖昧な、説得力のない考え方に気づかされ知識を深めたりすることができる。
- ・授業のグループワークで話し合いをする時、自分以外の人の考え方を理解した。
- ・経験者をまずは真似る。具体的には、バイトでは仕事が出来る人から習う事に全力で取り組む。
- ・大学に入って様々な出会いを通して、自分に足りない価値観、認識を養うことができた。
- ・楽器の専門の先生に自分の演奏を見てもらって、評価を受け、その人のマネを続けて技術の向上に励んだ。
- ・新歓活動の際、私は人見知りをしないタイプで新生に声をかけるのにためらいがなかったため、戸惑って中々新生に声をかけない同期に「どうして話しかけないの？」と厳しいことを言ってしまったことがあった。後になって、別の同期との会話のなかで感じ方は人それぞれであることに気がつき、自分にできることを他人に押しつけないように気を配るようになった。
- ・私はよく人に話しかけたり発表したり SNS 等を使うことが多かったため多くの意見や指摘をもらった。そこで自分とは違う考えに多く出会い、私の認識範囲も広がり、謙虚な気持ちを持つことができるようになった。例えばプレゼンに関しては早口でわかりにくいといったことや野球の技術についてアドバイスをもらった。
- ・障がい者の集まる団体で数年間居させてもらったときに、当時傷つくこともあったが、自分の中で整理して、そこから学べるものを、吸収していった。その癖が、今でも自分や他人を理解するときに役立っている。
- ・受験期の勉強では友達同士で教え合うことで理解できていない点や間違っている点を洗い出し、修正、向上できた。

●事後学修時

【水準3】

- ・外観からアジア人やアフリカ人などを判断せず、その人と接してから、その人の文化と思考を知ることが重要である。すなわち、他者の文化を理解する前に、自分の慣性的な思考を捨てるべきである。
- ・もし相手の方が良い意見だった場合、自分の意見にこだわらず積極的に相手の意見を取り入れる。
- ・現地で出会った人の価値観から、日本的な価値観を見つめ、自分の行動を見直した。
- ・インタビューの対象者に応じて、質問に変化をつけた。
- ・何か嫌な思いをしたときに、相手がしている行動を自分も前にとったことがある場合があるので、それに気づいた後は、行動を改めようとしている。
- ・同じコースの人で、あまり良くない行動をしていた人がいたので、それを反面教師にして自分の行動を見直すことができた。

- ・他人のふり見て我がふり直せ、を実行している。
- ・常に内省を通して自らの思考や行動を見直していた。
- ・より効率的に動くためにはどうしたら良いかを、周囲の人の行動から学んだ。
- ・気が利くと感じたこと、自分がされて嬉しかったことはできればすぐ実行するか、次の機会に応用する。逆に嫌だと思ったことは他人にしない。
- ・常に他の視点があることを理解している。
- ・対立意見や新たなアイデアなどを積極的に取り入れ、チームメンバーを信頼して取り組んだ。
- ・語学学校で、中国人の学生が文法はできていないが積極的に何でも発言していて、間違いを恐れずとりあえずやってみる姿勢が重要だと思った。
- ・カルチャーショックに苦しんでいたが、今までに経験のある人たちにアドバイスをもらい、解決につながった。
- ・自分の意見とは異なる意見を聞いて自分の意見を見直した。
- ・他者の調査方法が良いと思えば、それを参考にした。
- ・自分のコミュニケーションの取り方や生活への向き合い方について他者のふるまいを見て反省している。
- ・リサーチの積極性を見習った。
- ・リサーチが難航した際、ほかのメンバーで私と似たリサーチ方法をとる人の軌道の修正の仕方を学び自身のリサーチに生かそうとした。
- ・シュノーケルの際にサンゴの上は危ないし環境破壊に繋がるので泳がないようにしようと言われ参考にしました。
- ・普段の生活の様々な場面で、自分が見習うべきだと思った行動や考えはその後の自分に取り入れるようにしている。
- ・企業研修での事前学修度合いや、聞く姿勢が自分よりも上回っていたため、学修時間を増やした。また海外の学生との接し方では英語を話せなくても伝えようとする意思を見せること。1番はなぜこのプログラムを受けようとしたかという話をしたときに、それぞれの目標があつてこのために参加しているということを知って改めて自分の目的、目標を確認することもできた。
- ・The other members are very very active and curious!
- ・フィリピン渡航中は日本での普通や当たり前が通用しなかったので、異文化を感じながら内省をしていました。
- ・現地の人の言語観や価値観を知り、自分ももっと日本に誇りを持つと思った。
- ・他者のプレゼンテーションなどを見て、良いと思ったところを真似した。
- ・周りを見て気遣いができている人の行動を参考に自分の行動を見直している。
- ・ほかの参加者と話して、それぞれの将来の展望を聞くことで自分の将来のことも考えることができた。
- ・日欧での人々の生活や文化の違いから、日本や自分個人について見つめ直し、批判的に自分を捉えた。
- ・今回多くの人の話を伺って、将来自分がキャリアを構築するためにはどのような能力が現在足りていないのか、またどのような努力をするべきなのかについての具体的な課題が露呈した。そのため、今後自分の将来を考えるにあたって見直さなければならない点が多く発見でき、新たな考え方を獲得する機会になったと自覚している。
- ・ほかのボランティアの人が子どもたちの環境を変えようといろいろ努力しているのを見て、子どもたちの世話だけをするものの意義についていろいろ考えた。
- ・会話カフェで参加者全員が平等に話す機会が得られるように、ほかの参加者の話したい内容や韓国語能力を鑑みながら、会話カフェのスタッフを参考にして、話を振るなどして自分だけが話しすぎないように注意した。
- ・色んな人に自分についてヒアリングして、自己認知を深めているので、自分の弱みが周りに悪影響を与えないように、解決策を考えている。
- ・多くの人と会話を重ね、自分の考えを見直すきっかけとしている。
- ・ちょっとはっきり物を言わないメリットを学んだ。
- ・テニスサークルで自分は部活の経験がある立場でそっちの方が効率が良いと思っても、他のメンバーはもっと緩く楽しくというのを求めている中で、意見を伝え合って、自分の考えを改めている。

- ・自分の意見を主張するのが苦手だと弱点を認識し、周りのメンバーのように、今の自分ができる範囲で想いを伝えようとするようになった。
- ・今回のツアーを通して疲れている時にも笑顔を忘れないスタッフやフィリピンの人たちから様々なことを学び、自分も笑顔を欠かさないように心がけた。
- ・高校でチューターとしてボランティアをしていた時、初めは初めての空間に戸惑いどう振る舞って良いのかわからず上手く動けていなかったが、他のボランティアの動きをみて自分との違いに気づき、上手く動けるよう改善することができたこと。
- ・アルメニアコースでは、自分以外のメンバーが積極的に現地の文化を吸収するためにコミュニケーションを取っているように感じた。日本学校は複数ヶ所に行ったので、自分が何をしに来たのかを見直して、途中から修正して行動に移すことができたと思う。
- ・自分の優柔不断な所を直すため、友人の即断即決っぷりを真似している。
- ・メンバーが自分から積極的に諸活動に取り組む姿勢を見て、改めて自分自身も気を引き締め、積極的に活動に取り組んだ。
- ・アルメニアの学生と交流すると、意識の高さや物事に関する価値観などが自分と全く違うことがわかった。その経験から日本に帰ってからも自分の価値観を見直し、修正することもある。
- ・今回、自分が困ったときに、皆んなが助けてくれ、それが本当に嬉しかったので、それを返せるようになりたい。
- ・外国人と交わろうとしない日本人を見たり、積極的に話しかけてくれる人を嬉しく思ったりして、積極性が大事だと思い、心掛けた。外国人ばかりの輪の中に1人で入ったこともある。
- ・アルメニア人の学生と話す機会が多かったが、その中で出てくる相手の質問にはその内容を考えたうえで返すことができたと思う。
- ・ELC では、アラブ人の生徒などが特に積極的な姿勢で授業に取り組んでいて、想像をはるかに超えるものだった。そこから、少しでも自分もそこに近づこうと姿勢を見直し、また当人たちに話を聞いて考え方を取り入れた。
- ・自分はみんなと比べて方向音痴なので、みんながどのようなことを行って現地の土地勘を身につけているのかを聞き、自分もそれを実行しました。
- ・自分以外の人が、自分では思いつかないような質問をしているのを聞いてこういう考えもあるのか、と自分の考えを改める場面があった。
- ・モンゴルの人々と生活する中で、今までの自分が細かいところにこだわりすぎていたことに気づいた。モンゴル人の大らかさに学び、広い視野を持って物事を捉えられるようにしたい。
- ・GCP 活動中、外国で長期間生活する中で自分とは違う考え方に触れる機会が多くあり、自分の価値観・考え方を見直すように努めた。
- ・英会話をする際に、他者が使った、より適切な表現を盗み自分でも使えるようにした。
- ・自分より周りに対しコミュニケーションを取ろうとする学生を見て、帰国後自分も日々の生活の中で積極的にコミュニケーションを図ろうとしています。
- ・様々な考え方の人々と出会い、特にネパールなどの発展途上国における教育や発展などについて考えを見直すことができた。
- ・自分が思いつかないような活動内容を思いついている人にその意図を聞いた際に、「自分たちの帰国後に何かが残るようにしたい」と言っていたことにはっとさせられた。
- ・ネパールでは、自分が日本で暮らしては出会えないような人とお話をする機会がたくさんありました。自分とは異なった生き方や考えを持つ人と交流できたことはたいへん刺激的で、自分を見つめ直すことができました。
- ・ネパール人の人を気遣う心や相手を思いやる気持ちに触れ、自分も他者に対してそのような行動をするよう努めた。
- ・外国人の考え方や性格は自分の盲点に気づかせてくれることが多く、帰国してからは、より楽に考えられるようになったと思う。ネパールに行ったことが自分の行動に影響していると思う。
- ・事前学修、準備の段階から、直前、活動中まで、どうやったら活動がよくなるか、どうすれば子どもたちが楽しめるか、わかりやすいかを、それぞれが言葉にして、お互いに飲み込んで、今回のプログラムをよ

り良い形へと持っていくことができた。自分の考えた活動も、たくさん問題点を指摘してもらって、改善したことで、よりよい形になったと思う。

- ・ネパールでは、多くの我々とは違う世界で生きている人と出会い語らい、様々な刺激を受けて、また今後、自らの人生や、選択への、見直しではなくヒントを得た。帰国後は、環境問題への取組の必要性を他者の行動から学び、活動を開始したり生活へも工夫を入れたりしている。
- ・同じ部屋でずっと一緒に生活してくれた友達が、2 週間の間いつも私のことを気遣ってくれて、私も”お天気娘”にならずに常に人を気遣える人になろうと思った。
- ・日本大使館や JICA での他の学生の質問を聞き、彼らが行ったような多面的な考えができるように自身の質問内容を再考、修正した。

【水準 2】

- ・語学学校で日本人でも英語で話しかけてわからなければすぐに調べて英語力向上に努めていた人がいて見習おうと思った。
- ・リーダーの指示を聞き、自分を修正する。
- ・部活動で先輩・同期との話を通して、自分がやるべきことを分かっている。
- ・他の人のリサーチ方法を見て、実際に自分のリサーチの参考にした。
- ・SIIT の生徒から刺激を受けて、自分も日本でさらに学業に励もうと感じた。
- ・前よりも自分と違う意見に耳を傾け、尊重できるようになった。
- ・環境問題について自分は楽観的である一方で、より深刻に考えるべきだということを自分以外の意見から感じている。
- ・自分とは違う考えを持っている人と出会ったとき、自分の意見を押し付けようとせず、相手は相手であると認識することが必要であると思った。
- ・このコースによっていろんな面（英語はもちろん、勉強に対する姿勢）を見直すべきだと思った。
- ・自分の性格上のずぼらなところなどを理解している。また、人の発言や行動の裏にある意図を読み取ろうと努力している。
- ・他人の良い点、良い行動を見て見習おうとしている
- ・自分の苦手なことは、話をして人に伝えること。これは工学に携わる人として大事な部分であるから、もっと練習する場を設けて強くしていきたい。
- ・他人の振る舞いを見て、良い点はうまく取り入れようとしている。
- ・自分よりたけている部分がみんなたくさんあり、そこがたくさん見えた。
- ・部活中に意見が食い違ってもまずはその人の話を聞き、自分の価値観を多様にしている。
- ・周りの友人が持っていて、自分は持っていないものについて、常に探して、改善するポイントを見つけている。
- ・授業や他のところでの積極性。
- ・話す相手や発表をしている人物の話す内容だけでなく、身振り手振りについても注意を持って聞き、自分に還元できる点（内容と合致したジェスチャーをすることで理解しやすくなるなど）を見つけるようにした。
- ・今回フィリピンに短期留学したことで自分の発音が聞き取ってもらえなかったり文法が理解してもらいにくかったりしたことを踏まえて、今後の英語学習に活かしていきたいと考える。
- ・多くの自己紹介や、友達紹介などを通して、より自分を知り、友達のことを知ることができた。
- ・自分にはできないことができる人を間近で見て、目標が増えた。
- ・同行メンバーの体調や意向などを確認しながら、サポートすることができた。
- ・もっとしっかり準備しないと思った。
- ・異文化に触れ、日本の良いところや悪いところを再認識することができた。今後、改善できるように努力していきたい。
- ・他者の良い点を参考にし、自分の行動の選択肢の一つにしている。
- ・同じボランティア活動に参加していた留学生に、1 年休学して、世界の 15 カ国を巡ったり、海外でプログラミング講習に参加したりするなど、積極的にキャリア形成に取り組んでいる人がいた。これを見て、自分は大学生活をどう過ごすか考えるため、彼に倣って手帳を使いながら考えるようになった。
- ・チームメンバーや同じチームの人から様々なことを学び自分に足りていない部分を考え理解した。

- ・プレゼンの準備段階では、もう少し他のグループの長所を柔軟に取り入れるべきであったと思う。
- ・アルバイトやサークルで議論の赤入れをされて、自分の足りていないところを認識したり、新たな発見をしたりすることができている。
- ・プレゼンの意見交換では、準備のための甘さを鋭く指摘された。意見は真っ当でその通りだと納得はしたものの、その後自分たちのプレゼンを見直したりはしていなかった。
- ・自分の課題については把握し、解決に向けての努力をしていると考えるが、他者の行動については。理解できない時もある。また、理解できない時に理解しようとする努力はあまりできていないのではないかとと思う。
- ・孤児院での活動がギリギリの報告になってしまったが、なんとか参加することができた。アユタヤへの行き方などの反省を踏まえ、余裕を持った行動をとることができた。
- ・自分が実行可能だと判断したスケジュールでも、仲間の意見尊重し、本当に可能かどうかをしっかりと再検討した。
- ・同じインターン生の見学の仕方や、丁寧に仕事をこなす姿を見て自分の煩雑さを実感した。
- ・つい自分のやりたい方向に向かって行ってしまうので、他人の助言があって初めてチームで統一した発表に向かって取り組むことができた。

【自己修正力】2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

●事前学修時

【水準3】

- ・自分は興味がある分野については事前にしっかり下調べをして取り組んでいると思うが、語学力がないため単語帳を買って単語を覚えるところから始めている。
- ・英語に関してスピーキングが苦手なので、よく使うフレーズを覚えるなど自分のやり方で実践していること。
- ・受験がこれそのものだった気がする。
- ・集中力の継続を長引かせるための方法を模索している。また、話術を日々訓練している。
- ・得意分野を伸ばすために習慣としている読書を継続し、苦手分野を克服するために、意識的に苦手と思い込むことをやめ、多角的な視点を持つように心がけている。
- ・自分から人に話しかけるのが苦手なので大学に入学してから周りの友達を手本にしつつ自分から人に話しかけるコツを身につける努力をしています。また英語が好きでもっと得意になりたいので英語の勉強を授業以外でも行う努力をしています。
- ・語学の自主学修を行った
- ・自分には、自信がありませんでした。だから、筋トレをして、自分の体に自信を持つことができるようになりました。
- ・日常的に自分の興味のある分野について調べ、ネット教材などを用いて学んでいる。
- ・英語学修など。
- ・英語検定に向けて英単語を覚えている。
- ・日々、自分にはできなさそうと思ったら実行することにしていく。例えば、通訳など自分がやったことがないことに対してもチャレンジしている。

【水準2】

- ・情報を収集することが得意で、現地に関する情報を書籍やインターネットを通して調べてくる。苦手分野としては、活力が不足しているが、仲間と一緒にいれば、興味を持たせる。
- ・自分ができないことをできる友達が多いので、その人達を観察している。
- ・英語が苦手なので自分にあった勉強の仕方を探してはいるがいまだわからない。
- ・仲良くなった人と話すことや悩みを聞いたり相談を受けることは得意ですが、初対面の人とは話はいきなり趣味が合ったり共通点のない人とはどのように話を展開すればいいのかわからないです。

- ・得意分野はおのずと伸びていくが、苦手分野はいまだに克服する効率的な方法を見つけられずにいる。根気で克服するしかない状態である。
- ・クラブ活動で、自分の欠点を直すためのトレーニング方法を、周囲の人に相談しながら模索している。
- ・情報を調べて、自分に合ったものを探している。
- ・部活において苦手な技や道具のセッティングを先輩をじっくり見ることで克服しようとしている。
- ・自分の悪い習慣をやめ、良い習慣に変えようと意識して行動している。
- ・自分の苦手分野から離れるのではなく積極的にその分野に関わり何が自分には足りていないかを模索した。
- ・私は何においても苦手が多く、克服しようと色々考えてはいるもののなかなか成果が出ず、悩んでいるところである。
- ・自分で限界を決めずにとりあえず何事もチャレンジしてみる。
- ・初めて会う人と話すのが苦手なので、自分の心の持ちようを考えてみたり、他人の話し方を参考にしようとしていたりしている
- ・苦手なことには繰り返しやる、得意なことには食欲に取り組む。
- ・リスニングは得意な分野だったので、ネイティブと会話するとき早い会話でも理解することができるよう、言葉のクセやうまい聞き方を模索していた。
- ・初対面の相手に話しかけることはできるので、新しい仲間との出会いの場でそれを発揮し、パソコン操作は苦手なので、少しずつタイピングの練習をするなどしている。
- ・自分にあった勉強方法を見つけるのは得意な方だと思う。
- ・得意分野を伸ばすことよりも苦手分野を克服する方に重点を置きがちだが、自分に合う方法を試行錯誤を通じて模索している。
- ・話や考えをまとめるのが苦手なので、ディベートなどで積極的に発言をしている。
- ・私は外国語を用いて外国人とコミュニケーションをとることが比較的得意で、中学校のニュージーランド留学ではホストファミリーと共に教会やボランティアに赴き、積極的に交流を図った。一方、同年代との共同生活は苦手で、同じ家に滞在していた同年代の留学生と一緒に料理や買い物をしたりして良好な関係を築こうとした。
- ・自分は抽象的に考えるのは得意だがそこから具体的に落とし込むのは苦手なので、それを克服するために先輩や同級生に相談している。
- ・英語を学ぶ方法を模索している。
- ・受験勉強で得意な英語を伸ばし、苦手な化学、国語を伸ばすために先生に勉強方法を聞くなどして実践したが、自分が求めていたレベルには達しなかった。
- ・英語の読み書きは得意だが、会話には不安があったので、英語キャンプに参加し、積極的に外国人・日本人と英語で交流した。
- ・高校に入って初めて委員長になり、リーダーとして引っ張るだけでなく、今までどおり縁の下の力持ちとしても行動できた。
- ・用意されたものを率先して話したり行動したりするのは得意で0から1をつくるのは苦手だ。グループワークでもしばしば原稿を作ってもらって主に発表を担当することがある。克服しないととは思っている。
- ・受験勉強において、化学が嫌いだったが、弱点を勉強することで最終的に好きになることができた。
- ・得意分野であるコミュニケーション能力や問題対応力をあげるために、グローバルチャレンジプログラムに参加した。
- ・大学受験勉強。
- ・英語で速く喋られると聞き取れないという苦手分野を克服するための方法を調べていくつか試している。
- ・高校時代、野球部で自分の得意分野と苦手分野をしっかりと見極める必要性があったため、自然とその能力はついていると思う。得意分野と苦手分野をどう伸ばしていくかの実践もできるが、毎回その方法を考えるところで時間がかかる。
- ・英語のディベート大会でうまく討論できないので構成を考えることやデータ集めに回った。
- ・TOEFLの結果から、英語のリスニングが極端に苦手で、一方文法などは得意と分かったため、図書館でそれぞれのレベルに応じた参考書を借りた。

- ・部活動では、陸上競技の 7 種競技をしていました。限られた時間の中で七個の種目の記録を伸ばさなければいけなかったため、自分で苦手な種目と得意な種目にかける時間を調節したり、どのようにしたら効率よく成長するのかを日々考えたりしていました。
- ・大学受験の際、得意であった英語、社会は友達と確認し合ったり短い時間でテストを行ったりする程度にして、理科など苦手だった教科は時間をとって予習、復習の段階を踏んで学習するようにしていた。
- ・私はひとつのことを継続することが得意です。その反面、新たなことにチャレンジすることが苦手なので、自分が経験したことのないことに対して奥手になってしまうところを克服していきたいです。
- ・得意な文系科目は高度な内容、苦手な理系科目は基礎から学ぶ。
- ・得意な書道の魅力が伝わるスライドを作成する。苦手なコミュニケーションでは、積極的に交流するために、現地の情報収集を事前に十分に行いたい。
- ・受験勉強や大学のテスト勉強など。
- ・経営学部に合致するコースを選択した。また、現在は英語力が足りないので努力する。(このコースではぜひ英語の練習としたい)
- ・編入学を成功させるために、得意な化学は、編入先でしたいことをイメージして、それにつながる興味のあるものを調べるようにして、初めてやる生物は身近なことに絡めながら暗記を進めている。
- ・受験勉強時、得意科目の英語と他の苦手な科目の勉強の両立をしていた。
- ・ESS に所属し英語の競技性ディスカッションをしているが、今までに一位を獲得出来たことがない。なぜ一位が取れないのかを自分なりに考えた結果、自分の意見を持ちアイディアを話す力はあるが、他人の意図を汲み取り、理解し、それらをすり合わせて議論を前に進める力に欠けていることが分かった。アイディアを考えて発言する力を伸ばすために、より説得力が増すようにアイディアの前提をしっかりと詰めるように心がけている。苦手な面については、相手に対して質問や意図の確認を丁寧に行うことで向上させようと試みている。
- ・自分に甘い、時間管理が甘い。
- ・自分に足りないと感じている英語力をつけるために、高校、大学といくつかのプログラムに参加している。
- ・悪いものに悪いと言う時に相手に伝えるために、しっかり強い口調や態度で言うことがある。悪いことだとは思わないが、先の先を見据えてマイルド且つ戦略的に物事を言えるようになるために努力中。
- ・受験では数学を延ばし英語に力を入れた。今は、人に指示を与えるといった、人前に出るのが得意になる方法を模索しています。
- ・苦手な科目は基礎から、得意な科目は応用まで勉強することに重点を置いて受験期を過ごした。

●事後学修時

【水準 3】

- ・前もって準備することが得意であったが、自発的に他者と交流することは苦手であった。ニューヨークに行って、すべての活動に準備することができなかったため、地元の方との交流を通して色々調べても出てこない情報が得られた。
- ・英会話が苦手だったので、今回の GSP では、自分から能動的に英語を使った。
- ・英語だけでも普通にコミュニケーションを取れることがわかったので、思いきって色んな人と会話した。
- ・日記にその日あったことを書き、良かった点・悪かった点を分析して明日という日をよりこころ穏やかに過ごせるように努めている。
- ・英語のスピーキング能力が劣っていると感じたので、日本に帰ってきてからも参考書などで勉強するようにしている。また、リスニングは得意になったのでこれを継続するために毎日欠かさず英語を聞くようにしている。
- ・得意なパワーポイント、プレゼンの機会を得る。苦手なことはパターン分析して乗り越える。
- ・集団行動をそつなくこなすための実践を常に心がけていた。
- ・自分のスピーキング能力のために積極的に英語でコミュニケーションを図った。
- ・スピーキングが苦手なので、積極的にコミュニケーションを図り、成果がみられた。
- ・自分の英語の話す力を伸ばすために人見知りを克服していろんな人に話しかけるよう努力した。
- ・語学力向上のため自主学修を行った。
- ・部活動で、自分ができない部分を補うための練習に取り組んでいる。

- ・コミュニケーション能力の向上のために交流を多く持った
- ・自分からコミュニケーションをとることが苦手なので、積極的に話題を作ろうとしている。
- ・コミュニケーション能力をいかして、拙い英語でも意思疎通をとることはできたが、専門の内容になるとまだまだ話せなかったなので、まず基礎学力をつけるために TOEIC での得点 800 点を目指し勉強をしています。
- ・日常的に自分の興味のある分野について調べ、ネット教材などを用いて学んでいる。
- ・得意分野は発音、苦手分野はプレゼンでしたが練習をしっかりとできるようになりました
- ・自分が苦手な英語の発音のところは、プログラム中のナイトセッションやガイドドインストラクションで何度も練習を行なった。
- ・私は英語表現をあまり多く知らないので英語で日記を書くことで語彙力を養おうとしている。
- ・結果がどうなるうともまずは挑戦することを厭わず、好きなことにはとことん探求する。
- ・英語が喋れなくてうまく伝えられず苦勞したので、英語の勉強を今している。
- ・韓国語能力を伸ばせるように積極的に会話カフェやバレエ教室に参加して韓国語を練習し、人見知りを改善するためにヨガやバレエ教室などで初めて会ったひとに自分から積極的に話しかけた。
- ・自分は論理的思考力が弱い（直感でしか動けない）ので、先輩に聞いて、本を読み始めている。
- ・英語での会話を重ね、様々な活動に取り組んだ。
- ・塾講師をしているときなど、教えることに自信はあるが、字が雑で上手く伝わってないと感じていたので、ペン字の本を買って練習して、相手にとって理解しやすい工夫に取り組んでいる。
- ・笑顔で人と接するというのは、以前よりも心がけるようになった。英語で話すのは苦手であるが、克服できるように自分から英語で話しかけることを意識した。
- ・私は声が小さく、人と話すのがあまり得意ではなかったが、今回のツアーの最初には積極的にたくさんの人と話すという目標を掲げ、ツアーの中で成長を感じられた。
- ・人の感情に目を向けて相手と接することを課題として取り組んでいる。
- ・長所であるバイタリティやコミュニケーション力は最大限に活かし、短所である緻密さに欠けるところは一定程度改善されたように思う。
- ・アルバイトやサークルでは得意なことを生かせる仕事を請け負っている。議論をする際に深く考えたり先々まで見通して考えたりすることが苦手なので、一旦止まって、イメージをするように心がけている。
- ・コミュニケーション力やリーダーシップを身につけるために、自分から積極的に現地の人に話しかけたり、調査作業などを行ったりした。
- ・得意な英語を伸ばすために TOEIC の試験を申し込み、演習などの対策をして受けた。浅く広く興味を持つことが得意だと思ったので、もった興味を大切にして教養科目の参考図書などを読んだ。
- ・英語の語彙力のなさを痛感したため、単語帳で勉強している。
- ・ELC での活動や街の人とのコミュニケーションを通じ、私は Reading と Writing はそれなりにできるが、やはり Listening や Speaking は不得意であると感じた。現在 TED を視聴してまずは Listening を向上させようとしている。
- ・私の得意分野はすなわち好きな分野に直結しているので、自分の得意分野を伸ばすための努力は自然といつもしていると考えます。また、苦手分野に関しても、いつまでも苦手なままでは嫌なので、課題を見つけたらすぐに解消させようと考えているし、実行に移している。
- ・会話自体は得意分野だが、より多くの人と次々に会話をするのは苦手だった。学生からもっと話を聞きたいという状況の中でこの苦手を克服するようにコミュニケーションを積極的にとるようにした。
- ・プレゼンでは、人前で話すこと自体は得意としていることなので、ユーチューブなどで英語でのプレゼンをしている人の動画を見て、英語独特のものを学んだ。一方で、原稿作りでは正しい英語の運用に難があったので、他の学生と一緒に考えて、学んだ。
- ・タイに来て間もない頃、英語を使うことに自信が無く他の人に任せていたが、後半は積極的に現地の方に話しかけた。
- ・自分が人見知りで初対面の人に対し緊張してしまうと感じているため、克服のために多くの人と接する機会を持つようにしている。

- ・ベトナム人学生や先生との活動や、レストランでの会話で英語を使う場面に度々遭遇し、英語力を向上することができました。また、以前には自分が率先して何かを達成することが不得手でしたが、今回のグループ活動で得意になった気がします。
- ・私は子どもとの関わりに関することは得意で、今回は小学校を訪問したりする中で子どもとの接し方を考えることができた。また自分で何かを企画したり発表したりすることは苦手だが、小学校の活動や積極的に質問・発表することで解決に取り組んでいる。
- ・コミュニケーションをとるときにアクティブに動ける自信はついたが、英語力のせいで大学生や私立の学生と高度な会話をするときに困難を感じた。海外で働くときにこのままでは役に立たないので、もっと伸ばすように努力する。
- ・初対面の人に声をかけたり、質問したりすることが苦手だったが、今回のプログラムで、現地でどんどん人にぶつかっていくことで、積極的に質問していくことができるようになった。また、言葉なしで子どもたちとコミュニケーションをとったことで、言葉を通じないコミュニケーションも学ぶことができた。
- ・人前で話すことや知らない人と話すことは苦手だったが、みんなの前でダンスをしたり村の人と交流する中で克服できたし、人の意見を常にちゃんと聞くということはより強くできるようになった。
- ・自分は人に話しかけるのが苦手な方なので、メンバーだけでなく、現地の子どもたちとのコミュニケーションを積極的に行うように心掛けた。

【水準 2】

- ・物事を後回しにしてしまう癖を治すため、思い立ったらすぐ行動するようにしている。
- ・大勢の前で発言することは苦ではないので日本に帰ってきてからも授業でよく発言するように心がけている。
- ・スピーキング力を高めるために神戸大学内の留学生と関われる場に行くか考え中である。
- ・私は英語のスピーキングが苦手だが、先生や友人に聞いたり、自分で方法探ったりしている。
- ・新しい挑戦が苦手だったが、留学や他学部履修、説明会の参加などに取り組むようにしている。
- ・言語学修の向上に取り組んでいる。
- ・ロシア語で話す能力が苦手の一つだと認識しているので、学んだロシア語を積極的に使って、カフェなどでロシア語で注文を取る実践をした。
- ・自分の得意な分野と苦手な分野の共通する部分を探し、共通点から得意分野から応用できることを使って苦手分野を克服しようと努めている。
- ・勉強に関しても趣味に関しても人間関係に関しても、考えることはできるしこうすべきだとは思っているのだが、なかなか実践には移せないのが現状である。
- ・他人の意見に左右されがちであるため。
- ・新しい発想を思いつくということが苦手なので、できるだけいろいろな分野の本を読んで知識を増やそうとしている。
- ・我武者羅に取り組むだけでなく、他人にも良い方法を聞いてみる。
- ・英語を聞き取る能力は高いと思うので、youtube を利用して趣味の音楽と絡めながら英語の話し方になれていっている。話すことが苦手ではある。オンライン英会話などを使って話すことに慣れていきたい。
- ・たくさんいろんな人と会話する中で少しだけ見えてきた。
- ・How can I enjoy the communication in English?
- ・喋り出す前に考え込んでしまう癖があり、とりあえず先に結論を口に出すようにしている。
- ・友人の方法を取り入れながら、自分に合った方法を探している。
- ・他人に方法を聞いたり、他者から学んだことを心にとめたりしている。
- ・リスニングや、発音はだいぶできるようになったが、文法などをもう少し大切にしていきたい。
- ・文法的に英語が話せるようになりたいと思っていて、できる人の話を聞いて解決策を探している。
- ・自分の興味のある分野には積極的に取り組むことができるが、苦手な分野は避けてしまう。なんとか克服したい。
- ・自分の至らない点について思い知ったことは多かったが、その中でもここ数年自らの課題だと考えていたこととの重複が多かった。それらをどう克服したら良いのかのアドバイスを多くの人からいただいたのでそのアドバイスに基づいて今後も継続して試行錯誤を重ねることが必要であると感じた。

- ・自分から発信することが得意でないため、自分からは簡単なことしか話を振ることができなかった。一言目を話す勇気があまり出なかったが、少しは改善できたように思う。
- ・今の自分に何が必要なのかを考えようとしている。
- ・英語力、人前で話すことが得意、という点から、チューターを行うのに効果的に動くことができた。しかし、言葉が通じない子どもや大人とのコミュニケーションに対し、尻込みしてしまうことが多かった。日本で留学生のチューターをはじめ、文化の違う人との交流を続けてはいるが、全く言葉を使えない人とどう関わるかについてはまだ答えが出せていない。
- ・現地での活動中、自分の長所はコミュニケーションをとろうとする姿勢が人一倍あることで、短所は英語力不足で思ったことをすぐに口にできないことだと感じた。帰国後、より上手く人とコミュニケーションをとれるようになる方法や、英語で上手く自分の思いを伝えることができるようになる方法を模索している。
- ・日本語学校に行った際に、英語を使ってもうまくコミュニケーションをとることができなかった。日本に帰ってからは、まずアルメニアについて調べ直して、英語の勉強も自分で行うようになった。しかし、これらは一時的なもので、継続には至っていない。
- ・私はお金や労力などのコストを把握する力が弱い。コスト感覚を身に付けるため、家計簿を習慣化しようと考えている。
- ・得意分野は、たぶん音楽。だから、ギターの練習を始めた。まだ続いてはいない。苦手分野は、大学の勉強だが、これは単位さえ落とさなければいいと思っている。
- ・自分は方向音痴なので、駅や地図にとっても弱かったのですが、みんなが色々工夫して駅名や、バンコク市内の地図を覚えていたので、私も同じように工夫して駅名地名を覚えるようにしていました。
- ・タイでの訪問先や現地で知り合った人に対して積極的に連絡を交換してもらうようお願いすることで自分のコミュニケーション力をより伸ばすことができた。また、5人での集団行動を通して、他の人たちにも影響が出ることを認識し、自分がやりたいことをやらしてもらっているという感謝の心を持って物事を発言できるようになった。
- ・書道や教育など、自分が興味を持っている分野と今後の学びをどのように関連付ければよいかをしっかりと考えていきたい。また、臨機応変に対応していく力をつけるために、様々なことに挑戦したい。
- ・事務作業で、苦手なエクセルやパソコンの操作をほぼ毎日行ったので、調べ方や基礎的な操作方法を知ることができた。
- ・今回のプログラムで英語の苦手を再確認したので、今少し英語の勉強を始めている。
- ・英語に少しだけ自信があったので率先して他の人の原稿をチェックしたり、工夫したらもっと良くなる点について話し合ったりした。
- ・多くの人と協力して何かを成し遂げるという経験を経て、この先何ができるか考えていきたい。
- ・IELTS に向けて勉強をしているところだが、得意の Reading Listening は毎日少なくとも一回は触れるように心がけている。苦手の Speaking は向上させる方法を現在模索中である。
- ・自分の得意なことは、人との関係性を上手く築くことができる事だと思っています。これを伸ばしながら、自己中心的といったマイナス面をなくしていけるよう普段から意識しています。
- ・勿論、苦手分野は把握した上で、克服しなければいけない苦手もあるが、そう思わないものもある。できないことは人に任せるというのも大切なことなので、そこを意識している。

表 3 自己評価結果（課題挑戦力）

【課題挑戦力】

3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

		事前学修 回答数 (人)	事前学修	事後学修 回答数 (人)	事後学修
【水準3】	見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。	22	17.7%	47	37.6%
【水準2】	見つけた課題を解決する方法を模索している。	43	34.7%	50	40.0%
【水準1】	解決すべき課題を見つけることができる。	54	43.5%	27	21.6%
【水準0】	水準1に達していない。	5	4.0%	1	0.8%

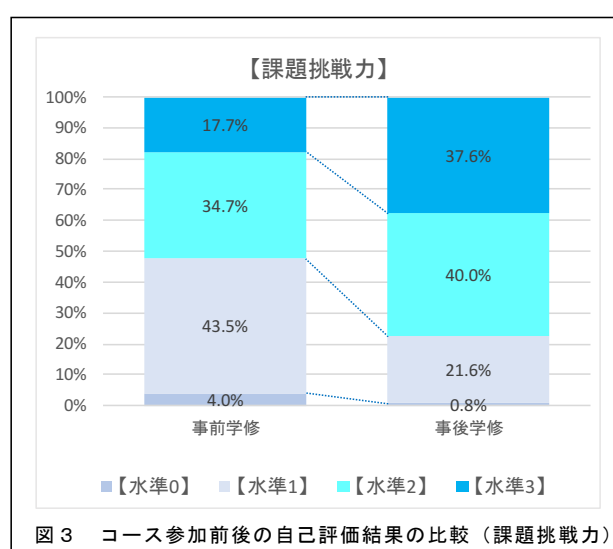


図 3 コース参加前後の自己評価結果の比較（課題挑戦力）

—水準選択における具体的な説明（水準2・水準3）—

【課題挑戦力】 3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

●事前学修時

【水準3】

- ・英語を話せるように単語帳を購入した。
- ・専門の勉強に関するテーマが見つかった今、それを進めるために何をする必要があるのか計画を立て実行している。
- ・自分自身の課題についてはすぐ解決に向けて取り組むことは日常的にできている。
- ・不便な移動を楽にするために公共物を作る。
- ・これまでの様々な課外活動において、失敗のたびにその修正と課題発見、解決を繰り返してきた。これにより成長できている。
- ・他人とのコミュニケーションが苦手だが、積極的に取り組んだ。
- ・授業や生活において、課題に積極的に取り組んでいる。
- ・自分はもともと、背中の筋肉が弱かったので、背筋や懸垂をして、自分を追い込んでいます。
- ・チームで活動すること自体が少ないので、このプログラムを含むいくつかの活動に参加している。
- ・自分のしたいことややりたいこと将来の夢についてどう現実化していくかについて考えているところです。

- ・バックパッカー、国際ボランティア、バイト、部活など親に反対されてもそれをするメリットや自分の考え、安全性を調べ、親を説得した。
- ・授業で理解できなかったこと、教科書を読んでも理解できなかったことは、理解できるまで徹底して調べるようにしている。
- ・アルバイトで、自分がホールとして接客や料理を運ぶ際、始めたばかりは効率よく仕事を行えていなかったため、進行状況を把握し皿洗いを後回しにするなど優先順位をつけることで、効率的に仕事を行えるようになった。
- ・日々の語学学修。
- ・小中高時代の野球部での活動から、自分の課題を消していくのが何となく好きで（自分の課題をノートなどに書いてそれを得意なものにして消していくという作業が好きだった）、課題は伸びしろと高校の担任に言われたこともあって、課題に挑戦していこうとするのは好きであり、得意でもある。
- ・サッカーの試合のレフェリングをした後に、見逃したプレーや判定に何らかの誤りがあった場合の自分自身のポジショニングや、体力面などを考えて、次回に防ぎ改善できる方策を生み出す。
- ・陸上で7種競技をしていました。中学生の時から陸上ノートを付けていたので、問題を客観視して解決することは得意な方だと思います。そのノートを使って精神を安定させていました。自分の動きを動画で撮ったりもしていました。問題に向き合って解決することは好きな方だと思います。
- ・私は受験期に自分の苦手な科目は友達に教えてもらったり、先生に質問に行ったりと分からないところを分からないままにしないよう解決するための方法を探し、取り組みました。
- ・アルバイトでもプログラムでも自分ができなさそうと思ったらチャレンジすることになっている。
- ・小さなことと言うと、他人の悩みなど一生懸命一緒に考え、解決に取り組む。大きなことと言うと、世界の貧困問題に目を向けて微力ながら今できることをいろいろと取り組んでいる。

【水準2】

- ・多文化の共生と独自性の保持について調べたいが、観光スポットだけでは足りないと思われる。現地で地元の方と交流をし、現地での体験を通して解決しようとしている。
- ・GCP コースにおいて自分の英語能力がネイティブと話すのにまだ乏しい段階であるという課題に対して、どうすれば向上するかという解決策を模索していること。
- ・仕事の優先順位づけや取り掛かるスピードなどの改善を行なっている。
- ・自分の課題を解決するため、積極的に周囲の意見に耳を傾けるように心がけている。
- ・見つけた課題について本やインターネットで調べている。
- ・自分が持っている疑問点を知るためには現地で何ができるか考えている。
- ・自分が興味のある分野における課題に敏感に反応し自分なりに解決の糸口を探ろうとしています。
- ・自分に足りないものを少しでも補うためにこのプログラムに参加しました。
- ・事前学修から見つかった自分の抱える課題を他のメンバー達を参考にして解決に向けて行動した。
- ・チームのメンバーと、どのようなことをすべきか、意見を言い合って考えた。
- ・英語の発音が苦手なので、洋楽を聴いたり、外国の方の発音を注意深く聞いたりしている。
- ・どうやったら成績が上がるかなどを考えるのが好きである。
- ・日本における外国人労働者の疎外感を知った。それを解決する方法を国内だけではなく、移民の受け入れの長いヨーロッパに学ぶ。
- ・常に達成したい目標や課題を持つようにしているが、危機感が迫っているだけで、まだ具体的にアクションを起こせない部分が多々あり、力不足である。
- ・課題の解決へ実践的な活動をするに対しては積極性に欠けると思われるが、課題を見つけその方策を他人に尋ねたり自分で調べたりして模索している。
- ・今まで中学受験、高校受験、大学受験を経験している。中、高の受験は自分が将来やりたいことや目標に一番近い道に進めるよう自身で決断しており、その際には内部進学を蹴っていた。しかし、今でもその結果に満足しており、とりあえずは順調に進んでいると思う。
- ・今自分が所属しているプロジェクトの課題は海外アイセックとの連携不足なので、その解決のための話し合いの時間を多く設けている。
- ・毎日模索を続けている。

- ・高校の体育祭の応援合戦で、振り付けや声かけなどの課題を見つけて、お互いに指摘しながら解決を図った。
- ・例えば私の所属しているかるたサークルでは経験者と初心者が混在しておりシステムの理解度に差があるので全員に理解してもらえるよう説明の仕方等を考えています。
- ・受験勉強の際、世界史が苦手で勉強が遅れていたのも、先生に頼んでプリントをもらい、1週間に1章取り組むことにした。テスト本番で点数を上げることができた。
- ・物事に取り組む時にミスを頻繁にしまうため、できるだけミスを減らすために、何かした後は見直しをするように心がけている。
- ・食生活で足りない栄養があることを課題とし、どう摂取するかを模索している。
- ・社会問題や自分達の周りの問題について友達とよく話すので見つける事自体はできると思う。ただ解決となると人に意見を求める事が多く自分では大分時間をかけないとアイデアが出てこない傾向があるように思う。
- ・サークルで、昨年の企画の改善点を見直し、改善案を作ることは企画を成功させることができた。
- ・カヌー部において、自分の課題を紙に書き出し、失敗を怖がらず解決する方法をたくさん試してみるように心がけている。
- ・学生サポーターとして戦力になるためにタイピングの練習をしている。
- ・将来何の仕事をしようかという問題で、情報を集めて決める、あるいは見つける方法を考えている。
- ・英語の中でも、writing が苦手なので、そのスキルを上げるために先生に添削をお願いする。また、speaking は、常に話しておかないと話せなくなるので、留学生との交流をする。
- ・大学の部活で今1番優先して解決しないといけない課題を毎回取り出して、練習の目標に掲げて、みんなに宣言してからプレーすることでその課題克服を目指している。
- ・モンゴルで、現地の学生に書道の良さを体験してもらうには、どのような方法をとるのが良いかを考えた。
- ・既存の考え方に則し課題を発見・解決することは得意だが、新しい視点から課題を発見することは苦手だ。
- ・気になる文献などから情報を得て、他人の考え方を取り入れ解決方法を探ることはできるが、緊急で優先されることを先に済ませることがあるので本当に必要なこととじっくり向き合えない
- ・ゼミの発表で英語力が足りないことに気づいた。
- ・様々課題はあるけれど解決策を模索しなければならない。
- ・一人の奏者として、部に貢献するために、自分に足りない技術を本番直前まで洗い出して、最後まで諦めずに努力した。
- ・英語力を養うため、英語で読書をするように心がけている。
- ・フードロスの問題に関心があり、自分に何ができるのかを考えて小さなことをいくつか心がけている。具体的には、スーパーで食材を買うときにあえて賞味期限が近いものを購入し、余分に買って無駄にすることのないように必要最小限だけ購入するようにしている。問題が大きいだけに、私一人の行動が直接影響を与えることができている訳ではないが、これからも解決策を模索していきたい。
- ・私は子ども、若者の問題、教育の問題について興味があり、不登校や学校魅力化などについて講義を聞いたり、学習支援施設を訪れたりし、それに対して自分ができていることを模索している。
- ・書道や数学をするとき、失敗すると、次うまくやろうと思うよりは、何でできなかったのかを考えることが多い。それが、課題の解決に繋がると思っている。
- ・ブライダルアルバイトで、荷物を床に置いている人がいればトーションを持ってきて敷くなど、すぐに解決策を見つけられるように鍛え中です、、、。

●事後学修時

【水準3】

- ・多文化の共生と独特性保存について、現状を調べるだけでなく、歴史を知ることが重要であると認識し、Museum of Jewish Heritage や国立アメリカ・インディアン博物館などに行き、移民の歴史も理解しようと努力した。
- ・コミュニケーションを積極的にとった。
- ・英語の日々の学修の中で常に改善点を探し、より効率よく勉強する方法を見つけている。
- ・AIESEC 内のシステムの課題に対して施策を打つ。

- ・課題やスケジュールの確認を怠らないようにし、時間通りにこなせるように意識し行動した。
- ・目のことだけでなく、先のことを充分に考えてから行動するよう心がけている。
- ・解決のために積極的に取り組んだ。
- ・ホームステイでたくさんの問題があったが、解決に向けて様々な取り組みをした。
- ・他人とのコミュニケーションが苦手だが、積極的に行った。
- ・学問、生活、対人関係の課題を改善するために、自分にとって新しいことをするよう努めている。
- ・言語学修の向上に取り組んでいる
- ・ロシア研修において、情報収集の仕方に悩んだ時に打開策を考えて行動できた。
- ・部活動で、自分ができない部分を補うための練習に取り組んでいる。
- ・サークル内で発生した課題に対して解決策を他の幹部と話し合い模索している。
- ・英語の日記を毎日書く、毎日 TOEIC の試験対策をする。
- ・チームで活動することが少ないので、このプログラムを含むいくつかの活動に参加している。
- ・自分の中で課題になる、もしくは将来必要と思われるスキルを考え、それを今のうちから身につけようと努力するようになった。
- ・I realized that I must study more, maintain the listening ability.
- ・苦手な発音は積極的にファシリテーターに見てもらおうようにしていました。
- ・発音の違いを詳しく先生に質問し、矯正することができた。
- ・授業内課題。
- ・英単語の語彙が不足していたので英単語帳で勉強した。
- ・プレゼンでの掴みを上手になりたい。
- ・英語の勉強を続けていきます。
- ・自分の夢がぼんやりと見えてきたが、次また留学に行きたいなと思っているので、よいプログラムを探している。
- ・フィールドワークで立てたリサーチテーマについて、これで終わりにせずそれを今後の学生生活でも探求していきたい。
- ・具体的にどう解決したら良いのかの方策が全く見えていなかった自分の学修や将来がより形を帯びたもののように感じられるような学びが多かった。少しずつではあるが、自分の意識の仕方は GCP を通じて変わったことを確信している。
- ・writing と reading は勉強していたため、文法の誤りなどは少なかったように思うが、speaking の経験が少なく、思うように話せなかった。今は、その課題の解決に向け、より多くの表現方法を勉強したり、ファミリーとの電話を通じて speaking の経験を積んだりしている。
- ・農家さんたちが自分の収支管理ができていなかったのも、帳簿をつけることを提案した。
- ・分からないことがあれば、そのまま放置することなく、解決に向けて、すぐに行動をとるようにしている。
- ・飲食店のアルバイトで、客単価を上げるため、お皿を下げる時に一声かけてデザートなどを提案することを始め、居心地の良い接客をするように取り組んでいる。
- ・語学学校、フィールドワークの過程では、常に反省点や課題を見つけ、改善、全体的な質の向上に努めた。
- ・GCP 終了後進路を真剣に考え、IFEK 参加を検討し始めた。留学と早期卒業のために英語や専門の勉強に現在真面目に取り組んでいる。
- ・課題は将来の夢がないこと。それを見つけるために、まず知っていることを増やそうと思った。既に、GCP に参加した。これは外国や英語という、未知の世界に触れるためである。文学部である自分に縁のない世界であるため、12 月からは情報セキュリティの会社でアルバイトをしようと思っている。
- ・自分は英語のスピーキング能力に課題があり、その点を自覚していたため、今回の G C P に参加し課題の解決を図った。英語学校でも外国人と時間を見つけては話すようにし、現地ではタクシーを多用したがその車内でもタクシードライバーと自分の話や相手の話、マレーシアの話題についていろいろと話すことができた。
- ・英語のリスニングが課題であるので、NETFLIX を鑑賞して勉強している。
- ・課題に関する調べものをしたり、人から話を聞いたりして解決できるように取り組んでいる。
- ・英語が苦手なのでまずは TOEIC を受けてみようと思って勉強を始めている。
- ・TOEIC をはじめとしてビジネス英語が苦手、経験不足なので勉強に取り組む。

- ・今回のプログラムでは、日本・ドイツから色々な大学の人が集まりました。また、現地では多くのベトナム人に会いました。その中で自分の役割を見つけ、行動に移してきた経験は、アルバイトや大学生活の中で活かされています。
- ・社会の中で生きていく力を身につけるために、普段の生活すべてで少しでも成長しようと努力しています。
- ・ネパールに行く前もネパールにいた時も、その後も、常に課題を見つけ、自分にできることを探し、多くのことに挑戦している。
- ・最初にやったダンスでは問題点が多かったけど、徐々に改善し、最後には、歌詞の説明を絵で描いたり、身ぶりで表したり工夫してやることができた。
- ・コミュニケーションは言語だけでなく、ボディランゲージでも十分できることが分かり、その手段でのコミュニケーションをできるだけやろうと試みた。また万国共通であるスマイルはコミュニケーションを行う上でとても大切であるとわかり、一層心掛けた。

【水準2】

- ・新聞の国際面は欠かさずに読んでいる。
- ・一人暮らしをしたことがなかったが、今回のプログラムで、いかに自分が自立していないかを知った。これから社会人になるに向けてどうすれば自分が自立していけるかを模索している。
- ・自分の英語力に関して、リスニング能力やスピーキングへの姿勢はよいと思うが文法が弱いのでどのように勉強するか模索中。
- ・自分は英語が書くことはできても話すとなると言葉が予想以上に全然出てこないことに気がついたので、スピーキング力を高めたいと思った。
- ・日本の英語教育とは違い、海外ではもっとアクティブラーニングを取り入れていたので自分が教師になったときにどのようにして子どもたちに英語を教えていくべきか模索している
- ・マングローブの植林活動において、森林局と地元の村の人との意見が対立しており、その絡まった糸を解くことで観光化の道筋が見えてくるのではないかと考えて模索しています。
- ・英語が苦手なのでインターネットや得意な人に聞いて勉強法を模索している。
- ・コミュニケーション能力の向上の為の取り組みを工夫した。
- ・自分の英語力の拙さを改めて思い知ったので、英語でのコミュニケーション能力を上げるために何か行動したいと考えるようになった。
- ・自分の意見を持つことが苦手なので、その克服の方法を考えている。
- ・特に印象に残っているのが、オーストラリアのクリケットスタジアムの水の再利用を行なっている施設で、そこでは自分の専門分野の技術が生かされていたので、自分の学びから地球環境に優しい技術を発展させることができるように思った。
- ・なかなか取り組むまでに至らないが、計画を立てようとしている。
- ・友人も意見も参考にしながら、自分に合った課題解決の方法を探している。
- ・1日の中で自分ができなかったことを振り返り、次の日にそれが改善できるように心がけた。
- ・英語の Speaking については、UPLB で先生に教えていただいた ESL との交流や神戸大学での英語を生かす機会を積極的に利用したい。
- ・計画性と実行可能性を持った方法を模索している。
- ・自分から何かを発信していくことが苦手ですそれを克服する方法を探している。
- ・今回の学びで、課題解決ができるということが分かった。日本にあった方法を模索していきたい。
- ・すべきことを箇条書きにした。
- ・学生の自分にできるとことが少ない中で、もっと子どもたちに貢献できる方法がないか模索している。
- ・バレエやヨガ教室のレッスンを通して自分が思っていたよりも、韓国語の外来語が苦手なことに気づいた。また、会話カフェで話しているうちに、日本語ではよく使うのに韓国語では知らない表現が想像以上に多いことに気づいた。韓国ドラマを見るのも解決策の一つだとは思いますが、本当に有効な手段なのかはわからない。
- ・英語力の圧倒的な不足を実感した。リスニングやスピーキングの力を向上させられるような方法を模索している。
- ・フィリピンでの貧困問題を知るにつれて、自分にもできることがあると考えるようになった。まずはこのツアーで知ったことを他の人たちにも伝えることから始めようと思う。

- ・現地での活動中、英語力がまだまだ不足していることが自分の課題だと感じた。日本に帰国後、より流暢に英語を話せようになるために効果的な勉強方法を模索している。
- ・物事に全力で取り組むことを課題として全力を出せる場所を探している。
- ・アルメニアでの実習を通して、自分に何が足りていないのか、どこが事前学修で不足していたのかが明らかになった。事後学修では見つけた課題を解決するためにアルメニアの本を読んだが、一時的なもので、現在は継続してできる方法を探している。
- ・継続が苦手なので、開始時間をはっきり決めて毎日取り組むことを心がけている。
- ・サークル活動において、自分で見つけた問題意識を企画として解決されるため、企画を打つことができた。
- ・パスポートを失くしたり、メンバーに中途帰国者を出したりするなど、リーダーとしての自分自身の課題が浮き彫りになったが、改めて自分自身の性格や日頃の行動を見つめ直す機会にすることができた。
- ・学科内で授業の遅刻者が多いことが問題になっているので、ほかの人たちがどうすれば時間通り来られるような意識付けをできるのか模索している。
- ・日本文化を知るなど、自信を持って説明できる、自分のフィールドを深めることの大切さを学んだ。
- ・アルメニアに行って日本語教育が行われている場で学生との交流をすることにとっても興味を持った。今後この興味をどのようにほかのプログラムに生かすことができるか模索している。
- ・タイのスラムや孤児院でたくさん課題が見つかったのですが、これは解決するのは大変厳しいことだと思うので、違う国がどのような取り組みを行ってこのような問題を解決に導いたのかを調べていきたいと思いました。
- ・念願であったスラム街と孤児院への訪問を通した見つけた自分の興味のタイ社会が抱える課題に対して、アプローチすることはできた。ここからどうそれを継続して行えるかが難しいが、タイで知り合った人の力も借りて関わり続けていきたいと思う。
- ・タイには、環境問題だけでなく政治的、経済的な問題が山積みである。知らなかったことも多いが、現地で行われている取り組みについて自分なりに調べた。
- ・今回のプログラムで、自分の英語力のなさを改めて感じた。語学能力を磨くために、大学での授業以外での活動を増やしたいと考えている。資格試験の勉強に取り組んだり、海外の人と関わるきっかけを見つけたりしていきたい。
- ・現状分析はできるがその後どうするか一人よがりの方法にはしってしまう。人にうまく頼れない。
- ・つい、日本人と行動して語学の向上を忘れていたりすることがあったので、気が付いた時にバディの子やドイツ人の子と一緒に話したり、一緒にご飯に行くようにしていた。
- ・特に発展途上国における教育や発展などの問題について自分に何ができるか考えていきたい。
- ・留学志望先と自分の予定のマッチングが上手くいっていない。語学要件をクリアするか他の大学を見つけるかの二択なので、今後の行動を検討中である。
- ・途上国支援について今回は様々な現状を知ることができたため、現在所属している団体やその他の活動でその課題に取り組んでいきたい。
- ・課題は個人の範囲の内外にたくさん見つけたが、解決策は考えても揺らいでしまうことが多い。
- ・子どもたちが理解しづらそう楽しんでいないようなら、その原因をみんなで模索することができていたと思う。

3-1-2. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化（平成 30 年度参加学生）

平成 30 年度参加学生に対しては、ルーブリック指標による自己評価を、教務システムの機能を利用して実施した。ルーブリックによる自己評価結果は、表 1～3 のとおりである。

また、それぞれに関するプログラム参加年度（事前学修時・事後学修時）と参加 1 年後の自己評価結果を比較した図が図 1～3 である。

3 つのチカラ（「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」）の自己評価の経年変化について、いずれの能力においても参加 1 年後に向上しており、「水準 3」の割合や「水準 2 以上」の割合が事前学修時及び事後学修時より増加していることが確認できる。

①チームワーク力

参加 1 年後において「水準 3」と回答した学生は、平均 37.6%（1-1：36.7%、1-2：38.5%）であった。（R1 目標値：30%）また、参加 1 年後において「水準 2 以上」と回答した学生は、平均 84.4%（1-1：83.5%、1-2：85.3%）であった。（R1 目標値：75%）「ボランティア活動で同じグループとなった 4 人のメンバーと協力して、活動を成功させることができた。」「授業のグループ活動で、相手のことを考え、尊重しながら行動している。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の翌年度もチームワーク力を高めていることが窺える。

②自己修正力

参加 1 年後において「水準 3」と回答した学生は、平均 43.1%（2-1：55.0%、2-2：31.2%）であった。（R1 目標値：30%）また、参加 1 年後において「水準 2 以上」と回答した学生は、平均 84.4%（2-1：91.7%、2-2：77.1%）であった。（R1 目標値：75%）「就職活動などでは他者のアピール方法を参考にしたり、アルバイト先では先輩の様々な問題への対処方法を参考にしたりと自分の考えややり方を顧みている。」「積極性がないという点を改善するため、部長など意見を発信しなければならないポジションに挑戦している。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の翌年度も自己修正力を高めていることが窺える。

③課題挑戦力

参加 1 年後において「水準 3」と回答した学生は、44.0%であった。（R1 目標値：30%）また、参加 1 年後において「水準 2 以上」と回答した学生は、88.1%であった。（R1 目標値：75%）「将来が見えていないことを自覚し、今は資格取得を目指している。」「強くて速い意思決定が苦手という自らの課題に向けて、論理的思考力を鍛えることと、根拠を積んだ後はその決断を正解にするという意気込みで意思決定を行うことを意識している。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の翌年度も課題挑戦力を高めていることが窺える。

表 1 自己評価結果（チームワーク力）

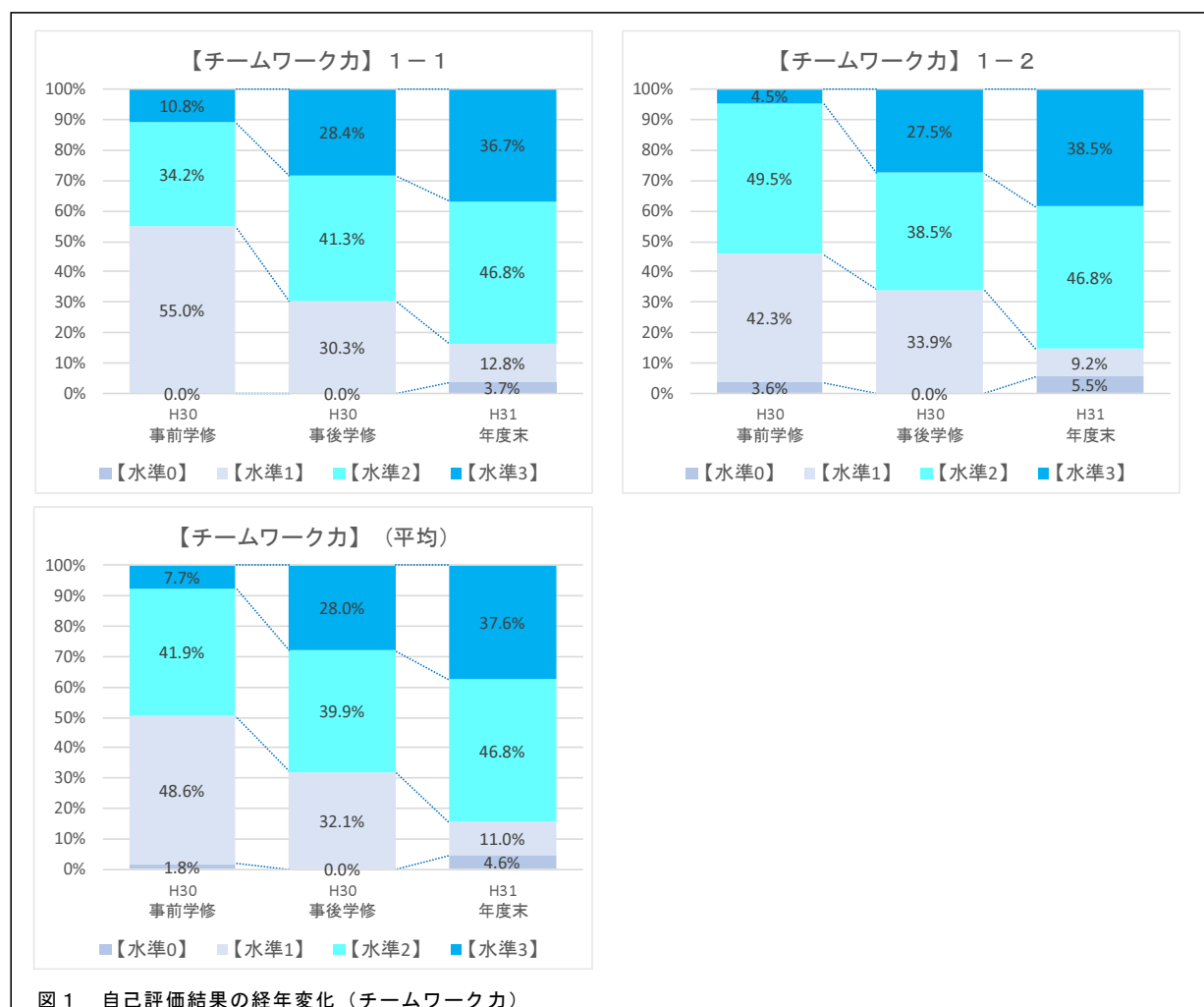
【チームワーク力】

1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

		回答数 (人)	H30 事前学修	H30 事後学修	H31 年度末
【水準3】	チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。	40	10.8%	28.4%	36.7%
【水準2】	活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。	51	34.2%	41.3%	46.8%
【水準1】	活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。	14	55.0%	30.3%	12.8%
【水準0】	水準1に達していない。	4	0.0%	0.0%	3.7%

1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

		回答数 (人)	H30 事前学修	H30 事後学修	H31 年度末
【水準3】	メンバーと協力し、チームの目標を達成している。	42	4.5%	27.5%	38.5%
【水準2】	メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。	51	49.5%	38.5%	46.8%
【水準1】	メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。	10	42.3%	33.9%	9.2%
【水準0】	水準1に達していない。	6	3.6%	0.0%	5.5%



【チームワーク力】1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

【水準3】

- ・アルバイトや、授業のグループ活動において、自ら積極的に行動を心がけている。
- ・サークルの活動ではある程度の責任のある役割についているが、そこでしっかりと自分の責務を果たすことができた。
- ・組織の中で数人でチームを組み、イベントを実施。その結果、イベントを無事開催し、盛り上げることができた。
- ・サークルで地域の小学生と交流するプロジェクトのリーダーをしています。これまではリーダーだからといって1人で物事を進めた方が早いと思っていましたが、他のメンバーを信じて役割を分担するとよりよいプロジェクトを行うことができたから。
- ・それぞれが能動的に行動していた。
- ・合同ゼミでの発表に向けたグループワークで、発表内容や、レジュメ、スライド作成に貢献したから。
- ・ボランティア活動で同じグループとなった4人のメンバーと協力して活動を成功させたから。
- ・座学中心であったため、チームで活動する機会は少なかったものの、チームでの活動の際には目的に向かって行動する上で自分の役割を十分に果たすことができていると考えている。具体的には、活動の際タイムキーパーを担当した時には、周りの議論に流されずに時間を伝え、周りを行動させることができたといった具合だ。このことは担当の先生からも評価されたので、自分の自信につながっている。
- ・チームのまとまりを大切にした。
- ・サークルで新入生歓迎イベントリーダーとしてリーダーになった。
- ・サークル活動で部長としてチームを引っ張れた。
- ・自分で判断する能力が養われたから。
- ・学科公式の新入生オリエンテーションで、学生スタッフ委員長としてチームを牽引し、結果として大成功を収めた。
- ・海外で協力することができたから。
- ・チームの中での自分の役割を理解し、行動しています。
- ・英語を通じて、コミュニケーションが取れるようになった。
- ・就職活動でのグループディスカッションにおいて、自身の役割をメンバーの性格などを考慮しながら見極め、自身の役割を全うし、発表において貢献している。
- ・ゼミ活動や授業でのグループ発表において、自分の役割をしっかりと果たし、良い発表ができたと思うから。
- ・部活動で中心学年として活動した。
- ・部活において最高学年になり理想のチームに向けて意見を発信しているから。
- ・インターンシップやアルバイトでチームで活動し、結果を残したから。
- ・レジュメを作成し、議論を進められたから。
- ・研究グループにおいて、自身の研究テーマについて実験等を十分に遂行していると考えられるため。
- ・部活動でリーダーシップを発揮した。
- ・絶対1人では達成できないプログラム内容だったので、初めて会う仲間とも協力し、自分も成長できたから。
- ・サークルでの委員の活動を積極的に行っているから。
- ・サークル活動において、一人ひとりに目を向け、それぞれに対する対処法を考えている。
- ・ゼミの発表や、インターンシップのグループワークにおいて成果が得られた。
- ・スウェーデンでの船グループプロジェクトをみんなで成功させた。
- ・マスターズ甲子園のボランティアに今年も携わせていただいたのですが、プレーをする選手方や一般ボランティア方全員が素晴らしい思い出を作れるようにサポートするという貴重な経験をさせていただきました。今年は失敗を恐れずに積極的に参加できたと思います。

- ・自分は率先してグループを引っ張るタイプではないので、全体を俯瞰し、議論の補助をする役割に徹しています。
- ・主体的にチーム活動に貢献するようになったから。
- ・目標を設定し、それを達成するために必要な行動を明確にし、丁寧に行っている。
- ・チーム始動時に明確な目標を設定したから。また、自分の役割をチームで互いに振り返る機会があったから。
- ・フットサルチームで、勝つという目標ではなく、一人ひとりの目標をつくることを推薦した。副キャプテンであったので、チーム全体をまとめてくれるキャプテンを支えるために、わたしは一人ひとりに注目してチームワークを築いた。

【水準2】

- ・部活動でしっかりと意見を幹部に言う。
- ・GCP 参加時は1年生だったため、役割をわきまえた行動をしたつもりだったため。
- ・アルメニアでは、リーダーというよりはサポート役としてみんなの意見のポイントを抑えたり、積極的に提案したりしました。
- ・部活において指示されたことを行う以外に二回生として考えて行動をし、一回生に対して指示やアドバイスをするようにした。
- ・チームのバランスを取るようにしている。
- ・各々の役割を決めてそれを果たし、ホームページとポスターの作成をした。しかし、それが満足いくクオリティかは微妙で、勉強不足を感じるものだったので水準2とした。
- ・授業の共同研究で集約係としてみんなの意見を取りまとめレポートを作成した。
- ・アーチェリーの部活動で技術という役職を担っており、後輩の射型指導を率先して行なっている。
- ・ゼミなどで積極的に発言しているため。
- ・GCP プログラムではチーム活動がなかったため。
- ・サークル活動で自身の役割を見つけ、それを実践した。
- ・サークルで自分たちの学年が中心の代となり、協力して頑張っている。
- ・サークルの会計として、責任有る行動と発言をしているから。
- ・自らの発言を発せん限り、人は生きていく価値がないと考えるから。
- ・自分に任された仕事は全て期限内にやり終えているから。
- ・サークルのみんなで、忙しいながらも学祭の準備ができた。
- ・部長として責任を持って新歓をしている。
- ・目標に対して計画を立てて取り組んでいる
- ・部活等で自分の立ち位置を意識して仕事できているから。
- ・授業等で積極的に発言している。
- ・部活で種目のリーダーとして、日々練習内容を考えて取り組んでいる。
- ・実験を行う際のグループでは、自分の役割はきっちり行い、率先して行動しているから。
- ・部活動では最高学年としての責任を果たしているから。
- ・現地の人と交流しながら活動できたから。
- ・クラブ活動で、ミーティングをするときに自分の3年間の経験を生かしてアドバイスした。また、積極的に議事録をとったり、アジェンダを作成したりしたこと。
- ・部活において、自分の得意な事を考慮した上で役職を引き受けた経験から。
- ・異文化理解を通して価値観の違いを意識することが増えた。
- ・ムードメーカーを担っていた。
- ・インターンシップなどで積極的に発言し議論に貢献できていると感じたから。
- ・ゼミ活動では、チームとして成果を上げることを目標に努力しました。
- ・実験で役割を理解し努力はしているが成果には繋がっていないから。
- ・他大学との合同ゼミに向けた準備の際に、チームリーダーという役割に基づいて、メンバーの意見の調整や、まとめ役を行なっている。

- ・自分から主体的に行動することに対して、それが全体にとってだけでなく自分自身の成長や気づきにつながることを海外の生活で学びました。帰ってきて大きく行動や何かが変わったということはありませんが、意識や身の回りのことに関する関わり方が変わったと感じています。
- ・活動の中で自分ができることを努力した。
- ・任された役割があるなら責任を持って最後までやり遂げたいと思うから。
- ・部活動では自分の役職を全うした上で他にも何かできることはないか模索しながら活動を行っている。
- ・チームの中で自分のできることを考えて行動できた。
- ・サークル活動で、救護係として発言しているから。
- ・交換留学先での授業のグループワークにおいて、意見を発信すると共に自分の与えられた役割を果たしている。
- ・クラブ活動で少しずつ周りのために動けるようになった。
- ・自分にできることを考えて行動している。
- ・部活動においてチームワーク力を発揮できたから。
- ・チーム活動においては最低限自分の役割を把握し、参加を試みようとしているから。
- ・留学中、調べたいテーマを決めて、同じようなテーマを持つ人と一緒に博物館等を訪れ、帰国後に議論することができた。

【チームワーク力】1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

【水準3】

- ・授業のグループ活動で、相手のことを考え、尊重しながら行動している。
- ・自分たちで主体的に取り組めた。
- ・サークル活動の講演のために、それぞれが忙しい中準備や練習を行い、良い舞台を完成させることができた。
- ・サークルでの活動では、意見が分かれることもあったが、それぞれを尊重して活動を行い、目標を達成した。
- ・成人式や同窓会などで幹事・実行委員を務め、他の委員や幹事と協力して成功に導いた。
- ・小学生が名前を覚えてくれていて、次はいつイベントするの？と次のイベントを楽しみにしてくれてたので成功したと思います。
- ・それぞれが考えて行動し不安なことは確認し合い、補い合った。
- ・部員に仕事を割り当てるとき、それぞれの得意分野を加味している。
- ・部活で皆で協力して練習し、上達することができているから。
- ・集中講義等で即席のグループを作った時も、役割分担や進行などがしっかりできた。
- ・ボランティア活動で同じグループとなった4人のメンバーと協力して活動を成功させたから。
- ・チームでの活動は個人の役割順守のみならず、団体で目標を達成することを踏まえて各々を指示して動かすことが得意である。特に具体的な成功ビジョンが持ちにくい最初は、自発的な行動をチームに期待するのは難しいので、私が事務や広報をこなしたうえで、小さな仕事をチームメイトに指示することで、目標への遂行を進められた。実際に一度目標をチームで達成すると、チームのモチベーションにつながって運営が楽になって楽しかった。
- ・自分の意見と相手の意見を聞き、合理的な判断を行うよう努めているから。
- ・留学で周りとは協力して学習した。
- ・サークルで新入生の獲得等、目標を立て、達成に向けて役割分担や、適宜話し合っ修正することができた。
- ・アルバイト仲間同士で今月の目標を決めそれに対して業務を改善したり、また身の回りの整理整頓を行ったりした。
- ・チームとして発表および報告書作成を成し遂げたから。
- ・サークルにおいて目標の細分化による関係の強化に繋がった。
- ・チームのメンバーと協調し、目的に向かって努力しています。
- ・相手方に、神戸大学の魅力を伝えることができた。

- ・サークル活動などでは、メンバー間で役割を分担し、自身も役割を認識し、全うすることで、全体として留学生に対するイベントを企画運営し、アプローチをかけている。
- ・部活動で中心学年として活動した。
- ・部活動において、学祭や新歓祭などの企画運営を行った。
- ・楽しませるという点において、仲間と意見を出し合い、達成した。
- ・グループプロジェクトをみんなで成功させた。
- ・グループで行動することが多く、それぞれが役割をこなしていたから。
- ・インターンシップ先などで良い評価をいただいたから。
- ・主体的にチーム活動に貢献するようになったから。
- ・目標を明らかにして、それを達成できるようにメンバーで協力できた。
- ・チームの目標に対して、チームのメンバーが役割を持ち、相互に協力かつFBを行い、チーム全体としてのパフォーマンスを高めている。
- ・メンバー全体で一つの目標を持っていたから。
- ・部活動においてメンバーと目標を達成することができたから。
- ・活動の中でしっかりメンバーと対話して目標に向けて協働できたと感じるから。
- ・帰国後に資料をまとめて、結論を出して発表することができた。

【水準2】

- ・部活動で様々な意見を持つ人がいることを理解して最善の方法を模索している。
- ・課外活動に出る際にほかの参加者の意見も聞いて行動していたため。
- ・共同で生活する中で、揉めないように洗濯機のペース配分などを考え、心地よく暮らせるように協力をはかりました。
- ・部活においてポジションの違いによるコミュニケーションの隔たりが起きないようにいったん相手の立場を考慮して話すようにした。
- ・正直なところ、プログラムが学生に求めるものの理解が浅く、みづからの目標も曖昧だった。同定作業や活動内容の相談などで交流を深めたので水準2とした。
- ・4月のリーグ戦に向けて、ミーティングで発言したり、緊張感を持って練習したりしている。
- ・メンバーと対話を繰り返しながら活動しているため。
- ・チームの中で話し合いの時間を設け、お互いを感じていることや考えていることを共有し理解を進めていこうと努めている。
- ・チームワーク力があまりない自覚があるので、なるべく自分が思ったことは素直に発言しつつも、チームの雰囲気が悪くならないように意識しました。
- ・自身の役割を進める中で自分の行動がチーム全体にどのような影響を与えているかを考え、他のメンバーと協調した。
- ・メンバーで意見を出し合い、良い方法を考えているから。
- ・サークル内で仲間割れしてないから。
- ・一緒に参加した人たちや向こうのスタッフの立場を理解することができた。
- ・目標に対して計画を立てて取り組んでいる。
- ・人の意見や立場を尊重していることは意識している。また、それに基づいて発言や行動をすることも意識しているから。
- ・海外ボランティアで、それぞれ母国語が違うなかでも、英語で積極的にコミュニケーションを図った。
- ・部活動では最高学年としての責任を果たしているから。
- ・具体的な目標の達成はできなかったと思うから。
- ・定期的なミーティングにおいて、意見をまとめているから。
- ・GCP プログラム前後、事前学修事後学修にてそれぞれ分担して取り組めたことから。
- ・目標の理解をした上で、活動に参加できていると思う。
- ・同じ方向を向くように心がけた。
- ・GCP における活動においてメンバーの意見や立場を尊重し、プレゼンなどの活動に取り組むことができたから。
- ・自分の意見を押し付けすぎることなくチームをまとめたため。

- ・グループ発表において、メンバーの意見を尊重しながら考えをまとめ、発表に取り組んだから。
- ・成し遂げたい目標を設定して結果がどうであれ、チームで共に取り組んでいた。
- ・ミーティングを重ね意見を言い合い、よりよいものを目指しているがまだ達成はできていない。
- ・周囲に意識を配りながらグループで活動できたから。
- ・部活でペアと協力しながら練習しているから。
- ・塾のアルバイトで冬期講習に向けて各生徒によって状況を判断し、他の先生と協力してカリキュラムを立てられたから。
- ・研究グループにおけるミーティング等において自ら議題を設定したり、他者の報告に対し質問をしたりするなど議論の発展に貢献していると考えられるから。
- ・学部・学年がそれぞれ違う中で、お互いの意見を聞くことを意識し、思ったことも言えたから。
- ・チームや組織を自ら作っていく積極性は常にある。
- ・他大学との合同ゼミに向けた準備の際に、チームリーダーという役割に基づいて、メンバーの意見の調整や、まとめ役を行なっている。
- ・GCPにおいて、特にチームワークを求められたと感じたことはなかった。
- ・ゼミの発表や、インターンシップのグループワークにおいて成果が得られた。
- ・以前から全体の目的のために何かをするということに関して、役割分断や自分の役割を考えることが多かったが、自分が主導するだけでない方法で参加する人がそれぞれに達成感や満足感を得られるような取り組み方を目指すようになりました。
- ・1人ではできないことも仲間と力を合わせることでできることの幅も広がると思うのでその仲間との意見交換などは大事にしたいと思うから。
- ・部活では安全対策を重点的に後輩に向けてフォローアップしている。
- ・対立しても対話を促す。
- ・サークル活動で、積極的にコミュニケーションをとるように心がけているから。
- ・交換留学先の授業のグループワークで、様々な意見が出る中でもお互いの意見を考慮した上でプロジェクトを進めている。
- ・目標を立てていなかったから。
- ・チーム全体に関わることは、グーグルフォームなどを使って匿名にしたりして、全員の意思を取り入れるようとした。

表 2 自己評価結果（自己修正力）

【自己修正力】

2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

		回答数 (人)	H30 事前学修	H30 事後学修	H31 年度末
【水準3】	自分以外の人の考えや行動を参考にして、 自分の考えや行動を見直している。	60	18.9%	34.9%	55.0%
【水準2】	自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の 見直すべきことについて理解している。	40	27.9%	35.8%	36.7%
【水準1】	自分の考えや行動について認識している。	6	52.3%	28.4%	5.5%
【水準0】	水準1に達していない。	3	0.9%	0.9%	2.8%

2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

		回答数 (人)	H30 事前学修	H30 事後学修	H31 年度末
【水準3】	自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を 克服するための実践を行っている。	34	9.9%	23.9%	31.2%
【水準2】	自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を 克服する方法を模索している。	50	24.3%	39.4%	45.9%
【水準1】	自分の得意分野や苦手分野について理解して いる。	20	56.8%	34.9%	18.3%
【水準0】	水準1に達していない。	5	9.0%	1.8%	4.6%

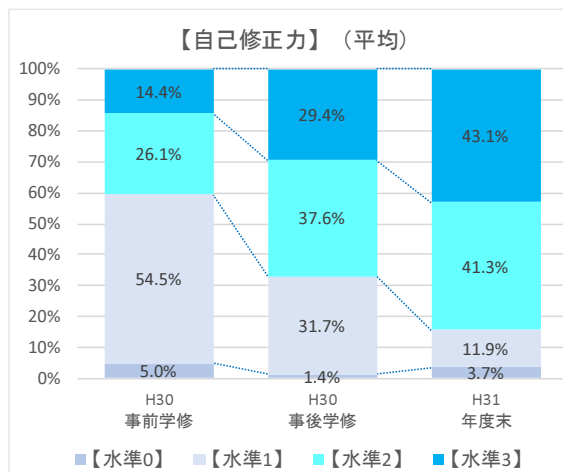
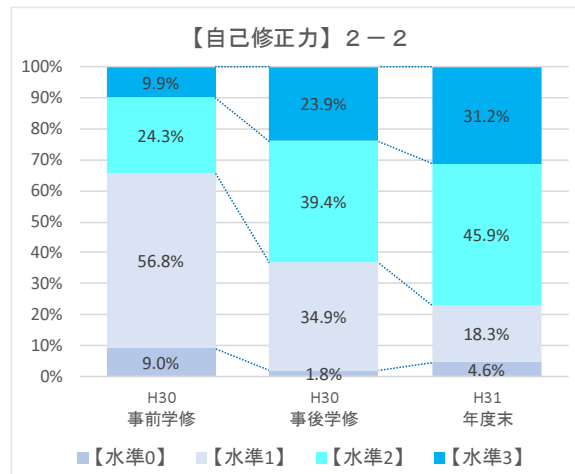
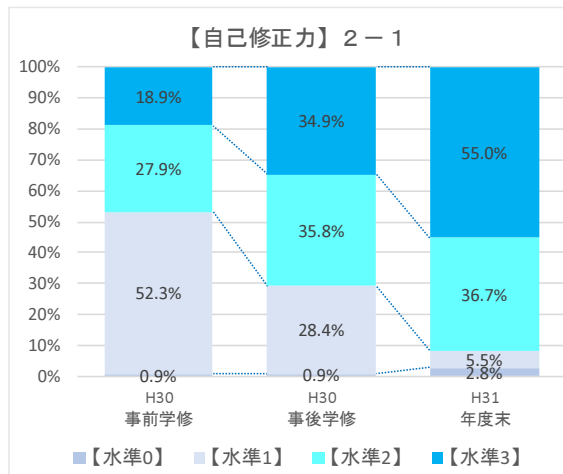


図 2 自己評価結果の経年変化（自己修正力）

【自己修正力】2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

【水準３】

- ・今年度から参加している、留学を目指すコースのみんなから日々刺激を受け、専門科目の授業や語学力向上に向けて頑張っている。
- ・アルメニアの子どもたちや、大学生の志の高さに感銘を受けて、それから自分はどのような人材になりたいのか考えて様々なことにチャレンジしました。
- ・自らの行動を修正するには他人を観察することが不可欠だと感じる。
- ・父と居酒屋で人生について話す機会があった。自分と考えが似ていることが分かったが違うところも少しあった。それを否定することなく、自分の考えに照らし合わせて見直すことができた。
- ・協調性を意識していた。
- ・同じプログラム参加者が、自分の興味のある分野について突き詰めているのを見て、なんとなく過ごしている自分をもったいないと思った。今は何故それをするかを考え行動を決めることが増えた。
- ・民間奨学金団体で出会った他大学の仲間の挑戦を聞いて、自分の行動について見直し、新しいボランティア活動を始めるなどした。
- ・常に自分の行動について振り返ったり、他人のよいところや嫌なところを見た場合には自分にも照らし合わせて考えたりしている。
- ・私は普段から自分の考えのみで短絡的に行動するのではなく、他人の意見や行動を理解し行動することが多い。
- ・自分の進路について親や友人と話し合った。
- ・人の意見を聞き、自分の意見を見つめ直しているから。
- ・文化という大きい差を認識し、その多様性を知ることができた。
- ・自分の考えや行動は、自分で気づいて直すこともあるが、人がきっかけで気づくことが多く、もし直すべきところに気づいたら、それを放置せずに直そうと努力している。
- ・合同ゼミでの発表に向けたグループワークで、発表内容、レジュメ、スライド作成の過程で、メンバーの知識量の多さや思考力の高さに驚き、自らの普段の勉強不足を実感したから。
- ・部活においては、先輩後輩関係なく、改善点や反省点があれば提案させるようにしている。
- ・自分の考えと人の考えが違ったときには、それぞれの根拠をよく吟味して判断するようにしているから。
- ・私は品がない人が嫌いなので、他人を見ていて素直に気持ち悪いだとか品がないだとか配慮がなってないだとか感じたことは、直接口にはしないがメモを取り、そのような行動を自分が振る舞わないように気を付けている。また、自分が置かれた環境の中で、品がある人、ない人の割合を大体で判断して、その場では自分はどのように振舞えばいいのか状況に応じて変えている。
- ・人のよい所はメモに残している。
- ・留学で共に過ごした人に指摘された生活行動を修正した。
- ・自己主張が得意な人と関わることで、自分の考えを主張することの大切さを知れたから。
- ・たまに意思疎通をとるようにしているから。
- ・留学中の英語力向上について、自己の間違いと他者の成功例を比較し、次どのようにすればうまくいくのかを常に考察している。
- ・他国の方々の価値観を十分に理解することができたから。
- ・自分の新たな欠点を認識。
- ・就活の自己分析に大いに役立った。
- ・逃げから挑戦ができるようになった。
- ・自己と他者の違いを理解し、自分の考えや行動を見直しています。
- ・GCPの活動中、コミュニケーションに関してプログラムの参加者や留学先の学生の行動を参考にすることによって能力を向上させることができたから。
- ・自分ではどうすることもできない状況においても、仲間の力を借りて、難題をクリアすることができた。

- ・就職活動などでは他者のアピール方法を参考にしたり、アルバイト先では先輩の様々な問題への対処方法を参考にしたりと自分の考えややり方を顧みている。
- ・海外研修において多様な人と交流する中で、様々な考え方に触れ、自分を見つめ直すことができたと思うから。
- ・相手の意見を尊重している。
- ・自分よがりな意見にならないよう周りの意見を聞き、柔軟な考えを保とうと心がけているから。
- ・常に周りの人々のよいところを吸収しようと心掛けているから。
- ・よく人のことを見て、そのあと自分を振り返るようにしているから。
- ・実験で、他の人の方法を参考にして自分のやり方を見直せたから。
- ・身近な先輩の姿を見て、自分の行動に取り入れているから。
- ・友人に頻繁に意見を求め、批判を受け入れ改善しようと努力した。
- ・他国の方とコミュニケーションをとり異文化理解ができたし、その後異文化についてもっと知ろうと思えたから。
- ・常に人から刺激をもらい、自らと比較する。
- ・友人や、先輩、後輩としっかりコミュニケーションを取って、自分と異なる意見があっても、否定することなく受け止め、吸収している。
- ・他者の意見も聞いて客観的に判断した。
- ・人の多様性を認識し、自分の独断や偏見で物事を決めつけないように、様々な事柄に対してなるべく体験してから判断を下すようにしている。
- ・ゼミの発表や、インターンシップのグループワークにおいて成果が得られた。
- ・みんなの考え方から様々なことを学んだ。
- ・全体を俯瞰するということは自分を客観視することも含んでおり、他の人の意見と照らし合わせて改善すべき点を探そうとする姿勢を基本的にとっているから。
- ・塾講師をしているときに、他人の指導方法を分析して自分の指導に修正を加えている。例えば、『〇〇はしてはいけない』と言うよりも『〇〇するのは良いことだ』と肯定的な発言を増やすように切り替えた。
- ・キャリアプランを形成している。
- ・常に、自分の行動を内省するよう心掛けている。
- ・常に他の人から学ぶようにしているから。
- ・お互いに今どう考えているのかを伝え合う機会を設けたから。
- ・周りのことはよく見ているほうだと思うから。
- ・よくできたと思うから。
- ・部活動においてメンバーの意見を聴くことで自分の行動を改善することができたから。

【水準2】

- ・自分の間違いを反省する。
- ・GCP参加時はあまり積極的でなかったが、ほかの参加者を見習い様々な活動に取り組もうとしたため。
- ・自分の考えや行動を理解しつつ、持続的に見直すことはできなかったため。
- ・集まりごとには基本的に参加して人の話をよく聞いて、そこからその人がどんなことを考えているのか、どういう人なのか、理解しようとしている。私自身は話すことが下手なので、他人のいいところを真似したり、あまり良くないと感じたことは注意したりしてやらないように心がけている。
- ・他人の考えや行動を完全に理解できているとは思わないが、他人を尊重し、その上で吸収できるところは自分も応用しようとする。
- ・他人のアドバイスを受けて自分の行動を改善するため。
- ・自身の弱みは、思考に重みを置きすぎる点であるため、自身の心理的障壁の低いことから取り組むようにしている。
- ・自身の役割をチーム全体から見て修正した。
- ・人間関係において、相手の感情を考えるようにしている。
- ・育ってきた環境の違う友人と価値観が異なることが多かったが、最近は相手の言い分も理解できるようになりました。
- ・他人の良い部分は参考にしているから。

- ・みんなに役割が平等に分配されるようにし、お互いに行動を確認し合うようにした。
- ・子どもとの交流を通して、様々な課題点を見つけることができた。
- ・目標に対して計画を立てて取り組んでいる。
- ・自分の欠点等を部活の友達等の長所を比較することで理解できているから。
- ・部活動などで設問のようなPDCAサイクルを回しているから。
- ・周りの良いところがよく見えるようになった。
- ・周囲との協力の中で自分がすべきことを意識できた。
- ・GCPに参加して自分のできなかったことや意識すべきことであったコミュニケーションををインターンや就職活動に意識して参加するようになった。それに対して反省をして次に生かすようにした。
- ・自己修正すべき点を理解はしているが、行動には十分に結びつけられていない。
- ・就職活動中に、自己分析を行いました。
- ・チームスポーツをやる上で必要だと思い、気をつけた。
- ・就活の中で自己分析は自ずと進めている。
- ・他の人の意見も参考にした。
- ・以前は排他的に近いような、初めから物事を否定的に捉えてしまうことが多くありました。しかし、プログラムを通じて年齢も環境も違う人と交流することで、まずは何事も受け入れた上で、自分との違いがあることについて否定的な感情を抱かず、うまく吸収するように思考を切り替えるようになりました。
- ・他人の意見を聞く機会が多くそれらを参考にすることができたから。
- ・サークル活動に参加する人はそれぞれ違った考えを持っており自分の考え、行動がどのようなものか見返すきっかけになるから。
- ・パン屋でレジのアルバイトをしているのですが、スムーズに仕事を進めるにはどうしたらいいかを他のアルバイトの方々の動きを見て学ばせてもらっています。
- ・尊重することでより良い結果が生まれると理解しているため。
- ・人のいいところや悪いところを言い合える。
- ・克服すべき部分を理解はしているが、それが自分の苦手分野だった場合、向き合うことが難しい。
- ・様々な国から集まった学生達と交流する中で違いを尊重する文化に触れ、個性を大切にすることを意識している。
- ・常に自分の行動を他人と照らし合わせて修正した方が良い箇所を発見できているから。
- ・他人と行動すると、いやなところもいいところも同じくらい見えてくるし、私が起こしたアクションにリアクションする他人をしっかりと観察できた。よって、私の見直すべき点が理解できた。
- ・他文化に触れ、互いの違いを認めて受け入れることができた。

【自己修正力】2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

【水準3】

- ・専門科目のファイナンス分野が苦手だと思い込み、手もつけていなかったが、友達の協力もあり、少しずつ克服できている。
- ・外国語でのコミュニケーションを上達するために、留学生交流サークルに入ったり、TOEICに挑戦したりしました。
- ・学業の中で得意分野については本を読むことでより深く知識を深め、苦手な分野は類似した授業を履修することで理解が深まるようにした。
- ・部活動で得意な部分はさらに伸ばそうと思い、ある程度練習していて、苦手な部分を見つけて克服するため練習している。
- ・発音練習に時間をかけた。
- ・自分の能力は毎日高めていかないと伸びないから。
- ・学修において、得意な分野を授業に関連したものだけでなく、そこからさらに発展的に深く学修を進めることで、得意な分野をさらに伸ばすことができるように努力している。また、苦手分野も、得意な分野に関連づけて学習を進めることで、克服しようと努力しているため。

- ・今ある授業以外の自由な時間の一部を自分の興味ある専門とは別の学問分野の勉強をしている。
- ・得意分野である初対面の人と話すことをより伸ばすため、どんな人とも先入観を持たず接することを心がけているから。
- ・自身の短所を自覚し、長期的にそれらを克服する計画を立てている
- ・留学を通し、苦手なドイツ語も周りと協力して学ぶ事が大切だと学んだ。
- ・積極性がないという点を改善するため、部長など意見を発信しなければならないポジションに挑戦している。
- ・自分の英語やコミュニケーションをもっと改善する必要があるなと感じていて、その勉強をしようとしている。
- ・苦手なことにも積極的に取り組めるようになったから。
- ・空手道部で練習に励む。
- ・TOEIC の学修。
- ・英語の苦手分野であるスピーキングやライティングを、毎日一定時間取り組むことによって克服しようとして実践しているから。
- ・人前で話すことが苦手だが積極的に質問するよう意識している。
- ・留学生と交流して、英語のスピーキングに取り組んだ。
- ・チャレンジ精神を忘れない。
- ・数学が苦手なので、SPI の数学の問題は、問題集をひたすら解いたり、得意な友達に教えてもらったりして克服している。
- ・日々の部活の練習で意識して取り組んでいる。
- ・プロジェクトを通して、得意な発言を積極的にし、苦手な傾聴を心がけた。
- ・自分の強みを生かすためにも、今自分は何が強みなのか自己・他己分析を行ったから。弱点を強化するためには、強みを何かしらの形で利用し実現可能性を高めた。
- ・英語のスピーキングにおいては毎日シャドーイングを行い、動画を見ながらリスニング力も鍛えている。

【水準 2】

- ・友人たちとともに尽力している。
- ・苦手分野を克服するための方法をどのように見出せばよいかわからないため。
- ・得意、苦手を再認識できた。
- ・得意なことや好きなことは調べたり、新しいことに挑戦してみたりして、深く知るようにする。苦手なことは、まず苦手であるということを理解して、解決策を考える。
- ・得意分野を生かせるように様々なことに挑戦している。
- ・週ごとの目標とその反省を文字に起こしているため、自分の今の状況を俯瞰的に見られるため、近い将来の課題を自覚し行動できる。勉強面で尊敬する人に聞いたり、様々な文献や雑誌に手を伸ばしたりして情報を得ようとしている。
- ・自分の好奇心を活かす方法を考えているため。
- ・感じていることを言葉にするのがうまくできません。そんな自分とどう付き合っていくのか、まだわかりません。
- ・まだ克服できていないため。
- ・どうすべきか、自分の意見を伝えながら、他人にも助言を求める。
- ・練習する量を調整しているから。
- ・記憶力が低いので、克服するために日記をつけたり指南書を探したりしている。
- ・物事を包括的に捉える力が足りないと試験勉強において感じた。
- ・これから子どもに関わっていくに際して気をつけるべき点を明確にすることができた。
- ・目標に対して計画を立てて取り組んでいる。
- ・部活でうまくいかないときがあるので、どうすればうまくいくかを考えているから。
- ・海外生活を通して、英語のスピーキング力が圧倒的に弱いことを知ったので、これからは、それに集中して取り組もうと思っている。
- ・昔からそうだが、私が一度苦手だと感じたものを克服することは対人関係においても仕事関係においてもとても難しい。したがって、苦手だと感じたものは極力私が注力しすぎず、他者の助力や、アドバイスを

受けてから行動するようにしている。それも難しい場合は、決して焦らずに、ゆっくりと自分のすべきことに目を向けながら進めるようにしている。

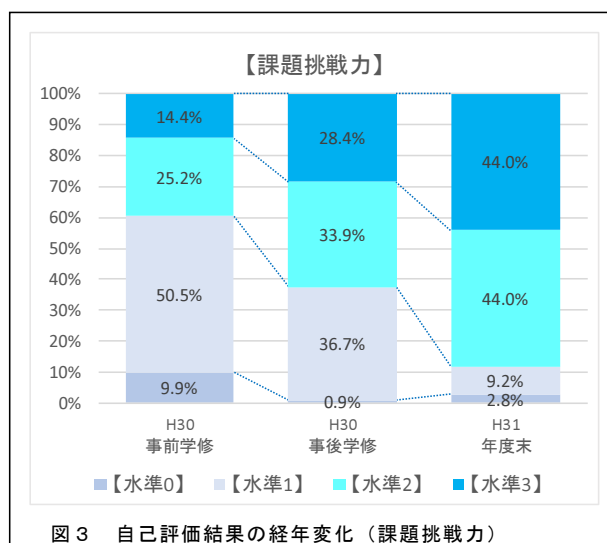
- ・苦手分野を克服するために何をすれば良いのか考えている。
- ・苦手分野の克服は視野に入れているが、具体的な方法が見つかっていないというのが現状だから。
- ・模索中である。
- ・方法模索をしているため、実践にはまだ結びついていない。
- ・挑戦をしていこうとする姿勢を大事にしている。
- ・就職活動中に必要だったからです。
- ・就職活動などにおいて自身の優れた点や、自身のできていない点が明らかになり、どうやれば自身の優れた点が伸ばせるのか、なぜできていないのか、どうすればできるようになるのか、模索している。
- ・実践するまで少し時間がかかるが、いつも苦手分野を克服する方法を探している。
- ・部活動で試合に出るため。
- ・自分より優れている人に聞くことで方法を見つけ出そうとしている。
- ・苦手分野については克服しようと心掛けているが、なかなか改善できないため。
- ・自分の良いところを伸ばしたいと考えているから。
- ・自分の得意分野は理解しているが、その方法をまだ掴めていないから。苦手分野は手先の器用さが求められる実験だと理解しているが、その克服の仕方がまだ分からないから。
- ・まだまだその方法を試している段階だから。
- ・大学院試験の勉強において模索中である。
- ・自分に足りないものが多く見つかったので、それに対してどう取り組むか、取り組まなければならないと考えるようになりました。
- ・まだすべてを理解しているわけではない。
- ・苦手をそのままにしていけないとは思わないから。
- ・読解力や数理的思考を鍛えるために、読書や数学の勉強の計画を立てている。
- ・領域の得手不得手を理解し、得意なところは積極的に、苦手なところは助けを借りながら克服しようとしている。
- ・実践できてはいない。
- ・得意分野を伸ばすために努力することができたから。
- ・自分の短所は把握できておりその克服に向けて行動は起こしているが、本当にそれで正しいのかは確信が持てないから。
- ・違う言語を話す人と対話するとき、少し身構えてしまうため。

表 3 自己評価結果（課題挑戦力）

【課題挑戦力】

3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

		回答数 (人)	H30 事前学修	H30 事後学修	H31 年度末
【水準3】	見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。	48	14.4%	28.4%	44.0%
【水準2】	見つけた課題を解決する方法を模索している。	48	25.2%	33.9%	44.0%
【水準1】	解決すべき課題を見つけることができる。	10	50.5%	36.7%	9.2%
【水準0】	水準1に達していない。	3	9.9%	0.9%	2.8%



—水準選択における具体的な説明（水準2・水準3）—

【課題挑戦力】 3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

【水準3】

- ・語学力向上のために、友達の勉強方法を参考にしながら、努めることができた。
- ・課題に取り組んでいる。
- ・将来が見えていないことを自覚し、今は資格取得を目指しているので、水準3とした。
- ・部活動で見つけた課題を克服しようと練習している。
- ・部活動で見つけた自分の課題を自分なりに解決しようとしている。
- ・サークルで活動している地域で何を行えば地域の人を巻き込んだことができるか考えて、実行している。
- ・自分から進んで課題に取り組もうとしている。
- ・経験したことのない仕事には積極的に挑戦している。
- ・解決すべき課題を見つけたとき、まずはそれを解決するための方法を考え、考えがまとまったら実践する、ということを意識しているため。
- ・本やインターネットで調べるようにしているから。
- ・英語の勉強を継続的に行なっている。
- ・強く速い意思決定が苦手という自らの課題に向けて、論理的思考力を鍛えることと、根拠を積んだ後はその決断を正解にするという意気込みで意思決定を行うことを意識しているから。

- ・生きていく上で課題は多く、乗り越えなければならない課題もまた年相応に多い。課題には、発見、模索、解決の三つのプロセスがあり、その三つを順守できることが社会人としての必要なふるまいの一つであると考えている。もちろん、自身の力でその三つを駆使して乗り越えることも大事だが、万が一一人で課題を解決できない状況になる前に、すみやかに他者の助けを借りることができることが生きていく上で必要なことだと考えている。
- ・わからない事象が観測された時に、それを探す方法がわかってきたから。
- ・異文化理解という問題に留学中積極的に取り組んだ。
- ・解決できたと感じているから。
- ・つねに自分の周りの物事が良い方向に進むように取り組んでいる。
- ・課題解決能力が身についたから。
- ・様々な課題にしっかり挑戦している。
- ・学生実験で考察を繰り返す。
- ・読み書きだけではなく、聞く話すということができるようにする。
- ・どう解決しやすいか、また課題のタイプによって違った取り組み方を試し、試行錯誤している。
- ・自分になにが足りないのかを考え活動しているため。
- ・課題を克服しようと日々実践しているから。
- ・研究において生じる困難な課題に対し、その解決に向けた取り組みを行っているから。
- ・授業カリキュラムになくても必要だと考えた分野について勉強した。
- ・自分が課題に思ったことはできる取り組むようになったから。
- ・粗探しではないが、マイナスポイントを探すのは得意にしているので、それを見つけるだけでなく課題解決への行動を前向きに検討できているから。
- ・社会学の調査において、俯瞰的視点でものを考える。
- ・就職活動において、面接が苦手なので、場数を増やすために練習する場に積極的に行っている。
- ・ゼミの発表や、インターンシップのグループワークにおいて成果が得られた。
- ・プロジェクトを何回も練り直して成功させた。
- ・課題を見つけたら解決しないと気が済まない。
- ・自分が将来やりたいことと大学を卒業した後に仕事を通して良い社会を作るために必要だと思い、留学をした。
- ・アルバイト先で研修生指導の改善に取り組んだから。
- ・まずはやってみることが大切だから。
- ・日本に帰国してから英語を話す機会が大幅に減ってしまうため、現地の友達と定期的に電話をしている。
- ・課題に直面した時はその解決に向けて動く事が出来ていると感じるから。
- ・帰国後もドイツ人の友達と言語交換コミュニケーションをとっていた。

【水準2】

- ・部活動内での問題に気づきどうすればよいか考えている。
- ・英語力が低いという課題を見つけたため、外国人の友人とできるだけ英語で話すよう努めている。
- ・フードロスの問題を解決したいと思ってサークルに入っていましたが、企画が上手く行かず挫折してしまった。他の策を考えている最中です。
- ・課題に直面したときに解決方法を模索するがその方法が現実離れしていたりして、行動に移せていない。
- ・関心のある分野の社会問題についてたくさんの本を読み、解決に向けどんなものが必要なのか自分なりに考えた。
- ・後輩や友人に相談されたときにその人がどうしたいのかを読み取って、叶えられる解決策を考えている。
- ・普段の生活や学校での活動、サークル活動で常に課題について考え、行動しようと思っている。
- ・変に自分の殻にこもり、他人に助言を求められないため有効な解決策を見出せない。
- ・自分のコミュニケーション能力を改善する方法を考えているため。
- ・課題が見つかる度に、解決法を考えるようにしている。
- ・サークルでの運営に関して課題は見つけています。ただ伝統の部分もあるため解決するのに時間がかかりそうです。
- ・本を読んで、苦手をどう克服すればいいのか模索している。

- ・解決しないとどうにもならないから。
- ・周りの人たちに相談しながら、子ども関わる方法について研究することができた。
- ・目標に対して計画を立てて取り組んでいる。
- ・他の人に聞いて少しでも実力を伸ばそうとしているから。
- ・課題を見つけるといつも解決方法を考えたり調べたりしている。
- ・課題意識は常にあるが、解決方法は一様ではないためそれを絞り込む作業が自身にとって1番難しい
- ・部活動などで設問のようなPDCAサイクルを回しているから。
- ・就活で自分の課題に向き合うことが多くなり、必然的に解決を意識するようになった。
- ・今実際に模索している途中だから。
- ・課題を見つけているが、まだ実行できていない。
- ・自身の力だけでは無理だが人との協力を経て成し遂げることができる。
- ・どのような方法が良いか模索中です。
- ・就職活動中に必要だったからです。
- ・自身の分析において明らかになった課題に対し、模索しているところである。
- ・練習に取り組んでいる。
- ・自分の将来を考えたら課題は分かっているが、それを解決する方法は分かっていないから。
- ・チームの目標を達成できるようできることをしている。
- ・課題をそのままにするのではなく例え解決できなかったとしても、解決策を考える経験自体がそのうち役に立つ時がくるかもしれないから。
- ・面接などで自分の個性をどう表現するのが苦手なので、インターンシップなどの面接を練習に見立てて、場数を踏んでいる。
- ・アルバイト先や部活動で課題解決を試みている。
- ・フィールドワーク先の課題だけにかかわらず、身近な問題にも目を向けるようになった。
- ・部活動に関する問題を見つけたが、まだ解決には至っていない。
- ・アイデアを出すことはできる。
- ・実践できてはいない。
- ・部活動において見つけた課題を解決することができたから。
- ・まだ模索中だが、わたしの課題は情報収集である。なかなかうまく情報収集できないが、友人や先輩を見て自分なりの方法を模索中である。

3-1-3. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化（平成 29 年度参加学生）

平成 29 年度参加学生に対しても平成 30 年度参加学生と同様に、ルーブリック指標による自己評価を、教務システムの機能を利用して実施した。ルーブリックによる自己評価結果は、表 1～3 のとおりである。

また、それぞれに関するプログラム参加年度（事前学修時・事後学修時）、参加 1 年後及び参加 2 年後の自己評価結果を比較した図が図 1～3 である。プログラム参加後も引き続き調査を行い、学生自身に、言動を振り返り自己を見つめ直す機会を与えることで、力の伸びが目に見える形になっている。

3 つのチカラ（「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」）の自己評価の経年変化について、いずれの能力においても参加 2 年後に向上しており、「水準 3」の割合や「水準 2 以上」の割合が事前学修時や事後学修時、参加 1 年後より増加していることが確認できる。

①チームワーク力

参加 2 年後において「水準 3」と回答した学生は、平均 41.1%（1-1：40.5%、1-2：41.8%）であった。（R1 目標値：30%）また、参加 2 年後において「水準 2 以上」と回答した学生は、平均 88.6%（1-1：88.6%、1-2：88.6%）であった。（R1 目標値：75%）「大学内の部活動や課外活動の中で、自分の役割を通して、チーム全体をチームの目標に近づけることができた。」「自動発注システム開発において、メンバー全員が主体性を持って一致団結して取り組んだ結果、開発体制が評価され、準優勝という成績を収めた。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の 2 年後も引き続きチームワーク力を高めていることが窺える。

②自己修正力

参加 2 年後において「水準 3」と回答した学生は、平均 48.7%（2-1：57.0%、2-2：40.5%）であった。（R1 目標値：30%）また、参加 2 年後において「水準 2 以上」と回答した学生は、平均 86.1%（2-1：89.9%、2-2：82.3%）であった。（R1 目標値：75%）「自分の性格や考え方の欠点を理解した上で、それを人前に出さないよう努力している。」「ゼミ活動において、今まであまり経験がなかった色々な意見をまとめる役を担当した。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の 2 年後も引き続き自己修正力を高めていることが窺える。

③課題挑戦力

参加 2 年後において「水準 3」と回答した学生は、58.2 であった。（R1 目標値：30%）また、参加 2 年後において「水準 2 以上」と回答した学生は、88.6%であった。（R1 目標値：75%）「自身の語学力向上において、リスニング能力向上という課題を、毎日英語のラジオを聞くことで苦手意識をなくすよう努めている。」「留学中の授業内の討論で、主体的に参加できていない状態であったが、目標を決めて現状のギャップを洗い出し、その解決に努力した。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の 2 年後も引き続き課題挑戦力を高めていることが窺える。

表 1 自己評価結果（チームワーク力）

【チームワーク力】

1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

		回答数 (人)	H29 事前学修	H29 事後学修	H30 年度末	H31 年度末
【水準3】	チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。	32	4.4%	19.4%	34.6%	40.5%
【水準2】	活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。	38	41.1%	50.0%	35.9%	48.1%
【水準1】	活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。	6	53.3%	30.6%	26.9%	7.6%
【水準0】	水準1に達していない。	3	1.1%	0.0%	2.6%	3.8%

1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

		回答数 (人)	H29 事前学修	H29 事後学修	H30 年度末	H31 年度末
【水準3】	メンバーと協力し、チームの目標を達成している。	33	5.6%	19.4%	24.4%	41.8%
【水準2】	メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。	37	45.6%	45.8%	43.6%	46.8%
【水準1】	メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。	5	45.6%	34.7%	29.5%	6.3%
【水準0】	水準1に達していない。	4	3.3%	0.0%	2.6%	5.1%

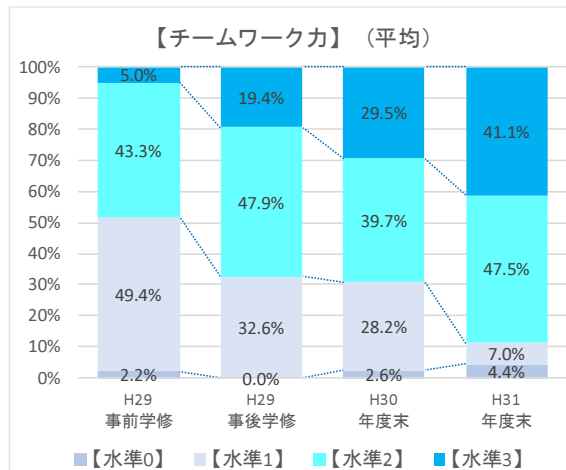
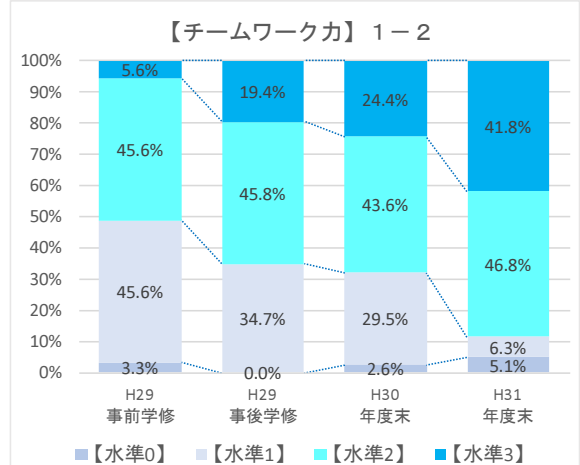
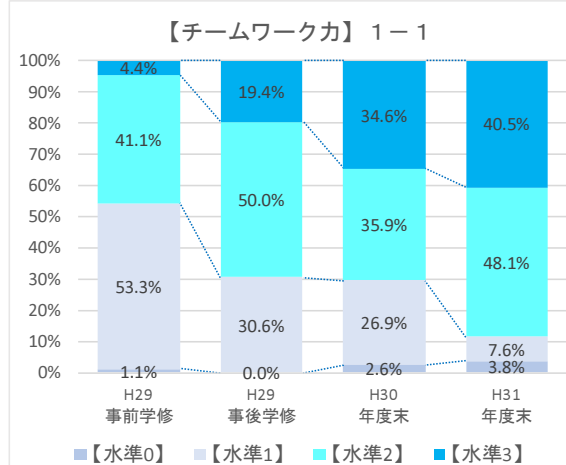


図 1 自己評価結果の経年変化（チームワーク力）

—水準選択における具体的な説明（水準２・水準３）—

【チームワーク力】1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

【水準３】

- ・現地で出会った海外の友達が日本に留学に来ているので、今でも交流を図っています。
- ・私がいることでチームが上手く回ったと他人から評価を受けたため。
- ・周囲の状況や会話から今自分がすべきことは何かを考えられるようになった。そして、それを実行に移すことができていると思う。
- ・特にサークル活動において重要な役回りを担っている。
- ・クラブ活動において演奏会のパンフレット係となり、原稿を集めるなど自分の役割を遂行した。
- ・サークルで自分の能力を踏まえた上で活動している。
- ・アルバイトでバイトリーダーとして働いた。
- ・旅行などの予定を立てるときに周りの状況をみて調べたりする。
- ・留学生対象のボランティアで案を出し合って進めたため。
- ・就活の中で議論を推し進める役割や、フォロワーとしてのリーダーシップを評価されたことがある。
- ・大学内の部活動や課外活動を通して活動する中で、自分の役割を通してチーム全体をチームの目標に近づけることができたと思う。また一定の成果を見ることもできた。
- ・ビジネスコンテストでリーダーを務めたからです。
- ・バイトでチームワークを生かした。
- ・自分の意見をしっかり持ちつつ、目的を達成するためにある集団内の分業化を図り、その体制の中で業務を統括することができた。
- ・主体的に動けたため。
- ・部活動での役割を最後まで果たせたと感じるから。
- ・ゼミ活動において、チームに貢献できたと思うため。
- ・部活動において自分の役割を遂行した。
- ・就活や卒論のゼミで上記の力を発揮でき、成果となった。
- ・自分に与えられた役割に対して責任感を持ち行動し結果にも繋がったから。
- ・サークルにおいて自らの役割を遂行したこと。
- ・機械学習やクラウドなどの最先端の情報技術を勉強するため、他大学と合同のプログラムである「enPiT AiBiC spiral」に参加した。その際、課題としてチームでの自動発注システムの開発が出された。この課題において、設計やプログラミング、ファシリテーターといった役割をこなした。
- ・ボランティア活動と団体運営へ参加した。
- ・サークル活動においては新たなシステムの導入者として多くの働きをしており、積極的にサークル員を参加させるための準備や企画を行っている。実際にシステムが定着するかまでは保障できないが、そういった新しい環境を導入することへの基盤を残せたのではないかなと思う。
- ・友人と協力して難しい本を読み終えた。

【水準２】

- ・部活動のミーティング等で積極的に発言しているが、それが成果につながっているかと言われるとわからない。
- ・昨年のKIBERの外国書購読の授業では、SAとして授業を計画、遂行する役割を担った。
- ・チームで活動する際には、チーム全体が結果的に成功することを第一に考えて行動している。成功のために足りない部分を自分が補うためには何が必要かを重視している。
- ・サークルで代表をしている。その立場の相応の言動はしているが、成果にはなかなか結びつかない。
- ・ゼミで講義者として前に立つときはもちろん聴講者の立場であっても積極的に質問したり投げかけられた問いに答えるよう心掛けたりした。
- ・自分の役割を理解している。
- ・自分なりにできることを考えて、考えをそれぞれ出した上に活動を行なっていたと思います。

- ・自分の役目は果たした上で、役目以外の面でも発言できた。
- ・チームでプレゼンを行う際に、役割分担して協力し、自分の役割を全うできたから。
- ・ゼミ活動では、自分の考えを発言することや皆で取り組むことに関しては円滑に進むように協力している。成果へつながっているかは不明。
- ・長期インターンでの活躍など。
- ・就職活動において様々なグループ活動に参加している。
- ・役割について理解し、自ら発信できることは発信するが、成果へとつながっているかは分からない。
- ・他者意見を尊重できているから。
- ・アルバイトで店舗から一人しかもらえないチームワーク賞をもらった。
- ・研究室では、一番下の学年として様々な仕事を積極的に取り組んだ。
- ・基本的には自分がチームで持ち味が発揮できるのは、議論を異なる視点で観察できることと、それをオープンマインドに話すことができることである。ゼミの共同論文で、現状分析から日本の経済政策の課題発見をする際や、それに基づき政策提言をする時にこれを意識し、行動することができた。しかし、この強み以外の持ち味を発見し、ゼミ以外の様々なチームごとに自分の強みを柔軟に変えて成果につなげることはまだできていない。
- ・アルバイトで上回生として考えたり意見したりしているから。
- ・フィールドワークを自ら計画し、アポ取りやインタビューでも主体的に取り組んだ。
- ・グループディスカッションで、毎回ではないが、リーダーシップを取ろうとした。
- ・サークル活動に参加した際に感じたから。
- ・成果には繋がらなかったため。
- ・現在学外での活動において、渉外を務めており、団体代表や、他のメンバーとのやりとりが適切にできていると感じているから。
- ・組織における己の役割を考え、自分で物事を考えるようになった。
- ・自分の役割や仕事に対して頑張った。
- ・ゼミ活動で自分の意見を積極的に言うことを意識している。
- ・ゼミでリーダーとして活動した。
- ・チーム全体の士気の底上げには至っていない。
- ・社会の中で求められる自分の立場を理解し、演じる。
- ・ゼミの発表に向けて研究室のメンバーと役割分担し、積極的に意見交換を行った。
- ・役割・立場を意識することが多くなったから。しかし、自信がなくて全うできないことも多い。
- ・部活動において、最上回生としてチームのためにできることを考え行動できた。
- ・所属する部活動で会計としての役割を果たすことができたため。

【チームワーク力】1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

【水準3】

- ・お互いに意見を出し合いながら、最高のプログラムを作れるよう、努力しました。
- ・アルバイトにおいて、同じ販売員とどうしたら商品が売れるか話し合い、協力した。
- ・昨年の5月には、KIBERの一部のメンバーでチームを組んでビジネスコンペに出場した。それぞれの役割を決め、互いに協力し、結果として2位に輝くことができた。
- ・友人とサークルを作ったから。
- ・サークル活動で協力して目標を達成している。
- ・旅行をみんなで計画し、予定した以上に安全に楽しめる。
- ・留学生に楽しんでもらえるプランをみんなで考えたため。
- ・就活の中で議論を推し進める役割や、フォロワーとしてのリーダーシップを評価されたことがある。
- ・大学内の部活動や課外活動を通して活動する中で、メンバーといかに協力するかを学びチームとして目標を達成することを学べたと思う。
- ・ビジネスコンテストで勝つことができました。

- ・アルバイトでチームワークを生かした。
- ・意識の高い学生とコミュニケーションをとれたため。
- ・百人を超える部活動の中で自分の考えと他者の考えをより合わせて良いものを作ろうと努力できたから。
- ・ゼミ活動において、チームで目標を達成した経験があるため。
- ・帰国後のゼミ活動で、高いところを目指す目標意識をつけた上で、全員が自分のやるべきことを自覚し、共同論文の発表会で、80 チーム中 5 位の優秀論文に選ばれることができた。
- ・部活動においてチームで協力した。
- ・海外インターンシップにおいて、他のメンバーやスタッフと協力してコンペティションに応募することができた。
- ・チームのメンバーと上手く連携しながら研究できた。
- ・積極的に、メンバー全員とコミュニケーションをとるように心掛けた。
- ・前述の自動発注システム開発において、メンバー全員が主体性を持って一致団結して取り組んだ。その結果、開発体制が評価され、準優勝という成績を収めた。
- ・研究室でのコミュニケーションと、結果を探究していくための協力ボランティア活動と団体運営への参加。
- ・数値的な結果を得た。
- ・友人と協力して難しい本を読み終えた。

【水準 2】

- ・何をして欲しいか、何をしたいかは言葉にしないと伝わらないので常にコミュニケーションをとる努力ができていると思う。
- ・サークル活動では一回の活動につき全てのメンバーと話そうにしている。
- ・そもそもあまり明確な目標を立てていない。
- ・仲間とミーティングをした。
- ・常にチームのことを考えている。
- ・状況に応じて、積極的にふるまったり他人の意見を聞こうと努めたりしている。
- ・ゼミやサークルなど、仲間と協力はできている。目標は達成できたりできなかったりである。
- ・今年度は企業のインターンシップに複数回参加し、初めて出会う人々と協力しながら課題をこなすことに取り組んだ。
- ・部活や他に参加していた活動と同様に GCP の活動も、仲間の考え方や価値観の違いなどを尊重しようと努力していました。
- ・クラブ活動で、大きな目標に向けて皆で協力することができたから。
- ・ゼミ活動ではうまく意見をすり合わせて決定するようにしていると思う。水準 1 と 2 の間かもしれない。
- ・メンバーの意見を全て踏まえた答えを出すのはとても難しいと感じており、最終的な目標から逸れる方向性に話が進むこともあった。
- ・制限時間内に定められた目標に向けて一定の回答を出せるようグループメンバーと共に努力している。
- ・他のメンバーの意見を聞き、意思疎通を図ることに取り組んではいるものの、結果へとつながっているか分からない。
- ・アルバイトの経験から。
- ・研究室で出会った新しい友人と、異なる思考であることを認識し合い、活動を行った。
- ・サークルで他メンバーとの意見の折衝を行ったから。
- ・メンバーの取り組みたいテーマも取り入れた。
- ・就職活動のグループディスカッションで、様々な意見を聞きながら全体で 1 つの意見にまとめた。
- ・常にチームメンバーのことを観察し、自分の立ち位置ややるべきことを把握するように努めている。
- ・目標は達成できなかったため。
- ・ゼミの副リーダーとして精一杯できることをした。
- ・チームの目標となると達成できていない部分もあるため。
- ・サークル活動において他者の意見を引き出すということに重点をおいて活動した。
- ・ゼミ活動を通して色々な意見をまとめる経験をした。
- ・リサーチクエストをチームで探すために協力できた。
- ・チームの一員として、課題解決に主体的に取り組む。

- ・研究室のメンバーの意見を尊重し、研究の見直しを繰り返し行った。
- ・他の部員とコミュニケーションをとりながら部の運営を行っていくことができた。
- ・部活動で他のマネージャーと協力して資金集めを行うことができたため。

表 2 自己評価結果（自己修正力）

【自己修正力】

2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

		回答数 (人)	H29 事前学修	H29 事後学修	H30 年度末	H31 年度末
【水準3】	自分以外の人の考えや行動を参考にして、自分の考えや行動を見直している。	45	23.3%	30.6%	28.2%	57.0%
【水準2】	自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の見直すべきことについて理解している。	26	26.7%	31.9%	38.5%	32.9%
【水準1】	自分の考えや行動について認識している。	8	47.8%	36.1%	29.5%	10.1%
【水準0】	水準1に達していない。	0	2.2%	1.4%	3.8%	0.0%

2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

		回答数 (人)	H29 事前学修	H29 事後学修	H30 年度末	H31 年度末
【水準3】	自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を克服するための実践を行っている。	32	14.4%	27.8%	23.1%	40.5%
【水準2】	自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を克服する方法を模索している。	33	30.0%	34.7%	28.2%	41.8%
【水準1】	自分の得意分野や苦手分野について理解している。	9	51.1%	33.3%	44.9%	11.4%
【水準0】	水準1に達していない。	5	4.4%	4.2%	3.8%	6.3%

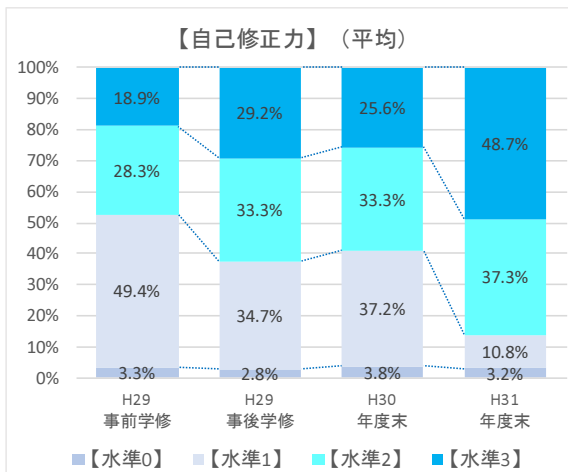
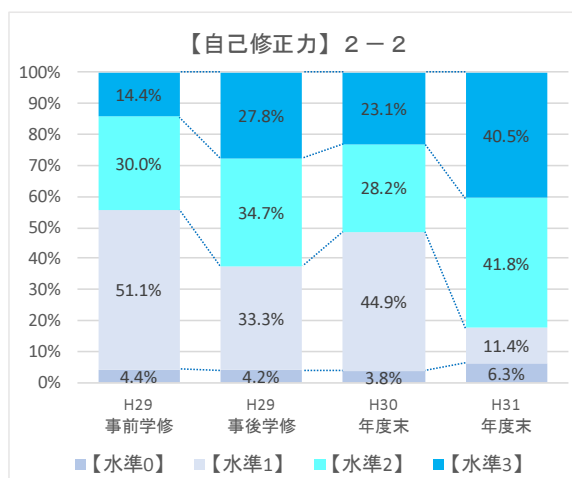
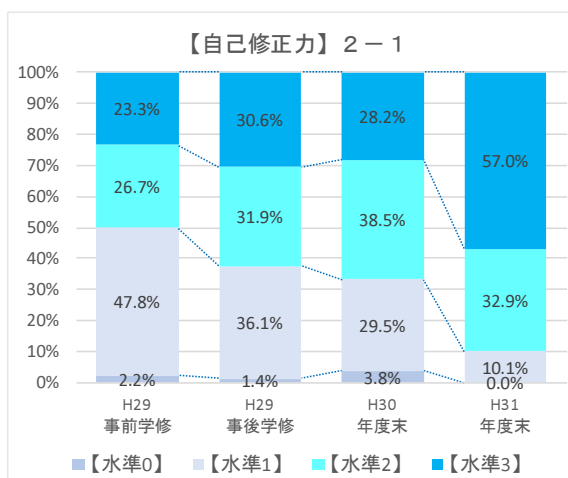


図 2 自己評価結果の経年変化（自己修正力）

【自己修正力】2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

【水準3】

- ・常に自分の行動は良かったのかを考えることができていると思う。そして、他人の行動を見て自分ならどうするかや、よいと思った行動を自分の中に取り入れて実践してみたりすることができていると思う。
- ・就活などでより多くの人と触れ合う機会が増え、コミュニケーション能力に長けた他大学の学生などから刺激を受けている。結果的に、本を読んだり、話を論理的にまとめる工夫をしたりするようになりました。
- ・留学先でいろんな人と話をし、それを基に自分の価値観を客観的に見つめることができた。
- ・友人の就活での話を聞き、そこから自己について理解を深めている。
- ・人の考えを参考にして考えているが、理解は難しい。
- ・人の振り見て我振り直せを実践するよう心がけている。
- ・アルバイトで部下をコントロールした
- ・シャーロックホームズを読み、日常の様々な場面でよく観察するようになったりした。
- ・リーダーの動きを見ながらサポートに回ったため。
- ・人の意見を素直に聞くようにしているから。
- ・OB訪問などで勉強になることがたくさんある。
- ・自分の性格や考え方の欠点を理解した上で、それを人前に出さないよう努力している。
- ・留学先で様々な人に会い、コミュニケーションを取ることで、自分の価値観について深く考えることができた。
- ・大学内の部活動や課外活動を通して活動し、また海外に出て様々な経験を積む中で色々な個性を持つ人と会うことができ、その中で自己修正していくことができていると思う。
- ・チームマネジメントを頑張っています。
- ・多角的な視野が身についた。
- ・発言内容が適切であったか、言い方に語弊が無かったかを他の人と比較しながら振り返っている。
- ・多様な価値観に触れることができたため。
- ・他者のアドバイスに耳を傾けられた。
- ・常に周りの友達や知り合いの意見を聞くことを大切にしているから。
- ・研究室の先輩方の研究への姿勢を参考に、自分の姿勢を見直した。
- ・家族や友人の考えを参考にしているから。
- ・周りの人に影響を受けやすいため。
- ・就活等でさまざまな学生、社会人と出会う機会があり、そのたびに自分を見つめ直していた
- ・研究成果報告会などで積極的に発言する人を見て、自分も必ず1回は質問することを心がけ、それを概ね実践できているから。
- ・自分の行動を見直すことができたため。
- ・他の人の意見を（相手の年齢や立場によらず）受け入れ、自分の意見を改善できていると感じているから。
- ・他のメンバーの意見を積極的に聞いた。
- ・自分の考えに固執することなく周りからの意見を取り入れ改善しようと努めているから。
- ・他人の良いところを自らの行動に取り入れるということを意識して行っている。
- ・就職活動中、他の学生の行動を参考にすることがあった。
- ・期限内に終わりそうにないタスクを分担して協力してもらうように頼んだ。
- ・自分と異なる考え方や行動に出会った際に頭ごなしに否定するのではなく、自分なりに咀嚼した上で、良い部分を見習うようにしているため。
- ・研究室のメンバーからの行動を参考に、一人で研究に打ち込むより頻繁に先輩や先生からのフィードバックを貰うよう心がけた。
- ・どんな意見であれ、最後まで相手の話を聞こうとするように心がけるように変化した。

- ・就職活動における自己分析をきっかけとして、内省することが多い年であった。自分の至らない部分を見て嫌になることも多くあったが、他の人と協力する中で他人の考えを理解し、また、自分の考え方を改めたらすることができたと思う。
- ・積極的に外に出て、いろいろな研究者と交流している。

【水準2】

- ・他人の積極的な行動を見習い、自分も努力しています。
- ・特にゼミにおいて、様々な批判的意見を耳にし、また求められるようになった。それら一つひとつについて批判的立場に立って考えるようにしている。
- ・心から尊敬している人たちが多くいて、自分もそのようになりたいと思うことは多々あるが、実際にはあまり行動を起こせていない。
- ・他人の行動や発言に納得がいかなかった場合に衝突を恐れずにその理由を聞き、自分の想定との違いを考えるようにした。
- ・人の意見をよく聞くようにしている。
- ・仲間と一緒に何かを進めようとする際、考え方や価値観ややり方の相違はあるため、理解しようとするこ
- とによって客観的に自分を見ることもできたと思います。
- ・特に意識してなかったが、周りに言われた。
- ・自分の弱点を改善するための取り組みを行っている。
- ・自分や他者が他人からどう見られているかということを意識した1年だった。
- ・他人の考えに理解はできるものの、自分の意思をすぐには変えられない。
- ・他者の意見を尊重すること。
- ・周りの人のよいところを見つけ、自分に足りない部分を見つけるようにしているため。
- ・留学先の友人や現地で出会った日本人社会人、帰国後の新しいゼミ仲間など、新しく出会った他者の優れている能力や考え方を見つけ出す意識は付いているが、それを自分の現状に落とし込むことはまだ十分できているのは言っていないから。
- ・海外研修で異文化に身を置いたことで、価値観の刷新を図れた。
- ・友人など、様々な人の意見を聞きながら、卒業論文や就職活動など様々なことに立ち向かおうとしている。
- ・サークル活動において実感する場面があったから。
- ・見直してはいるが、改善にまではいたっていない。
- ・すべて自分でしたほうが早い。
- ・研究室では同じ研究室のメンバーで過ごす時間が長くなるため、自分以外の人の考えや行動を理解するのに努めた。
- ・一人でいることが多く、振り返りの時間が多かったから。
- ・自分とは違う考え方をする人の話を聞き、様々な角度から問題を見つめることができたため。

【自己修正力】2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

【水準3】

- ・自分の苦手なことに関して、その分野が得意な人を見習うことで上達できるので、広い視野で周りを見渡すことができていると思う。
- ・4回生の卒業論文も視野に入れ難しい本であっても読み漁っている。
- ・コミュニケーションを積極的にとっている。
- ・自分の苦手分野を早めに見つけ、それを克服する方法を考え実践している。
- ・引込み思案な部分を克服し、留学し語学力を伸ばした。
- ・研究を始めるにあたって満足に取り組めるよう基礎知識を万遍なくつけるため。
- ・得意な英語力を伸ばし、苦手な中国語の勉強も進めているため。
- ・大学内の部活動や課外活動を通して活動する中で、率先して自分の苦手なことに挑戦して苦手を克服することができている。

- ・得意分野を伸ばし苦手意識を払拭できた。
- ・好きなことは妥協せず苦手なことも逃げないように心がけている。
- ・理系人の価値観に触れることが出来たため。
- ・部活動では自分の不十分な点を分析し、改善に向けて努力できた。
- ・負けず嫌いな自分の性格が、長所にも短所にもなるため、多くの場面で長所として活かせるように日々工夫をしている。
- ・人前での発表が苦手であったが、プレゼンテーションを積極的に行うことで苦手意識を克服した。
- ・苦手分野を意識して直そうとしたため。
- ・英語のスピーキングが苦手であるが、カナダの友人とチャットをしている。
- ・自分の能力を把握し、不足部分に関しては学修できているから。
- ・自分についてある程度理解し、できないことをできるように努力してきたと思うから。
- ・ゼミ活動において、今まであまり経験がなかった色々な意見をまとめる役をした。
- ・得意分野であるプログラミング力を伸ばすため、競技プログラミングのコンテストに参加したり、応用情報技術者の資格を取得したりした。苦手であった計画性については、物事を先延ばしにせず早めに取り組むように心がけている。
- ・資格試験に向けて過去3年間で特に苦手だった教科の復習を行った。
- ・積極的に外に出て、いろいろな研究者と交流している。

【水準2】

- ・英語のスピーキング力の向上に繋がる勉強法を模索しています。
- ・就活などのインターンを通してそう思ったから。
- ・得意分野、苦手分野は把握しているがどう伸ばしたら良いのか分からない。
- ・自分の思っていることを言葉にすることが苦手。どう言えば相手によく伝わるのか考えすぎてしまう。
- ・自分の得手不得手な分野はだいたい把握しているので、改善方法をいろいろ試している。
- ・SPI や適性検査を受検したりエントリーシートを書いたりする中で自分と向き合う機会が増えた。その中で「苦労した経験とどのようにしてそれを乗り越えたか」という項目を書くにあたり、過去の克服方法だけでなくこれから立ち向かうべき壁について考えた。
- ・得意分野についての勉強に力を入れているから。
- ・自分の得意と苦手分野を知ることが大事で、活動によって改めて実感していますが、弱いところはまだ他の活動で見られているので模索の段階だと考えます。
- ・専門の数学以外にも、英語やマーケティングについて勉強している。
- ・リスニングが苦手だったので、留学先では積極的に話しかけるなど、苦手克服のために努力したから。
- ・今年度は性格面での長所、短所を認識したので、それが原因でうまくいかない物事については考え方の転換などに努めた。
- ・プレゼンテーションにおいて自分に不足している要素を克服する方法を模索している。
- ・自分の能力を客観的に見れるようになったから。
- ・修正しようと心がけているため。
- ・留学と就活を通し、得意分野や苦手分野、好きや嫌いという自己認識をつける意識をして、以前より自分を知ることではできたが、それを改善していく行動は、まだ模索中であるから。
- ・英語で積極的にコミュニケーションをとった。
- ・就活を通し、得意不得意とそれへの対処法は見えてきた。
- ・苦手を克服できなかったため。
- ・まだ実践まではできない。
- ・得意であるパワポ作成には積極的に参加したが、発表原稿作成などは積極的に行うことができなかったから。
- ・方法は模索しているが生活リズムを変えることができずなかなか実行まで移せていないため。
- ・自らの得意分野や苦手分野を理解することができるようになったと感じるため、それぞれを伸ばすこと、克服することを考えることができるようになったのではないと思う。
- ・人前での発表が苦手なので、代わりに原稿作りを頑張った。
- ・メンバーが集まらないから。

- ・今後の就職活動に向けて、自己分析、自己投資を行っている。
- ・自分の不得意なことを改善することができなかった。
- ・新しいコミュニティに関わる手段を模索しており、それが自己成長にもつながると考えている。

表 3 自己評価結果（課題挑戦力）

【課題挑戦力】

3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

		回答数 (人)	H29 事前学修	H29 事後学修	H30 年度末	H31 年度末
【水準3】	見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。	46	20.0%	30.6%	23.1%	58.2%
【水準2】	見つけた課題を解決する方法を模索している。	24	18.9%	23.6%	34.6%	30.4%
【水準1】	解決すべき課題を見つけることができる。	5	56.7%	44.4%	37.2%	6.3%
【水準0】	水準1に達していない。	4	4.4%	1.4%	5.1%	5.1%

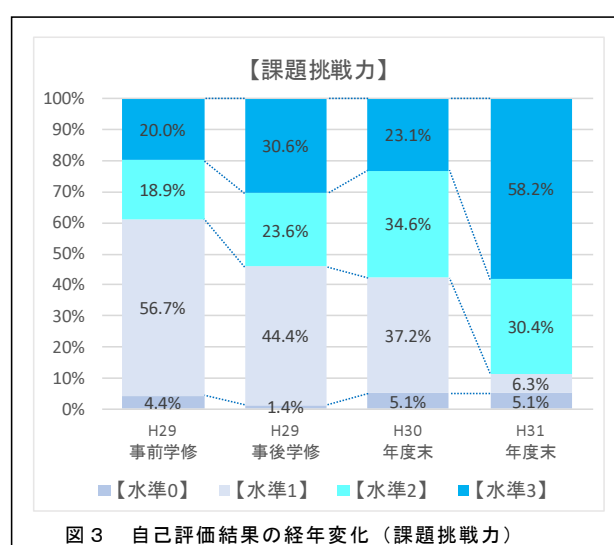


図 3 自己評価結果の経年変化（課題挑戦力）

—水準選択における具体的な説明（水準2・水準3）—

【課題挑戦力】3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

【水準3】

- ・就活などのインターンを通してそう思ったから。
- ・先の質問で回答したが、うまくできている人の行動や考え方を真似して自分の不得手な分野の改善に取り組んでいると思う。
- ・Output 大全という樺沢紫苑氏の本を読み、実行に移している。
- ・自身の語学力向上においてリスニング能力向上という課題を、毎日英語のラジオを聞くことで苦手意識をなくすよう努めている。
- ・卒論の調査に向けて語学を学修したり方法論を学んだりしている。
- ・思ったことを言葉にする練習としてよくノートに言語化している。
- ・課題解決へ取り組み、自分に合った方法を見つけようとしている。
- ・一人暮らしなので、ついダラダラしがちだが、対策をいろいろと試している。
- ・留学中毎日のやることを決め努力した。
- ・研究活動の練習としてわからないことについて色々考えるようにしている。
- ・就職活動において自分に足りない力を養おうと努力しているため。
- ・現在行っている事業の拡大に専念している。

- ・試験に向けて自分の苦手科目を認識し、目標を立てて、苦手をなくせるように毎日取り組んでいるから。
- ・大学内の部活動や課外活動を通して活動する中で、社会の中にある課題に微力ながら挑戦し、解決に向けて取り組むことができています。
- ・実際に様々な人と話しています。
- ・課題については洗い出せているので現在は解決に向けて取り組んでいる。
- ・課題を発見し、それを解決しようと動いている。
- ・現場で自分の目で見る経験を積んだから。
- ・課外活動やゼミ活動において達成できたと思うため。
- ・就活のグループワークの時に取り組めたから。
- ・大学院に進学後、交換留学にいくために受け入れ先との交渉や、奨学金などの問題を解決するために取り組んでいる。
- ・留学中の授業での討論で、主体的に参加できていない状態から、目標を決めてそれに対する現状のギャップを洗い出し、その解決に努力した。
- ・資格試験のために、教材を買い、学修を進めている。
- ・就活で見つけた課題を克服しようとしているところ。
- ・実権でうまくいかない度に自分で考える、もしくは先生・先輩・同期に相談して解決策を考え、何度もチャレンジし続けられていると思うから。
- ・自分の見つけた課題を友人と相談して解決方法を模索し、編み出した方法を実践できているから。
- ・課題を見つけたらすぐに解決策を考えるようにしていた。
- ・外部の学生との交流で英語の必要性を感じたため、今取り組んでいる。
- ・課題解決の方法を見つけたらそれを実行し改善に向かおうとしているため。
- ・就職活動中に、どんな時も明るく振る舞う努力をした。
- ・卒業研究では、与えられた課題ではなく、自らが発見した課題について取り組んでいるため。
- ・研究室の書籍を読み、先生と相談しながら音響分野の課題を発見し、論文のテーマとした。
- ・研究などでは考えるだけ(してるつもり)で終わらず、実際に行動するようにしている。
- ・課題が多い年であったが、そのどれともうまく付き合えたと思う。
- ・他者に理解しやすい構造の作成が課題だと考え、出来る限りシンプルかつ具体的な説明を心がけている。しかし構造の骨子だけでなく肉付けも行うとどうしても負担が大きくなるため、それらも平易に理解しやすい表現を探している。
- ・数学の勉強をしている中で疑問に思う箇所があったとき、本で調べたり人と議論したりして疑問を解消しようと努力している。

【水準2】

- ・活動を通して見つけた自分の苦手な部分を克服しようとしています。
- ・卒論について漠然とした問題意識を模索しつつも、それを明確化できてはいない。
- ・まだ実行まで至っていない。
- ・失敗できるのは学生のうちと割り切って思いつく限りのあらゆる手段でアプローチすることにした。
- ・発表が苦手なのでよく練習をしている。
- ・困難にあった時にうまくいかないときもまだあります。
- ・計画的に課題解決に向かっているから。
- ・自己成長のために必要だから。
- ・テーマにおける課題について、他の人の意見も取り入れて解決した。
- ・まだ解決手段については模索中である。
- ・課題解決の方法を学修している最中であると考えため。
- ・課題の解決策を模索するが、人の力を借りることも多かった。
- ・部活内での課題を見つけ、解決に向けて行動することができたため。

3-1-4. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化（平成 28 年度参加学生）

平成 28 年度参加学生に対しても平成 29、30 年度参加学生と同様に、ルーブリック指標による自己評価を、教務システムの機能を利用して実施した。ルーブリックによる自己評価結果は、表 1～3 のとおりである。

また、それぞれに関するプログラム参加年度（事前学修時・事後学修時）、参加 1 年後、参加 2 年後、参加 3 年後（卒業年度）の自己評価結果を比較した図が図 1～3 である。プログラム参加後も引き続き調査を行い、学生自身に、言動を振り返り自己を見つめ直す機会を与えることで、力の伸びが目に見える形になっている。

3 つのチカラ（「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」）に共通して、参加 1 年後では「水準 2 以上」の評価が一旦低下するが、参加 2 年後及び参加 3 年後では再び上昇している。「水準 3」の割合は、「2-2：自己修正力（得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する）」を除くと、これまでのルーブリック評価の中で最も高い結果となっている。

なお、「苦手分野の克服」のみ、参加 3 年後の「水準 3」の割合がプログラム参加直後よりも低い水準となった要因としては、プログラム参加直後は、英語等の語学力に課題を見出している学生のコメントが多く、課題が比較的明確で、克服に向けての意識が非常に高いことが挙げられる。他方で、参加 1 年後以降、プログラム参加直後の自己評価よりも低下しているのは、年次進行に伴い、学修内容についてより深い専門性とより高い水準の理解・考察能力が求められていると認識し、自己をより厳しく評価していることの表れであると考えられる。プログラム参加直後の「水準 3」の割合には達しなかったが、参加 1 年後以降、「水準 3」の割合が徐々に増加していることから、入学直後とは異なる大学生活における個々を取り巻く様々な状況の変化に応じ、学修が深化したり、学内外での活動内容・活動範囲が広がったりと、学生の成長が伺える。

①チームワーク力

参加 3 年後において「水準 3」と回答した学生は、平均 43.4%（1-1：42.6%、1-2：44.1%）であった。（R1 目標値：30%）また、参加 3 年後において「水準 2 以上」と回答した学生は、平均 89.0%（1-1：88.2%、1-2：89.7%）であった。（R1 目標値：75%）「サークル活動を通じて、すべてを自分でやるのではなく、自分が得意なことで周りの人が得意なことを俯瞰的に見るができるようになり、自分は自分の得意なところで力を発揮することができた。」「ゼミ活動における論文発表会では、論文執筆を皆で協力して行い、大会ではプレゼン役を務めるなど十分に力を発揮しながら、周囲と協力して努力し、目標だった優秀賞を受賞した。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の 3 年後も引き続きチームワーク力を高めていることが窺える。

②自己修正力

参加 3 年後において「水準 3」と回答した学生は、平均 41.9%（2-1：50.0%、2-2：33.8%）であった。（R1 目標値：30%）また、参加 3 年後において「水準 2 以上」と回答した学生は、平均 83.1%（2-1：88.2%、2-2：77.9%）であった。（R1 目標値：75%）「自分の周囲の人の考えやインターネットを通して知った物事の見方、価値観を見かけた際に、自分の考え方との相違点や共感できる点などを比べ、それらを踏まえて自分の考えを日々アップデートするような感覚を持てるようになってきた。」「苦手と思っていた人前でのスピーチを教えるボランティアに参加して、意外とそこまで自分は人前で話せないわけではなく、話す機会が今まででなかっただけということに気づき、自分を変えることができた。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の 3 年後も引き続き自己修正力を高めていることが窺える。

③課題挑戦力

参加3年後において「水準3」と回答した学生は、58.8%であった。(R1 目標値：30%) また、参加3年後において「水準2以上」と回答した学生は、85.3%であった。(R1 目標値：75%) 「卒業論文の作成において、自分ではわからない問題や大学内では解決できない課題にも果敢に挑戦した。行政や法人にも協力を求め、精一杯、課題の解決に向けた努力ができている。」「社会人として求められる、誰とでもスムーズにより友好的な関係を築く力や、相手と対等にさまざまな交渉を行う力がまだまだ自分には不十分だと感じ、それを少しでも身につけようと行動している。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の3年後も引き続き課題挑戦力を高めていることが窺える。

表 1 自己評価結果（チームワーク力）

【チームワーク力】 ※H28事前・事後学修時のデータは、旧ループリック指標の「チームワーク力」の数値（1-1, 1-2共通）

1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

		回答数 (人)	H28 事前学修	H28 事後学修	H29 年度末	H30 年度末	H31 年度末
【水準3】	チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。	29	3.6%	14.4%	25.9%	35.5%	42.6%
【水準2】	活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。	31	38.4%	62.9%	28.7%	34.5%	45.6%
【水準1】	活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。	5	53.6%	22.7%	40.7%	25.5%	7.4%
【水準0】	水準1に達していない。	3	4.5%	0.0%	4.6%	4.5%	4.4%

1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

		回答数 (人)	H28 事前学修	H28 事後学修	H29 年度末	H30 年度末	H31 年度末
【水準3】	メンバーと協力し、チームの目標を達成している。	30	3.6%	14.4%	19.4%	32.7%	44.1%
【水準2】	メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。	31	38.4%	62.9%	37.0%	38.2%	45.6%
【水準1】	メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。	4	53.6%	22.7%	36.1%	24.5%	5.9%
【水準0】	水準1に達していない。	3	4.5%	0.0%	7.4%	4.5%	4.4%

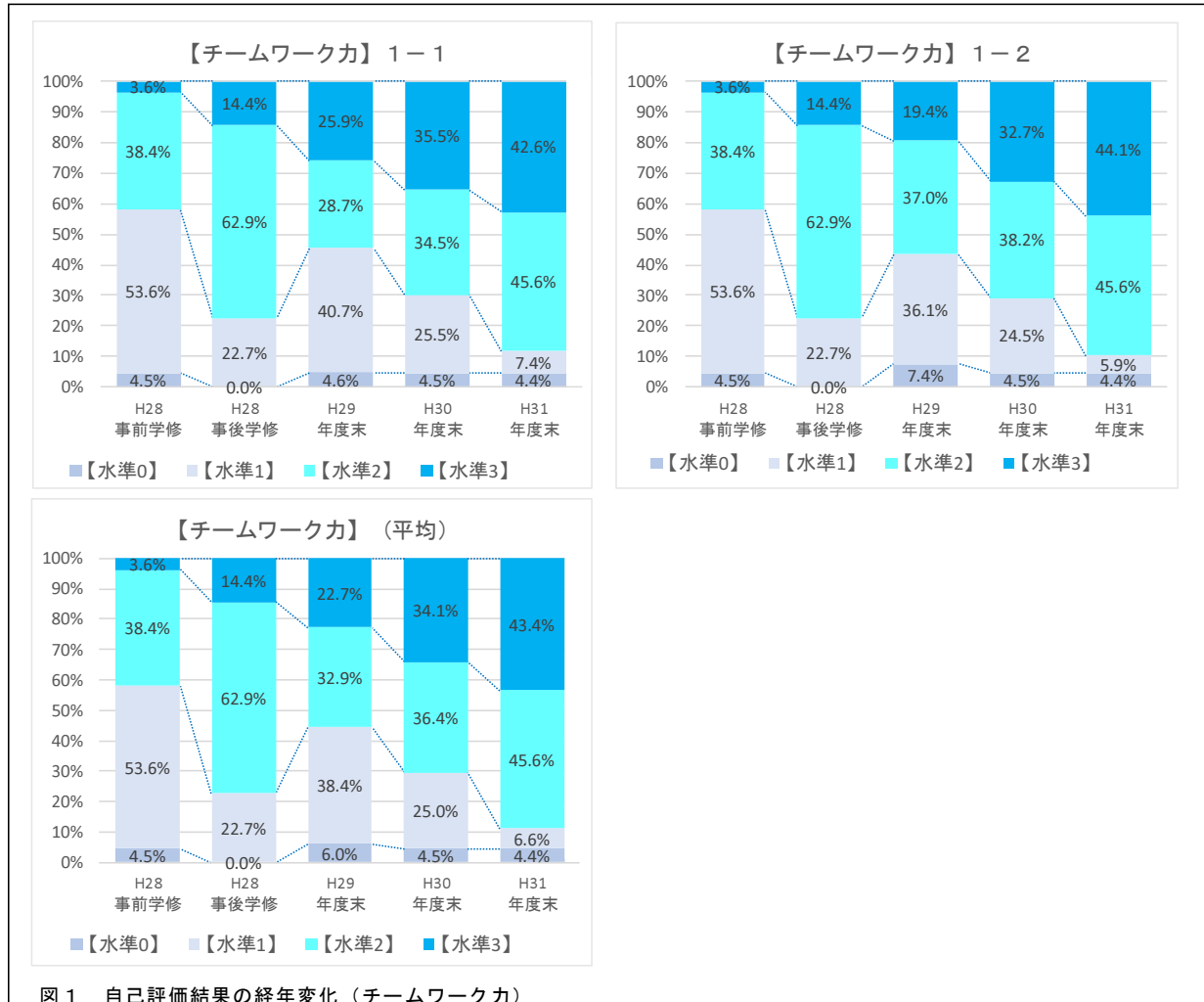


図 1 自己評価結果の経年変化（チームワーク力）

【チームワーク力】1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

【水準３】

- ・様々な活動・コミュニティがある中で、それぞれにおいて上手くコミュニケーションを構築できている。
- ・部活動においてリーダーとしての役割を考え行動・発言できたと考えている。その上で、本番での充実した活動ができた。
- ・与えられた課題に対して即席のチームで解決に尽力するため自らまとめ役を買って出て課題に対する回答を簡潔にまとめたこと。
- ・ゼミ活動において、複数人でのディスカッション時の議論を展開し、話の争点の整理、結論をまとめるなどの経験を積んで、自分の役割をこなし、少しでも成果に結びつける力を伸ばすことができたと感じたから。
- ・いろいろなことにチームワークを意識して取り組めた。
- ・サークル活動を通じて、すべてを自分でやるのではなく、自分が得意なことで周りの人が得意なことを俯瞰的に見ることができるようになり、自分は自分の得意なところで力を発揮することができた。
- ・周りの状況をよく観察して、理解して行動することを意識するようになった。
- ・初めての海外経験で、自分の価値観に変化を与えた。
- ・チームの中で自分がどのような役割をするべきか考えるようになったから。
- ・ゼミでのグループ発表で自分の役割を遂行した。
- ・留学中はチームで活動することはあまりなかったですが、帰国後のアルバイトなどで、集団の中で自分の立場から自分が何を求められているか考えて行動している。
- ・部活動(演劇部)の部長として団体を牽引し、公演を成功させると共に、部内の問題などにも真摯に取り組んで解決のための話し合いを重視した。
- ・常に自分の役割と周りのタスクを意識し、その結果が良いものになることが多かったから。
- ・ゼミ活動で自分の役割を考え、活動できたと思うから。また、就職活動でもそのような旨を自信を持って話せたと思うから。
- ・部活でリーダーを務めた。
- ・所属している団体内で課せられた課題を遂行したことにより団体内での目標の達成に近づいた。
- ・しっかりとグループの中の意見をまとめることができた。
- ・チームをまとめられるようになった。
- ・部活動において、最上級生として後輩の指導やチームの方針の統一等に取り組み、結果としてチームを３年ぶりのリーグ戦優勝に導いた。
- ・ゼミ活動の運営に対し、積極的に関わることができた。

【水準２】

- ・場によっては成果に貢献できていると思えないときもあるため。
- ・自分が何をすればいいかを考えて行動できるようになった。
- ・チーム内での自分の立場を意識し、役割を担っている。
- ・以前より発表できる力が付いたと感じるから。
- ・サークル活動において、その発展と向上に副キャプテンとして尽力できたから。
- ・結果に貢献できたかは定かではないが、ゼミでの共同論文や友人とのテスト勉強、海外旅行などにおいて、果たすべき行動はしてきた。
- ・ゼミ内において最低限やるべきことはやっていると思うから。
- ・ゼミ活動において積極的に意見を述べ、ゼミの議論に活性化を加えた。
- ・積極的に発言することを心がけていたから。
- ・大学の授業でグループワークの話し合いをするときに積極的に自分の意見を述べるようにしている。
- ・GCP の経験が部活動に活かしました。
- ・上回生としてのやるべきことは果たした。

- ・以前よりは積極的になったから。
- ・チームのほとんどはやる気がない。
- ・積極的に意見を言った。
- ・積極的に発言した。
- ・自分の役割に基づいた発言、行動は幼い頃から意識しており今更である。
- ・就職活動においてグループワークを初対面の学生と行った際、積極的に発言しチームの雰囲気を良くすることに尽力出来たから。
- ・卒論ゼミで客観的な意見を提供しよう心がけ、互いの卒論の質を高められるよう努力した。
- ・チームメンバーによって自分の役割を使い分けた。
- ・長期で参加したインターンシップにおいて、自分が果たすことのできる役割を意識し、行動できたから。

【チームワーク力】1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

【水準3】

- ・最終目標に対してどの場所でも最低ラインはこなせていると感じているため。
- ・自分の役割を意識し、責任をもって仕事に取り組んでいる。
- ・副キャプテンとしての役割を全うした。
- ・サークルを体育会に入会させるためみんなで協力できた。
- ・サークル活動で、メンバーと高め合うことや力をかりること、そして協力することで大会で目指していた結果を出すことができた。
- ・サークル活動において日々のトレーニングから各々の目標を達成した。
- ・チームメンバーの意見を尊重し最終的に全員が納得する形で目標を達成できたから。
- ・留学先でのグループワーク等に精力的に取り組んだ。
- ・GCP の経験が部活動に活かしました。
- ・ゼミ活動における論文発表会では、論文執筆を皆で協力して行い、大会ではプレゼン役を務めるなど十分に力を発揮しながら、周囲と協力して努力し、目標だった優秀賞を受賞した。
- ・役割分担の大切さを知ることができたから。
- ・部活動において実行できた。
- ・六甲祭に出店した際、以前役割分担をして、チーム全体で取り組めたと思うから。
- ・所属している団体のメンバー内でタスクを分担し、お互いに協力し合いながら目標の達成に貢献した。
- ・学生連盟で実行委員長として大会運営にあたり、メンバーの役割を決め、それぞれとコミュニケーションをとりながら大会の成功に導いた。
- ・ゼミ活動の中で、ゼミ生と協力し共同論文の執筆ができた。
- ・活発な議論を持つことができ、有意義な時間を持てた。
- ・インターンシップで、メンバーと一緒に目標値を追いかけ、達成できたから。

【水準2】

- ・各メンバーに配慮することを心がけていた。
- ・ゼミでは人の意見を聞き、まずは議論し、その後皆が納得する形を作り上げることができている。
- ・部活動において、メンバー相互のコミュニケーションを密に図り、明確な目標を目指して活動できた。
- ・様々な意見を否定する前に受け入れて、グループで検討したこと。
- ・メンバーで協同する機会も多かったから。
- ・目標を達成できなかったこともあったが、コミュニケーションを大切にチームと協調した。
- ・メンバー間で積極的にコミュニケーションをとることを以前より意識するようになり目標達成に近づくよう行動しているから。
- ・相手の意見を聞くようにしているから。
- ・協力するところは協力していると思う。しかし、そもそも明確な目標があるような活動をしていない。
- ・大学の授業や実習で、みんなで協力して、課題を達成しようと自ら努力した。

- ・人の話を聞くことを意識したから。
- ・意見の尊重、尊敬からチームワークが始まると思うため。
- ・大学の授業でグループワークの話し合いをするときに他の人の意見に相槌や肯定の反応をするようにしている。
- ・チームで動く際には周りの考えをよく聞くようにしている。
- ・一歩引いた目線から意見を考えることで、感情的にならないようにしている。
- ・部活で役割を発揮できたから。
- ・他の人の意見も尊重した。
- ・意識したから。
- ・ゼミ長としてゼミ生をまとめている。
- ・この類のことは幼い頃からしている。
- ・サークル活動において、たとえ先輩であっても気を遣われないように意識しながら、居心地の良い雰囲気づくりを目標としているから。
- ・チームメンバーの意見を聞き出し調整した。

表2 自己評価結果（自己修正力）

【自己修正力】※H28事前・事後学修時のデータは、旧ルーブリック指標の「自己修正力」の数値（2-1, 2-2共通）

2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

		回答数 (人)	H28 事前学修	H28 事後学修	H29 年度末	H30 年度末	H31 年度末
【水準3】	自分以外の人の考えや行動を参考にして、 自分の考えや行動を見直している。	34	13.4%	34.0%	25.0%	47.3%	50.0%
【水準2】	自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の 見直すべきことについて理解している。	26	49.1%	51.5%	34.3%	20.9%	38.2%
【水準1】	自分の考えや行動について認識している。	5	35.7%	14.4%	34.3%	27.3%	7.4%
【水準0】	水準1に達していない。	3	1.8%	0.0%	6.5%	4.5%	4.4%

2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

		回答数 (人)	H28 事前学修	H28 事後学修	H29 年度末	H30 年度末	H31 年度末
【水準3】	自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を 克服するための実践を行っている。	23	13.4%	34.0%	14.8%	25.5%	33.8%
【水準2】	自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を 克服する方法を模索している。	30	49.1%	51.5%	33.3%	24.5%	44.1%
【水準1】	自分の得意分野や苦手分野について理解して いる。	11	35.7%	14.4%	44.4%	46.4%	16.2%
【水準0】	水準1に達していない。	4	1.8%	0.0%	7.4%	3.6%	5.9%

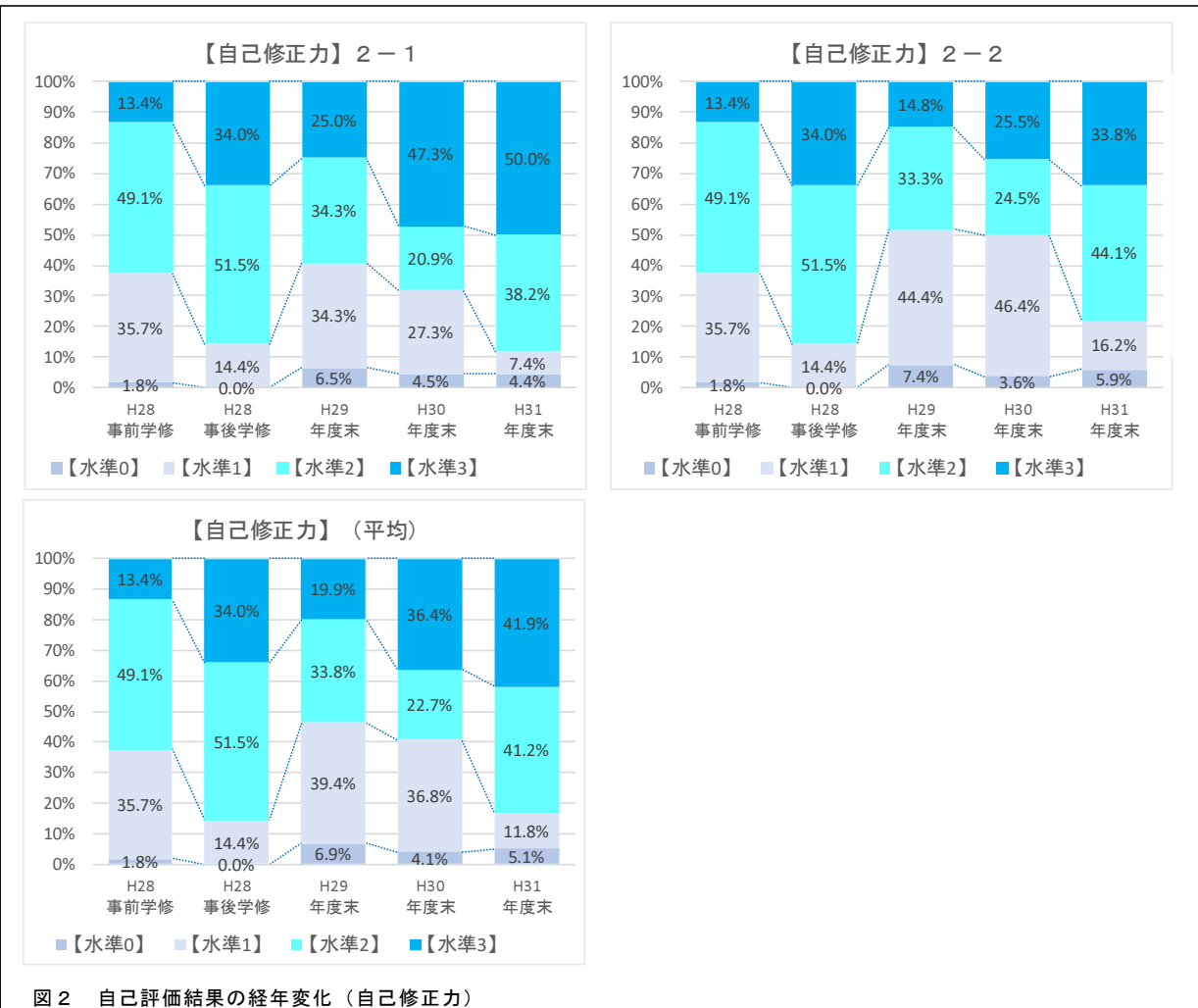


図2 自己評価結果の経年変化（自己修正力）

—水準選択における具体的な説明（水準２・水準３）—

【自己修正力】2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

【水準３】

- ・人の考え・行動を見て、自分の中でよりよくできる部分がないかを考えている。
- ・部活動において、先代のリーダーや他団体のリーダーを参考にし、自分なりのリーダーとしての役割を果たそうと心掛けている。また、周りのメンバーに指摘されたことや、求められたことを受け入れることができた。
- ・他人からの意見を参考にし、自らの行動を変革しようと努めた。
- ・自分の周囲の人の考えやインターネットを通して知った物事の見方、価値観を見かけた際に、自分の考え方との相違点や共感できる点などを比べてみたりなどし、それらを踏まえ自分の考えを日々アップデートするような感覚を持てるようになってきたから。
- ・常に周りに感謝をもって生活できた。
- ・実習では、自分の考えがすべてではないことを、患者さんとの関わりの中で気づき、常に配慮するようにした。海外で、当然が当然でないことを痛感して、意識するようになった。
- ・卒論において、自制し、他人の意見をよく取り入れられた。
- ・他人に対してどうしてそのように考えたのか？を考えるようになったから。そしてそれを参考にし自分の行動を改めるようにしている。
- ・留学中に多様なバックグラウンドをもつ人と交流した。
- ・後期からの交換留学で周りの生徒から刺激を受けて、予習復習など授業を受けるための準備をするようになった。
- ・怒られた際はしっかり反省し行動を見直している。
- ・就職活動では、何度も同期や社員の方とお会いし、自分の課題や、長所短所を見極めて、自分を見つめ直しながら、充実した日々を過ごした。
- ・自分が正しいと思ったことはない。周りの意見を聞くことを大切にしているから。
- ・自己に振り返って考えることができた。
- ・留学を通じて国内外の友達に恵まれたので、日々スカイプ等を通じて話すことで自分の考えなどを改めて向き合っていると感じたから。特に今年は、就職活動で自分の話をする機会も多かったので、他者の意見を参考にし自分について考えられたと思う。
- ・目上の人に対して自分を含んだ同回生はコミュニケーションが取りにくい状況にあり、研究室内での雰囲気が決して良いとは言えなかった。そのため今度は後輩に対して自ら話しかけ相談しやすい雰囲気を作ることを心掛け、行動に移している。
- ・部活において声を出して全体を盛り上げている人を見て、自分もそのような行動をとるなどチーム全体への好影響を考え行動した。
- ・大学に入ってから、人の意見・特に親の意見はかなりの的を射ていることを感じて、自分の決断を変える場面がたくさんあった。
- ・ゼミ活動で他者の意見を尊重した意思決定をすることが多かった。
- ・日頃から他人の長所を取り込めるよう努力しているつもりである。
- ・自分の行動の良い点、悪い点を見直し、次の行動に反映できるように意識しているから。

【水準２】

- ・まだ修正できない自分の癖を把握しているため。
- ・人からのアドバイスなどは聞くようにした。
- ・人と話す中で他者の良いところ・悪いところを意識して自分に落とし込む機会を作っている。
- ・友人知人との対話、第三者との関わりを通して、自分の考え方を見直している。
- ・就職活動の際、自己分析や他己分析を行う中で自分を見直すことができたから。
- ・自己修正を心がけているから。

- ・自分よりも優れた人にであって落ち込んだり、意見がかみ合わない人とであって苦勞したりした経験から、人の意見を聞く力が鍛えられ、受け入れる幅が広がったと思う。
- ・自分の改善したい点はあるが改善に至っていないから。
- ・周りに気を配ることを意識したから。
- ・人の嫌な所は、反面教師にする。
- ・参考にするのと理解するには個人の価値観が重要であると考えている。
- ・自分では思いつかない意見を聞き、フレキシブルであることの重要性を知った。
- ・ゼミで活動する中で行っている。
- ・意識して観察した。
- ・他人から多くを学んだ。
- ・他者の発言を通して、自分に当てはめて考えた。
- ・文化的差異に気を付けた。

【自己修正力】2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

【水準3】

- ・自分の学修した専門領域としての政治学(政治理論、政治哲学など)について英語で話せるように、単語や英会話の学修を進めているから。
- ・苦手だと思っていた人前でのスピーチを教えるボランティアに参加して、意外とそこまで自分は人前で話せないわけではなく、話す機会が今までなかっただけということに気づき、自分を変えることができた
- ・ずっと苦手としてきた英語学修に対して、明確な目標ができたことで、継続して取り組んでいる。
- ・自分の場合内向的になりやすいので、外向的になるよう気をつけている。
- ・部活動などで、フィードバックを受ける機会が多かったため。
- ・得意分野として英語がある。これは、アメリカ人、ベルギー人などの友達と定期的に会ったり、連絡を取り様々な話をしたりすることや、英語で論文を読むなどして現状維持、また英語力を伸ばすことを目指している。また、知識に偏りがあることが気になっていたのも、様々な分野の本や、新聞を読んだ。
- ・得意分野はわからない。しかし、苦手なことを得意にするため、時間を見つけては練習したり他者にアドバイスをもらったりするようにしている。
- ・部活において得意な分野として後輩への個別の声かけなどのコミュニケーションをとること意識し、苦手な分野として意見がぶつかっても主張するなどを意識して取り組んだ。
- ・英語の苦手意識を克服するため、勉強をして交換留学にいった。
- ・スケジュール管理を行い、勉強時間を確保して実行している。
- ・自分の得意分野を伸ばす為、第三者に客観的に見てもらいアドバイスをもらっているから。

【水準2】

- ・得意分野をどう生かし、苦手分野をどうしていくか、まだはっきりと道筋が見えていない。
- ・自分の得意・不得意は理解しており、それに基づいて行動している。
- ・就職活動において、周りに協力を求めながら工夫して自己分析を行い、弱みと強みを明確にした。さらに、特に弱みの克服に向けての方法を模索している。
- ・苦手な分野は手をつけがたいものであるが、まず、面白がってみることで始めてみようとしている。
- ・プレゼンの練習→実践をゼミ活動などで行っている。
- ・変わらなければならないと感じ、その方法を模索している。
- ・自分自身、英語が苦手だが現在、TOEIC 対策を必死に行っている。
- ・わからないことがあれば、人の意見をもらうようにできるようになった。
- ・得意分野は集中できるが、苦手は避けがちで飛ばしてしまうことも多かった。
- ・自分の強みを理解することに努めたから。
- ・自分は何が得意で何が苦手なのかまだ探している途中であるから。
- ・積極的に教授に質問するようになった。

- ・得意分野としては、コツコツと努力することで、留学に来てからも英語の勉強を続けている。私は人見知りでスピーキングが苦手だけど、一日に最低一回は人に話しかけるようにしている。
- ・自分の長所と短所は何か書きだして考えた。
- ・弱い部分を考えるようになりました。
- ・大学で周囲と関わるなかで、周りとのコミュニケーションに悩むことが多かった。色々試みたがいまだに短所として認識している面も多い。
- ・できている部分とまだできていない部分がある。
- ・苦手分野に関する克服はあまり行わず、得意分野の研究（専門）をより深めていった。
- ・苦手を見つめた。
- ・苦手分野の克服が難しい。

表 3 自己評価結果（課題挑戦力）

【課題挑戦力】※H28事前学修・事後学修時のデータは、旧ルーブリック指標の「課題挑戦力」の数値

3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

		回答数 (人)	H28 事前学修	H28 事後学修	H29 年度末	H30 年度末	H31 年度末
【水準3】	見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。	40	5.4%	29.9%	23.1%	31.8%	58.8%
【水準2】	見つけた課題を解決する方法を模索している。	18	22.3%	42.3%	27.8%	28.2%	26.5%
【水準1】	解決すべき課題を見つけることができる。	7	67.0%	27.8%	42.6%	34.5%	10.3%
【水準0】	水準1に達していない。	3	5.4%	0.0%	6.5%	5.5%	4.4%

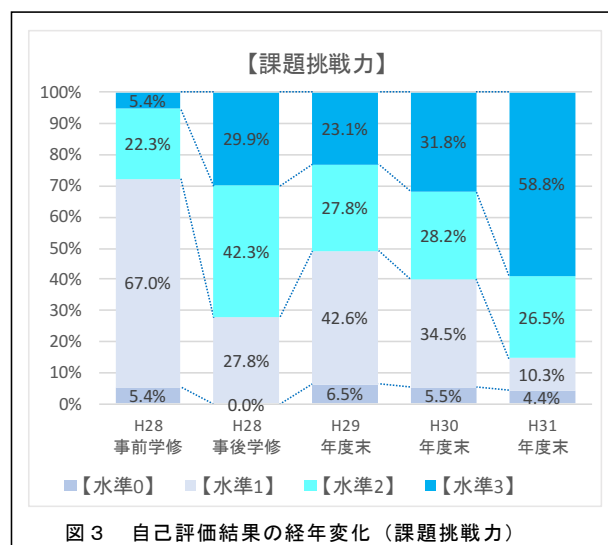


図 3 自己評価結果の経年変化（課題挑戦力）

—水準選択における具体的な説明（水準2・水準3）—

【課題挑戦力】3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

【水準3】

- ・身近な課題であれば、解決に向けた努力をできると感じている。大きな課題に関してはまだまだだと感じる。
- ・大学生活における課題を理解し、それに対するアクションをとっている。
- ・卒業論文作成において、自分ではわからない問題や、大学内では解決できない課題にも果敢に挑戦した。行政や法人にも協力を求め、精一杯課題の解決に向けた努力ができている。
- ・課題設定した分野に関して、自ら資料を集め、大切な場面を抜粋しまとめ卒論制作に取り組んだこと。
- ・課題を見直す努力をしている。
- ・TOEICの点数を上げるため、あらゆる方法で点数を伸ばそうとしている。
- ・社会人として求められる、誰とでもスムーズにより友好的な関係を築く力や、相手と対等にさまざまな交渉を行う力がまだまだ自分には不十分だと感じ、それを少しでも身につけようと行動しているから。
- ・課題について取り組んでいるから。
- ・達成したことや、よかった部分を振り返ることも大事だが、課題があることも考えながら物事に取り組んだ。
- ・卒論において、思った課題は何を改善すればよいか模索できた。

- ・課題から逃げても未来はないから。
- ・生活の中で常に解決すべき課題がないか探している。また見つけた時は解決をはかっている。
- ・卒業論文に向けた研究で自主的に情報収集を重ねた。
- ・最近受けた就活の面接で、私がやりたいことの理由ははっきりしているけれど、どのように実現するかの方法については具体性がないと気づいた。そこで、卒論のためのリサーチも兼ねて、具体的な解決策についても情報を集めている。
- ・留学経験で課題解決力は培われたと思う。
- ・現状維持であると考えます。
- ・コミュニケーション能力や人脈の狭さを感じ、多くの人と話す活動を公私ともに意識して取り組んでいる。
- ・自分ができることをやらないと気が済まないタイプだから。
- ・時間を見つけて勉強することができている。
- ・機能主義的な思考を持っているから。ちなみにこのような考えが正しいとは限らない。
- ・時間をかけてどうすれば問題を解決できるか考えている。
- ・部活動において自分がミスしてまうプレーやチームとして上手くいかない点に向き合い改善に努めた。
- ・苦手な映画を克服するため、オンライン英会話に留学とできることはすべてやったつもりです。
- ・ゼミ活動を通した卒業論文で自ら課題を設定し、取り組むことができた。
- ・就職活動において常に妥協せず、行動することを惜しまなかった。
- ・時間管理ができている。
- ・様々な情報を集める。
- ・毎回、改善策を書き出し、解決できる様に取り組んでいるから。

【水準2】

- ・やらなければいけないことはわかっているが続かないことも多い。
- ・ゼミ内での発表を客観的に見直し修正を加えている。
- ・課題を見つける力は身についたと感じている。
- ・課題の解決方法を模索し行動に移しているところ。
- ・この一年間自分を高めるための留学プランを一から自分で考えて活動できたから。
- ・大学生活の中で見つけた課題を残してしまっている。
- ・特別なことは行っていないが、最低限それくらいはやらないといけないしやっているだろうと思うから。
- ・様々な活動を通じて、課題を解決しようと考えていたと思うから。
- ・自分で何が課題なのかを考えるようになった。
- ・課題がたくさん見つかった。

3-2. プログラム参加後のアンケート結果

令和元年度に実施した 16 コースの参加学生を対象に、コース内容の満足度や学修成果等に関するアンケートを実施した。学修支援システム BEEF を利用してアンケートを実施し、プログラムに参加した学生 138 名（複数回参加者を含む）のうち、111 名から回答を得たところである。

◎各設問の集計結果について

・コースについて

コースへの参加理由については、「内容に興味があったから」（82.0%）、「海外に行ってみたかったから」（63.1%）となっており、自由記述からも、本プログラムの趣旨・内容を踏まえて参加していることがわかる。

また、参加したコースの内容については、「満足している」（80.2%）、「おおむね満足している」（18.9%）と、満足度は非常に高い。自由記述からも、様々なコースの学修活動が参加学生にとって学びの動機付けや気づきを得る良い機会となるとともに、英語によるコミュニケーション等を経験したことで次のステップへの意欲がわくなど、充実した内容であったことが読み取れる。

・学修成果について

学修成果については、「達成できた」（33.3%）、「おおむね達成できた」（62.2%）と、合わせて 95% 以上の学生が目標どおりの学修成果を得ている。自由記述からも、語学能力の向上に加え、派遣先の日常生活やフィールドワークを通じて、異文化理解を深めていることがわかる。また、自らの学修に対する姿勢を振り返り、今後の学修意欲に結びつけようとしていることも窺える。

・プログラムへの要望について

回答数は多くはなかったが、現地の学生との交流など、自らの興味や意欲を基にした積極的な意見があった。

・さらなる留学等について

本プログラムへの参加を契機として、より長期的な留学等に挑戦したいかの問いについては、「そう思う」（57.7%）、「どちらかといえばそう思う」（25.2%）と、8 割を超える学生が再チャレンジへの意欲を持っている。また、関心を持ったテーマについて、より深く学修したいかの問いについては、「そう思う」（73.9%）、「どちらかといえばそう思う」（25.2%）と、合わせて 99.1% の学生がより深く学修したいと回答している。長期留学等の国際的な活動へのチャレンジやより専門的なテーマへの学修意欲の向上等、本プログラムが全体を通じて設定している「学びの動機づけ」という目標が達成されていると言ってよいであろう。

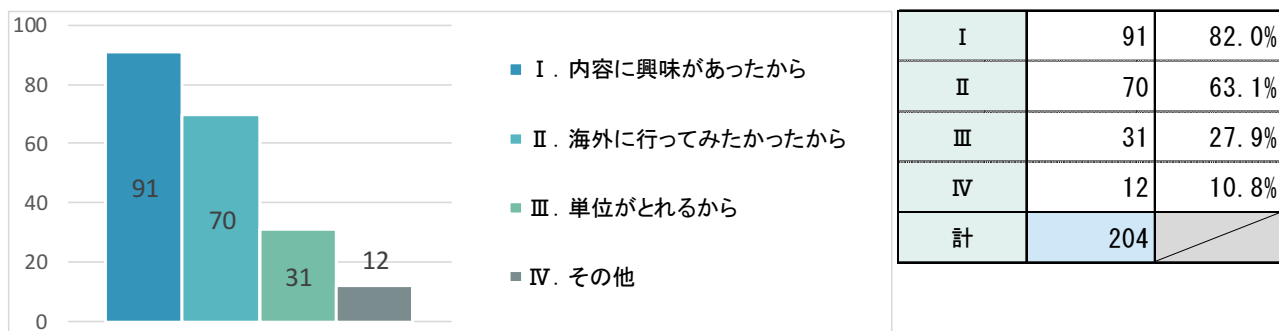
なお、プログラムは開始 4 年目であるが、アンケートで得た高い満足度や学修意欲を反映して、参加した学生のうち 25 名は既に本プログラムの別のコースに参加しているなど、海外での更なる活動に積極的にチャレンジしている。

神戸グローバルチャレンジプログラム 参加後アンケート集計結果

回答者数 111 名

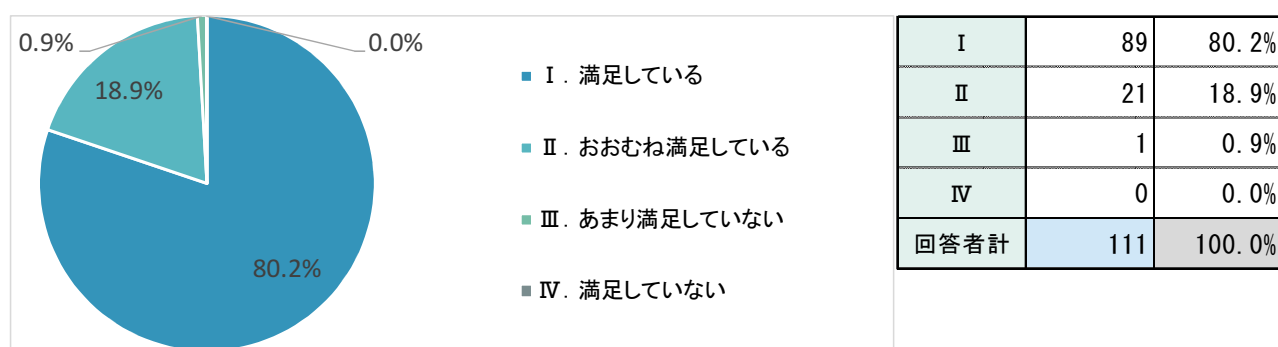
(1) コースについて

●どのようなきっかけで今回のコースに参加しましたか。（複数回答可）



- ・日本にいただけでは体験できない違う文化や考え方や環境に触れて自分の中に新しい物事を取り入れたかったから。
- ・留学を考えていたのでその予行練習として。
- ・日本の移民受け入れを考える上で多文化共生社会のトロントに行くことは良い機会であると思ったから。
- ・担当の先生にお声掛けいただいたから。
- ・ロシア語を上達させたかったから。
- ・ヨーロッパかつ旅行でなかなか行かない国へ行きたかったから。
- ・海外に行けるだけでなく企業研修という形で、自分の分野に加えて他の学科の会社にも赴くことができるから。
- ・海外に行ったことがなかったから。
- ・必要な費用の一部が奨学金として支給されるから。
- ・春にウガンダに行った先輩からお話を聞いたときに、自分も行きたいと思ったから。
- ・中途半端な韓国語能力にちょうどいい留学プログラムはあまりなく、自分に合った形で留学できる点に魅力を感じたから。
- ・夢だったから。
- ・2、3回生時に希望している長期留学のいい予行になるのではないかと考えたため。
- ・アルメニアはなかなか行くことがない国だと思い、面白そうだなと思ったから。
- ・高校の授業で少し習っていたアルメニアという国に、行ってみたいと思ったから。
- ・在学中に資格試験の勉強に打ち込むか、長期留学を目指すかで迷っていたので、進路の判断基準にしたかったから。
- ・アルメニア人の友達がいるということがめったにないことだと思い、彼の母国について知りたかったから。
- ・去年ネパールに行ってみて、手続きなどが簡単であることや旅行とは全く違う経験ができることなどがとてもいいと思い、また、ほかの国のコースに参加したかったから。
- ・モンゴルについて調べるうちに、モンゴル書道の存在を知ったから。
- ・安いから。

●参加したコースの内容に満足していますか。



<満足している>

- ・自由時間と大学で学習する時間の配分がちょうど良いと感じたから。
- ・充実した自由時間でのフィールドワークと納得の授業。
- ・想像以上にアメリカの文化を体感することができ、そのコミュニティで過ごすことの意義を感じたから。
- ・3週間アメリカで暮らすことによって、日本との環境や国民性の違いを肌で感じる事ができたから。世界の中心であるニューヨークを満喫でき、他の神戸大学生とともに楽しく過ごせたから。
- ・日本では触れることのできない文化や人々の生の生活に触れられたから。また、多い自由時間で自分たちの計画したフィールドワークを自由に行えたから。
- ・日本に帰ってきた後、日本では見ることのできない景色をいっぱい見られたんだと実感できたから。
- ・事前学修でこれから行う活動について前もって調べることができたことがよかった。また、担当の先生がとても細やかに迅速に生徒の面倒を見てくれ、現地の生活がスムーズにできた。現地では学校に通ったが、早い時間に終わるため、放課後に美術館に行くなど、学校生活だけではなく、様々なことができる時間があつたのがよかった。
- ・ニューヨークの多様性について学ぶことができ、とてもよい体験ができたから。
- ・英語だけでも生活できることが分かった点で、参加した意義がある。
- ・授業がとても充実しており、午後からは自由時間なので自分のフィールドワークや観光にあてられるから。
- ・大学で多様な学生と交流する機会があつたことと、先住民や多文化社会について考える時間があつたこと、独自のフィールドワークをする時間を十分に取れたことから。
- ・カナダの文化や人々の生活のスタイルの違いなどすべてのことが新鮮に感じられました。ルームメイトや外国人のクラスメイトと仲良くなり、休日に拙い英語ながらも出かけたことは貴重な経験になりました。ボランティア活動などもプログラムに含まれていたため、現地の人と関わることができたのも良かったです。
- ・語学研修としてレベルの高い授業を受けることができた。また、ボランティア、アクティビティに参加したり、自分で計画を立てて自由に行動できたりする時間も多かった。ホームステイを経験できたのも良かった。
- ・英語力の向上や英語の学習意欲の向上につながった。また、英語を教える立場からの観察もできてよかった。
- ・ロシア語能力の向上に大いに役立った上に、現地での活動の自由度や充実度が非常に高かったため。
- ・ロシアの生活を生で感じる事ができ、その上で文化学習などを通してロシアのことをよく知ることができたから。
- ・実際に行ってみて雰囲気がつかめたから。
- ・自分だけではロシアに行く機会はありませんので、大学のプログラムで訪れることができて感謝している。ロシア語のクラス、主要な社会文化施設での研修はもちろん、自由時間が多く確保できたので、自分のリサーチテーマや卒論研究に役立つ調査を行うことができた。
- ・様々な経験ができたし、現在のロシアの雰囲気や人々の生活感などを肌で感じる事ができ、また、様々な施設に連れて行っていただけたので、歴史を学んだり買い物を楽しんだり文化を味わうことができたのでとても満足です。

- ・言語学修と文化学修の両方ができたから。
- ・初海外で分からないことだらけだったが、引率の教員の方や同じプログラムの参加者の支えがあって何事も無く、帰ってこられたから。
- ・先生や現地の学生との距離が遠くもなく、近くもない程よい距離が取れており、先生は学生のしたいことなどをさせてくれて、学生自らがプログラムを推進するような形が取れたので自分たちで能動的に行動していくことができたので満足しています。
- ・満足したから。
- ・元々興味があったアジアに実際に行くことができ、また、共に課題に取り組む仲間ができ、日本とは異なる環境で過ごすことで自分の視野を広げることができたから。
- ・とても濃い3週間を過ごすことができたから。
- ・まず、海外に3週間も充実した滞在ができたことにとっても満足しています。授業とその他のアクティビティの比率も私にとってちょうどよく、現地での生活を体験しつつも、英語力向上のための授業を受けることができました。授業内容については、インタラクティブな授業で活発に参加することができました。また、生活面についても不自由することがなく、毎日おいしい料理を出していただき、しっかりと睡眠時間も確保できました。現地のホテルのスタッフの方もとても対応が良かったです。一緒に行動してくれたUPLBの学生の方々もとても優しく、フレンドリーで、積極的でした。
- ・ロイヤルメルボルン工科大学に訪問できたのはもちろんのことですが、それに加えてジョージア工科大学のプログラムへの参加、サマースクールへの参加、企業研修など、貴重な経験をたくさんすることができ、将来の進路を考える際に大変参考になったから。
- ・とても貴重な経験ができたし、これからのモチベーションとなったから。
- ・期待していたとおりのプログラムであり、その内容はどれも期待以上でとても充実していたため。
- ・充実したギャップタームだったから。
- ・このコースに参加していなかったら絶対にできていなかった体験ができ、素晴らしい経験をする事ができた。
- ・1年半の内容のとても濃いプログラムであり、自分の成長や自己認識につながった。費用もほとんど免除していただき、とても有り難かった。
- ・他学部の交流、研究室見学や、海外提携校との交流など、刺激の多いコースだった。
- ・最初から様々な内容のプログラムが組まれており、自分たちで何かするよりもしっかりとした貴重な体験ができたから。
- ・日本のありがたみと不便さを、フィリピンの現実を目の当たりにすることで知ることができたから。
- ・今回のコースでは、いろいろなものを得た気がします。第1に英語の聞き取り能力、最初は現地の方が何を言っているかわかりませんでしたが、最後には聞き取れるようになっていました。第2に現地の友達ができたことです。今でもSNSを通じて、連絡をしています。第3に農学部内での友達が増えたことです。後期から前期よりもまして楽しいです。
- ・以前から興味があったアジアの文化に触れることができた上に、きちんと英語の授業も受けられたから。
- ・掛け替えのない体験でき、異文化に触れられ、英語に対する姿勢もかわったから。
- ・日本では経験できないようなことがたくさん経験できたから。
- ・英語の授業や、休日のトリップの内容がとても充実していたから。英会話が苦手でも、ファシリテーターとの会話が楽しめたから。一緒に行った農学部の子たちがかけがえのない友達となったから。
- ・楽しく英語を使え、話す力を身につけることができたように思うから。
- ・現地の人がとても親切にしてくれた。一緒に行った学生とも仲良くなれた。
- ・英語だけでなく、フィリピンの文化にも多く触れられ、多くの友人も作る事ができ、輪が大きく広がった。視野が広がった。全てが楽しかったし、よい経験になった。
- ・自分の価値観や考え方が広がったから。
- ・授業と旅行のバランスと、人数がちょうどいいと思った。
- ・英語の勉強ができたり、異文化に触れることができたりしただけでなく、学内にもフィリピンにもかけがえのない仲間ができたから。
- ・発音やリスニング、会話の力が飛躍的に伸びたと思うし、現地の文化や価値観に触れ、自分を見直すきっかけになったから。

- ・海外に知り合いができたこと、同じ学部に沢山の知り合いを作れたこと、自己成長の機会になったから。
- ・充実していて今のタイミングでこの貴重な経験ができて本当に良かったと思う。
- ・個人では訪問できない、GCP ならではの国際機関などへの訪問ができたことは非常に有意義なものであった。また、自らでテーマを設定した上でそれを探究する自主探究のスタイルは今後の論文執筆などの土台となると考えられるため、学び多いものであった。
- ・個人では訪問できないような機関に訪問できたから。
- ・個人的には入れない EU 機関に入り、直接説明を聞き、質問することができた。このような手配をして頂いたことに大変感謝しています。
- ・引率の先生のおかげで、様々な機関、企業を訪れてお話を伺うことができ、今後の自らの展望を考えるうえで非常に参考になった。
- ・初めてのボランティア参加でわからないこともたくさんあったが先生がフォローしてくださり、的確に指示をくださったのであまり不安はなかったし、とてもいい経験になったから。
- ・プロジェクトは私が経験してみたかったことがそのまま組み込まれたような内容だったため、非常に充実した時間を過ごすことができた。また、はじめに事前学修として目標や達成したい成果を設定していたため、どうして自分はこのプログラムに参加したいのかという意思を明確にすることができたのもよかった。ただ行くだけではなく、有意義な時間にしようと思いながら参加することができた。
- ・もともとアフリカに興味を持っていて、いつか行ってみたいと思っていたので、大学に入ってすぐに行くことができたから。また、7～8割が農業で生計をたてているウガンダで、実際に農家さんたちと非常に近い距離で接することができて、短い期間ではあったものの、現状をリアルに身体で感じることができたから。
- ・事前学修や事後学修で留学の目標をしっかりと定めたうえで振り返りもでき、留学中の学外学修も充実していたから。
- ・かかった費用の数億倍の価値をしっかりと受け取ってきたから。
- ・海外旅行に行くだけでは、何をそこで得られたのかについて考えを深める機会を持てないが、コースに設けられた事後学修では、活動を振り返る機会を持つことができるから。
- ・私が参加したツアーでは、ただ話を聞いて終わり、ワークをやって終わりではなく現地スタッフからの評価を聞けたり深いテーマについてディスカッションをしたりと学んだことを自分の中で深めていく時間を持つことができました。学校も学年も違うメンバーで本気で語り合った時間は私の人生の宝物になりました。
- ・充実した経験をすることができたから。
- ・初めて1人で海外に渡航したことで自信もつき、また現地の人に囲まれて日本人が自分以外にいない状況でボランティアをするという経験をすることで、当初の目的であった語学向上だけでなく外国語でのコミュニケーション能力も高まったように感じられるため。
- ・日常生活の中では出会えない仲間と出会え、今までの自分に足りていなかったことを自覚し、与えられた課題を達成した。
- ・この活動を通じて、自分の今の課題を見つけることができた。今後の勉強に対するモチベーションに繋がった。
- ・色々な人や建物を見ることができ、日本とは全く違う文化の中で2週間生活することは大変ではありましたが、楽しかったし多くのことを学ぶことができたから。
- ・初の渡航であったが、先生やチームのみんながサポートしてくれ、有意義な体験であったから。
- ・新しいことを知ることができたから。中でも、英語で友達を作るという初めての経験ができた。海外を体験できた。
- ・1ヶ月弱という期間はとても短かったけれど、新しい経験をたくさんできたから。
- ・現地の学生と交流でき、実際の生活を観光客としてではなく、学生として学ぶことができたと思うから。
- ・今回のプログラムにリーダーとして参加したことで、改めて自分自身の課題がいくつも浮き彫りになり、自分自身の性格や日頃の行動を見つめ直すいい機会になった。また、日頃日本で英語を話す機会がない分、現地で自分自身の英語を試す貴重な機会となり、これが良く通じたことで自分に自身を持つことができた。
- ・ネパールとはまた違って、西アジアやヨーロッパの文化を体験することができ、英語も通じる中で現地の同世代の子たちと交流できたことが自分にとってとてもいい刺激になったと感じるから。

- ・語学留学とは異なり、フィールドワークということで、アルメニア文化について詳しく知ることができ、現地の人との交流により生のアルメニアを知ることができたのが、何よりも参加して良かったと思うし、一番の収穫であったと思います。
 - ・1ヶ月のうちに様々なフィールドでの経験をさせてもらったから。
 - ・アルメニアという全く知らない国について知ることができたから。また、学生交流を通して、アルメニアの風土や人の考え方など、本や観光では知りえなかった事柄について知ることができたから。
 - ・単なる観光では知ることのできないタイの裏側や、政治、経済事情について理解を深めることができたから。
 - ・自分の力ではお会いできなかったような人とも、神戸大学というつながりを通じてお会いし、お話を聞くことができたから。
 - ・モンゴルでの4週間の滞在の中で多くの人と交流することができ、自然・文化に触れる機会も多く持つことができた。
- 個人旅行などでは長期間の滞在は難しかったと思い、大学プログラムでしかできない貴重な体験をすることができたと思う。
- ・大学のプログラムの中であったため様々な面でサポートしていただき、初めての海外生活でしたが無事に終わることができたからです。「日本語」に対して日本にいれば気付かなかった特徴を知ったり、日本の良さや改善すべき点に気付いたりすることができ、良い経験になりました。
 - ・日本語センターでインド人の方とお会いし、生活のことや祭りのことについて話を聞くことができた。同じインターン生が熱心に業務をしていて、その様子に刺激をもらった。観光地ではなく住宅地などを毎日観察することで現地の実際の生活を垣間見ることができた。
 - ・スケジュールがみっちりで濃かった。毎日やることがいっぱいでものすごくたくさんのものを得たと感じるから。
 - ・自分を見つめ直すことができた。
 - ・ネパールでの子どもたちとの活動に加えて、ともに二週間過ごした仲間たちとの絆が強まり、本当に良い経験になったと思うから。
 - ・ネパールの実情が学べたし、ネパールの人たちや、メンバーと固い絆が結べたから。
 - ・期待しすぎかなと思っていましたが、それを上回る内容だった。
 - ・自由度の高さ。
 - ・楽しんで、自分のしたいことを学修することができたから。
 - ・現地の子どもたちとのふれあいを通して、育った環境が違えば子どもたちの様子も変わるのか、などを知りたいと思っていたが、どこにいても、どう生きても、子どもたちは変わらないこと、彼らと私は同じであることが確認できたため。
 - ・日本と異なる教育事情を実際に見聞きすることができ、村での宿泊を通して人とのつながりや自然の素晴らしさを知り、カトマンズ観光でネパールの文化や歴史に触れることができたから。
 - ・初めての東南アジアだったため、緊張していたが、ストレスを感じることなくプログラムに参加できた。各プログラムも円滑に進められ非常に内容の濃い活動ができた。

<おおむね満足している>

- ・ニューヨークのさまざまな場所を訪れることができたから。
- ・英語が学べて、フィールドワークする時間もたくさんあったので時間を有意義に過ごすことができました。
- ・ネイティブの学生と関わる機会が少なく、現地に日本人が多いと感じたため。
- ・多文化共生というものがどういうものなのか聞くだけではわからないものを自分で訪れてわかった部分があったから。
- ・現地にいるインドネシアの学生と積極的にコミュニケーションをとる機会がたくさんあったから。
- ・自分を取り組みたい活動を行えるように、柔軟に先生が協力してくださったから。
- ・自分のスキルの向上につながった反面、最初に提示されていたプログラム内容とのズレが大きかったため。
- ・初めに言われた内容とは違った内容であったため。
- ・タイで過ごした三週間はとても貴重な体験になりました。しかし、実際に現地に行く前に授業のことや地域について詳しく知りたかったです。

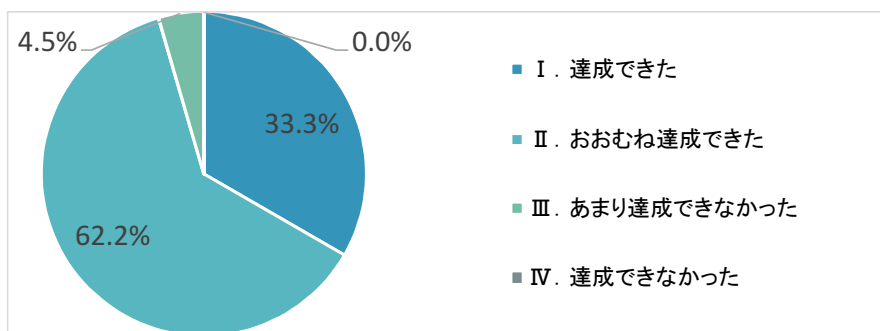
- ・申し込み時に聞いていた内容と少し違ったので、はじめは戸惑いがあった。
- ・普通の大学生活を過ごしていれば決して味わえない貴重な経験をさせてもらったから。研修の情報の連絡が遅く、ギリギリだったのは少し困った。
- ・自分が苦手としていた英語の発音を正しくできるようにするような練習を含む授業内容であったため、自分の英語の話す力を向上するのに役立ったから。
- ・宿泊場所や食事について、申し込む前に読んだリーフレットの内容と違うことがあり、戸惑った。ただ、これも海外でよく起きるトラブルと思い、対処する経験をさせてもらったと思う。ボランティアとしての活動内容も、事前に知らされたものと異なる部分があったが、特にこだわりはなく、試行錯誤しながら楽しめたのでよかった。
- ・とても濃い1か月だったと思うし、今回参加を決めてよかったと思う。英語学校の時間がもうちょっとあったらなとも思う。
- ・語学学校は先生、生徒、環境等素晴らしかった。日本人が多いとはいえ、自分の行動次第では外国人と接する機会も多くなるはずである。様々な知識や経験を教えていただいた。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響で行動が制限されている中、本当にたくさんの訪問先へ伺うことができた。
- ・タイでは、神戸大学同窓会の人々や企業や独立行政法人に勤める社会人の方々と積極的にコミュニケーションを取ることができたから。
- ・行けなかった企業もあったが、充実していたから。
- ・充実したプログラムでとてもいい体験ができたから。
- ・現地の文化は十分に学べたが、英語に触れる機会は、想像していたよりも少なかったから。
- ・開発途上国の実際の様子を肌で感じることもできたから。また、短期とはいえ現地の村に滞在したことで現地の人々とコミュニケーションを取ることができた。

<あまり満足していない>

- ・現地での英語授業の内容が中学校や高校でやるようなもので、英語力アップに役立たなかった。例えば、簡単な質問文に対するマルバツ問題や、非常に簡単な「ディスカッション」など。また、クラスが日本人しかいないので、クラス内の雰囲気は日本と全く同じで、日本でもできることをNYでやっているなんて何のためにわざわざここまできたのか、と思ってしまった。他の国からきている学生と同じクラスであれば、より刺激的で実り多い体験ができると思う。

(2) 学修成果について

●目標どおりの成果が達成できましたか。



I	37	33.3%
II	69	62.2%
III	5	4.5%
IV	0	0.0%
計	111	100.0%

<達成できた>

- ・英語のスキルが上達した。海外の友人ができた。
- ・英語の能力向上に向けて、多くのコミュニケーションの機会を得られたし、文化を学べたから。
- ・いい意味でも悪い意味でも、カルチャーショックを受けて、自分の将来を見直すことができた。また、移民の歴史に触れられるプログラムも組まれており、積極的に学ぶことができた。
- ・自分で積極的に現地の人と交流し、現地の空気感を肌で感じそれを自分の中に取り込むことができた。これによって、語学勉強のモチベーションが上がり、更なる努力に向けてエンジンがかかった。
- ・フィールドワークで行きたいところや観光ができたから。
- ・自分の知りたいことを調べる時間がたくさんあったから。
- ・計画していたことは全て行い、現地でも積極的に行動した。
- ・自由な行動が許されたことによって、自分のテーマに沿ったフィールドワークが行えたから。
- ・興味分野のリサーチを深くできたから。
- ・英語の授業の内容は自分の想像していたものより簡単であったため。
- ・タイの学生と触れ合いができたし、タイの文化を肌で感じることもできた。英語の向上も感じたし、最初に立てた目標は達成できたと思う。
- ・たくさんの大切な友人と出会うことができ、英語に対するモチベーションも上がったから。
- ・目標としていたのは、語学力の向上と現地での生活を知ることでした。語学力の向上については、何か大きく変わったとまでは言えないですが、頑張って話そうとする姿勢は変わったのではないかと思います。現地での生活については、大学近辺だけですが少し体験することができました。また、現地の学生などの話から想像することができました。
- ・事前に期待していたよりも大きな達成感が得られたから。
- ・自分の興味をもつ分野が分かったから。
- ・積極性を身に付けることができたから。
- ・自分に今何ができるのかや、貧困層の実態を学べたから。
- ・目標は超えた。
- ・私は元々途上国に行ったことがなかったため、自分の目で途上国の現実を知り、カルチャーショックを受けることを主な目的としてツアーに参加しました。初日から様々なカルチャーショックをうけ、だんだんと現地の生活に慣れていく中で自分の視野の狭さを実感し、苦しい中であっても他の人の助けになりたいと語る何人ものフィリピン人の姿勢を見習いたいと強く思いました。
- ・企画が通った上、そのプロセスにもほとんど抜けがなく、チームでまとまって取り組むことができたから。また、自分の課題を見つけることができたから。
- ・チームの企画が採用されることを目標としてそれを達成することができた。
- ・英語で話す能力の向上、外国人と話すときのハードルの解消、海外留学経験等自分が事前に設定していた目標をすべて達成できたと思うから。
- ・渡航してみて身を持って体験したことは絶対に忘れず、また新たな課題が見えたので、勉強に対するモチベーションが維持できている。

- ・行って滞在すること自体が最大の目的であったから。また、積極的に行動できたため、現地でも満足 of いく活動ができたから。
- ・現地で様々なことにチャレンジし自分から行動することを心掛けたから。
- ・様々な経験を得られたから。
- ・事前に目標を明確に定めたことで、やるべきことが明確になった。
- ・私の目標は、みんなと協働して、異国の地での困難も達成する事だったので、それは、この2週間を通して大いに達成することができたと思ったからです。
- ・さまざまな企業や学校への訪問を通して、それぞれの場面で異なる課題を達成することができたから。
- ・目標以上に学びがあったと感じる。
- ・視野が広がった。
- ・今の未熟な存在である自分たちにできることを精一杯することができたと思う。現地で活動面、生活面において想定外の事態が起こっても、その時点でできることを考えて、臨機応変に行動できたように思うから。
- ・子供たちはダンスを楽しんでくれたし、また来てねと言ってもらえた。日本のありがたみも感じる事ができた。
- ・予想していたものを見つけることもできたが、考えてなかったことを発見する方が圧倒的に多かった。
- ・ネパールでの活動を通して、することができた。
- ・自分の見てきたかったことを見る事ができた。現地での活動から、たくさん得ることがあった。途上国とは？という問い、イメージの形成に役立った。
- ・知りたかったネパールの教育や生活、文化、歴史について知ることができたから。

<おおむね達成できた>

- ・Protestantismを中心に宗教を学習するという目標は、多文化都市 New York に適しているものであったから。
- ・積極的に授業で発言したり、地元の人と交流したりすべきだった。楽で楽しい方へ流れて、神戸大学生とばかり一緒にいるのではなく、自分からもっと英語を使う時間を増やせばよかった。
- ・自分の目標を理解し常に行動できたから。
- ・大学での語学研修に加えてフィールドワークを充実させられた。
- ・行きたい、見たい場所もほとんど行くことができて、その行った先々でいろんな感情を抱くことができた。
- ・英語運用能力は身につかなかったが、多様な文化について学べたから。
- ・グループで助け合いながら行動したので、目標はおおむね達成できたと思う。
- ・やりたかったこと、見たかったこと、学びたかったことはできたが、語学力や自分の積極性が足りないことで、できなかったこともあったから。
- ・移民とマイノリティの人々に関するフィールドワークで今回の研修に参加しましたが、その取り組みが盛んな地域を訪れたり、トロント大学でのゲストスピーカーによるお話で疑問に思ったことを知ったりすることができた。
- ・フィールドワークに関しては、納得いくまで調査するだけの十分な時間がなかった。テーマを大きくしすぎると時間が足りなくなる。
- ・自分の設定したフィールドワークについて新たな視点が多く得られたことと自分から積極的に行動することを意識できたから。
- ・目標のロシア語の上達はある程度したけれども、それでも会話を上手にできるようになるなど大きくできるようになったわけではなかったから。
- ・いろいろな人と話すことができたから。
- ・ロシア語の能力をあまり向上させることができなかったのは残念だが、そのぶん新しいことに挑戦する力と対応力、コミュニケーション能力がついたと思う。そして研修のリサーチと歴史に関する学習は満足できる程度まで行うことができた。
- ・ロシア語上達が大きな目標であり、特に読む、聞く、話すは現地のほうがよく学べるのでこのあたりのスキルを中心に学ぶことが目的でした。読むや話すはそれなりに上達した実感があるのですが聞くはどうしてもなかなか上達しなかったので達成率はおおむねどまりだと感じています。

- ・写真や動画だけでは分からないことを感じてみたいと思い、このプログラムに参加したので目標はある程度達成できた。
- ・トンケトンケ村でマングローブ植林やボネで本物のマングローブを観察できたし、非常に満足している。しかし、マングローブコースのマングローブプロジェクトチームであったのだが、マングローブに関する生態調査や他の自然環境との関わりなどもっともっと時間があれば調べたいことがあったので概ね達成できたにしました。
- ・達成できたから。
- ・当初、日本で企画していたインドネシアの専門学校での授業が成功裏に終わったから。
- ・したかった項目は一通り達成したが、最も力を入れたかった生態系調査が、もっと詳しくしたかったという心残りがあるから。
- ・希望していた活動をほとんど実行できたから。
- ・大学での授業は理解できたので目標は達成できたと感じましたが、想像していたよりも現地の学生と英語だけを用いてコミュニケーションをとることは難しかったです。もっと英語を話せるようになって再挑戦したいと思います。
- ・自分から海外の人に話しかけることができるようになったと思う。
- ・海外の方との交流ができたことに加えて、英語学修へのモチベーションが上がったことが主な理由です。しかし、本当に英語力が上がったかどうかはまだ分からないので概ね達成にしました。
- ・やはり英語力は自らの努力がかなり必要であることを改めて痛感したが、大学生の早い時期からいろんな企業に行き、海外に行き、文化の異なる様々な学生と触れ合うことができて、自分の中での考え方に幅ができた。
- ・ギャップタームを有効に使えた。
- ・その期間中内の目標は達成できたが、プログラムが終わった後、やはりそのプログラムで感じて大切にしていきたいと思っていた思いを忘れかけているのがよくない。
- ・海外とつながりを持って働くこと、また海外で働くことのイメージ、その上で必要とされる力、英語力の大事さ、海外の学生と協力して何かを成し遂げることなど、様々なことを学ぶことができた。
- ・自分の将来についての具体的なプランを立てられるようになった。ただ、英語学習についてはまだまだ足りてない部分があると感じた。
- ・自分自身では英語力が上達したという実感は持てなかったが、現地の学生や先生との会話はとても楽しかったから。
- ・話す能力も身につけたかったのですが、話す能力を身につけるのはきつかったです。
- ・自身の英語能力の低さを痛感し、これからの自己研鑽が必要だと思ったから。
- ・3週間だったので語彙はあまり増えなかったが、英語を話すことに対する苦手意識が減ったから。
- ・英語に対して良いイメージを持て、これから努力する理由が見つかったため。
- ・人前で話す抵抗感が減った。
- ・自分が思っていたより英語がスムーズに話せるようになったことと、英語を話すことへの抵抗がなくなったこと。
- ・英語のリスニング力は概ね向上したと思うから。
- ・もっと自分から積極的に行動していかないと得るものはないと気づけたから。
- ・細かい部分の発音を矯正できたし、自分から会話を進められるようになったから。
- ・直接 TOEIC や TOEFL への手助けになる感覚はあまりなかったから達成できたとは言い切れないが、異文化との交流や新しい出会いを通して自分を知るきっかけになったから。
- ・自分が不得手としていた英語の発音に対して、このプログラムに参加する前よりも自信を持つことができたから。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響により行き先を変更せざるを得なかった。
- ・行程を変更ざるを得なかったため、当初予定していた目標は全て達成できなかったが、概ね目標は達成できた。
- ・単独行動が多く取り入れ、個人の行きたいところへ行くことができるプログラム内容であったため。
- ・EU の働きについて、実際に説明を聞いたり、質問したりできた。メヘレン市では2日に渡って各担当者が融和政策について説明した上、ディスカッションすることができた。大学生としてメールを送ったにもか

かわらず、ここまで時間を割いて丁寧に対応していただき、学びの多い充実した時間を過ごせた。ただミラノで難民受け入れのNGOで3日間ボランティアをする予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で行けなくなり残念であった。

- ・様々な方々からのお話や実際の現場に触れることで、自分の興味分野について考えることができた。
- ・ホームステイ型の研修だったため、ホストファミリーと一緒に生活し、たくさんの日常生活で使う英語を学ぶことができた。
また、同じプロジェクトに参加したメンバーがメキシコの方で、交流を持ったことのない国だったというのもあり、新たな文化にも触れ、自分の視野を広げることができた。
- ・韓国語はたくさん練習できて少しは上達し目標を達成できたが、アイデンティティの部分ではある程度目標どおり達成できたが、やはりまだ確立しきれていない部分があるから。
- ・現地では、うまくいかないことがあったが、目標を達成しようと試行錯誤し、活動成果を概ね達成できたと感じているから。
- ・語学を向上させるという目的に関しては、期間も短かったために劇的な向上は感じられないが、ネイティブの話すスピードについていけるようになったことや、英会話が上手くなったように感じられるため。また、ボランティアを通して当初の目的であった友人作りもでき、今後も関係が続いていけそうに思えるため。
- ・活動中に自分の課題を見つけ、それを克服できるように努力できたから。
- ・一人で手続きや準備などをして海外に行き、アジアの発展途上国の実態を見てみたいという、海外で活動することの入り口として取り組んだ研修としてその目標を達成することができた。しかし、見た、体験した、だけにとどまってしまったので、次回からはより高度な目標を設定して取り組む必要があると感じた。
- ・アルメニアの文化に触れることで、日本の良さを感じることができ、アルメニアの日本語を学んでいる人たちと関わることでもっと日本良さや文化を知りたいと思えたから。
- ・英語力に関しては上達したように思うが、理想には全く達しなかった。
- ・英語力はもっと伸ばすことができたのではないかと思うから。
- ・現地の人々との英語でのやり取りや、リーダーとして行った様々な手続きや活動を通して、英語のリスニング・スピーキング力のブラッシュアップのほか、集団の中で一定の役割を果たすことの難しさと大切さを学ぶことができた。いくつか我々の心構えの緩みに起因するトラブルは起きたが、これも自分自身を見つめ直すいい機会となり、さらなる活動のためのきっかけにもなった。
- ・人数が多かったため他人に頼って自分でチャレンジできなかったこともいくつかあるが、私なりに現地の学生たちと気になることや考えの共有ができたため。
- ・正直なところ、事前学修が足りていなかったと現地に着いてから痛感しました。あと、「英語以外の外国語を何か話せないの?」と言われました。自分はこのプログラムに向けて、英会話教室に通って実践の練習をしていたので、ガックリしました。
- ・海外やアルメニアについて知ることは出来たが、自分の語学力のなさを痛感したから。
- ・自分の念願だったスラム街、孤児院への訪問が叶った。
- ・バンコクの日本よりも発展している【光】の部分と日本よりも遅れている【影】の部分を両方とも見るのができたから。
- ・自分とは違う文化・背景を持った人たちと多くの交流の機会を持つことができ、他文化理解を深めることができた。また慣れない環境での生活を通じて柔軟な思考を養うことができた。
- ・自分の新たな一面を知ったり、様々な人や考え方に会って視野を大きく広げたりすることができたからです。日本の書道の魅力を伝えることはできましたが、モンゴルの書道を体験する機会がなかったことが心残りです。次は挑戦したいことだけではなく、そのためにどうすれば良いかということまでしっかり考えておきたいです。
- ・現地に行かないと聞けない話しや、見られない光景をたくさん見るすることができた。インド人と交流できた。
日本語教育に係わって自分が当たり前だった価値観などがそうではないと実感した。
- ・海外で色んな経験をすることができたから。
- ・自分の積極性が足らず、もっとできたはずだと思えるところが何点もあったから。
- ・出発前に抱いていた疑問点は完全には解消されていない。
- ・やりたいことはある程度はできたが、もっと上手くできたとも思う。

- ・現地の人々との交流の機会も多く得ることができた。ホームステイでその地の生活を体験できたのがよかった。ただ、言葉が通じなかったのでコミュニケーションはあまりとることができなかった。

<あまり達成できなかった>

- ・1ヶ月では内容が薄いものになってしまったから。
- ・完全に英語の準備が足りなかった。
- ・自分の語学の力不足のところもあったが、第一にコミュニケーション能力が足りていないことを痛感した。
- ・自分の発音がなかなかひどいことがわかりスタート地点が下がったから。気づくことで成長した部分は大きいと思う。
- ・実際に現地の人たちとたくさん接することで、彼らの課題なども見えてきたし、自分がずっと考えている「幸せ」についての考えも深まった。でも、自分が見つけた課題に対して行動はできたものの、それを軌道に乗せるまではいかず、結局今彼らの幸せに繋がっているのかわからない状態になってしまっている。期間が短いからしかたないと言えばそうなのかもしれないが、もっと早く動き出せていればという思いもあるから。

(3) プログラムへの要望について

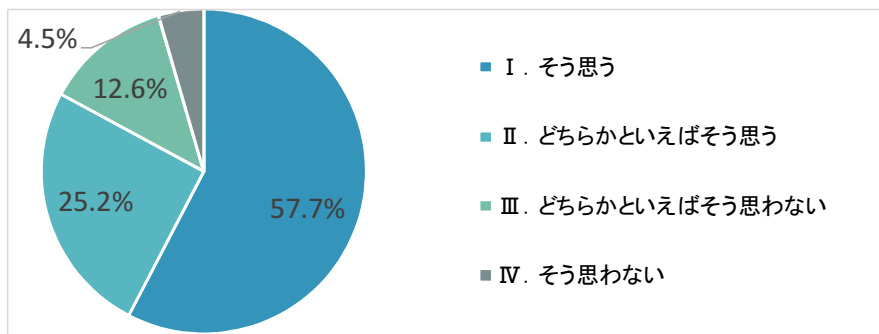
●新たに企画してほしい学外学修プログラムがあれば教えてください。

- ・発展途上国や他の地域でも、世界的な環境問題や人の健康、教育などで問題が起こっている地域に半年ほど行って、その問題を耳で聞くだけでなく自分の目で見て、考えて行動できるプログラムを企画してほしい。
- ・神戸大学はとにかくアジア系の大学へのプログラムが少なすぎると思います。他の大学では韓国や中国への短期のプログラムを用意しているところが多いのに対して、神戸大学はせっかく協定校があるのに語学が学べるプログラムが全くないのはおかしいです。私自身、中国での留学を考えていますが、単位の都合上4年で卒業するには、半年の留学には行くことができず、だからこそ1か月ほどの短期でも他にも中国へ留学したいと考えています。私のように考えている学生は多いと思います。私が調べた中で、GCPで中国に行けるのは上海コースのみでそれも水質調査など理系向けのプログラムになっており、せっかく武漢大学や清華大学など歴史のある町の大学と協定を結んでいるのに、もったいないと思います。もう少し、そういった街で中国の歴史、文化を体験するプログラムなど、アジアのプログラムが増えてほしいです。
- ・語学研修であれば、各国の学生とまざって授業をうけるスタイルの方が絶対に良い。日本でもできる授業を外国でやるのはわざわざ渡航する意味が半減すると思う。
- ・共通言語が英語しかない人たちが集まって何かする。日本語を教える代わりに英語を教えてもらい、マンツーマンのプログラム。
- ・ロシアの他の地域に行くプログラムも企画してほしい。
- ・ロシアの中でもサンクトペテルブルクやウラジオストクなど、モスクワとはまた違った様子の地域に行けるプログラム。
- ・北欧の国へのプログラムが文学部提携、全学共通とにもないので、北欧の国で学習するプログラムがあれば嬉しい。
- ・現地のロシア人学生との交流イベントを企画してほしいです。リサーチするうえで学生にアンケートをとるいい機会になるのであるとありがたいと思います。
- ・アフリカで行うプログラム。
- ・海外の大学での共同研究。
- ・現在存在しているのか分からないですが、いろんな国籍の方とたくさん関われるような留学をしてみたいです。あと、マルタ留学にも興味があります。
- ・もう少し長期の海外研修プログラム(1ヶ月など)。さらに、費用補助がでるとありがたい。
- ・デザインに特化した国際交流プログラム。
- ・ヨーロッパの経済を学ぶために二週間くらいの留学がしたい。
- ・アジアの国に絵本を届けるスタディーツアー。
- ・留学先で、いろんな国からの留学生と一緒に勉強できるようなプログラムがあればぜひ行きたいです。
- ・今回の内容は本当に素晴らしく、できればもっと多くの学生が参加できるといいと思った。また今回のメヘレンの移民融和政策など、興味ある学生に是非学んでほしい。他にもドイツの融和政策、フランスの選挙におけるジェンダーギャップを縮める取組などのプログラムを希望します。
- ・少年兵や、傷ついた子供のサポートができるプログラム(準備のための心理学の講座なども含む)。
- ・結局その国の未来を作っていくのはその国の子どもたちなので、子どもと触れあえるようなプログラムがあったらいいなと思います。
- ・もっと南米とかにもコースを作ってください。
- ・もし海外の基礎医学の研究室訪問ができるツアーなど医学部向きのコースもあれば是非参加したかった。
- ・国際協力関連の職を志望し、青年海外協力隊に参加してみたいなという生徒に向けてのプログラム。アフリカを渡航先に設定しているプログラム。
- ・マダガスカルプログラム、または希望する国に行くことができるプログラムをもう少し自由にしたもの。
- ・食文化にスポットを当てた学外学修を作してほしいです。
- ・タイなど東南アジアへの長期学校訪問プログラム。
- ・野生生物の観察のプログラム。
- ・北欧の短期留学コース。

- ・学部限定コースのいくつかを全学部対象に広げて欲しいです。
- ・アメリカなど英語圏へのプログラム。
- ・海事科学部に特化した短期留学プログラム。海関係の仕事はどれも、英語が必要不可欠なのに対して、学部の特化したものは一年間の留学しかなく、単位互換も難しく、留年をかけて挑むものなので、ハードルが高く、留学が身近に考えられない環境にあるから。
- ・3回生でも参加できるもの。
- ・学外学習プログラムのことを知り尽くしてはいませんが、とても私たちにとっては十分だと思います。
- ・海外、特に途上国、特に貧しくてスポーツをちゃんとはできない子どもとの現地でのスポーツ交流活動。アフリカで農業。
- ・アフリカで行うプログラムがあれば嬉しいです。

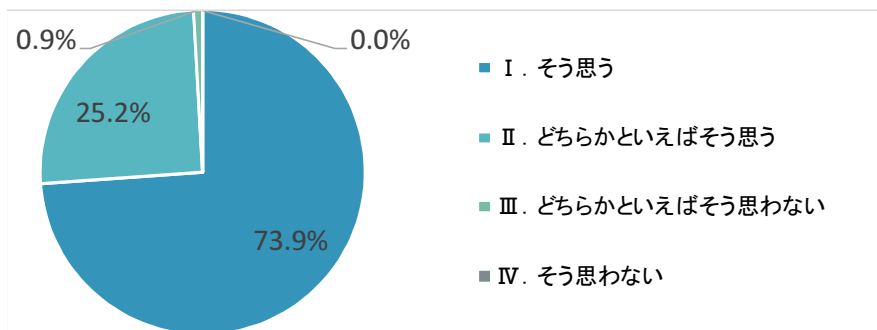
(4) さらなる留学等について

●神戸GCPの参加を契機として、より長期的な留学等に挑戦したいと思いますか。



I	64	57.7%
II	28	25.2%
III	14	12.6%
IV	5	4.5%
計	111	100.0%

●関心を持ったテーマについて、より深く学修したいと思いますか。



I	82	73.9%
II	28	25.2%
III	1	0.9%
IV	0	0.0%
計	111	100.0%

3-3. 大学教育再生加速プログラム(AP)令和元年度フォローアップ報告書

「平成 30 年度実施状況報告書」を提出し、その評価結果について、令和 2 年 1 月 6 日に「大学教育再生加速プログラム(AP)令和元年度フォローアップ報告書」を受領した。今後は、改善を要する点として記載されている内容を確認するとともに、事業終了後の事後調査で問われることとなる、AP 事業の必須指標及び独自の事業目標に対する達成度（資料 1）についても分析・対応を進めていく必要がある。

（資料 1）必須指標及び独自の事業目標に対する達成度（平成 30 年度実施状況報告書より抜粋）

2. 達成目標と事業内容（3 ページ以内）※【取組内容・成果】については 1 ページ以内									
【定量的な数値目標の達成状況】									
テーマにおける 必須指標		H27	H28		H29		H30		R1
		実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標
長期学外学修 プログラムに 参加する学生 の割合	全学生	—	1.61%	0.98%	1.77%	0.85%	2.17%	1.01%	2.53%
	1, 2 年生	—	3.12%	2.17%	3.97%	1.78%	4.82%	2.23%	5.67%
長期学外学修 プログラムを経た 学生の成績評価		—	0.20	0.04	0.27	0.27	0.34	0.25	0.41
退学率		1.12%	1.03%	1.21%	1.03%	1.17%	1.00%	1.10%	0.98%
学生の 授業外学修 時間	全学生	—	5.8 時間	7.3 時間	6.0 時間	7.6 時間	6.2 時間	9.5 時間	6.5 時間
	プログラム 参加学生		7.6 時間	6.5 時間	8.0 時間	8.8 時間	10.1 時間	11.5 時間	12.0 時間
進路決定の割合		92.11%	92.37%	94.14%	92.51%	94.80%	93.37%	95.00%	94.09%
学生が企画する活動数		37 件	72 件	52 件	100 件	108 件	124 件	124 件	150 件

本学の独自指標		H27	H28		H29		H30		R1
		実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標
長期学外学修プログラムに参加した学生が プログラム終了後に身に付けた能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」	水準 2 に 達した学生	—	37.5%	78.3%	50.0%	56.6%	62.5%	62.7%	75.0%
	水準 3 に 達した学生	—	0.0%	26.1%	10.0%	23.7%	20.0%	30.8%	30.0%
プログラムに参加後、在学中に 留学を含む海外での学修活動に参加した学生の割合		—	5.0%	0.0%	20.0%	20.2%	35.0%	50.7%	50.0%

【取組内容・成果】

<進捗状況（■：必須指標 ●：独自指標）>

■長期学外学修プログラムに参加する学生の割合

単位を授与する長期学外学修プログラムについて、平成 30 年度の参加者も目標値を下回る結果となったが、増加傾向にある。引き続き本プログラムの広報活動を行い、更なるコースの拡充を目指し、参加者の増加に繋がるよう努力する。

■長期学外学修プログラムを経た学生の成績評価

本プログラムの参加者と不参加者の GPA を比較した結果、目標値を達成できなかったものの参加学生の方が成績評価の推移は良好であり、神戸 GCP 参加後のアンケート結果を見ても、9 割近い学生が、学外学修で関心を持ったテーマについてより深い学修をしたいと回答しており、プログラム参加により一定の学修意欲の向上が得られていると言える。

■退学率

成績不振による退学者を出さないために、平成 28 年度から、全学部において、GPA を成績不振の基準の 1 つとして活用し、成績不振学生への修学指導に取り組んでいる。

近年、本学の退学率は 1 % 台前半で推移しており、平成 30 年度は目標値を達成できなかったものの、徐々に低下している。

■学生の授業外学修時間

平成 28 年度から、全学部生の学修時間を調査する「学修の記録」を導入し、高い回答率を得ており、学部生の学修時間のおおよその実態を把握できている。平成 30 年度は全学部生・プログラム参加学生とも目標値を大きく上回った。今後もアクティブラーニングの導入等、教室内外での学生の主体的な学びの充実を図る取組を予定している。

■進路決定の割合

好景気という社会的状況の中、平成 30 年度も引き続き目標値を上回る結果となった。今後も就職率を維持・向上させるため、学内外の就職支援組織等と連携し、更なる充実を図っていく。

■学生が企画する活動数

平成 30 年度も目標値を達成することができた。ボランティア等の活動数が着実に増えてきており、プログラム参加者による一定の波及効果が感じられる結果となった。今後も様々な分野の交流の場としてラーニングコモンズの活用を進めるなど、学生が積極的に企画を推進できる環境の充実等に全学的に取り組んでいく。

●プログラムに参加した学生がプログラム終了後に身に付けた能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」

ルーブリック指標を用いて経年変化を測定した結果、水準 2 に達した学生は 62.7%、水準 3 に達した学生は 30.8% となり、いずれも目標値を上回った。平成 28 年度はプログラムによる学外学修の初年度に当たり、参加直後の評価だったため高い値であったが、2 年後（平成 30 年度）の経年変化においても、目標を超える値が得られており、プログラム参加経験が各能力の向上に繋がったものと思われる。今後も各能力水準の維持・向上に努めていく。

●プログラムに参加後、在学中に留学を含む海外での学修活動に参加した学生の割合

平成 28 年度から本プログラムによる学生派遣を開始し、平成 30 年度までに本プログラムの別コースへ再チャレンジした者が 16 名いる。加えて、その他短期プログラム・長期留学等に参加した学生もあり、目標値を達成できた。また、プログラム参加後アンケートの「神戸 GCP の参加を契機として、より長期的な留学等に挑戦したいと思いますか」という問いに対して、9 割近い参加者が「そう思う（どちらかといえばそう思う）」と回答しており、今後も目標値の達成が期待できる。

3-4. プログラム全体の自己評価総括

(1) 自己評価総括

【自己評価】4：計画を十分実施できた

プログラム全体の実施状況（2-1）、令和元年度実施コースの各取組状況（2-2）、ループリック指標に基づく参加学生の自己評価（3-1）及びプログラム参加後のアンケート結果（3-2）により本プログラムの実施状況を点検した結果、多くの学生は本プログラムへの参加を通じて「課題発見・解決能力」の必要性に気づき、「学びの動機づけ」を得て「主体的な学修姿勢」を身につけており、神戸GCPの目標達成に向けた活動は計画どおり進行している。

(2) 課題への対応状況

昨年度の自己点検・評価では、今後の課題として「①参加者数の増加」「②プログラムの継続・充実」の2点を挙げた。①については、目標値には達していないものの、プログラム参加者数は年々増加しており、令和元年度は、プログラムを開始して以来、最も多い参加者数となった。参加者が増加するように、開講コース数を増やし、オープンキャンパス等で高校生や保護者等、大学生以外にも広く広報活動を行った結果だと考えられる。②については、学内の様々な海外プログラムと連携したり、全学部とそれぞれ意見交換を行ったりしたことで、大学全体としてプログラムの継続について検討を進めることができた。また、各開講コースの派遣先と今後の課題等について検討・協議を行い、令和2年度から参加対象学年を1～4年次に拡大することで、プログラムの充実を図ることができたと言える。

以上、今年度をもって、文部科学省「大学教育再生加速プログラム」としての事業は終了となるが、本プログラムは令和2年度以降も継続して実施していく予定である。

また、今年度の2月、3月に実施したコースでは、新型コロナウイルス感染症の影響で現地での活動予定の変更やフライトの変更を余儀なくされたり、1コースが不催行になるなど影響があったが、各コース担当教員による状況判断と臨機応変な対応もあり、プログラムとしては、安全に履行することができた。来年度においては、コロナ禍で海外渡航が難しくなると思われるが、神戸グローバルチャレンジプログラムとして、出来得る活動や、対応策を検討しつつ、これまで取り組んできた各コースのさらなる充実を図り、本プログラムの発展・目標達成へと繋げていく。